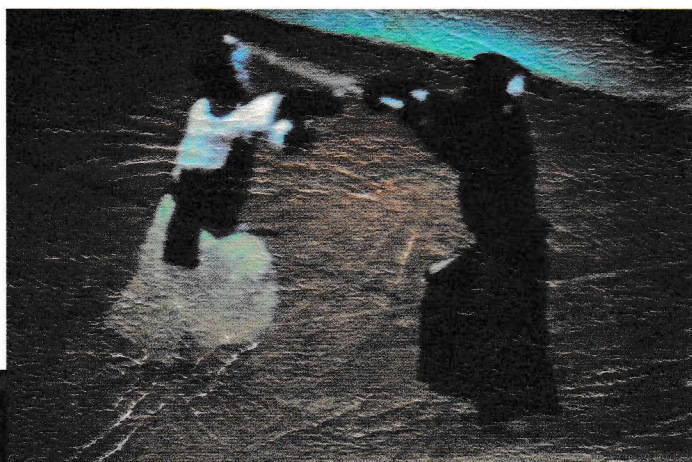


徳島の剣道

特集

1. 新八段誕生
2. 全日本スポーツ少年団交流大会
3. 中学校武道必修化に向けて

第27号



徳島県剣道連盟

若宮神社における 徹心道場

創立四十周年記念の武道額奉納と
道場生一同による奉納演武

平成二十二年十一月十三日



奉納演武 道場生一同による揃抜 (前庭にて)



巻頭言

徳島県剣道連盟会長に就任して

徳島県剣道連盟 会長 坂下彦之



昭和二十七年夏、初めて竹刀を握り、剣道をはじめました。そして、恩師・堀江幸夫先生に出会い、先生の素晴らしい剣道に一目惚れし、それ以来今日まで師の背中を見ながら精進してまいりました。

となりました。新執行部の主なメンバーは次のとおりであります。今後とも、会員皆様の温かいご叱責、ご指導を賜りますようお願い申し上げます。

振り返ってみますと「六十年」という歳月が流れ、時代の流れの速さを身をもって感じられます。

この度、計らずも徳島県剣道連盟会長に選任されましたが、浅学非才の私がこの大任を務めることが出来るのかと困惑しているところでもあります。

聖徳太子は十七の条憲法で「和を持って貴しとなす(第一条)」
「それ事は独りさだむべからず(第十七条)」と言っておられます。この精神をもって、今後の徳島県剣道連盟発展のため微力ではありますがありますが、一生懸命に務めて参る覚悟でございます。

なお、これまで、会長として連盟をリードしていただいた遠藤一美先生には、名誉会長として大所高所よりご指導いただきたくこと

名誉会長	遠藤 一美
会長	坂下 彦之
副会長	原田 勝

理事	近藤 亘
副理事長	平野 誠司
事務局長	藤本 雅史
事務局次長	手塚 十三子

『徳島の剣道 第二十七号』 目次

巻 頭 言…………… 坂下 彦之…………… 1

《特別寄稿》
 剣道との出会い 恩師は、私の中に生きている…………… 瀬部 昌秀…………… 4

世界は広く、剣は深し、蓋し人生は束の間…………… 作道 正夫…………… 6

《特集Ⅰ 新八段誕生》
 阿波の平野誠司伝…………… 坂下 彦之…………… 9

中学校時代に思いを馳せる…………… 吉田 輝昭…………… 11

おめでとう 剣道八段合格…………… 近藤 巨…………… 15

「日々感思流汗之行」 剣道八段昇段に想う…………… 平野 誠司…………… 16

さすが先輩八段昇段おめでとうございます…………… 岩木 一功…………… 19

《特集Ⅱ 第三十二回全日本スポーツ少年団剣道交流大会》
 第三十二回全国スポーツ少年団…………… 組橋 正人…………… 21

第二十二回全国スポーツ少年団剣道交流大会…………… 米倉 滋…………… 24

第三十二回全国スポーツ少年団…………… 寺西 明弘…………… 28

第二十二回全国スポーツ少年団…………… 太田あかり…………… 32

第二十二回全国スポーツ少年団…………… 中山 繁輝…………… 33

《特集Ⅲ 中学校武道必修化に向けて》
 交流大会徳島県大会に参加して…………… 西岡 昌哉…………… 35

中学校武道必修化に向けた…………… 二木 毅…………… 36

中学校武道必修化に向けて…………… 福多 博史…………… 40

少年剣道教育奨励賞を受賞して…………… 美馬 勝行…………… 45

少年剣道教育奨励賞を受賞して…………… 濱田 逸郎…………… 44

少年剣道教育奨励賞を受賞して…………… 馬見 和秀…………… 47

体育功労賞…………… 手塚十三子…………… 48

平成二十二年徳島県中学校剣道優秀選手…………… 51

先生を偲ぶ…………… 熊澤 信行…………… 53

中尾誠先生を偲んで…………… 北村 環…………… 56

思い出すままに…………… 中尾 正輝…………… 58

香川久治先生の思い出…………… 笠井 勝…………… 60

同期生総代 香川先生を偲んで…………… 佐藤 佳宏…………… 62

全国講習会報告…………… 坂本 憲一…………… 66

居合道中央講習会に参加して…………… 玉田 晋作…………… 68

第四十八回剣道中堅剣士講習会に参加して…………… 藤本 雅史…………… 71

平成二十二年徳島県秋季講習会報告…………… 竹内佳代子…………… 74

第五回女子審判法研修会に参加して…………… 兵頭 新平…………… 77

日本剣道形（初心者）講習会の報告…………… 米倉 滋…………… 78

徳島の剣道史…………… 坂本 憲一…………… 84

阿波刀の歴史（新刀編）…………… 鎌谷 和輝…………… 102

大会所感…………… 美馬 州一…………… 104

全日本歯科学生剣道大会を主催して…………… 井上 幹大…………… 105

韓国少年団を迎えて…………… 竹内佳代子…………… 107

各種大会に参加して…………… 前田 秀一…………… 109

第五十八回全日本都道府県対抗…………… 笠井 栄一…………… 110

第二回全日本都道府県対抗…………… 栗野 文那…………… 111

管内矯正職員武道大会…………… 富岡東高校…………… 113

全国高等学校選抜剣道大会に出場して…………… 城北高校…………… 113

全国選抜大会「絶対、勝って全国に行く」…………… 福居 壮太…………… 113

美ら島沖繩総体に出場して…………… 8

インターハイ「高校最後の夏」……………	富岡東高校	栗野	文那	114
全国中学校剣道大会に出場して……………	徳島文理中学校	玉田理沙子		116
第五十二回全国教職員剣道大会に参加して……………	福多	雅英		118
全国高専女子剣道大会にて二年連続準優勝……………	湯城	豊勝		120
第五回全日本都道府県対抗少年剣道優勝大会……………	中山	繁輝		122
第五回全日本都道府県対抗少年剣道優勝大会に出場して……………	塚田	圭吾		124
「初優勝」関西女子学生				
剣道選手権大会に出場して……………	平野	千尋		125
「夢の大会」全日本女子				
剣道選手権大会に出場して……………	平野	千尋		126
第五十五回全日本東西対抗				
剣道大会に出場して思うこと……………	平野	誠司		128
第六十五回国民体育大会（剣道競技）……………	中尾	正輝		130
全日本居合道大会に参加して……………	福井	勝		132
憧れの夢舞台に立って……………	敦賀	晋平		133
第五十三回全日本実業団大会結果報告……………	中尾	幸雄		135
全国警察剣道大会……………	山名	信行		138
平成二十二年徳島県高齢剣友会活動状況……………	笠井	勝		139
高知、愛媛剣道交流会に参加して……………	兵頭	新平		143
第三十二回全日本高齢者武道大会……………	東	徳美		145
第二十三回全国健康福祉祭				
剣道交流石川大会に参加して……………	中村	稔裕		147
随想				
剣道とは……………	大澤	孝彰		149
この道……………	影山	美雄		151
遍路人……………	別宮	憲治		154
剣道に出会って……………	丸岡	偉人		156
剣道と絆……………	藤川	和秋		157
剣の道……………	村井	正志		159
こころ……………	吉田	昌彦		161
中・高年からの剣道……………	武山	滋		163

称号・段位合格者

自分にはあまりに大きすぎる
目に見えない目標に向かって……………

恵まれて剣道七段…………… 寒川 博文 164

剣道七段に合格して…………… 原田 進 165

七段に合格して…………… 池田 洋一 167

居合道七段に合格して…………… 片山 尊史 168

六段に合格して…………… 森 将夫 169

六段に合格して…………… 川添 義仁 171

六段に合格して…………… 兼松 圭史 172

六段審査に合格して…………… 谷本 晃成 174

六段に合格して…………… 篠原 永光 175

六段への挑戦…………… 喜多 一幸 176

剣道六段に合格して…………… 近藤 浩文 177

私の剣道六段…………… 月岡 陽市 178

居合道六段に合格して…………… 藤本 常己 180

真の剣道教士を目指して…………… 一村 昌和 182

錬士号取得の道程と疑問符！…………… 佐賀 博史 184

称号・段位合格者一覧…………… 武田 修典 185

がんばろう徳島…………… 兼松 佳史 192

部活だより……………

阿波中学校剣道部……………

阿南工業高等学校剣道部……………

平成二十二年 大会記録……………

徳島新聞に見る戦いの跡……………

平成二十三年 昇段審査学科試験問題・解答例……………

平成二十三年 徳島県剣道連盟行事予定表……………

平成二十三年 審査実施計画表……………

徳島県剣道連盟審査資格・審査料等……………

居合道 道場案内……………

剣道行事の中止、開催のなどの確認の仕方……………

編集後記

…………… 261

特別寄稿

剣道との出会い

恩師は、私の中に生きている

徳島県高等学校体育連盟剣道専門部長

徳島県立城西高等学校校長

瀬部 昌 秀



今、手元に一冊の冊子があります。

『落羽松の梢に、下村富夫先生を偲ぶ』の冊子です。ページをめくると先生の写真があります。先生が逝去されて二十四

年が経ちますが、その写真を見ると懐かしさではない緊張感を今でも感じます。私にとってかけがえのない恩師であると同時に、私の人生を切り拓いてくれた大恩人とも言えます。

この度、高体連の剣道専門校長の役目を引き受けることとなり、光栄に感じるとともに、剣道振興に寄与できることを大変うれしく感じています。

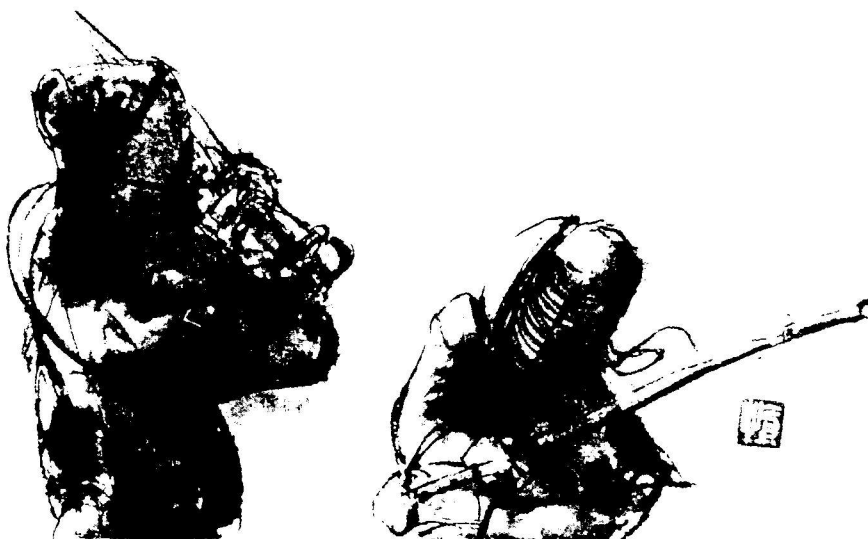
私と剣道との出会いは、徳島農業高校に入学して、下村富夫先生に師事を受けたことから始まります。友達に誘われるままに剣道部に入部したのが始まりでした。二・三年生部員八名、新入生

十五名の部員数で、本格的な部活動をしたことのなかった私は、その厳しさに参ってしまいました。「今日は退部届を出そう」と毎日思っていました。言い出せないまま一年間が過ぎ、結局三年間活動することとなりました。徳農時代の練習は、先輩にとことん向かっていく掛かり稽古が中心でした。強い打ちとなるように鍛え、強靱な体力と持久力を作り上げることが目的であったように思います。高校から剣道を始める者が多かったこともあり、基本を作ることが重要視され、常に「真っ直ぐ振れ」が指導でした。恩師との練習は緊張の連続で、自分から苦しさの中へ飛び込むような気持ちで覚悟を決めてお願いし、毎回「息が上がる」稽古を付けていただきました。今思い返すと、恩師は私たちを引き立てる稽古が上手でした。ある時は、かすりもしないまま竹刀をたたき落とされたかと思うと、ある時は、満身の力を込めて打った面が気持ちよくあたることもありました。これは、打つタイミングと間合いを教えてくださいました。これは、打つタイミングと間合いについてもよく話をしてくださいました。「剣を交えると、相手の息づかいが手に取るようになる。その息づかいと間合いの中に打つ機会がある。」「剣先の責め合いで勝負が決まる。」「突いて面を打て。」「打ち合いが終わった時こそ、勝敗の一本がある。」などの言葉は今でも覚えていています。徳農での剣道と恩師、仲間との出会いが今の私を作ってくれたのだと感謝しています。

私の剣友たちは、厳しい気持ちを持って剣道に精進し、多くの

者が高段者となっています。しかし、剣道とはありがたいスポーツで未熟な私がかぶると、今でも友は稽古に応じてくれます。また、体を動かすことが健康にもつながり、さらには、精神面でも人間を磨いてくれるのだということを改めて実感しています。私たちは、剣道のすばらしさを児童生徒に伝えるために創意工夫をしながら剣道振興に取り組まなければいけないと強く感じています。

終わりに、徳島県剣道連盟をはじめ関係の皆様の日頃のご支援ご指導に対し、深く感謝申し上げます。また、高体連部活動指導者の方々に心より厚くお礼申し上げますとともに、今後益々の高校剣道の発展を祈念いたします。



世界は広く、剣は深し、

蓋し人生は束の間

—平野誠司君の八段位昇段を祝う—

大阪体育大学教授 作 道 正 夫

(一) あかあかや

あかあかあかや

あかあかや

あかあかあかや あかあかの月



この歌は鎌倉の時を生きた明恵上人の作であるが、この大らかで伸びやかな表現の裏には「人間という自然」、そして「人間と自然」というものに対する深く鋭い洞察力が潜んでいる。一昨日の早

朝(二〇二一年一月二十二日)朝稽古に向う自転車で、この「あかあかの月」を全身で感受し、この歌を口ずさみながら自転車を漕いだ。「十二回」を数える「あか」は「明るく澄み渡った月」として、私の体内に流れ込んできた。稽古も含めこの一日が実に心嬉しきものとなったことは言うまでもない。

生かされ生きる人間の時間論と、一時間が六十分、一分間が六十秒という時間論とはどうも別物のようである。道元禪師はこのことを「時は飛去するとのみ解(げ)会(え)すべからず」と言っている。近年、一年間がアット言う間に過ぎ去ってしまうことに驚きを感じていたら、東京は高尾山の薬王院に

六十歳を過ぎたら 一年一年を

七十歳を過ぎたら 暑さ寒さを

八十歳を過ぎたら 春夏秋冬を

九十歳を過ぎたら 一日一日を

大切にお話し下さいと掲げられていると聴かされ、加齢とともに「加速化されていく時間」というものを覚悟して生きてゆかなければならないと改めて知らされた。剣道界にあっても、この時間論を巡る体験智の教えは多い。私の師である湯野正憲は「成、不成は時なり、時は成る、成らざるにあらず、時心にあり、心時にあり」と説く。成功、不成功と時間の流れとは別物ということである。人間は現象的な成功、不成功を越えて、常に自己創造的な「いま」という時間に乗って生きなければならないと言うのである。肥後の雲弘流ではこのことを「あとさきのいらぬところを思うなよ只中程の自由自在」と、表層的な勝ち負けを透過した「剣道に勝ち無し負けなし勝負あり」の全人格的圧倒性を説いている。

平野誠司君の京都での八段審査の心気現象から発する技の攻防を印しておきたい。戦いを前にして、彼はすでに施無畏(ほどこすことに畏れなし)の心境に至っており、構えそのものが攻めとなり(赫機(かくき)の構)、ほとんど無駄打ちが無く、その張り詰められた対峙空間にあって、彼の一挙手、一投足に会場全体の空気が動く、そんな美事な立合いとなった。まさに、「一方究尽・只中程の自由自在」の剣振りであった。釈尊は、人間は生涯

を通して「大悟すること十八回」と説いているそうであるが、この日の彼の立合いは、どう観てもこのうちの一つであったことは紛れもない事実である。道元は「正精進 九々算来八十二也」と説いているが、十八回を目指す悟後の更なる精進に期待したい。

(二) 仏国四国は一つ

年末には一昨年に続いて司馬遼太郎原作の「坂の上の雲」が、又、昨年中は「龍馬伝」がNHKで放映された。我々四国人の古里、弘法大師（空海）の仏国四国に俄かにスポットライトが当てられたような気持ちになって、多くは観れないまでも心嬉しき時間を頂戴することができた。松山出身の軍人秋山好古、真之兄弟その親友であった俳人正岡子規が西欧列強の近代国家主義の波に呑み込まれまいと、明治という近代国家形成の時代を必死に生き抜くドラマである。今日的な閉塞感をはるかに凌ぐ弱肉強食の時代を「坂の上の青い天にもし一朵の白い雲が輝いているとすれば、それのみを見つめて坂を登っていく」彼等の楽天主義と気骨に学びたいと思ったことである。因みに好古の晩年は我が母校松山北高の前身北予中学の校長であった。又、龍馬伝の一コマに、黒船来港の光景が在り、千葉道場で剣術修業中の龍馬の驚き、興奮、狼狽ぶりの画面に共鳴している自分が居た。剣で黒船に対抗できるはずもなく、その後の〈剣⇄黒船〉で思い悩み、千葉道場を去ろうと悩むシーンがとても印象的であった。龍馬個人の中で〈剣⇄人間〉へとコペルニクスの転換がなされていく過程を観ながら、

柳生の剣における「殺す」「殺される」「殺す」「殺される」との転換を想った。龍馬の時代とは大いに異なる現象、社会であった。更にこの〈剣⇄人間〉の枠組みをこのように発表された、言っているのかは今まさに求められて、言っているのか、言っているのか一つである。

「子ども叱るな来た道じゃ、三寄り嫌うな行く道じゃ」という弘法大師の教えを新生人類（ホモセピエンス）の二百年の歩みとして受け止めるところから出発しなければいけない時代を迎えている。三世代構成の家族の絆、社会の絆の回復が求められている。

剣道は老若男女、三世代共習、共導の文化として存在してきた老舗である。徳島という連盟がこの時代において、何をどのように継承し、新たな価値をどのように創造していくのかが問われている。

「少子高齢化社会」が加速化し、超高齢化社会突入も間近かの我が国である。これからの社会、時代を担う社会体育指導員養成講習会で、その委員長の日黒大作氏は「少ないからこそ、ここで今一度原点に返って、子供達の養育、鍛育の仕方を考え直す指導の在り方を」と言う。この時代、そしてその先を生きていく若者達を見据えて剣道指導者の資質向上に意欲的である。

また、大阪府剣道連盟にあって、昨年に「未来構想委員会」を結成した。〈少年（社会体育）―中学生（学校体育）―高校生（地元集中）〉の連続と関係改善に向けての後方支援と人材派遣をめぐって組織を挙げての取り組みに懸命である。森政弘（ロボット工学博士）の「創造なき継承は形骸化をもたらし、継承なき創

造は稚拙の域を出ない」という言葉は知的生命体としての人間の生き方や、その歴史や文化に関して極めて核心を突いている。今日の剣道という文化領域にあってこの「継承」と「創造」の内実の追及こそ、異文化交流をも含めて今後積極的に進めていかなければならない時宜を迎えている。

(三) 徳島の剣光

最後に徳島と言えば、堀江幸夫先生の日々の稽古を中心に、若手剣士の剣心を逞しく育てられた在りし日の姿が忘れられない。徳島からは富浦廣志君を筆頭に沢山の有能な剣士達を大阪体育大学へ進学させて頂いた。このこともあって学生引率の合宿、遠征で度々御稽古、御指導を頂戴することが出来た。先生の剣風はズッシリとした重厚な構えの中で、足腰が安定していて気攻めが強く、相手の打ち出しを把える甲手打ちの手の内の見事さが特に印象的であった。朝稽古、夕稽古と二回お願いする日も度々であった。率先垂範、剣道に対する真摯な態度、取り組み、自らの修練と若者達への無尽蔵なる想い、その指導・稽古が印象的である。「徳島に堀江有り、これから育つ若者達を見よ」そんな印象を強く受けた。今日八段にそのお弟子さん達がどんどんと合格していく様は、まさに、堀江先生の剣徳の輝きのように思えてならない。

今度は「徳島の剣道」への寄稿の機会が与えられ、有難いかぎりであった。貴連盟と会員諸氏の益々のご活躍、ご発展を祈念申し上げます、心より感謝申し上げます。



特集Ⅰ 新八段誕生

阿波の平野誠司伝

坂下彦之

平成二十二年五月京都において開催された剣道八段審査会において平野誠司氏が合格されました。心からお慶び申し上げます。

私と平野氏とは、鳴門第一中学校、鳴門高校の先輩後輩であり、ご母堂の幸子さんとは高校の同窓生であります。

平野氏は、昭和四十六年鳴門市光武館に入門し、剣道を始められました。寺西慶裕先生等の御指導を受け、恵まれた身体と天性の勝負感、巧みな剣捌きで小・中・高の各大会で大活躍をされています。

昭和五十七年四月、大阪体育大学に進学し、杉江憲先生（京都府警師範）、作道止夫先生に師事、関西学生剣道選手権大会に優勝、全日本学生剣道大会に第三位入賞をされ「関西に平野あり」と名を挙げられたのです。

昭和六十一年、徳島県警察宮を拝命され、翌年には剣道特別訓練員となり、四国、全国警察剣道大会は勿論のこと国体、選手権大会、全日本都道府県大会で大いに活躍されています。また、平

成五年本県において開催されました第四十八回東四国国体では成年男子一部選手として出場し、第三位入賞の原動力となり、本県初の剣道総合優勝に貢献されました。

また、翌年フランス・パリで開催された第九回世界剣道選手権大会に日本代表選手として個人戦に出場され、第三位入賞する等、立派な戦績をあげられております。（別添、剣歴戦績表参照）

現在、平野氏は県警察機動隊の小隊長として勤務しており、近藤巨師範と共に特練員に厳しい指導をされています。また、警察学校体育館で週二回実施されております県剣連の強化錬成会に休む事なく参加され、小・中・高・一般の育成強化に熱く指導されている姿を拝見し、頼もしい限りであると常々感じる次第であります。

平成二十一年には、全日本東西対抗剣道大会に出場され、優秀選手賞を受けられました。これは本県初のことであり、平野氏の立会が立派で高い評価をされた証であります。私はこの時点で、次の八段審査において間違いなく合格をすると心密かに期待しておりました。そして、平成二十二年五月二日、期待通り見事合格されたのです。

この度の八段合格は平野家の喜びは勿論のこと、先輩の私にとっても大きな喜びであります。

今後は、益々精武されまして徳島県剣道連盟の発展に尽力されるところに、日本いや世界の平野誠司に成られますよう祈念申し上げます。本当におめでとうございます。

平野誠司氏の経歴

1. 剣歴

- 昭和38年7月1日 徳島県鳴門市撫養町で出生
昭和46年 鳴門市少年剣道クラブ（現鳴門市光武館）に入門
（恩師 故 寺西慶裕教士、故 山田富康教士、故 堤茂教士）
昭和51年4月1日 鳴門市第一中学校入学（剣道部入部）（恩師 吉田輝昭先生）
昭和54年4月1日 県立鳴門高等学校入学（剣道部入部）（恩師 近藤辰夫先生）
昭和57年4月1日 大阪体育大学入学（剣道部入部）
（故 杉江憲範士、作道正夫範士に師事）
昭和61年4月1日 徳島県巡査を拝命（徳島県警察学校入校）
（故 堀江幸夫範士に師事）
昭和62年4月1日 徳島東警察署勤務・剣道特別訓練員に指名
（坂下彦之教士に師事）
昭和63年4月1日 警備部機動隊勤務（松村克隆教士に師事）
平成6年4月9日 世界剣道選手権大会
日本代表選手（12名）に選考される
平成9年4月1日 （中尾正輝教士に師事）
平成11年11月25日 剣道七段合格
平成13年12月14日 術科指導者養成科第36期卒業（警大）
平成14年5月7日 教士号受領、剣道特練監督に指名
（近藤巨教士に師事）
平成22年5月2日 剣道八段合格

2. 戦歴

- | | | | |
|-------|----------------|-------|-------|
| 昭和52年 | 全日本少年剣道練成大会 | 中学個人 | 第3位 |
| 昭和53年 | 県中総体 | 団体・個人 | 優勝 |
| 昭和53年 | 四国中総体 | 団体・個人 | 優勝 |
| 昭和56年 | 県高総体 | 団体・個人 | 優勝 |
| | インターハイ出場 | | |
| 昭和59年 | 全日本学生剣道優勝大会 | 団体 | 第3位 |
| 昭和60年 | 関西学生剣道選手権大会 | 個人 | 優勝 |
| 昭和60年 | 全日本学生剣道選手権大会 | 個人 | 第3位 |
| 昭和60年 | 全日本学生剣道優勝大会 | 団体 | ベスト8 |
| 平成3年 | 全日本剣道選手権大会出場 | | |
| 平成5年 | 東四国国体 | 団体 | 第3位 |
| 平成5年 | 中倉旗争奪剣道選手権大会 | 個人 | 第3位 |
| 平成6年 | 第9回世界剣道選手権大会 | 個人 | 第3位 |
| 平成12年 | 全日本選抜剣道七段選手権大会 | | ベスト8 |
| 平成21年 | 全日本東西対抗剣道大会 | | 優秀選手賞 |

中学校時代に思いを馳せる

元鳴門第一中学校 剣道部顧問 吉田 輝 昭
(現相生中学校校長)



平成二十二年五月二日、剣道の八段審査会が京都で行われ、平野誠司君が合格率一パーセントともいわれる難関の剣道八段に見事合格された。佐賀博史君（徳島警察本部勤務）からの電話連絡に興奮を覚えた。早速にお祝いの電話を入れるも、結果の発表後も京都に留まり稽古会に参加しているとのこと。さすが、日本最難関の審査レベルの高さを思い知らされる思いがした。

平野君と私の触れ合い、関わりの方は、昭和五十一年に鳴門市第一中学校に入学、そして剣道部に入部してきたことに始まる。

この年の新入部員は、一貫した道場剣道を基本とした鳴門市少年剣道教室（現在の鳴門市光武館）の門下生が多く入部してきた。

当時の鳴門一中の状況は、昭和四十九年九月十九日に待つこと久し、三年十か月と巨費を投資して、一階部分に待望の剣道場（二四〇平方メートル）を有する体育館が完成している。また私も昭和四十九年から通算五年間鳴門一中で在職したが、昭和五十一年からそれまでの野球部から剣道部の顧問へと移った。このことで、平野君を始めとするこの時入部してきたチームメイトと三



第32回県下中学校総合体育大会（県武道館）
昭和53年7月23日 優勝

年間を過ごすという機会に恵まれた。

平野君の入学初年度には、部員数は総勢十九名に達していたが、第三十回鳴門市中学校総合体育大会（昭和五十一年七月十八日）の団体戦から副将として早くも起用された。この時の第三十回県下中学校総合体育大会（昭和五十一年七月二十六日）では個人戦で優勝、その後三年間優勝を重ね、三年生の夏には、第十六回四国中学校総合体育大会（昭和五十三年八月六日）でも見事に優勝している。この大会ではチームも、一中4・1高知学芸（高知）

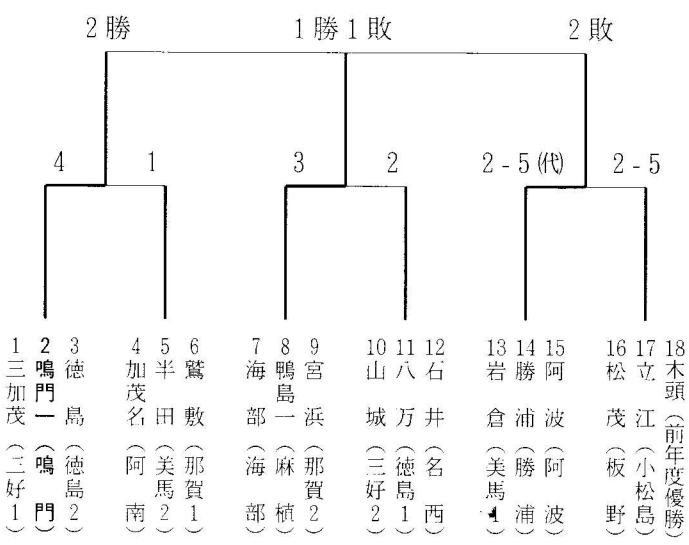
一中4-0 広見（愛媛） 一中4-1 紫雲（香川）とよく善戦し、団体初優勝を果たし有終の美を飾ることが出来た。

中学生時代から、多くの剣道家に指導を乞う、積極的な姿勢で修練に努める姿があった。鳴門はもとより県武道館で開かれる稽古会にも、チームメイトと共に意欲的に足を運び自らの剣風を確立していった。力みのないバランスが取れたしなやかな姿勢から繰り出す面、また小手・面の二段打ちは得意中の得意技といえる。

平野君が中学校を卒業するにあたり「鳴門一中学報」（昭和五十四年三月十五日発行）の中で次のように語っている。「三年間剣道を練習して、色々なことが身についた。まず、剣道を通して学んだ礼儀作法や厳しい練習に耐える根性、それとみんなが団結して一つになってあることを実現させようとするこの素晴らしさ……など、剣道によって、ほんとうに、いいものを学んだと思う。しかし、このいいものを他の事に生かすことができなかつたのが、とても残念である。だから、今後の生活にいいものを生かせるようにしなければならぬと思う。」この言葉通り、当時の錬磨しあったみんな（チームメイト）とは、今もお学年、府県（宮崎・岡山・大阪・千葉）を越えて、深い親交を温められている。そして、自らの置かれた状況を直視する謙虚な心と、動向を見逃さない注意力と旺盛な研究意欲をもって取り組むことが、最高段位にふさわしい技量を身に付ける最短コースであることを、最短の四十六歳の若さで八段合格という偉業を成し遂げる事で証明してのけた。

昨年九月初旬お父様・平野節夫様のご病気による突然の訃報に接した。中学時代から武道館のスタンドには、必ず平野ご夫妻を始めとする「花の応援団」の陣取る姿があった。中でもお父様は、一戦一戦実に緻密に戦況を書き留めておられた。ここ最近においては、お孫さんの応援によくお見かけし、声を掛けさせていたに誠に残念である。この試練を乗り越え、八段として職務に邁進されている平野誠司君の姿勢に感嘆すると共に、剣道一家として県下に名の馳せた平野家の益々の発展と大いなる活躍を期待するところである。

第32回県下中学校総合体育大会 (昭和53年 7月23日)



決勝リーグ

鳴門一中		阿波中	
榊	メメ		網師本
橋本	メメ		佐光
松尾	ド		増田
早川	メ		岩佐
平野	コメ		長瀬

鳴門一中		宮浜中	
榊	メメ	ド	佐々
橋本	メコ		蔭山
松尾	コメ		山上
早川	メ反		泉
平野	メメ		光永

予選リーグ

鳴門一中		三加茂中	
榊	メメ		田口
橋本	メメ		田村
松尾	メメ		黒島
早川			三宅
平野	メメ		久保

鳴門一中		徳島中	
榊		メメ	楠本
橋本	メコ		桑田
松尾	メ	ココ	川崎
早川	ドコ		浜田
平野	メメ		土橋

決勝進出トーナメント

鳴門一中		鷲敷中	
榊	コド		篠原
橋本		コド	中谷
松尾	メコ	メ	宮本
早川	コメ	メ	亀代
平野	メメ		延谷

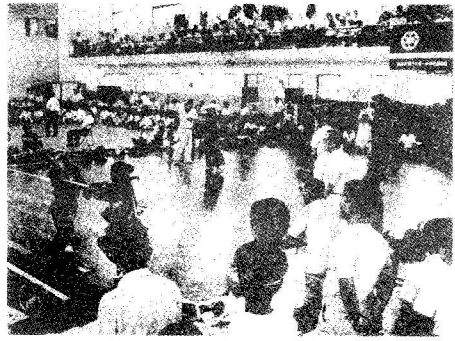
3年 個人戦



1978 鳴門 柔道 柔道 昭和53年(1978年)7月24日 月曜日 スポーツ (1/2)

種別	種目	対戦校	結果
男子	柔道	平野(鳴門一)	松茂(坂野) 2-0
		平野(鳴門一)	堺(勝浦) 1-0
		平野(鳴門一)	三浦(海部) 2-0
		平野(鳴門一)	山口(高浦) 1-0
		平野(鳴門一)	岩見(城西) 2-0
		平野(鳴門一)	金文(半田) 0-0
		平野(鳴門一)	関口(木頭) 0-0
		平野(鳴門一)	岸上(山川) 2-1
		平野(鳴門一)	鎌田(藍住) 0-0
		平野(鳴門一)	宮浦(八万) 2-0
女子	柔道	湯浅(加茂谷)	平田(山城) 0-1
		湯浅(加茂谷)	長瀬(阿波) 0-0
		湯浅(加茂谷)	平野(鳴門一) 2-0
		湯浅(加茂谷)	宮浦(八万) 2-0
		湯浅(加茂谷)	鎌田(藍住) 0-0
		湯浅(加茂谷)	岸上(山川) 2-1
		湯浅(加茂谷)	関口(木頭) 0-0
		湯浅(加茂谷)	金文(半田) 0-0
		湯浅(加茂谷)	岩見(城西) 2-0
		湯浅(加茂谷)	山口(高浦) 1-0

11競技で熱戦の火ぶた



父兄、一般ファンもどくと詰めかけ、熱戦でエンタメする姿。新大会場へ集った選手

柔道 男子 池田が3度目の制覇

【本紙記者 池田 隆雄】池田が3度目の制覇を達成した。男子柔道大会は、24日(月)の夜、鳴門大会場で行われ、池田が3度目の優勝を挙げた。池田は、2000年から2002年まで、3年連続で優勝を果たしている。今回の優勝は、池田にとって、3度目の優勝となる。池田は、今回の大会で、男子柔道大会の優勝を達成した。池田は、今回の大会で、男子柔道大会の優勝を達成した。池田は、今回の大会で、男子柔道大会の優勝を達成した。



第1日

優勝校

(男女別)は兼用校

種目	優勝校
男子	池田(池田)
女子	湯浅(加茂谷)

2年ぶり

【本紙記者 池田 隆雄】池田が2年ぶりに優勝を達成した。男子柔道大会は、24日(月)の夜、鳴門大会場で行われ、池田が2年ぶりに優勝を挙げた。池田は、2000年から2002年まで、3年連続で優勝を果たしている。今回の優勝は、池田にとって、2年ぶりの優勝となる。池田は、今回の大会で、男子柔道大会の優勝を達成した。池田は、今回の大会で、男子柔道大会の優勝を達成した。

柔道

種目	対戦校	結果
男子	池田(池田)	松茂(坂野) 2-0
	池田(池田)	堺(勝浦) 1-0
	池田(池田)	三浦(海部) 2-0
	池田(池田)	山口(高浦) 1-0
	池田(池田)	岩見(城西) 2-0
	池田(池田)	金文(半田) 0-0
	池田(池田)	関口(木頭) 0-0
	池田(池田)	岸上(山川) 2-1
	池田(池田)	鎌田(藍住) 0-0
	池田(池田)	宮浦(八万) 2-0
女子	湯浅(加茂谷)	平田(山城) 0-1
	湯浅(加茂谷)	長瀬(阿波) 0-0
	湯浅(加茂谷)	平野(鳴門一) 2-0
	湯浅(加茂谷)	宮浦(八万) 2-0
	湯浅(加茂谷)	鎌田(藍住) 0-0
	湯浅(加茂谷)	岸上(山川) 2-1
	湯浅(加茂谷)	関口(木頭) 0-0
	湯浅(加茂谷)	金文(半田) 0-0
	湯浅(加茂谷)	岩見(城西) 2-0
	湯浅(加茂谷)	山口(高浦) 1-0

おめでとう剣道八段合格

徳島県警剣道師範 近藤 亘

剣道八段合格。誠にありがとうございます。

平成二十二年五月二日、京都市立体育館で行われた剣道八段審査会において、平野君が素晴らしい立会を行い、見事合格致しました。

私は審査当日、会場でつぶさにその立ち会いを見ることができました。特に二次審査では、気持ちが集中していたのでしょうか。相手を制し、出て打ってよし、応じて打ってよし、打つ太刀一本一本が機会を捉えて無駄がなく、無心の打ちとなっていました。結果発表を待たなくても合格と確信できる素晴らしい内容でした。

平野君は、昭和六十一年四月徳島県警察官を拝命し、翌年から剣道特別訓練員として指名を受け、警察官大会を始め、国民体育大会、全日本東西対抗など各種大会に出場し活躍をしてきました。中でも特筆すべきは、平成六年四月フランスで行われた第九回世界剣道選手権大会に日本代表として選ばれ出場し、個人第三位に入賞したことです。

平成十四年からは、県警剣道部監督として後輩の育成にもあたっています。選手時代から監督としての現在までの平野君を間近で見ていることは、「真摯に剣道に向かい合う姿勢」が変わらないということです。



警察の剣道は、一般の剣道に比べ勝負に対するこだわりが強く、初めの頃は警察剣道に戸惑いもあったと思います。しかし、自分の剣道のスタイルは、一切変えない頑固さも持っています。あえて正攻法に拘っているように見えました。当然対戦相手は戦いやすく、負けが込むこともありました。

そういった中、自分の理想とする剣道を求める求道心に一段と火がつき、八段審査にも繋がってきたのではないのでしょうか。八段合格は、本人にとってはもちろんのこと、県警察、ひいては徳島県剣道連盟にとって大きな財産といえます。また、同じ道を歩む同年代、あるいは後輩にとっても大きな励みになります。

今後とも自らの剣道の追求、そして、徳島県剣道連盟の発展のために活躍していただくことを大いに期待してお祝いと致します。

「日々感思流汗之行」 剣道八段昇段に想う

警察支部 平野 誠 司

私は平成二十二年五月二日、図らずも二回目の挑戦（京都審査）で剣道八段に合格させていただきました。この八段審査に対しては十年前から意識をしておりましたが、それ以上に自分の目指すべき剣道にも人一倍の執着をもって積み上げてきました。

しかし、いざ審査が近づいてくると自分の剣道を表現するといふより、「審査はこうあるべき」とか「こうしなくてはいけない」等のこだわりやとらわれがしがらみとなって、それは型どおりで精気のない剣道を削り上げてしまっていたのです。



初挑戦（半年前の東京審査）が不合格だったことを真摯に受け止めながら、「審査」という言葉に剣道の一番大切なことを忘れてしまっていたことに気づいたことが何よりの救いでした。

『あれこれ工夫し頭脳を働かせ、新しい自分、新しい物、新しい仕方・方法等を削り出すのは人間ならではの喜び。剣道を含め、自分が手掛けるどんな仕事でも、創意工夫が加われば喜びは増す。たとえ人まねでもいい、やってみようと自覚的に意欲的に動くならば、その仕事の上に天与の個性（持ち味）がにじみ出て、その人なりの創造・独創となって、それはそれで楽しいもの。目標と意欲がある限り、この喜びは尽きることはない。』

（記事抜粋 「創造する喜びは無限」芸術生活社）
「何かを活かして形にする」「絵になるように努力する」といった外形を創造する次の段階では「自分の魂を注入する」という一歩踏み込んだところに進んでいきます。そして、相手を前に真剣勝負をやりながら、本物になるまで試行錯誤の繰り返しです。

また、金剛般若経の一節である『オホムネノソウジンニツクシク心無所住而生其心』の教えに重ね合わせてみると、

「自分がやるべき事を適宜心に生じさせながら、しかもその動きには一切心を止めず、偏らず、目の前の相手と合気となる。後先の何もなく、ただ心気力一致した真の勝負をやり切る。」

形の創造から無心応のやりとりまで、一心不乱となって臨めたことが良い結果に繋がったと思っています。

現在私は梟警の監督であり、連盟の強化部長という立場であります。微力ながら率先するこの二つの立場は、逆に言えば非常に恵まれた稽古環境でもあります。

そしてもう一つ。それらを結ぶための「独り稽古」を重要な位置づけとして取り入れてきました。

その一つには、「主観的な自己」への働きかけ」ということです。自分の内側への感覚をもって姿勢を正し、竹刀を構え、竹刀を振り、そして打ち込みます。その一振り一振りに呼吸を凝らして心気力一致を高めるのです。北辰一刀流でいえば、心気の「心」とは内に向けて働く作用、「気」とは外に向けて働く作用、力は五体、すなわち全身全霊（全力）です。この心・気・力の一致力は打突の冴えと強さに必要不可欠です。

もう一つは、「客観的な自己」への働きかけ」です。これは鏡の前で自分の鏡像と対峙して行います。自分の鏡像に対して構え、捌き、振り、そして打ち込みますが、単に鏡の前でやるのではなく、その鏡像の動きを他者の捌き、他者の一振りとして捉え、呼吸を合わせて同調させます。

当然ながら、その動きは自分も鏡像も同じであります。一方の鏡像だけに働きかけることで相対的な捉え方、相手と合気となる力をつけて無心応の打ちに繋げる感覚を鍛えていくわけですね。

この二通りの独り稽古を心を込めて繰り返し繰り返し行くと、集中力が深まっていくことに気付きました。

最近、手にした内田樹著の『武道的思考』の中に、「自分自身の他者化」という項があり、これを「他者の体感との同調」という言葉に置き換え、鏡像やミラー・ニューロンの言葉によって説明しています。

この部分を読んだとき、自分の積み上げてきた感性はこれだと思いました。師道正夫先生との稽古を大切にして、その合気、同調した体感をそのまま鏡像に持ち込むことでその稽古は更に進んでいきました。最初は師との距離（大阪と徳島）を補う苦肉の策でしたが、この独り稽古はいわゆる自己を客観視する、または俯瞰的に捉えることが大切であることに気づかせてくれました。

私のもう一つの感覚に、「なんば」すなわち「二軸感覚」があります。捌きにおいては、下半身の動きがスムーズになり、相手と正対する感覚が明確になってきます。この感覚は恩師、故堀江幸夫先生の足捌きであると確信していますが、稽古の中ではどうも理解できなかった無駄無理のないあの捌きが、この二軸の感覚でスパッと私の体内に入り込んできたのです。今では間詰めや打ち出しのバリエーションに欠かせないものとなっています。

また、打突時には下半身の開きが修正され、右手右足が前にある踏み込み足打突を、この二軸感覚は下半身、特に骨盤の感覚を改めさせ、体崩れ（打ち崩れ）をなくしてくれたように思っています。

当然、従来の腰の回転という一軸感覚も必要ですが、木寺英史氏が著した一連の「常足（あしなみ）」等は、撞木足と左膝、そ

して左踵の踏み方等、左半身を修正するのに大きなヒントとなりました。

結局、剣道の醍醐味は例え審査の立会であってもやるかやられるか。切羽詰まった状態から繰り出される技の攻防。すなわち「真の打ち」の創出であると考えられます。いくらイメージどおりにできたとしても、置きにいった、または当てにいった打突では「感動を与える瞬間」を表現することはできないでしょう。

私はこのように剣道の本体なるものに導かれながら、「自分で、自分を、自分する」剣道観を創造してまいりました。それは日々有意識の積み重ねであり、無意識への移行であることを肝に銘じ、今後も大切にしていきたいと考えております。

今日までご指導していただいた故堀江幸夫先生をはじめ徳島県剣道連盟の先生方、また私を育てていただいた警察組織の上司、同僚の皆様方、そして剣の正師に心から感謝を申し上げ、また今後の正精進、信じた剣行をお約束して心からの御礼といたします。ありがとうございました。

合掌

座右の銘

「オウム心無シヨジユウ所住ジシヨウ而生ゴシン其心」

何事をするにも、しなうと思えばそのすること心止まる。
よって、そこに心を止めず、しなうと思えば心を起しなす。
という心の執着を戒めた教えである。

心無所住而生其心

剣道八段 揮受 誠二 年五十一日 平野 誠司

さすが先輩八段昇段 おめでとうございます

警察支部 岩 木 一 功



平野先輩、剣道八段ご昇段本当におめでとうございます。心からお喜び申し上げます。

私と平野先輩の出会いには昭和五十五年の春、私が高校一年生の時でした。高校

進学時に剣道が強い平野先輩のことを知り鳴門高校を選んだ経緯があり、入学と同時に剣道部で一緒に練習させていただきました。

それから高校、大学、警察と先輩を追いかける形となり、以来三十年余りの長きにわたり、兄貴のように慕わせてもらっています。

高校時代はインターハイ出場を目指し、監督不在の中、一年間を部員だけでやり切りました。平野先輩の強引なリーダーシップ(?)には多々泣かされましたが、あのころの絶対的なチームワークには誇れるものがあります。昭和五十六年八月、本当に勝ち取った「県総体優勝」は自分たちの自負するところでありました。

大学は、「関東と勝負する」と言って大阪体育大学に進学されましたが、その一年後に「大学はすごいところやからお前もここに来い」とお誘いを受け、私も大阪へ行くことになったのです。

高校時代は柔軟な勝負師なところがありました。大学当時から先輩の剣風は中心から外れることのない正しい真っ直ぐな剣道となっていました。いつも私の手本であり、憧れの先輩でありました。

警察特練員時代では、勝ちを求められる警察剣道においても先輩はどんな相手に対しても崩れることなく正しい真っ直ぐな剣道でした。常に「剣道とは何ぞや」という剣道の真髄を熱く語り、追い求めていましたが勝ちという結果を求められる警察剣道の前には、歯がゆい思いをしながらも、自分を見失うことなく剣道に打ち込む姿を拝見しておりました。

時は移り、平成二十二年五月二日の京都審査において、四十六歳という若さで合格率一パーセントの難関を見事突破され、遂に快挙を成し遂げられたのです。

審査会の二日後だったと思いますが、熊本県の人吉で中学校の教諭をしている大学の後輩から連絡が入りました。

「大体大に行って平野先輩の後輩で本当に良かったです。」と、自分のことのように喜んでいて後輩の誇らしげな声でした。これは私達後輩すべて同じ思いでありますが、いつまでも剣道人の憧れの存在であってほしいと思っています。

そして平成二十二年十一月二十九日、徳島市内のホテルにおいて大阪体育大学の恩師である作道正夫先生をはじめたくさんの先生方のご臨席をいただき、警察支部主催の一剣道八段昇段祝賀会を開催いたしました。

その時の平野先輩のお礼の言葉で、今後の剣道修行の日標とするところを三つ話されています。

*警察組織に身を置いて以上、警察剣道の存在価値として、警察官の心身の鍛練はもとより、武道的精神の向上に取り組むこと。

*生涯剣道として白他ともに人生を豊かにできるような剣道を目指すこと。

*青少年の夢や希望、大きな志を強く受け止めることの出来るような奥行きのある剣道であること。

この三つのビジョンを継続していきたいという先輩の言葉に感銘を受けました。

現在、私は警察支部の事務局を仰せつかっておりますが、先輩が目指す徳島の剣道発展ともう一つ、広い視野を持って剣道そのものを直視する剣道観を私自身も少しでも身につけたいと考えております。そして、より良い剣道の伝承のためにお役にたてたらと思っております。

最後になりましたが、平野先輩の今後益々のご発展とご活躍をお祈りいたしまして昇段のお祝いとさせていただきます。



特集Ⅱ 全日本スポーツ少年団交流大会

第三十二回全国スポーツ少年団

剣道交流大会を終えて

徳島県スポーツ少年団本部長 組 橋 正 人



日頃は、徳島県体育協会徳島県スポーツ少年団の諸事業にご理解、ご協力、ご支援を賜り深く感謝いたします。

第三十二回全国スポーツ少年団剣道交流大会が、去る平成二十二年三月二十七日（土）二十九日（月）の三日間、鳴門・大塚スポーツパークアミノバリエーホールで開催されました。

この大会は、平成十九年五月三十一日、日本スポーツ少年団本部の開催決定により行われるもので、徳島県スポーツ少年団としては、これを受けて大会成功のために諸準備を進めてきました。

まず最初に徳島県剣道連盟へ共催の依頼と競技全般の運営をお願いし、快くご了解いただいたことからスタートしました。その後、平成二十年三月二十六日から第三十回静岡大会、平成二十一年三月二十七日からの第三十一回岩手大会に、県剣道連盟の三木理事長を中心とする視察団が参加し、大会の実態を見聞し研究

しました。

そして、平成二十一年十月八日に徳島県実行委員会設立総会を開催し、いよいよ競技運営等の諸準備が始まりました。式典部会、競技部会など五部会に於いて、それぞれ具体的な準備を重ね、大会前日の平成二十二年三月二十六日に準備を全て終え、万全の体制で三日間にわたる大会を迎えました。

三月二十七日の第一日は、飯冨知事、全日本剣道連盟松井審



判長をはじめ多数の来賓、役員、団員（選手）等の参加のもと、不安と自信が交錯する中で、開会式が行われ、熱戦の火蓋が切って落されました。

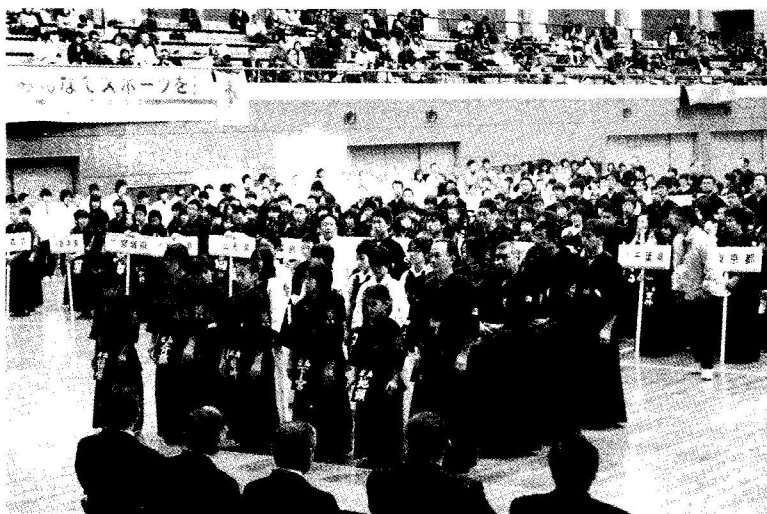
参加者は各都道府県の厳しい予選を勝ち抜いた四十八チーム（開催県は二チーム）の団体戦（小学校四・五・六年生五名）と個人戦（中学生男女各一名の計九十六名）の団員（選手）、指導者（監督）をはじめ、運営・競技役員、審判員等約一〇〇〇名でした。

開会式に続いて、徳島県剣道連盟教士八段の近藤巨様をはじめ、多くの先生方による日本剣道形、古流組太刀、団員基本錬成、指導者研修等盛り沢山のメニューを実施しました。さらに本県スポーツ少年団リーダー会による楽しいゲームや記念品交換等の交歓交流会も盛大に行われ、団員相互の交流を深めました。

第二日目より団体戦予選リーグ、個人戦（男子・女子予選リーグ）が行われ、それぞれベスト一六が決定しました。

最終日の第三日目は、団体戦、個人戦男女決勝トーナメントが行われ、それぞれ優勝・第二位・第三位・敢闘賞が決定しました。

本県代表の団体戦阿南市チームと鳴門市チーム及び個人戦の男子西岡昌哉君、黒木景太君、



女子山本悠さん、中井優里花さんは地元の大声援を受けるなか、開催県の意気に燃え大健闘して大きな感動を与えました。阿南市チームはベスト八、黒木景太君はベスト一六でいずれも敢闘賞を受賞しました。

午後一時からの閉会式も無事終り、全日程が成功裏のうちに終了しました。

感動、興奮、歓喜……数多くの熱闘ドラマを生んだこの大会を

無事開催出来ましたのも、ひとえに徳島県剣道連盟の遠藤会長様、三木理事様をはじめ、競技役員、審判員の皆様の深甚なるご尽力の賜物と痛感しています。

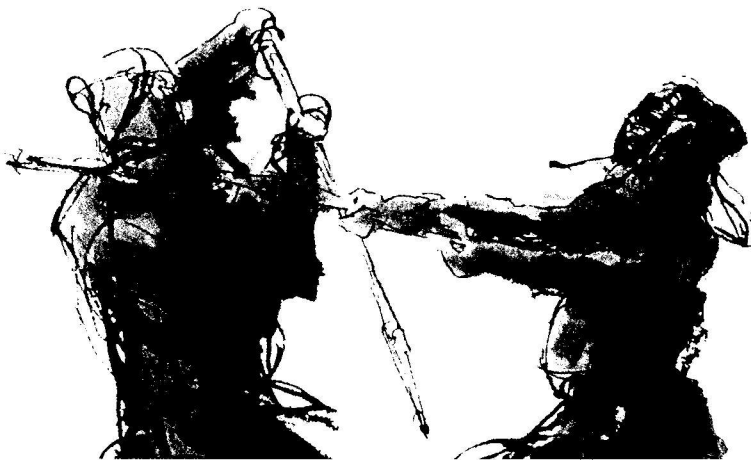
この感動と感激を大切にしながら、さらに大きく発展させるためにも徳島県スポーツ少年団本部は、徳島県スポーツ少年団活動をより一層活発にしていこう覚悟です。

徳島県剣道連盟の皆様、本当に有難うございました。



演武：無双直伝英信流古伝太刀打之位
(打太刀) 一村昌和 (仕太刀) 坂本憲一

※ 写真提供 (株)フォトクリエイト



第三十二回全国スポーツ少年団 剣道交流大会

米 倉 滋



青少年期におけるスポーツ活動は、心身の健やかなる発達を促すとともに、ルールを守るフェアプレーの精神力を培い、仲間との交流を通じてコミュニケーション能力を育成し、豊かな心と他人に対する思いやりの心をはぐくむなど、青少年の健全育成に重要な役割を果たすことから、財日本体育協会日本スポーツ少年団及び財団法人日本剣道連盟等は、全国スポーツ少年団剣道交流大会を共催開催しています。

平成十九年五月三十一日、日本スポーツ少年団から財徳島県体育協会に対し、平成二十一年度全国剣道交流大会の徳島県開催決定通知がなされ、開催に向けた準備が始まりました。私達は、平成二十年三月二十六日から同月二十八日までの三日間、静岡県下で行われた第三十回剣道交流大会の視察から行動を開始しました。

基本的に大会運営は体育協会、剣道競技運営は徳島県剣道連盟で行うことになっています。体育協会関係者は剣道を熟知されていない方が多く、又担当者の人数も少ないのが実状でした。その

ため両者が積極的に関わって一致団結し、大会を成功裏に導くための実施計画原案に基づき、その後の日程を次のとおり計画し、実施しました。

平成二十一年三月二十七日 第三十一回全国スポーツ少年団剣道交流大会岩手大会視察

平成二十一年五月十日 第一回徳島県予選会実施

平成二十一年六月十二日 スポーツ少年団剣道徳島大会に向けた準備会（剣道連盟実行委員会の立上げ）

平成二十一年九月十七日 関係者事前打合せ会（県体協、県剣道連盟、県スポーツ関係者）

平成二十一年十月八日 第三十二回全国スポーツ少年団剣道交流大会徳島県実行委員会設立

総会

平成二十一年十二月十三日 第二回徳島県予選会（都市対抗戦にて代表選手決定）

平成二十一年十二月二十九日 剣道連盟実行委員会（役割分担等の具体化）

平成二十二年一月十一日 剣道連盟実行委員会（役割分担等の具体化）

平成二十二年一月二十三日 リハーサル大会会場設置

平成二十二年一月二十四日 リハーサル大会（第二十回県下中学校剣道強化練成大会）の実施

式典のリハーサル 審判研修 運営委員会連絡調整会議

平成二十二年三月二十六日 競技会場設営

平成二十二年三月二十七日から同月二十九日までの三日間本大会開催（鳴門・大塚スポーツパーク・アミノパビリューホール）

この中で剣道連盟がはたす役割は競技運営で具体的には

- ・ 競技の実施計画
- ・ 競技の進行
- ・ 競技役員の選任
- ・ 指導者会議の開催
- ・ 競技記録
- ・ 競技用具
- ・ 日本剣道形、古流組太刀演武、団員基本錬成、指導者研修会の開催
- ・ 審判員の選任、研修
- ・ 会場の掲示等

でありまさに県剣道連盟あげての取組みとなりました。

本大会は三月二十七日から二十九日までの三日間にわたる大規模大会だけに、大会役員としてお願いする先生方は大勢となり、しかも「土・日・月曜日」の三日間となるので仕事に従事されておる先生方には格別の配慮をいただきました。

又、審判員については、「審判が良くなれば試合が良くなり、試合が良くなれば剣道全体が良くなる」とのもと適正公平な審判

を依頼すべく剣道六段以上で三月二十八日、二十九日の二日間にわたる出席及びリハーサル大会での審判と審判研修の受講をお願いしました。本大会前日競技会場設営途中、全日本剣道連盟長尾英宏常任理事、全日本剣道連盟事務局員一名及び審判長の松井明範士（本県出身、岡山県在住）の三名が大会会場を訪れ、本県剣道連盟の役員と打合せ会議を行い大会にそなえました。

大会初日は、指導者会議、団員研修オリエンション後、開会式が挙行され、少年剣士がもつプラカードを先頭に、各都道府県の団旗を掲げた四十八チーム（選手、指導者）の堂々とした入場行進で幕を開けました。開会式に引き続き、日本剣道形演武、古流組太刀演武、基本錬成指導者研修、交歓交流会等の行事が行われました。

日本剣道形は打太刀・近藤亘、仕太刀・平野誠司両先生による演武。又、古流組太刀は、打太刀・一村昌和、仕太刀・坂本憲一両先生による長谷川英信流「古伝太刀打之位」の演武が行われ、格調高く、迫真の演武に会場から称賛の拍手が送られました。次く団員基本錬成は、県警剣道師範剣道教士八段近藤亘先生の指導のもと県警剣道特錬員の協力を得て充実した錬成がなされました。

一方、指導者研修においては、審判長の松井明範士から「剣道理念と剣道指導の心構えを重視した青少年に人間力をつける指導について」との講話がなされ、指導者にとっても指導の指針等が語られました。

大会二日目は、審判会議で本大会申し合せ事項を確認し、試合

最後になりますが、青少年を取り巻く環境の悪化や子ども
の体力向上が求められている昨今、青少年の健全育成、そして地域を
つなぐことを目指すスポーツ少年団の果たす役割は従来にも増し
て重要となっています。私達は、本大会などにより剣道の錬成や
試合及び交歓交流会を通じて、青少年の健全育成と体力の向上を
図るとともに、地域の人々との関りを通して子どもたちの社会性
を養いさらには生涯剣道の振興をはかりたいと願っています。



第三十二回全国スポーツ少年団 剣道交流大会に出場して

徳島県B監督 寺西明弘



剣道を修得する少年にとって誰でも出場したいと願う、全国スポーツ少年団剣道交流大会が、平成二十二年三月二十七日、鳴門市で開催されることとなり、徳島県代表チームの他に地元チームとして小学生団体戦一チーム、中学校個人戦男女各一名が出場できるという幸運に恵まれた。

過去三回徳島県代表チーム監督として本大会に出場させてもらっている私にとって何よりも幸運だと受け止めた。

平成二十一年十一月二十一日、その予選を剣道連盟主催のもと光武館道場で行い以下のとおり選手が決定された。

団体戦

監督 寺西 明弘（鳴門市光武館）

先鋒 富田 瑠莉（鳴門市光武館）

次鋒 出淵 南帆（鳴門市光武館）

中堅 本田 洋輔（鳴門運動公園、現鳴門少年剣道教室）

副将 太田あかり（鳴門市光武館）

大将 中瀬 知勇（鳴門市光武館）

個人戦

男子 黒木 景太（鳴門市光武館）

女子 中井優里花（鳴門市光武館）

選手が決まってからは、中学生については各個人に調整方法をまかせ、小学生を中心に、合同稽古、練習試合を行ってきた。

近県の代表チームと練習試合をしてみると、実力の差は歴然としていて、一勝も出来ないようなチームであることが判り、選手自身も自信喪失になり、かなり落ち込んだ。

また、他からも、「鳴門市以外の市町村で開催すればよかったのに。」といった声も聞こえてくるようになり、私自身も「こんなチームが代表になり申し訳ない。」「もっと鳴門が強かった時期に開催してくれたら。」と思うようになった。

そんな気持ちを消すには練習しかないと考え、二月からは、毎日厳しい稽古を重ねてきた。

選手の中には、練習が嫌になり練習をさぼる者も出てきたが、その都度、「全国大会に出場したくても出場できない人がいる。

君たちは開催地で出場出来るという幸運だけだ。厳しい予選で敗退した人の気持ちを考える。」「全国にチャレンジ出来ること自体が幸せだ。」と言いつづけた。すると誰と無く「出場出来なかった選手の分もがんばろう。」と互いに励まし合い、チーム一丸となって稽古に励み大会を迎えることとなった。

大会初日目

入場行進は全出場チームの最後であったため、順番を待っている

る間は、私を含め選手それぞれが無口になり、緊張している様子が伺えたが、いざ行進が始まると堂々とした態度で行進していた。また、開会式での日本スポーツ少年団団員綱領の朗読（開催市の代表が行う）もそれぞれの選手が役割をきちんとこなし感動的な開会式を終えることが出来た。

二日目

さて、待ちに待った大会本番、予選リーグを迎えることとなった。

団体戦、予選リーグ最初の対戦相手は長野県、選手達には、「悔いを残さず全面的に気迫を出し積極的に攻めていこう。」と指示し、試合に臨んだ。

先鋒、富田選手。積極的に攻め、出小手で一本先取し、更に相手の手元が浮いた瞬間を見逃さず小手に飛び込み、二本を先取る幸先の良いスタートとなった。

次鋒、田淵選手。チームの中では一番声が出ず、いつも私に「気迫、声出せ。」と叱られている選手であるが、この日はいつもと違い、気迫で相手を攻め小手で一本、更に抜き面と二本を先取した。

中堅、太田選手。得意の小手で攻めるも、決定打が無く引き分け。

大将、中瀬選手。得意の面返し胴で攻めるも、不十分で引き分け、しかし結果は初戦を勝利で飾った。

予選リーグ二戦目、対戦相手青森。試合前、「相手は初戦、こ

ちらは二試合目、試合順番からはこちらが断然有利である。初戦のときのように今まで稽古してきたものを出そう。」と指示し試合に臨んだ。

しかしながら、青森は横へのさばきが素早く、先鋒一本負け、次鋒、中堅共に二本負け、副将、大将が引き分けの三―〇で敗退し、目標のリーグ突破を果たすことはできなかった。青森は、決勝トーナメント一回戦でも優勝候補の京都に勝ち、優勝した広島県チームに接戦の末敗退した。そんなチームに引けを取らずに対戦できたことは、やはり日々の苦しい稽古を積み重ねた結果であり、自信へと繋がっていった。

中学校男子個人戦出場黒木選手は、全国中学校総体にも大将として出場している名選手であり、上位入賞が期待される選手である。

予選リーグ初戦の相手は、藤澤選手（長野）。黒木選手の圧倒的な強さで、開始早々面、二本目胴を決め快勝する。

予選リーグ二試合目は、全国中学校総体にも出場している長内選手（岩手）互いに攻め合うが決まらず引き分け。この結果、黒木選手と長内選手の同点決勝となり延長の末、黒木選手の胴が決まり決勝トーナメント進出となった。

中学校女子個人戦出場の中井選手、一年生ながら道場全体に響き渡る気迫を持っている選手で、予選リーグ初戦の相手は沖田選手（奈良県）、中井選手は気迫で攻めるも、面を取られ一本負け。

予選リーグ二試合目の相手は菅選手（山形）。中井選手得意の

面返し胴が決まり一本勝ち。この結果、一勝一敗で予選リーグ敗退となった。

大会三日目決勝トーナメント、徳島県Bチームで唯一決勝トーナメントに進出した黒木選手は、山梨県の梶原選手との対戦となったが、面の一本負けでベスト一六、敢闘賞を受賞した。

全ての試合が終了し閉会式を迎えるとき、選手達に「出場してどうだった。」と尋ねると、「それぞれが楽しかった。」「来年も出場したい。」等、「友達が出来、メール交換した。」と話していた選手もいた。

閉会式を終えた全ての選手の顔には疲れより笑顔があり、大規模な大会に出場できた喜びの表情があふれた。

このチームはこれで解散となったが、選手達にはいつまでも指導してくれる先生、試合等で世話をしてくれているご両親、互いに稽古している先輩、同僚、全ての人に感謝の気持ちを持って、これからも剣道が続けて後に続く少年育成に努め、今度は君たちが指導者としてこの大会に出場して欲しいと願う。

最後になりましたが、地元開催ということで、準備等大変であった剣道連盟のみなさん、並びに徳島県体育協会のみなさん、本当にありがとうございました。書面をもって御礼の言葉と代えさせていただきます。



試合結果

〈団体戦予選リーグ一回戦〉

徳島 B	二	一	長野県
先鋒	富田	ココ	横川
次鋒	田淵	コメ	松沢
中堅	本田	一	柳沢
副将	太田	引き分け	内田
大将	中瀬	引き分け	小西

〈団体戦予選リーグ二回戦〉

徳島 B	〇	一	三	青森県
先鋒	富田	一	メ	新田
次鋒	田淵	一	コメ	古川
中堅	本田	一	メメ	阿部
副将	太田	引き分け		小松
大将	中瀬	引き分け		今野

〈男子個人戦予選リーグ〉

黒木 (徳島)	メド	一	藤澤 (長野)
黒木	引き分け		長内 (岩手)

代表戦

黒木	ド	一	長内
----	---	---	----

決勝トーナメント一回戦

黒木	一	メ	梶原 (山梨)
----	---	---	---------

〈女子個人戦予選リーグ〉

中井 (徳島)	一	メ	沖田 (奈良)
中井	ド	一	菅 (山形)



第三十二回全国スポーツ少年団 剣道交流大会に出場して

副将 太 田 あかり



第三十二回全国スポーツ少年団剣道交流大会が鳴門市で開催されるという幸運に恵まれ、鳴門市代表で出場できたことがとてもうれしくて、いい経験になったと思っています。

鳴門市で予選が行われたのは十一月でした。五・六年生女子は三人しかいなかったのですが、総当り戦でした。それで私は優勝し、副将になりました。日が近づくにつれ、きん張が増してきました。三月に入ると、団体のメンバーは、練習日が増えました。増えた練習日は少しの時間しかできなかったけど、集中して練習ができました。出場記念の刺しゅうの入ったはかまを作ったり、徳島の垂れネームをわたされたり、日本スポーツ少年団員綱領の練習をしたり、楽しいことや、うれしいこともたくさんありました。特に私は、はかまができて初めて見たとき、とてもうれしかったことをおぼえています。

三月二十七・二十八・二十九日が大会の日でした。鳴門市の体育館だったし、何度も何度も行ったことのある体育館だったので、会場に入る前のドキドキやワクワクは少なかったのですが、入っ

てみるとザワザワしていて、会場につられるように少しきん張しました。ほかの選手の人たちは、各都道府県代表というだけあって、キリッとしていてかっこよかったです。

大会の間は徳島市内のホテルにとまれて、特別な気分でした。ご飯もホテルで食べて、夜は徳島県代表の人たちと遊んだりしました。今までしゃべったこともなかったけど、一気に仲良くなれました。

二日目、二十八日にリーグ戦がありました。相手は、青森県代表と長野県代表でした。やっぱり、いつも通りきん張しましたが、家族や道場の友達が応援に来てくれたので、きん張も少しなくなりました。結果は一勝一敗でしたが、勝者数で負けていて、おしくも決勝リーグには上がれませんでした。

三日目は、リーグを上がった中学生や徳島県代表の団体チームの応援をしたりしました。

私たちは、リーグを上がれなかったけれど、たくさんの人たちと交流を深めることができてよかったです。そして、いろんな経験ができて、たくさん思い思いの出ができてよかったと思っています。強い人の試合もいっぱい見れて、たくさん先生方に指導していただいて、とても勉強になりました。そしてやっぱり、自分自身が一番成長できたと思います。

第三十二回全国スポーツ少年団

剣道交流大会

徳島県A監督 中山 繁輝

○期日 平成二十二年三月二十七日～二十九日

○場所 徳島県鳴門市アミノパビリューホール

○徳島県Aチーム (阿南市選抜)

監督 中山 繁輝 (徳島至誠館)

選手 先鋒 朝田 智輝 4年 (至誠館)

次鋒 清水 真優 6年 (阿南)

中堅 福田 峻斗 6年 (至誠館)

副将 玉田 真子 6年 (至誠館)

大将 田中 皓己 6年 (至誠館)

中学男子 西岡 昌哉 3年 (阿南一中)

中学女子 山本 悠 3年 (那賀川中)

○試合結果

小学校団体ベスト8 (敢闘賞)

団体予選リーグ 一試合目

徳島	3(5)	(0)	0	山梨
先朝田	メ	ー		山本
次清水	×			前川
中福田	メ	ー		苅津

団体予選リーグ 二試合目

副玉田	×			上野
大田中	メ	ー		八田

徳島 3(4) (0) 0 福井

先朝田 ココ × 丹羽

次清水 メ ー 中山

中福田 × × 玉岡

副玉田 × × 宮澤

大田中 コ ー 増永

団体決勝トーナメント 一回戦

徳島 2(3) (1) 1 三重

先朝田 コ ー 大道

次清水 × × 芳村

中福田 ドド ー 崔

副玉田 ー メ 高田

大田中 × × 佐藤

団体決勝トーナメント 二回戦

徳島 1(1) (3) 2 大阪

先朝田 メ ー 姜

次清水 × × 黒川

中福田 ー コ 内橋

副玉田 × × 石田

大田中 ー メコ 内橋

男子個人予選リーグ（一勝一敗）

西 岡 下 | 松 山（秋田）
西 岡 | メコ 榊 原（岐阜）

女子個人予選リーグ（一勝一分け）

山 本 メ | 塩 野（群馬）
山 本 | × 高 木（福島）

○所感

大会初日の開会式では、開催県を代表して福田・玉田両選手のさわやかな選手宣誓で、大会の幕が切って落とされた。

交流大会にふさわしく、試合だけでなく合同練習やレクリエーションなどで交流を深め、また、夜の宿舎でも他県の選手たちと親睦を図ることができた。余談ではあるが、宿泊先の駅前のホテルのレストランから、食事をとりながら間近に観る「眉山」は実に雄大で絶景でもあった。

日頃は遠くから眺めている眉山であったので、改めて徳島の良さを一つ見直した思いであった。

大会二日目、いよいよ予選リーグ開始。全員が攻めの気持ちが強く、安定した戦いで山梨・福井を破り、決勝トーナメント進出を果たした。

中学男女個人戦では、二人とも一勝をしたものの、予選リーグの突破はならなかった。

いよいよ大会最終日。決勝トーナメント一回戦、三重県に辛勝。続く二回戦では今日の一番の大阪戦である。大将戦まで勝負の

行方が分からない緊迫した試合であったが、接戦の末敗れた。

地元開催で優勝を指していただけに、準々決勝敗退は無念であった。審判員の

判定を批判することはタブーであるが、

今回の大阪戦ではビデオを何回確認しても、打突部位を打たれていない技が二本有効打突となった。

本県の勝利に大きな誤算であったことは間違いない。今後、公平で適正な審判を望みたい。

選手の皆さんの、更なる精進と益々の飛躍を心よりお祈り申し上げます。



第三十二回全国スポーツ少年団 剣道交流大会徳島県大会に参加して

大野城山クラブ 西 岡 昌 哉



平成二十二年三月二十七日から二十八日、鳴門・大塚スポーツパーク、アミノバリューホールで第三十二回全国スポーツ少年団剣道交流大会が開催されました。僕自身、本大会は初出場となります。参加資格は、中学三年までということもあって、僕にとっては最後のチャンスに出場することができ、光栄に思っています。今までご指導いただいた道場の先生方、中学の先生方、稽古会等でお世話になった先生方、先輩方、チームメイト、お世話になった保護者の方々、ありがとうございます。

僕の祖父と父は、大野城山クラブで、小学生生達に剣道を指導しています。そんなこともあり、小学校に入学すると同時に、兄も僕も剣道を学ぶことになりました。先生方が指導してくださるうちに竹刀が振れず、足さばきもできず、自分の不器用さに嫌になることも何度もありました。剣道をやめたいと思うことは、何度も何度もありました。だけど、このまま途中でやめてしまうのは何か悔いが残るような気がして、中学三年の引退するまではがんばろうと思いい練習に励みました。練習していく中で、試合で勝つ

こともできるようになり、いつのまにか剣道が好きになりました。今大会の予選リーグ、第一試合は、秋田県代表の松山君で、その時は返し胴が決まり一本勝ちすることができました。第二試合の岐阜県代表の榊間君には、面に出るところを出ばな小手を二本取られてしまい、予選落ちとなってしまいました。どこか捨て身になることができなかつたのではないかと反省していますが、攻めて負けたのだから、悔いは残りません。

今大会で優勝した和歌山県代表の平井君の試合を見ると、身体はそれほど大きくなく僕より少し大きいくらいですが、攻めが効いて剣がつぶれず、「気・剣・体」が一致のすごい剣道をしていました。僕は、剣道の新しい目標ができたと思いました。

今大会に出場できたことで、他県の選手と話をしたこと、攻めの剣道を目のあたりにできたことが、大きな収穫となりました。多くの先生方の指導、支えになってくださった方達の御蔭で今大会に参加できたので、感謝の気持ちと剣道に対する高い目標を持ち続け、今後も練習に励みたいと思います。

特集Ⅲ 中学校武道必修化に向けて

中学校武道必修化に向けた 剣道連盟の対応について

理事長 三 木 毅

はじめに



教育基本法は、昭和二十二年に制定され約六十年に亘って学校教育が実施されてきたが、平成十八年安倍内閣において、教育基本法の改正が審議され平成十八年十二月十五日に改正法が可決され、平成十八年十二月二十二日に公布施行された。

私ども剣道関係者にとって最も関係が深まった点は、中学校学習指導要領の改訂で示された「中学校における武道の必修化」である。

武道の範疇には、剣道・柔道・相撲・空手・弓道・薙刀・銃剣道・少林寺拳法・合気道などがある。先ず指導要領では、剣道・柔道・相撲が示されているが、他の武道についても履修させることができるとも示されている。

教育基本法の前文では、「日本国民は、たゆまぬ努力よって築

いてきた、民主的で文化的な国家を更に発展させるとともに、世界の平和と人類の福祉の向上に貢献することを願うものである。

我々は、この理想を実現するため、個人の尊厳を重んじ、真理と正義を希求し、公共の精神を尊び、豊かな人間性と創造性を備えた人間の育成を期するとともに、伝統を継承し、新しい文化の創造を目指す教育を推進する。」と明示されており、全日本剣道連盟が昭和五十年三月に制定した「剣道修練の心構え」に明記された、「剣道を正しく真剣に学び心身を錬磨して旺盛なる気力を養い剣道の特性を通じて礼節をとうとび審議を重んじ誠を尽くして常に自己の修養に努め以って国家社会を愛して広く人類の平和繁栄に寄与せんとするものである。」という崇高な剣道精神と合一するところである。

剣道の歴史を顧みると隆盛期と衰退期を知ることができるが、我ら剣道愛好者が地道に伝承修練してきたことが、ここに公に大きく評価されたことに誇りを感じ、次代へ確かな伝承を行うという重責を果たして行かなければならない。

第一 教育基本法などに明記された武道

一、教育基本法第二条（教育の目標）

教育は、その目的を実現するため、学問の自由を尊重しつつ、次に掲げる目標を達成するよう行われるものとする。

一項 四項省略

五項 伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国

と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平

和と発展に寄与する態度を養う。

二、第十三条（学校・家庭及び地域住民等の相互の連携協力）

学校・家庭及び地域住民その他の関係者は、教育におけるそれぞれの役割と責任を自覚するとともに、相互の連携及び協力を努めるものとする。

三、中学校学習指導要領 第七節 保健体育

ア、目標

心と体を一体としてとらえ、運動や健康、安全についての理解と運動の合理的な実践を通じて、積極的に運動に親しむ資質や能力を育てるとともに、健康の保持増進のための実践力の育成と体力の向上を図り、明るく豊かな生活を営む態度を育てる。

イ、体育分野の目標

◎ 各種の運動の合理的な実践を通して、課題を解決するなどにより運動の楽しさや喜びを味わうとともに運動技能を高めることができるようにし、生活を明るく健全にする態度を育てる。

◎ 各種の運動を適切に行うことによって、自己の体の変化に気づき体の調子をを整えるとともに、体力の向上を図り、たくましい心身を育てる。

◎ 運動における競争や協同の経験を通して、公正な態度や、進んで規則を守り互いに協力して責任を果たすなどの態度を育てる。また、健康・安全に留意して運動をす

ることができ態度を育てる。

ウ、体育分野の内容

◎ 自己の能力に適した課題をもって次の運動を行い、その技能を身に付け、相手の動きに対応した攻防を展開し練習や試合ができるようにする。

・ 柔道

・ 剣道

・ 相撲

◎ 伝統的な行動の仕方に留意して、互いに相手を尊重し、練習や試合ができるようにするとともに、勝敗に対して公正な態度がとれるようにする。また、禁じ技を用いないなど安全に留意して練習や試合ができるようにする。

◎ 自己の能力に適した技を習得するための練習の仕方や試合の仕方を工夫することができるようにする。

第二 武道必修授業の実施時期

中学校における武道実施時期は、平成二十四年四月からである。

学校現場では、いきなり授業実施はできないので、平成二十一年度から指定校を確定して事前の試行授業を行いながら、県下体育教諭の研修会を開催し、本格実施に備えている。

第三 県教育委員会と徳島県剣道連盟との連携

ア、県教育委員会スポーツ健康課との連携

中学校武道授業の開始に向けた県教育委員会の担当部は、

平成二十年四月当時は、教育委員会スポーツ健康課であり、石井博課長のもとで、「武道振興協議会」を創設して剣道連盟との会合をもつこととなった。

剣道連盟では、「剣道振興協議会」委員として

三木 毅 河田 清実 米倉 滋 近藤 巨
藤本 雅史 木原 資裕 高島 稔之 美馬 勝行
富田 正 中山 繁樹 藤川 和秋 竹内佳代子
平野 悦子

が就任し、また、「剣道振興小委員会」委員には

三木 毅 河田 清実 近藤 巨 藤本 雅史
高島 稔之 美馬 勝行 日野 利之
が就任した。

第一回会合は、平成二十年七月五日徳島市の「ふれあい健康館」で開催され、石井博課長と剣道連盟から剣道振興協議会委員が参加した。

第二回は、平成二十年十一月十五日徳島県警機動隊会議室において開催した。

第三回は、平成二十一年二月七日機動隊会議室において開催した。

この間、全国的見地から武道必修化に向けた先進県の事例の紹介がなされたり、また剣道連盟では「剣道道場・剣道教室一覽」の資料作成を行った。

イ、県教育委員会体育健康課との連携

県教育委員会の担当課が「体育健康課」となり、会合の名称が「中学校武道必修化に向けた地域連携指導推進協力者会議」となった。この会議は剣道のほか、柔道・相撲・ダンスの各委員によって構成され、剣道連盟からは「三木毅・木原資裕・米倉滋」の三名が委員となった。

ウ、国からの委託事業

文部科学省では、「中学校武道必修化に向けた地域連携指導実践校」という事業を徳島県に委託した。

徳島県教育委員会体育健康課では「地域連携指導推進協力者会議を立ち上げ、構成メンバーは柔道・剣道・相撲・ダンスの部門から各三名が選出された。剣道連盟からは、三木毅・米倉滋・木原資裕がメンバーとなった。

一方、剣道部門の教育関係者で構成する「研究委員会」では木原資裕・福多博史・叶井克典・本村賢二・白木洋一・長井薫がメンバーとなった。

エ、平成二十一年度剣道指定校

文部科学省からの委託事業を開始するに当たり徳島県での剣道指定校は、海南中学校・阿南第一中学校・城西中学校・北島中学校・瀬戸中学校・石井中学校・県立川島中学校の七校となった。

また、平成二十二年度の指定校は、県立富岡東中学校・羽ノ浦中学校・勝浦中学校・鷺敷中学校・藍住東中学校・土成中学校・阿波中学校・鴨島第一中学校・美馬中学校・穴吹中

学校の十校となり、国から剣道防具、竹刀が支給された。オ、中学校における講習会の実施

教育関係者の研究委員会が中核となって、指定校の授業実態調査を行いこれを分析して資料化し、中央から範士八段佐藤義則講師を招聘して、県下中学校体育教諭を対象に講習会を開催した。

平成二十一年度は、六月二十九日に海南文化館で実施され三十名が受講した。

次いで、平成二十二年度は十月七日、八日の二日間鳴門市ソイジョイ武道館で実施された。

第四 徳島県剣道連盟の活動

ア、全中学校への訪問活動

平成二十二年度が開始し徳島県教育委員会と県下各中学校では武道必修化まで二年後と押し迫ってきたことから学校現場ではいよいよ武道の種別選択作業を進めなければならない時期となった。

全日本剣道連盟では、中学校で剣道が選択された場合の対応として平成二十一年四月一日付で「剣道授業の展開」という指導要領の資料を作成し発刊した。この資料の内容は中学校における授業計画書を即刻作成できるものである上、資料に基づき授業の実際が展開できるものとなっていることから、県下各中学校に配布して剣道を選択されやすい環境を醸成するため、県下各支部長が中核となって「中学校訪問担当者」

を組織した。県下各支部の三ブロックについて、三木毅において平成二十二年九月五日徳島中央ブロック・九月十二日西部ブロック・九月十九日南部ブロックにおいて各ブロック内の全中学校を訪問し、説明すべき内容を確認する会議を開催した。

その結果、平成二十三年四月現在で、徳島県で剣道を選択された中学校の数は二十九校となった。

イ、剣道連盟からの剣道講師派遣

国からの委託授業による剣道指定校の授業に講師として活動したほか、二十二年度に前倒し実施の中学校に地域部外指導者として講師を派遣した。

ウ、剣道連盟としての課題

各中学校から剣道講師派遣要請がなされた場合、授業の現場で指導する内容に格差や内容の欠落が生じないように、統一した資料を作成の上、講習会を開催する必要がある。

中学校武道必修化に向けて

阿南第一中学校 福 多 博 史

学習指導要領改訂に伴い、平成二十四年度から中学校の体育授業において武道が必修となります。主に剣道・柔道・相撲の三種目からそれぞれの学校が実施する種目を選択し授業を行います。

この武道必修化に際し、徳島県剣道連盟から他の武道の連盟に先立って対策を考えて頂き、多大なご支援を頂いているところです。

各支部の代表者の方が県内の中学校一校一校に出向き、剣道の良さや環境の整備についてお話をさせて頂いたことは剣道授業の実施に向け大きな一歩となっています。徳島県では三種目ある武道の中で剣道を実施する学校が多いのもその成果の表れだと感じています。紙面にて失礼ではありますがお礼を申し上げます。

武道必修化の完全実施まであと一年となりました。私が勤務している阿南第一中学校では平成二十一年度より剣道の授業を実施してきました。この取組の中で見えてきた課題や成果について報告させていただきます。

一、武道（剣道）必修化の目的

改正の教育基本法では、「伝統文化を尊重し、それらを育んできた我が国と郷土を愛するとともに他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと。」と伝統文化に関する具体

的な目標が明示されました。基本となる技を用いて、打ったり受けたりするなどの攻防を展開するという競技的な特性を学ばせることはもちろんですが、「礼には始まり礼に終わる」という武道の考え方、礼儀作法や所作について説明し指導していくことも伝統文化としての剣道を知ってもらう上で必要だと思います。

二、剣道の授業の実施に向けての課題と対応

(1) 武道場などの施設の問題

現在、半数近くの学校に武道場がつくられていますが、武道場がない場合でも体育館で実施しています。本校では学校の敷地内にある練武館道場で授業を行いました。

(2) 指導者の問題（指導者の指導力の向上）

体育科の教師が授業の指導にあたります。平成二十一年度より、徳島県教育委員会や学校剣道連盟の主催で指導者講習会が年に数回開催され、実技講習や授業の進め方について研修を深めました。また、外部指導者が教師と連携して授業の指導を行っている学校もあります。

(3) 防具などの用具の問題

文科省の「中学校武道必修化に向けた地域連携指導実践事業」の指定を受け防具・竹刀四十組が支給されました。県内でもこの事業により二十校以上の学校に防具が支給されています。

(4) 授業の進め方についての問題

生徒達にとって魅力ある剣道授業を進めていくことが大切に

なります。あるアンケートで「剣道をやってみたい(続けたい)」
 と思う人の割合は、部活動での経験者や全くの未経験者に比べ、
 授業で剣道を経験した人が一番低いという結果がでました。剣
 道の難しさや厳しさを知ったことで剣道に対するマイナスイメー
 ジを持ったのが理由と書かれています。武道特有の礼儀や作法
 を教えるのも大切ですが、他のスポーツと同じように体を動か
 すことの楽しさや喜びも生徒達に伝えなければならぬと感じ
 ました。

三 研究実践(平成二十一年度に指定を受け、取り組んだ授業実
 践について報告します。)

(1) 研究主題

外部指導者との連携を通して、生徒が主体的に取り組むこと
 のできる剣道授業の展開を創造する。

(2) 研究主題設定のねらい

本校区は剣道の盛んな地域である。武道の必修化に向けて、
 地域の教育力を生かした授業の実践を展開したいと考えた。そ
 こで地域の指導者に外部指導者として授業に参加して頂き体育
 教師と連携を図りながら、生徒が主体的に取り組む剣道授業を
 創造していきたいと考え本主題を設定した。

(3) 主な取り組み

授業は十月中旬から十一月中旬にかけて実施した。外部指導
 者には本校区の指導者である遠藤一美先生をお願いした。指導
 体制は主に体育教師が授業を展開しながら、外部指導者が補助

を行うというTTの形態をとった。事前の打ち合わせを行い、
 剣道の特性や伝統的な行動の仕方について理解させるとともに、
 剣道の楽しさを感じる事ができる授業内容になるよう共通理
 解を図った。授業実践では外部指導者から一つ一つ具体的に説
 明を頂いた。また、巡回指導を通して、個々にきめ細かく指導
 を行うことができた。

生徒達は剣道を初めて行う者がほとんどであったが、授業を
 進めていくうちに大きな声で活動することができるようになっ
 た。また、打ったり、打たれたりといった相手との攻防につい
 てもある程度できていたように思う。

授業後の生徒の感想を紹介すると。

○剣道の授業を体験して、はじめはやりたくなかったが、剣
 道をしているうちにおもしろくなってきた。思ったように
 技が打てたときはうれしかった。また、機会があればやっ
 てみたい。

○裸足で行うのは抵抗があったが、慣れてきた。遠藤先生と
 福多先生の模範練習は迫力があつた。

○大きな声を出すのは難しいが、詳しく教えてもらい剣道が
 少し分かった気がした。基本技の練習の時、遠藤先生が優
 しく教えてくれたのでよく分かった。

(4) 成果と課題

外部指導者と連携を図ることによりきめ細かく学習活動を観

察することができた。外部指導者の真剣な態度に授業全体の雰囲気が高まったように感じた。生徒達は学習が進むにつれ、今まで学習してきた基本技能の確認を互いに相談するなど主体的に学習を進めていこうとする姿勢が見られた。課題としては外部指導者の授業参加について時間的な問題が挙げられる。平日ということもあり、なかなか定期的に来て頂くことが難しい。

また、指導内容や授業の進め方、評価方法などあらかじめ共通理解を図っておかなければならないことも多く、打ち合わせの時間を確保することが必要である。

現在、徳島県の各中学校では武道の必修化に向けての取り組みが進められています。まだまだ研究不足ですべての生徒に剣道の良さを伝えるには至っていませんが、これからもよりよい授業を目指して研修を積んでいきたいと思えます。今後ともご指導よろしくお願い致します。



平成二十二年度 顕彰一覽

剣道八段 (全日本剣道連盟)

○平野 誠 司 (昭和三八年七月一日)

平成二十二年五月、京都市立体育館における昇段審査会において難関の剣道八段に合格する。受審者一五三〇名、合格者二二名、合格率一・三%であった。

剣道有功賞 (全日本剣道連盟)

○濱田 逸郎 (大正十四年十二月十七日生れ)

昭和四十九年に羽ノ浦少年剣道教室を立ち上げ、県南地域の少年剣道熱を盛り上げ、今日に至っている功績は顕著である。また、昭和六十年には成人を対象とした朝稽古会を立ち上げ、現在も継続されている。また、昭和五十八年より二十年間にわたり、徳島県剣道連盟の理事および審議員として剣道連盟発展と剣道普及に多大な貢献をなしている。

少年剣道教育奨励賞 (全日本剣道連盟)

○北井上剣道教室

昭和五十六年に設立され、基本を大切にしながら将来につながる剣道を精励しており、近年、北井上中学校の活躍が目覚ましく、県下の大会での優勝を争い、四国大会・全国大会に出場をはたしている。また、勉学にも優秀な生徒が多く、文武両道の将来性豊かな剣士の育成に尽力している。

○新野少年剣道教室

昭和五十八年に設立され、近年は過疎化の影響で少年剣士の人口が伸び悩む中、卒業生が指導者となり、少年剣道教室の伝統を受け継ぎ、剣道の普及発展に努力している。また、県南地域の少年剣道大会を主催して少年剣道の振興に多大な貢献をしている。

体育功労者表彰 (徳島県体育協会)

○手塚 十三子 (昭和三十年十月二十日生れ)

徳島県女子国体チームの大将として活躍し、平成九年・十年の国体五位連続入賞を果たした。その後、県女子国体チームのコーチ・監督を八年間務め、女子剣道の競技力向上に多大な貢献をなしている。また、昭和五十二年より現在に至るまで、徳島県剣道連盟の理事・常任理事・事務局次長の重責を担い、連盟の運営・発展に寄与している。

剣道有功賞

剣道有功賞をいただき

濱田逸郎

この度、全日本剣道連盟より剣道有効賞と言う立派な賞を、私のような者に下さり身に余る光栄でございます。会長をはじめ剣道連盟と剣道関係の方々のお厚情に依るものと心から厚くお礼申し上げます。

一旦やると決めたことは最後までやり通すと言う強い信念が出来ました事は剣道の稽古のお蔭です。朝稽古をはじめから二十年の間やり通す事が出来ましたことは、剣道に熱心な方々のご参加とご指導によるものと深く感謝をする気持ちでいっぱいです。徳島、阿南、小松島、海部の先生方ご指導有難うございました。現在は、膝を傷めやむをえず剣道を休まなければならぬ状態であり、誠に残念でなりません。先づ健康でいると言う大切さを痛感いたしております。これからも皆様方ご支援ご指導の程賜りますようお願い申し上げます。

この度の受賞を期に更に気をひきしめ後輩の指導に専念いたす覚悟でございます。どうか皆様方よろしくご鞭撻の程お願い申し上げます。



少年剣道教育奨励賞

少年剣道教育奨励賞を受賞して

北井上剣道教室 美馬勝行

この度、北井上剣道教室が全日本剣道連盟から少年剣道教育奨励賞を受賞する栄誉にあずかりました。



この栄えある受賞の真の立役者は、設立当初から現在に至り、通じて子供の指導を続けてきた佐野徳雄先生に他なりません。仕事の関係で指導に出られない先生がいる中、時には一人で長期間指導に当たり、教室の存続とその名を県下に知らしめました。まさに教室の育ての親であり、この受賞を語るとき、先生をおいて前に進むことはできません。まずもって、先生に心から敬意を表したいと思えます。

一、教室の誕生

北井上剣道教室は、昭和五十二年二月に北井上地区に住む、故下村富夫先生の弟子達によって産声を上げ現在に至っており、教室名に「少年」の字が入っていないのは、教室を卒業してからも

自由に入入りして近況を話したり、稽古ができる生涯教室を目指しての命名でした。

二、会員及び指導員

- ・少年数 二十二名
- ・中学生 十二名
- ・当教室の指導は、佐野徳雄、富田圭介、佐野伸治、池田勝彦、美馬一城、美馬敦子の各先生と私の七名で指導に当たっています。

三、教室運営

教室の運営は、会員の会費及び保護者の支援活動によって運営し、剣道以外の主な年間行事としては、新入生歓迎会、六年生送別会、バーベキュー、ボウリング大会等を通じて、団結力、譲り合い、思いやりのある心を養っています。

四、指導方針

少年剣道の目的については既に承知のとおりですが、当教室では特に『継続は力なり、能力は努力にあり』を「教室訓」とし、剣道、勉強、私生活などにあたって『一生懸命』に取り組むことができる少年剣士に育てることをその指導指針としています。

練習日は、毎週火・木曜日とし、指導内容は、最初の三十分を

準備運動・素振り。次の一時間を基本稽古。最後の三十分を指導稽古と、ごく平凡な内容であります。特に基本稽古では、「あの子、ええ面打つなあ」と言われるように「面打ち」にこだわった指導に力を注いでいます。

五、今後への取り組み

生涯剣道を目指すために、今、少年剣道教室が持つ役割は大変重要なウエイトを占めており、そのために、

- ・途中で挫折しない、息の長い剣道
- ・やむなく中断しても、いつでも再開できる剣道

を更なる指導指針に加え、指導員一同決意を新たにしているところであります。

最後に、この度の受賞にあたり、ご尽力をいただいた徳島県剣道連盟並びにご指導をいただいた諸先生方、更には歴代の会員及び支援をいただいた保護者の方々に心から感謝の意を表しますとともに、今後ますますのご指導をお願い申しあげましてお礼の言葉といたします。



少年剣道教育奨励賞を受賞して

新野少年剣道教室 馬 見 和 秀

この度、新野少年剣道教室が全日本剣道連盟より栄誉ある「平成二十二年少年剣道教育奨励賞」を戴きました。大変名誉であるにあまり光栄と、指導者及び関係者、部員一同心よりありがたく感謝致しております。これも徳島県剣道連盟の先生方をはじめ多くの剣道関係者の方々によるものと心より厚く御礼申し上げます。

新野少年剣道教室は昭和五十八年、新野小学校学校医でありました馬原医院院長（後援会会長）馬原文彦先生が当時、校内暴力がしばしば報道されている中、父兄の一人として心を痛めていました。（礼にはじまり礼に終わる）剣道こそが子供達の健全育成にふさわしいとの思いに駆られ、剣道連盟阿南支部にご相談したところ遠藤一美（前県連会長）先生が室長を引き受けてくださいました。また、地元から新野哲朗・磯田尚文・田中昭次・金久博・仁木香先生が指導者として参加してくれました。また、新野小学校教頭であった川上満先生に特にお願いして監督に就任していただき、新野少年剣道教室が発足致しました。

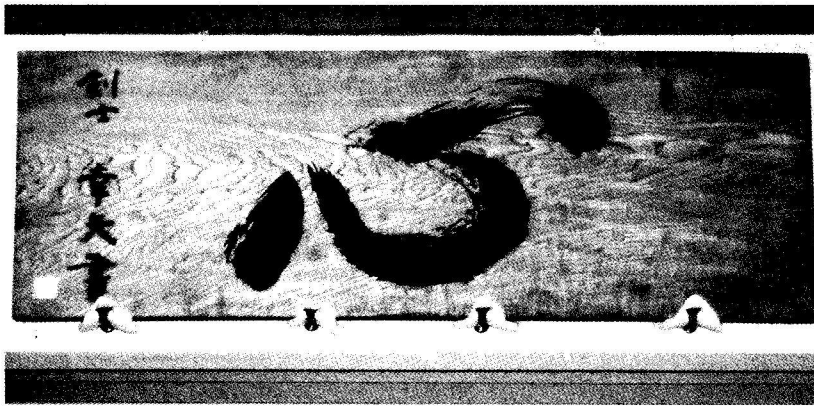
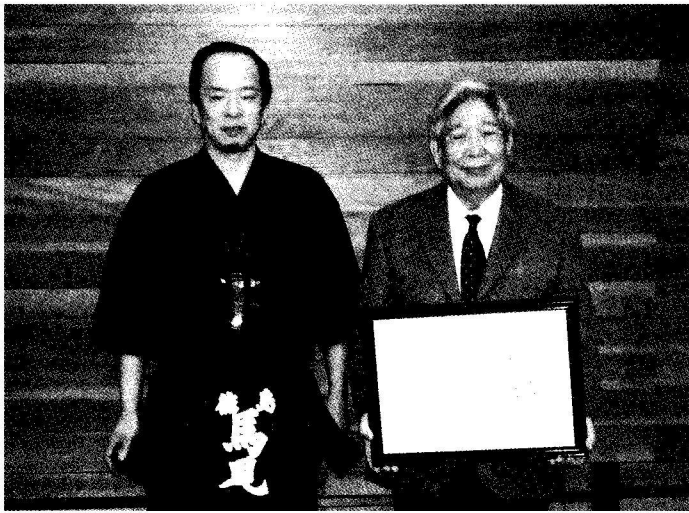
発足当初は、小学三年生から六年生の初心者四十名で船出をしたものの、指導する側にしても剣道をしたことがない監督と指導経験がない指導者の悪戦苦闘の日々でありました。また、発足からわずか一年で新野少年剣道錬成大会のお世話をする事になった

たのですから、大変の上に変が重なり、当時、阿南支部長でありました（故）清原栄先生、有賀秀敏先生方の所に日参してお力をお借りしながら、第一回新野大会を盛大に開催できました。そのような状況の中、楽しい思い出ですと語っていただけの馬原後援会会長や当時の保護者会のOB方には、心から感謝申し上げます。今日、新野少年剣道教室が教育奨励賞をいただけるのも、剣道教室を裏で支えていただけの後援会の皆様方や地域の皆様方の深いご理解とご支援・ご協力があったればこそと改めて深く御礼申し上げます。

こうして二十八年の年輪を刻んできた新野少年剣道教室にも地域の過疎化と少子化の影響が駆け足で忍び寄ってきています。新野少剣の火を絶やす事なく引き継いでいく事が今携わっている者達の使命であり、指導する側としてはよくよく考え、事に当たらなければならぬと感じています。子供達の生活スタイルが年々変わる昨今、特に幼少年に対しては、特によく考え発達段階に応じた指導、礼儀指導、基本重視の指導、自立心・独立心の養成に心がけ長く続けられる剣道・生涯剣道を目指し、将来、徳島県剣道連盟で活躍できる一人となってもらえるようがんばりたいと思います。

終わりにりましたが、受賞に当たりご推薦いただいた徳島県剣道連盟遠藤一美前会長様はじめ諸先生方に厚く御礼申し上げます、今後ともかわらぬご指導の程、直しくお願い申し上げますご挨拶とさせていただきます。

発足時からお世話になって
います
馬原文彦 後援会会長



道場に掲げられている
堀江幸夫先生よりの書



受賞記念写真

体育功労賞

体育功労賞を受賞して

剣道連盟事務局次長 手塚 十三子



このたび徳島県剣道連盟のご推薦をいただき、財団法人徳島県体育協会より身に余る体育功労者表彰を受賞させていただきました。このことはひとえに今日までご指導、そしてお支えいただいた皆様方のおかげによるものと心より深く感謝申し上げます。振り返りますと、昭和五十年徳島の地に初めてお世話になり、以来徳島県剣道連盟で育てていただき、三十六年という何ものにも替え難い年月を過ごさせていただきました。

当時城之内にありました武道館では、県警機動隊特練生の皆さんが毎朝厳しい稽古に励んでおられ、その充実した稽古を求めて小学生から大学生、そして一般の方と幅広い年齢層の方がしかもご遠方からも参加されて、武道館はいつも熱気に溢れておりました。朝稽古に始まり夕方の稽古と多くの先生方がご指導をくださった中、いつも若者の気持ちを鼓舞して引き立ててくださったのが、当時剣道連盟の会長職に就かれていた故三木只雄先生（剣道範士

七段）です。私は剣道連盟の組織や具体的な活動についてほとんど存じませんでしたが、その後三木会長先生のご指名により理事職を拝命、女子部長としてその職責をお受けすることになりました。三木先生はどなたに対しても満面の笑顔で、常に「和の心を以って貴しと為す」方でありました。

そして昭和六十三年剣道連盟会長は故堀江幸夫先生（剣道範士八段）へと受け継がれました。先生は『徒然草』の一節ではありませんが、先生のご自宅を訪問された方をお見送りなさる時はいつも、そっと目を眺めるかのご様子でいつまでもその方の後ろ姿を消えてなお見送られ、どなたにも行き届いた配慮とご慈愛に満ちた方でした。ご自身を礎に常に剣道という種を随所に蒔き続けて来られた方です。私の心の貧しさを先生はいつも、「連盟のお世話を預かるということは未来を見据えて、会員の皆さんのお声を真摯に聞かせていただくこと」であると教えてくださり、行事の消化に追われることを強く戒められました。何よりも今日の剣道連盟を築いて来られた先生方のご貢献を肝に銘じ、その継承に向けて懸命に、そして謙虚な姿勢で責任を果たすことを論ざれ、それは人としての在るべき姿と成長を促してくださったものでした。

女性の剣道が全国的に技術の向上とともに普及発展し、隆盛を極め、その活躍や評価には著しいものがあります。そして現在、女性たちが目指す剣道の方は本質的なものが問われ、同時にまた奥の深さも求められるようになりました。

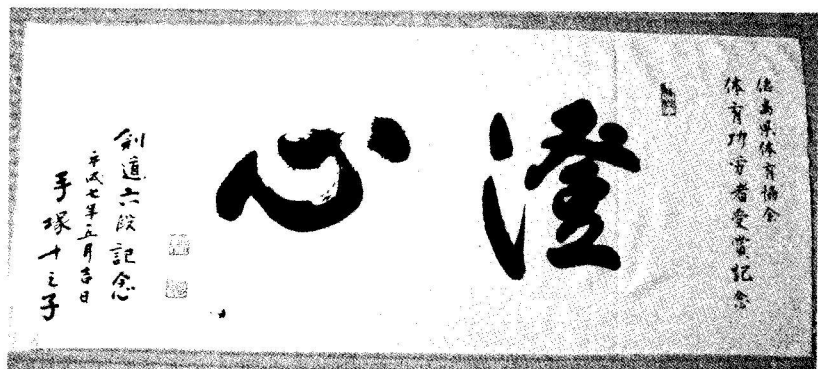
本県では今年度、県下女子大会が三十一回目を迎えました。ご主人やお子さんの熱い声援を受けながらの全国家庭婦人大会（平成二十一年全日本都道府県対抗女子優勝大会に改）、師弟同行の範を示す全国教職員大会、全日本女子選手権、平成十年から開催されている国体（成年女子）など、多くの女子大会があります。

その間、私自身も有り難いことに選手や監督として、各種大会に出場させていただき、貴重な学習の機会を頂戴しました。女性の皆さんの頼もしいご活躍の場面を間近に拝見し、感動の瞬間はさらに今後の活躍を期待し、夢を大きく繋ぐものとして今日へと回を重ねています。また県連や学剣連、全剣連主催の女子講習会への参加など、皆さん積極的に自己の研鑽に努めておられます。審判法や指導法の技術の向上はもとより、他府県の方々との交流を通じてよい刺激を得られ、それを徳島に持ち帰ってくださることが、県内においてもお互いの技量を高める大変有益な機会になっています。各種大会における好成績は女性の方のご努力と意思の強さによるものですが、剣道連盟の多くの先生方のご指導とご尽力のおかげであることは言うまでもありません。

徳島県剣道連盟のさらなる発展の願いのもと、平成九年連盟会長に遠藤一美先生（剣道教士七段）が就任なさいました。先生は全国高齢者大会で四度も優勝を果たされ、剣道連盟の強化練習などあらゆる場において誰よりも早く面をつけられ、打ち込み掛り稽古も果敢になさる、まさしく「行」を通じて剣道を語られる率先垂範の方です。幸運なことに私は三代の会長先生を始め、多く

の先生方にお導きをいただき、今日に至ることができました。しかしながら、人間的にもまだまだ未熟で来し方を反省するばかりです。なお一層剣理の正修を通して人間性を養う努力を致さねばなりません。

現在、剣道人口の減少が懸念され少子化の問題と相まって、日本の伝統文化の継承や在り様までもが深刻な課題となっています。剣道は他のスポーツと異なり年齢や体力など、個人の状況に応じて無理なく行うことができ、さらにバランスのとれた心身の鍛練は人生を有為な方向へと導いてくれます。このすばらしい剣道が、今後ますます徳島県剣道連盟を発信地として、競技力の向上と生涯剣道の普及発展に繋がりますよう、微力ではございますが精一杯職務に努めて参る覚悟でございます。どうぞ今後ともよろしくご指導をお願いいたします。皆様本当に有難うございました。



平成22年度 徳島県中学校剣道優秀選手

No.	男 子	学 校 名
1	田 村 隆 晟	羽ノ浦
2	上 田 雅 大	羽ノ浦
3	福 田 篤 己	羽ノ浦
4	岩 原 将 平	羽ノ浦
5	佐 賀 誠 典	徳 島
6	飯 田 時 生	徳 島
7	西 田 凌 介	徳 島
8	山 田 溪 太	徳 島
9	明 石 直 也	徳 島
10	高 木 勝 己	徳島文理
11	金 川 京 平	徳島文理
12	阿 部 正 典	徳島文理
13	高 野 俊 一 郎	徳島文理
14	山 本 大 介	鳴門一
15	福 居 周 平	鳴門一
16	西 田 和 弘	相 生
17	本 田 将 大	相 生
18	山 本 政 志	阿南一
19	田 村 幸 太	鷲 敷
20	小 川 虎 太 郎	木 頭

No.	女 子	学 校 名
1	玉 田 理 沙 子	徳島文理
2	栗 野 安 香 音	徳島文理
3	河 野 優 季	加 茂 名
4	吉 田 歩 生	加 茂 名
5	永 野 み き み	加 茂 名
6	山 本 響	那 賀 川
7	甘 利 あ か ね	那 賀 川
8	松 本 美 紗 樹	那 賀 川
9	福 田 茜	城ノ内
10	株 本 奈 緒	城ノ内
11	佐 藤 千 佳	城ノ内
12	岡 田 春 希	木 頭
13	藤 本 結 衣	相 生
14	春 木 生 美	牟 岐
15	前 川 真 里 奈	山 城
16	阿 部 美 月	北 島
17	松 浦 園	北 井 上
18	美 馬 汐 里	北 井 上
19	下 込 衣 里	北 井 上
20	橋 本 千 里	阿 波

平成22年度 徳島県高等学校剣道優秀選手

No.	男 子	学 校 名
1	柴 田 大 輔	脇 町
2	土 井 翔 吾	阿 南 工
3	笠 井 栄 一	城 北
4	福 居 壮 太	城 北
5	松 本 好 史	徳島文理
6	青 木 大 将	徳島文理
7	福 田 純 大	徳島文理
8	田 中 宏 明	徳島文理
9	安 部 晃 太 朗	富 岡 西
10	上 田 義 弘	富 岡 西
11	小 濱 紘 通	富 岡 西
12	篠 原 寛 弥	徳 商
13	木 下 裕 貴	香 蘭
14	田 中 湧 大	鳴 門 工
15	入 江 健 太	鳴 門 工
16	福 島 優 也	鳴 門

No.	女 子	学 校 名
1	原 麻 由 香	富 岡 西
2	井 上 彩	富 岡 西
3	喜 多 桃 子	富 岡 西
4	木 村 奈 々 美	富 岡 西
5	酒 卷 志 穂	川 島
6	村 上 遥 香	川 島
7	大 館 希 望	川 島
8	井 上 愛 理	城 北
9	迎 美 榛	城 北
10	石 川 晴 菜	城 北
11	高 橋 麻 美	城 北
12	岩 原 紗 也 香	富 岡 東
13	栗 野 文 那	富 岡 東
14	福 井 美 咲	富 岡 東
15	盛 嘉 恵	富 岡 東

先生を偲ぶ

中尾誠先生を偲んで

徳島支部 熊澤信行



先に、先生へ届け 今更残念 残念
真に 残念 いくら考えても残念です。

平成二十二年五月に家内よりの電話で、

中尾 誠先生の訃報の連絡に、仕事中に
動揺したことが思い浮かびます。今回は、

「中尾誠先生を偲ぶ」との内容で『徳島の剣道』への投稿の依頼があり、中尾先生から戴いた多数の剣道指導や人生訓を教え子の一人として、私の個人的な記憶の範囲で、記載させていただきま
す。年次など不明確な個所がありますが、御容赦ください。

昭和四十七年に小松島中学校に私は入学し、一年生の二学期に初めて、新任教員の中尾先生より剣道部に誘われ、入部したのが、私の剣道人生の始発点であります。小松島中学校の思い出は、当時剣道場は無く、一般教室で練習し、強い踏み込みをすると、教室の床を踏抜くことが多く、中尾先生が、授業中の合間を縫って床張り替え作業をされていた様子が思い浮かびます。又、剣道練習を全員で、さぼって遊んでいると、背後にある扉の小窓から、

あの大きい目で眺めていて、発覚後の厳しい剣道練習が数日続き
ました。私が中学三年生春の全国中学校剣道大会県予選に臨むに
際して中尾先生は、優勝すれば、私たちにご自身の出身地である
半田町の山林を売却し、全国大会へ連れて行ってやると言われま
した（結果は予選敗退）。また、私の高校進学についても、本人
に一言の話もなく、私の母親と阿南工業高校剣道部監督の鎌田恵
先生との間で決定して頂きました。今となれば中尾先生の深い御
配慮に感謝しております。

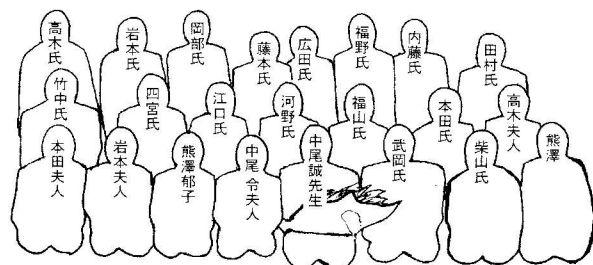
その後、私が阿南工業高校へ進学と同時に中尾先生も半田中学
校に転勤されました。野球部の監督を務めた後に、教え子の小松
島中学校剣道部の卒業生を召集し、半田町の旅館で合宿し、半田
中学校との合同剣道練習をしたことは、今から思えば、その当時
としては、無茶な合宿でした。それと、私が阿南工業高校三年生
で初めて、国体に出場が決まり、中尾先生よりお手紙をいただき、
教え子の中で初めて全国大会へ出場する選手になりました。その
時「臆することなく頑張れ」と励ましを頂きました。

社会人となり、地元企業の徳島三菱自動車（株）に入社後、剣
道部師範井上健二先生と中尾先生は懇意の間柄でしたので、熊澤
を剣道練習会には強制的に連れて行くことが、中尾先生より申し
送り事項として有ったと聞いています（当時は有難迷惑であると
記憶）。又、私が剣道五段に昇段し、徳島県高校総体の剣道審判
に参加時の休憩中、私は軽率に、「剣道審判は、一日中審判して
も仕事一日分の日給に及ばない」と発言した直後、久し振りに中

尾先生に首を捕まれ、あの大きな目で私に、「熊澤が審判出来るのも、小松島中学校で剣道を習い始めて小手面など打てない時期に、小松島支部の蛭名先生、早川先生、榎福先生らの諸先生方が手弁当で、君たちの審判をし、支えてご指導してくれたからこそ、今の熊澤が存在す」と厳しく教訓されたことは、今も肝に銘じております。そのことにより、今では可能な限り剣道審判のお手伝いをさせていただいております。その後は、中尾先生とお会いする、県下の剣道大会審判時や社会人剣道大会と阿波支部主催の稽古会で、剣道指導や人生訓を、ご指導頂きました。今では大切な思い出ばかりで、先生のご逝去が真に返す返す残念です。

中尾先生が病を発病され、阿波中学校校長を一年早く退職された後は、奥様やお子様方とご出身地の半田町の山仕事などを楽しく過ごされ、高校と大学の同級生で阿波支部の塩田善治先生と地元の温泉巡りや讃岐うどんの食べ比べに行かれていました。

そこで、中尾先生が監督指導者として全国中学校剣道大会に数度出場した阿波中学校の教え子の方とは別に、中尾先生が国士館大学を卒業し、最初の臨時教員一年目の小松島市和田島小学校当時の本田敦彦夫妻と田村義弘氏、臨時教員二年目の半田町八千代中学校当時の武岡勝美氏、新任教員時一年目の小松島中学校当時の私共夫婦（先生は私どもの仲人）と同級生一同、教員二年目の福山伸明氏と同級生一同、教員三年目の高木壽史夫妻と同級生一同、半田町半田中学校当時の岩本一彦夫妻と同級生一同で、中尾先生の退職の慰労会を開催しました。中尾先生よりは今回の慰労



中尾先生慰労会
記念写真

会に参集した教え子は中尾先生が、教員と剣道指導者としての草創期で原点であり、試行錯誤し大切な経験をした時期で、一人一人大切な教え子であり、剣道以外でも社会人として、剣道部での体験や指導を糧に、個々に頑張って活躍する様にと全員にお言葉をいただきました。これからも中尾先生からの教訓を、思い出し剣道修養や社会生活に生かして活きたいと思えます。

中尾先生へ最後に、私たちは、中尾先生からの教訓を今後忘れることなく、ここにお誓い申し上げ頑張ります。

最後に先生の早すぎること逝去は重ね重ね残念 更に残念です。

まだまだご指導頂きかった。

教え子一同より 中尾先生へ届け ご冥福お祈り申し上げます。

合掌



思い出すままに……

北村 環



「今日から剣道するぞ。」中尾誠先生がおっしゃったこの一言から私の剣道人生が始まった。大変恥ずかしい事だが、昭和五十八年四月に阿波中学校へ入学するまで剣道を全く知らず、剣道部の活動や輝かしい戦歴等も勿論知る筈がなかった。そんな私を、また一緒に入部した部員を、先生は一年後の県総体で優勝するチームに育てて下さったのである。

竹刀の握り方や、足さばき、そして一番初心者として抵抗のあった発声も、いつの間にか競い合うように大声を出していた。「稽古中はライバルになれ。稽古中の（心の）弱さと甘さが一番大事な時に命取りになる。」と御指導いただいた。「負けるもんか。」と全員が必死になった。

防具が着用できる段階になると、中学校から始めた私は防具一式購入する事になるのだが、胴の色を部員達と悩んでいたところ、「女子は赤だ。」という先生の一言で、全員赤胴を着用する事になった。当時黒胴を着用する学校が多くなっていたのに、「どうしてだろう?」と思っていたのだが、先生は「赤は目立つだろ。お前達がどこで試合しているか、すぐ見つける事ができたな。」とおっ



しゃって下さった。勿論この事を先生にお伺いしたのも、大学を卒業して何年も過ぎてからのことである。

稽古は本当に厳しかったと記憶している。先生は大笑いされたが、同級生と集まった時、必ず話題にのぼるのが、先生が道場に来られ、更衣に入られた瞬間の事である。部員全員声が小さくなり、体が固まった。今から始まる充実した稽古を考えると、胸が苦しくなり、うつ向きかげんで先生の前に並んだものである。先生に稽古をつけていただくのは、誰もが本当に緊張する時間であっ

たのだ。

当時、先生は担任もされており、多忙な日々を過ごされていたにもかかわらず、月、水曜日の朝稽古、毎日の夕稽古と必ず防具をつけ、稽古して下さった。休日は先生の御家庭に御迷惑をおかけしたと思うのだが、他校へ出稽古、県外への練習試合と、私達を乗せ、先生自ら運転をされ連れて行って下さったのである。車中でも行きは今から向かう先の剣道について、帰りはその日の試合や稽古についての反省と、少しの時間も無駄なく御指導いただいた。いつも私達をしっかりと見ていただいているという安心感があつた。

昨年、先生が入院された時、お見舞いに伺うと、体調が悪いであろうのに、「剣道部の活動はどうだ？子供の状態は？」といつも笑顔で私の心配ばかりして下さった。先生の前で見せてはならないと溢れそうになる涙を我慢した。帰り際には、「ありがとう、頑張れよ。」と声を掛けて下さった。私に一体何が出来るとのだからと悩んだ。

阿波中学校へ入学し、中尾先生と出会わなければ、今の私はなかっただろう。先生が私達の事を一番に考えて下さり、厳しく、温かく導いて下さったお陰で剣道を続け、教師という道に就く事ができた。先生に恩返しできないまま、先生は逝ってしまわれた。これから、自分にできること、少しでも中尾先生に近づける様、教師として、人として、精進したいと思う。先生、これからも見守っていて下さい。



第15回 全国中学校選抜剣道大会 昭和60年8月21日・22日（砂川市総合体育館）

香川久治先生の思い出

徳島支部 中尾 正輝



香川さんと私は、徳島県警察学校の同期生である。昭和三十七年四月徳島市安宅町（現・城東町）の警察学校に同期生十九名と共に入校した。香川さんは、只一人大学出身者であった。私より、四歳年上で長身のスマートな人が第一印象である。

鳴門高校から、関西大学にすすみ剣道の修行に励まれ四段を取得していた。私たちの総代（同期生の代表者）を努めた。よく他人の世話をした人でもあった。田舎から出て来た私は特に香川さんのお世話になった。

警察学校在学中、故・堀江幸夫先生のご指導によって、厳しい稽古を重ね県下警察剣道大会で立派な成績を残した。

香川さんは、剣道の稽古においても、剣道部長として、剣道専攻者の中心となって活躍された。香川さんとの稽古中、たびたび後頭部を打たれた記憶がある。面金を通して見える大きな目がなつかしい。

香川さんは、昭和三十九年四月、私は昭和四十年四月それぞれ機動隊に入隊し、本県警察の剣道特別訓練生として日夜厳しい稽古に励んだ。大阪府警察での度重なる合宿訓練や九州、中国地方

の各警察との合同稽古で実力を付けた。昭和四十二年の四国管区警察剣道大会において、香川さん等の活躍によって、初めて全国警察剣道大会に出場したのも良き思い出である。

剣道以外でも、たびたび自宅へ招いていただき馳走になったこと。県職員の秋の運動仮装行列で一等賞に輝き、景品を頂いたこと等々本当に今は懐かしい。

市場警察署長（現・阿波警察署）を平成十一年二月に退職されてからは、しばらく剣道から離れていたようであった。

年一回開かれる同期生会で「剣道をやりませんか。」と誘ってみたが反応なし。ところが、平成二十一年頃から連盟強化稽古会に顔を出されていたようである。



香川先生と出場した仮装行列

大阪城内で（後列右から一人目香川先生）

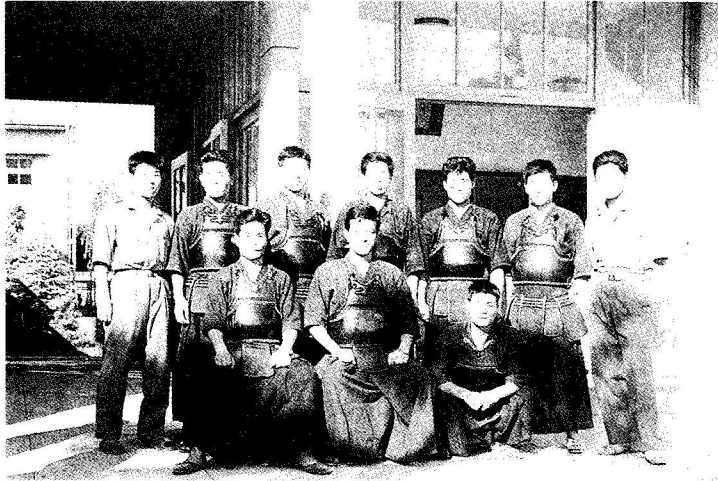


奥様のお話するところによれば、平成二十一年十二月の末、東京から帰省された三人のお係さんの前で木刀をもって素振りを見せていたが気分が悪くなりそのまま入院、平成二十二年一月一日七十歳の生涯を閉じた。

香川さん、本当にお世話になりました。
謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

合掌

警察学校時代（前列中央香川先生）



昭和四十二年 全国大会初出場を決めて
（後列左から三人目香川先生）



同期生総代 香川先生を偲んで

笠井 勝

出 会 い

それは昭和三十七年四月一日、徳島県警察学校に入校した時でした。十九名の新任警察官は、巡査見習生として警察学校で勉強をすることになりました。

十九名の大半は、高校卒業直後の採用でありましたが、一名だけ大学卒業者が存在しました。その一名が香川先生であり、長身で凶抜けており「電柱」と表現する者がおりました。十九名の中には、剣道経験者五名、柔道経験者五名が存在し、香川先生は、剣道四段取得者であり、これも凶抜けておりました。香川先生が、同期生の総代に任命され、柔道の猛者が副総代に任命され、私たち同期生のリーダー役が決まりました。これが、香川先生と小生との出会いでありました。

当時の警察学校は、県立徳島商業高等学校の東側、徳島市城東町二丁目にありました。今では、大きく様変わりしておりますが、警察学校から北方吉野川堤防までは、畔道のような道路が続き、朝の体練として駆け足をしました。

警察学校での授業は、午前中が教室での座学で、午後は、剣道組、柔道組に分かれて、道場で機動隊の先輩方から指導を受けま

した。剣道の先生は、私たちと同日に採用された故堀江幸夫先生で、柔道は故湊庄市先生でありました。機動隊剣道特練員の中には、香川先生と剣道での知人が何人もおり、四段の実力を持っておりましたから、稽古もそれ程苦もなくこなしておりましたが、私たち二段組は、手厳しい稽古に首を上げておりました。

香川先生は、警察学校卒業後、徳島西警察署へ配置され、佐古十六丁目の交番に勤務し、程なく剣道特練員となり、剣道の修業を続けておりました。小生は、池田警察署勤務となり、剣道の稽古とは縁が薄くなりました。それでも、非番日には、地元の青年と細々と稽古しておりました。

香川先生は、機動隊の剣道特練員として堀江先生の指導を受けておりました頃、小生は、北島警察署へ転動になり、剣道特練員の予備軍にしてくれました。当時、北島署では、強盗殺人事件が発生しており、小生も捜査要員として従事しました。その中で、小生に刑事採用の話があり、剣道特練員になれば刑事になれると自己判断し、堀江先生と「剣道は一生続けますので刑事に成らせて下さい」と約束をして刑事の道を歩んだのです。小生は、その後、剣道は忘れない程度に稽古をして、刑事の道で励んだものです。

今にして思えば、あの頃、もう少し堀江先生の指導を受けておれば良かったのにと後悔しております。

香川先生も剣道特練員として、全国大会などに出場して活躍しましたが、除隊後、警務部企画監察課という警察中枢部で勤務を

続け、警察署長を経て退職しました。

剣道再開

小生は、警察退職後に堀江先生との約束ということで剣道の稽古を再開し、苦しみながらも、先生方に稽古をお願いしました。その内どうにか稽古らしくなってきたのですが、元来、剣道の基本稽古を碌にやらずに竹刀振りをしてきたことから、基本稽古を指導してくれる県立中央武道館での稽古仲間に入れて貰って稽古を始めたのです。

稽古の状態をビデオカメラで撮影してもらって、自分の姿を見て啞然としたものです。香川先生から「お前の剣道は変剣じゃ」と言われたことを思い出しながら、立ち姿から竹刀操作まで自己流剣法を我が目で確認したものです。以後、先生の指導の言葉を体現しようと努めていたところですが、そんな折、同期生会の席で、香川先生との話の中で、老後の健康維持のためにも、生涯剣道をしてはどうかと勧めたところ、香川先生も乗り気になり中央武道館へ稽古に来るようになったのです。

香川先生と小生との間柄は、「お前は声が大きいのう」といわれ、それに「声の大きいのに悪い奴はおらんと言われとるでないか」と言い合うような仲でありました。香川先生と小生の稽古を見て、「あの二人の稽古が一番真剣じゃ」と評してくれることがありました。

香川先生は、自宅でもトレーニングを続けていた模様で、剣道

を再開すると警察初任科生の時と同様に、長身から繰り出す面技はすばらしく、打ちも早く鋭いため、小生は一生懸命に竹刀を交えていたものです。中央武道館での稽古日が楽しみの一つとして待ち遠しく思うようになっておりました。

そんなある日、「香川先生が亡くなった」との連絡を受け、「なぜ、どうして」と我が耳を疑ったものです。現実には厳しいものですが、訃報を聞くに及んで残念でなりません。僅かに年長だったとは言え、昨日まで元気であった人が急に居なくなるとは理不尽も甚だしいものです。心を残し、ご冥福を祈りながらお見送りをするしかありませんでした。

合 掌



全国講習会報告

剣道中央講習会に参加して

徳島支部 佐藤佳宏

平成二十二年度(第四十五回)剣道中央講習会(西日本)が平成二十二年四月三日・四日の二日間、神戸市立中央体育館で開催され、本県から、中村稔裕先生と私の二名が出席させていただきました。

役員として、武安義光全剣連会長、松永政美副会長、福本修二専務理事、講師として田口榮治範十、村上濟範十、松井明範十という蒼々たる先生方のもと受講者五十四名の出席により講習が行われました。

松永副会長からは、この講習会は、以前は伝達講習という意味合いが強かったが、ここ数年重点事項は変わっていないため、新しく伝えることは無いが、重点事項をしっかり認識して帰ってほしい。また最近、剣道を学ぶ姿勢が全体的にマンネリ化して来ているように思われる。もっと「なぜ」、「どうして」という意識を持って修行に励んでほしい等のお話がありました。

講習会の内容の要点については次のとおりです。

一、指導法(田口講師)

(一) 指導者のあり方

指導者の人格・技は習う人に伝わるということを、指導者自身十分に認識して指導を行う。指導目標・内容をしっかりと考えて、口だけでなく、体を使って指導にあたる。

アンケート調査を行った結果、子供が剣道をやめる理由として、「先生がほめてくれないから」というものが一番多くなっている。また、「なぜしかられるのか」、「しかられている内容がよくわからない」という理由も多かった。

子供、特に小学生に対しては、上手にしかる、また、しかるだけでなくほめて指導すること大切である。

(二) 実 技

最近、所作の乱れが特に目に付くようになってきた。

左足から座り、右足から立つ。面紐を結んだまま面の着脱をしない。竹刀の握り方等、基本的な所作をもう少し重要視してほしい。

指導者自身、三節の礼(神前、師匠、相手)の意味を頭に入れ、剣道における礼とは何かということ子供に理解させる。

切り返しを受ける際の注意点として、初心者に対してはできるだけ引きつけて、上級者になるほど打ち落とし気味に受けてやる。また、熟練度に応じて体当たりをさせるが、子供には体当たりをさせずに打ち切りをさせた方がよい。

二、審判法（村上講師）

(一) 審判員の任務

審判員の任務は「適正な試合運営に努め、試合の活性化を図ること」となっている。そのために次の事項を十分に頭に入れ審判を行っていただきたい。

①客観性に基づいた公平な審判を行うということが大前提となる。

②審判というのは、ただ判定をする・反則を取るだけでなく、剣道は武道ということで教育的配慮が必要。

③自分自身が審判の修行をさせてもらおうという気持ちで、審判をしてやるといわずにはなく、させて頂くという気持ちを持つ。

④審判が良くなれば試合も良くなってくる。審判が試合を作るといふ気持ちをもって、できるだけ良い審判をしていくように心がけることが大切。

(二) 有効打突の見極め

有効打突とは、「充実した氣勢、適正な姿勢を持って竹刀の打突部で打突部位を刃筋正しく打突し、残心あるもの」となっている。

審判要領の中にも有効打突の条件を書いてある。（機会、強さ・冴え・打突部位・刃筋・残心）このような有効打突の条件をしっかりと頭に入れて審判を行って頂きたい。

有効打突の判断には、目で見るとはもちろんだが、耳で

聞くということも非常に重要である。特に小手技は死角になって見えない場合も出てくる。「音」は冴える技を判断する基準になるといふことで、音をしっかりと聞くことは判定をする上で非常に大切になってくる。

小学生、高校生、全日本クラスでは判定の基準も変わってくる。その辺の見極めをしっかりと行い、レベルに応じた審判を心がけてほしい。（特に小学生は、完璧な技は少なく、また小学生の中でも大きなレベルの差があるため、非常に難しい。経験を積んで教育的な審判をお願いしたい。）

(三) 審判員の位置取り

主審を頂点とした二等辺三角形を崩さないようにということが原則。主審が主導権を取って副審をリードしていく。試合者が動いてから動くのではなしに、試合者の動きを予想しながら準備しておくことが大切。（しっかりと動いて死角を作らないように）

また、必ずしも主審が頂点に立つ必要はない。コーナー付近では流れによっては副審が頂点に立つ場合もある。

試合途中での、「やめ」、「合議」は、むやみやたらにかけない。「やめ」をかけると、そこで試合の流れが途切れてしまい、試合の活性が失われる。少々のことでは「やめ」をかせずに試合の流れを大切にして頂きたい。

合議の時間はできるだけ短く。合議をかけて初めて相談をするのではなしに、確認をする時間と考えて頂きたい。

四 審判員の所作

審判旗は体側につけ、まっすぐ床を突くような気持ちで持つ。

足は開かないようにかかとを軽くつける。

目付は、一点を見たり、攻めている方に目がいきがちになるが、全体を視野に入れるということを心がける。(遠山の目付)

旗の表示

「有効打突」旗を斜め四十五度に一直線に上げる。(斜め前にならないように)

「やめ」真上に上げる。(斜め前、手が曲がらないように)

「引き分け」頭上前で交差

「反則」斜め下四十五度

「有効打突を認めない場合」両旗を前下ではっきりわかるように三〜四回しっかり振る。

移動の際にはできるだけ上下動せずに、腰を水平移動させてスムーズに移動。移動が遅れたからといって、のぞき込むような姿勢をとる人がいる。素早く移動して体勢を崩さないように適正な姿勢を保つ。

宣告の後、定位置に戻る際に目付が離れている人が多い。

試合者の方を見ながら定位置に戻る。

次期審判席では姿勢正しく、話等はしない。

「始め」の宣告後、後ずさりしない。旗の割れ、取り消し

はできるだけ少なく。

三、日本剣道形(松井講師)

打太刀と仕太刀は師弟関係になるということ認識してほしい。打ち太刀が仕太刀を指導するという立場となるので、必ず打ち太刀が先に動いて仕太刀をリードしていく。

形に重厚性を持たせるためにも、十分に残心を示してから次の動作に移る。打ち太刀がスッと動いてしまったら仕太刀は残心をとれないので、打ち太刀が十分に間を取って仕太刀に残心を示させるように心掛ける。

充実した気迫をもって、迫真性のある演武を行って頂きたい。そのためには、気を詰めて、一本の形を一息で打つような気持ちで打つことが必要。また、打っていても、小さく打って届いていないような場合が多く見受けられる。しっかり踏み出して物打ちで打つという気持ちを持つ。

その他、緩急強弱を付けることで迫真性のある形になってくる。

理合いを十分に理解した形を打つことが必要。例えば太刀一本目では、間合いに接したとき「機を見て」となっているが、小太刀一本目では、間合いに接したとき、「仕太刀が入り身になろうとするところを」となっている。よって、これらは打つべき機会がまったく違っている。このように、理合いを理解するということは形を打つ上で非常に重要なポイントとなる。

蹲踞時や、構えを解く前等、抜き合わせたときには必ず横手

を交差させる。これが最近おろそかになっているので注意してほしい。

中央講習会終了後の五月十六日、鳴門ソイジョイ武道館にて中村先生と共に伝達講習会の講師として参加させて頂きました。

講習を受け十分に理解してきたつもりでしたが、いざ自分が講習をするとなれば、中央講習会での聞き漏らしや理解不足、自分の知識の少なさといったことが痛感されました。

参考書や、日本剣道形・木刀による剣道基本稽古法のDVD等を見ながら、再度勉強をやり直しました。当日は十分に伝達できたかどうかわかりませんが、役員の先生方にも協力を頂きながら無事終了することができました。

今回の講習会に参加させて頂きまして、大変勉強になったことはもちろんですが、講習を受けることは簡単でも、その内容を人に伝えるためには、うわべだけでなく、深い理解と広い知識が必要であるということが感じられました。

まだまだ未熟ではありますが、この講習会参加を機にさらに精進を重ねていきたいと思えます。

今回の講習でお世話になりました講師の先生方、剣道連盟の関係者の方々に心より感謝を致しまして報告とさせていただきます。



居合道中央講習会に参加して

居合道部 坂本 憲 一



居合道中央講習会は、居合道の作法や技術の修得、適正な審判のための技術向上等を目的とし、毎年九月に二日間の日程で行われるもので、私にとっては八年ぶりの参加である。

講習会は、七人の講師陣（岸本千尋・武田清房・山崎正博・河川俊彦・安永毅・山崎誉・小倉昇・村主彦範士）と全国各都道府県の連盟より派遣された指導的立場の者、さらに第四十五回全日本居合道大会の審判員、計一〇二名で行われた。

第一日目は、安武会長の「各県の中心的指導者が一堂に会しこの講習会を行うのは非常に意義深い。この講習会が居合道の将来を担う指導者を育て、斯界のさらに発展につながると信じる、未だ酷暑だが頑張って頂きたい」の挨拶から始まり、講師陣の紹介後、岸本委員長より、講習日程と心得の説明があった。

特に委員長挨拶では、今回の講習テーマでもある「足と体捌きによる刀法を徹底して身に付け、この講習で学んだことは、配布の資料に基づき地元へ正確に伝えてほしい」と特に資料の配布を力説された。要点を列記したこの解説資料の配布は、短時間で講習を受ける者にとっては実に有益である。

最初の講習は、全剣連居合である。武田範士が解説し、小倉範士が演武するという形で、礼式に続いて全県連居合十二本の実技指導が行われた。中でも陥り易い盲点と押えるべき要所が詳細に指摘され、さらに理解しづらい部分は分解して演武が行われたため、これまで見過ごし緩慢になっていた点が多々あり反省するところ大であった。

引き続き受講生を六班に分け、それぞれの担当範士が実技指導を行った。班編制は、八段を三班に分け、第一班は、全日本居合道大会審判予定者八段二十一名、担当武田・山崎誉範士、二班、八段十五名は山崎正博範士、三班十六名は河口範士がそれぞれ担当された。

七段以下の五十名は三班に分け、四班十七名は安永毅範士、五班十七名は小倉範士、六班十六名は村主範士が担当された。

小生は六班に編入されたが、村主範士の適格な指導に加えて受講先生方の真摯な態度と研究意欲の旺盛さには実に頭がさがり、県連より派遣された者としての自覚を多に喚起させられた。

第二日目の午前中は審判実技の講習である。最初に山崎誉講師より審判法規則・同細則について明瞭な解説がなされ、続いて審判実技にはいった。今回は全日本居合道大会審判員予定の八段の先生方が交代で主審・副審を務め、参加者のうち七段が一組となり模擬試合を行い、他のものは試合と審判状況を見学するという形で行われた。

宣告や発声、旗の表示方法、審判員の交代方法、所作のタイム

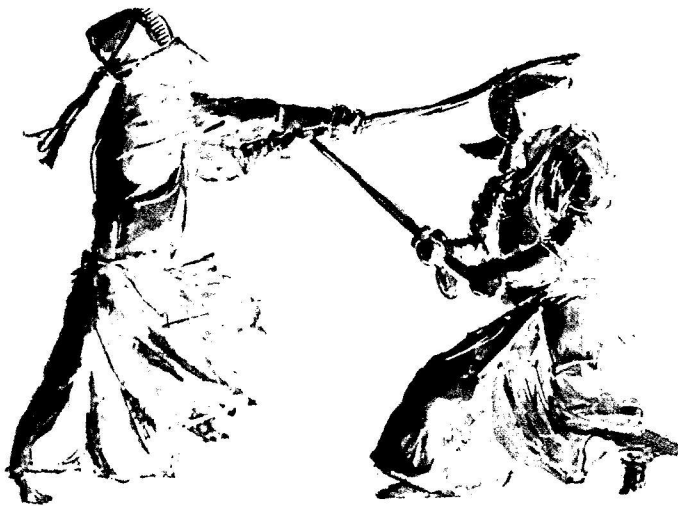
ングなどについて、その都度細かい指導があり、数年ぶりに参加した者にとっては実に有益で、今後の審判への取り組み等に多くの示唆を与えてくれた。

午後は古流研究である。無想神伝流・無双直伝英信流・伯耆流等六流を三班編制とし、各班に同流派の複数の範士が指導に付く形で行われた。小生は英信流三二十六名の二班に編入、講師は武田・山崎両範士である。指導方法は八段教士が先に演武し、六・七段がそれに続き、個々に批評を受けた後、両範士が総括するという形で行われた。

同じ流派でも指導者によっては理合はそれぞれ個性がある。様々な理合を知るのも自己の技を練磨するのに多いに役立つ。今回の古流研究は多分にその機会を与えてくれた。

また、講習会終盤の各流ごとの集団演武は、一流派の者が集団で演武したので、その流派の特性をつぶさに把握でき、ここから知り得た見識は異流派試合の審判判定に多いに生かせるものである。

最後になったが、講習会参加の機会を与えてくださった県剣連はじめ居合道部の先生方に感謝を申しあげて筆を置く。



第四十八回剣道中堅剣士 講習会に参加して

徳島支部 玉田晋作



平成二十二年五月十九日から二十三日まで、奈良県中央武道館において開催されました、第四十八回剣道中堅剣士講習会に参加させていただきました。四月上旬に事務局よりお声をかけて頂いた際には多少の躊躇もありましたが、生徒の指導が忙しいことを言い訳にして修練を怠る自分に「喝！」を入れる絶好の機会であると思いい参加を決意しました。このような機会を与えていただいた徳島県剣道連盟の先生方に、この場をお借りして御礼申し上げます。以下は、講習会の内容報告と所感を述べさせていただきます。

一、講習会の内容報告

講習会役員

武安義光会長 松永政美副会長 福本修二専務理事

長尾英宏常任理事 浅野修常任理事

講師

奥島快男範士 田口英治範士 村上 济範士

島野泰山範士 中田琇士範士 藤原崇郎範士

石田健一範士 高橋俊昭範士 末野栄二範士
地元講師

上垣 功教士 松田勇人教士

スポーツ医学講師

佐本憲宏医師

【五月十九日 午後】

開講 式

松永副会長より、「本講習会の内容は錬成強化による指導力の養成であり、厳しいものではあるが健康に留意して頑張ってください。」との訓示をいただいた。

奥島範士の講話

「大相撲の仕切り、立ち合い」「双葉山の相撲道」から始まり「京都大会の立ち合いの在り方」等、稽古における考え方、相手との潔い立ち合いについて説いていただいた。

稽古

全講師元立ちによる指導稽古 浅野範士より、所作を大事にすること。またとない機会なので、講習会中に全講師に稽古をお願いするようにとの話があった。

【五月二十日 午前】

早朝稽古

全講師元立ちによる指導稽古及び互角稽古

審判法実技

村上講師より全剣連の重点方策等の説明の後、中田講師、藤原講師のもと二班に分かれ実技指導が行われ、「有効打突の見極め」「審判員の位置取り」等細部に亘り実践的な助言をいただいた。

【五月二十日 午後】

指導法（島野講師担当）

素振り（特に股割素振り）に多くの時間が費やされた。その後、四人一組に分かれて切り返し、打ち込み、掛かり稽古が行われた。島野講師からは、「手の内の冴え・左足の引きつけ」「自覚を持った稽古」の指導があった。

稽古

全講師元立ちによる指導稽古及び互角稽古

【五月二十一日 午前】

早朝稽古

全講師元立ちによる指導稽古及び互角稽古

指導法（石田講師担当）

素振りの後、二人一組で切り返し、基本打ちが行われた。石田講師からは、「発声」「足さばき」「気持ちのこもった打突」の指導があった。その後、区分稽古が行われ、ふらふらになりにながらも何とか乗り切ることができた。

【五月二十一日 午後】

木刀による剣道基本技稽古法 上垣講師、松田講師より、刃筋正しく打突すること、目付、体さばきに注意すること等の指

導があった。村上講師からはこの稽古法の意義等の話があった。指導法（高橋講師担当）

素振りの後、二人一組で切り返し、基本打ち、打ち込み、掛かり稽古が行われた。高橋講師からは、「気迫」「稽古における心構え」「攻めて打つこと」の指導があった。

稽古

全講師元立ちによる指導稽古及び互角稽古

【五月二十二日 午前】

早朝稽古

全講師元立ちによる指導稽古及び互角稽古

指導法（末野講師担当）

素振りの後、二人一組で切り返し、基本打ちが行われた。末野講師も受講生と共に素振り、基本打ちをされ、その力強さに感動を覚えた。また、「基本からの応用」の指導があった。その後、掛かり稽古、相掛かり稽古が行われた。

【五月二十二日 午後】

日本剣道形

田口講師より、作法から刀法の原理等、内面から湧き出るような説明をいただいた。その後、田口講師、中田講師による模範演技を拝見する幸運にも恵まれた。両講師の演武に感動し終了かと思っているところ、受講生から三組だけ、演武を披露することにになり、その一組に私の組みが当たり、緊張の中、講師の先生方、受講生の前で演武する機会もいただいた。

稽古

全講師元立ちによる指導稽古及び互角稽古

【五月二十三日 午前】

早朝稽古

前日の懇親会の席上、二十三日の早朝練習は無しにするという、浅野講師の話であったが、同室のメンバーを中心に、せっかくの機会だから有志で稽古をしようということになり、互角稽古を行った。

講義

佐本講師により、捻挫、アキレス腱切断の予防についての講義が行われた。

閉講式

浅野常任理事より、これからの修練の心構えについての講義があり、その後、福本専務理事より修了証が代表に授与され、五日間の講習会が終了した。

二、所感

受講を決意してから、多くの先生方から、「柳生はきついぞ。」というお話は聞いていましたが、その通り素振り、切り返し、打ち込み、掛かり稽古等、本当に厳しいものでした。己の肉体や精神と真剣に向き合う体験をさせていただきました。しかし、私が最も苦しく感じたのは、講師の先生方に懸る指導稽古でした。講師の先生方の強さは想像以上で、気迫に圧倒され、フラフラにな

るまで引き出され鍛えていただきました。先生方の日々の鍛錬の積み重ねを身を持って感じるとともに、自分の修練の甘さを痛感しました。この貴重な経験を更なる精進の第一歩にしたいと思います。



平成二十二年徳島県秋季講習会 (全日本剣道連盟後援) 報告

事務局次長 藤 本 雅 史

平成二十二年十月十日 岡山県から範士八段松井明先生をお迎
えして県下各地域から八十三名の受講生の下秋季講習会がソイジ
イ武道館に於いて開催されました。

松井先生(協町出身)には故郷に錦を飾っていたいただくのは今回
で二度目でもあり、愛情のこもった熱意溢れるご指導を賜りまし
た。

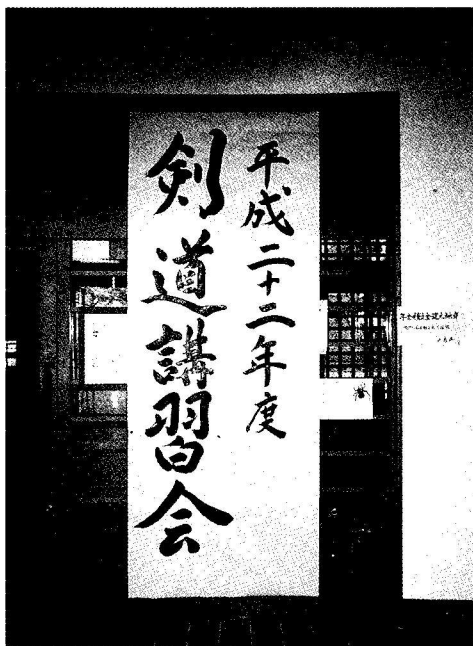
以下に概要を報告します。

講習Ⅰ(日本剣道形)

「この生まれ育ててもらった徳島に帰ってきて、勉強ができる
ことを大変うれしく思う。徳島には高島先生、堀江先生、大澤先
生など立派な先生がおられ、剣道形の徳島と言われていた。今日
まで何度も受講され、立派に出来ると思うが、確認の意味を込め
て実施したい」 旨のお話があり、その後剣道形解説書に沿って
確認があった。

○礼法

・ 刀を持つとき、太刀の鐔の下に小太刀の鐔がくるように持つ



・ 太刀、小太刀が平行になるように、左手を添えて安定させて
から右手で持つ

・ 刀を腰に差すとき、木刀の場合は柄頭がへそにくるように

刀の場合は鐔がへそにくるように。

・ 刀を腰に差すとき、刀の場合は栗形を人差し指で挟む

○形に対する心得

四項 打太刀 ー 師の位、 仕太刀 ー 弟子の位

呼吸を合わせ合気

七項 打突したら、後足を残さず、前足に連なって引き付ける

一五項 呼吸は構える時に吸気し、前進するときは丹田に気迫

を込め……

・太刀二本目 形に表さない残心は内面的で表す

・太刀三本目 物打ちで凌ぐ

・太刀四本目 仕太刀の剣先は下段より低く、支えが無いから巻き返し

・太刀五本目 剣先をこぶしに付ける 少し右足を前に 頭上ですり上げる(前ですり上げない)

・太刀六本目 下からの攻めに攻める 大きく退る

・太刀七本目 打太刀の攻めと同じだけ退る(近い間合いにならない)

大きく退る、引き出す、目線は顔を向けると回転がスムーズになる

・小太刀一本目 剣先は顔の中心 しっかり頭上ですり上げる

イチ ニイ サン ヤア(止まらない)入り身になるうとする端

・小太刀二本目 刃は 真下 ↓ 右下 ↓ 下

・小太刀三本目 真っ直ぐ(すり上げ) 鰐元にすり落とし(脇が空くから胴にくる)

打太刀が退るから付いていく

○形に対する心得

武道は緩急強弱である。緩急強弱を心得て一拍子で打つ

五項 打ち突きの原形を自得して、充実して気迫をもって行わせる

一六項 構えを解いて後退する時も気分をゆるめず終始充実した気迫で行わせる

○日本剣道形審査上の着眼点

三項 気迫を持って愛気(先の気と合気)で

七項 物打は一点

一〇項 打太刀は十分な残心を見届けてから始動しているか

以上、細部にわたり詳しい経験に裏打ちされた的確な講義を受けました。

その後、近藤巨教士(地元講師)を相手に熟達の技を示範されながらの実技講習に移った。

各自、教えを細部にわたって確認をしながら熱心に習得され、最後に代表九組が模範演武を披露して午前の部の日本剣道形の講習を終了した。

追記

剣道形の実施時間は座礼から終わりの座礼まで九分で行う。よって公開演武の所要時間は一〇分を予定しているとのことであった。

講習II(木刀による基本技稽古法)

・スポーツからスタートでなく武道からスタートし、形に移行し易くする

・集団指導による

・技の終わりは横手の間合い、技の打ち出しは一足二刀の間合い

・合気にて隙（構えが動いた瞬間）に打突させる

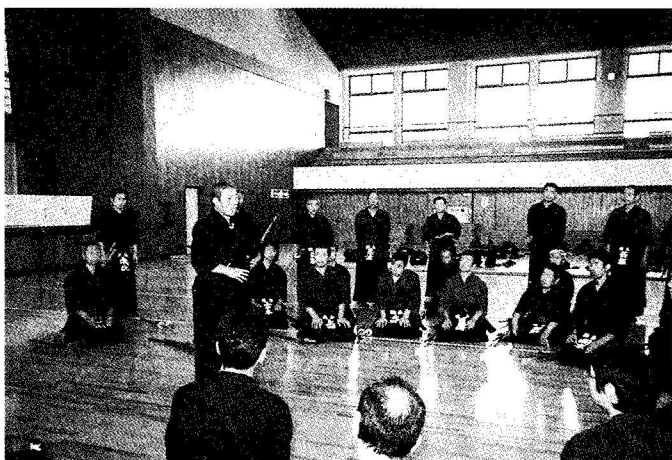
河田清実教士（地元講師）を相手に細かい部分を確認しながら示範され、実技講習に移った。

何回も何回も二時間たっぷり行い、充分体得できた。来年の審査導入に向け、安心して自信をもって指導できるものと確信をした。

最後に二組ずつ六組が模範演技を行い、立派な成果を披露して、木刀による基本技稽古法の講習を終了した。

講習Ⅲ（実技指導）

松井先生には秋の八段受審者が懸かって指導稽古をお願いし、八段・七段の先生方が元立ちになって合同稽古が三十分間行われた。



閉講式

受講生を代表して出葉成一麻植支部長が「松井先生には早朝より終始ご熱心に倣に入り細にご指導を賜りありがとうございます。今日ご指導頂きましたことを今後の修練に生かすと共に各地域、職域に持ち帰って剣道の普及、発展に寄与したいと思います。松井先生のご健康とご活躍をお祈りし、謝辞とします」と述べられて平成二十二年度徳島県秋季講習会も無事終了しました。

毎年全剣連から後援を頂いて、立派な高名な先生をお迎えして秋季講習会が実施されていますが、県内の指導者の先生方の参加が少ない気がしました。折角の機会ですので自身の修練と子供たちの指導力向上に多数の先生方が参加をされ、徳島県の剣道が発展することを熱望して報告とします。



第五回女子審判法研修会に参加して

竹内 佳代子

期 日 平成二十二年五月二十九日～三十日

会 場 日本武道館研修センター（千葉県勝浦市）

主 催 財団法人日本剣道連盟

女子審判法研修会がはじまり、今回で五年目になりました。私は、第三回からの参加なので、三回目の参加となります。全日本剣道連盟が「女子審判員の育成ならびに、審判技術の向上を図る」ことを、重点事項として掲げ、そのために全国の女性七段の中から二十四名を選出し、毎年審判法研修会を行っています。この研修を受講した人の中から、全日本都道府県大会または全日本女子選手権大会の審判を行うようになっていきます。

講師先生は、網代忠宏先生、中田秀士先生。また、全日本剣道連盟の役員からは福本修二先生、村上済先生がおいでで、ご指導をいただきました。緊張感漂う中、今年も有意義な研修会が実施され、私自身大変勉強になりました。今年もこの研修会に参加でき、それによって全日本女子選手権大会の審判という経験ができたことに感謝しています。

第一日目

審判の目的・審判員の任務・審判員の心得について

目的 試合者が試合を決定する。それを判定するのが審判。任務 剣道を正しく行わせることで、日本文化の剣道を後世に

正しく伝承させること。そしてそれは、「使命」でもある。正しくとは、規則どおりに正しく行わせること。

心得 一般的要件をきちんともつこと。

審判法の解説

審判員の基本姿勢・審判旗の表示方法・位置取り・有効打突の見極めなどについて、細かく指導。その中で、特に

○有効打突は、だれもが納得するような客観性と妥当性がなければいけない。

○有効打突の基準は、大会によって変わることはあるが、変えてはいけない要因を忘れてはいけない。そして基準は、その大会参加者の中のレベルの高い選手にあわせること。

○「玄妙な技」を見落とさない。

○相打ちはまずないと考えるべき。一瞬の差をしっかりと見極める。

○打突後の様子までしっかりと見る。

○試合の活性化をはかるように心がける。

○審判員同志の意思の疎通を事前の審判講習ではかること。

○禁止行為の原因と結果の正しい見極めをする。とくにつばぜりあい。つばとつばがせり合っているか、打突の意思、別れる意思があるかを正しく判断する。

といったご指導がありました。

第二日目

審判員としての認識度の確認

- (一) 審判細則第十一条、十二条、十六条の確認
- (二) 諸禁止行為についての〈事例五〉の確認
- (三) 反則となるつばぜり合いとは
- (四) 女子審判研修会についての意見

今回初めて、この研修会に参加した女性が五名だそうです。自分自身も初めての時は、緊張感も手伝い、ものすごくこぢない動きで、細かくご指導をうけたことを思い出します。経験を積んでも、なかなか自信をもって審判ができませんが、でも最初の時の自分に比べると少しは成長できたのではないかと思います。ご指摘をうける回数も少なくなりました。また、他の方の審判を見ていても、今の位置取りはどうするべきかなどに気づくことができるようになってきました。本研修を受けることで大変勉強になりました。そして、何より自分自身が変わったと思えることは、審判員の任務の重さを今まで以上に自覚できるようになったことです。

こういった機会に恵まれ学べたことに感謝し、学んだことはこれからのいろいろな大会の審判を行う中で活かしていきたいと思っています。そして、これからもいろいろな研修会に積極的に参加し、研鑽を深めていきたいと思っています。



第 5 回女子審判法研修会 日程表

5 月 2 9 日 (土)		5 月 3 0 日 (日)	
時 間	内 容	時 間	内 容
9 : 0 0	受 付	6 : 0 0	起 床
9 : 3 0	開講式	6 : 3 0	自由稽古
9 : 4 5		7 : 1 0	
9 : 5 0	講義：22年度全剣連基本方針 重点方策・重点事項について (村上講師)	7 : 3 0	朝 食
1 0 : 1 0		8 : 1 0	
1 0 : 1 0	講義：審判の目的・審判員の任務・審判員 の心得について (網代講師)	9 : 0 0	審判員としての認識度の確認
1 0 : 4 0		9 : 4 0	
1 0 : 4 0	休 憩	1 0 : 0 0	審判法実技研修(正規の服装)
1 1 : 0 0	講義：審判法の解説 審判員の基本姿勢・審判旗の標誌・位置取 り・有効打突の見極め等について (中田講師)	1 1 : 3 0	
1 1 : 5 0		1 1 : 4 0	休 憩
1 2 : 0 0	昼 食	1 1 : 4 0	審判法実技研修(正規の服装)
1 3 : 0 0		1 3 : 1 0	
1 3 : 0 0	審判法実技研修(剣道着・袴)	1 3 : 2 0	閉講式
1 4 : 3 0		1 3 : 3 0	
1 4 : 3 0	休 憩	1 3 : 3 5	昼 食
1 4 : 4 0		1 3 : 5 0	
1 4 : 4 0	審判法実技研修(剣道着・袴)	1 3 : 5 5	解 散
1 6 : 1 0			
1 6 : 2 0	稽 古		
1 7 : 1 0			
1 7 : 1 0	入 浴		
1 8 : 3 0			
1 8 : 3 0	夕 食		
2 0 : 0 0			
2 2 : 0 0	就 寝		

日本剣道形（初心者）講習会の報告

審査部長 兵藤新平

平成二十二年度の日本剣道形講習会を七月二十四日、二十五日の両日、徳島中央武道館にて実施しました。受講者は四十名余で中には数名の有段者も受講されていました。講師の坂下彦之先生が日本剣道形指導の重点事項にもなっております、次の事項を初心者非常に解りやすく指導、説明して頂きました。

一、立会前後の作法、立会いの所作、刀の取り扱ひ方や体さばき

二、正しい刀（木刀）の操作（刃筋、鑄の使い方、一拍子の打突）

三、打太刀、仕太刀の関係

四、打突部で打突部位を正確に打突すること

五、形の実施中の目付け、呼吸法、残心……など。
それから、今回は初心者にしっかり覚えてもらうために、坂下先生以外に指導者を五名ほど動員して実施しました。

日本剣道形は、昇段審査に於いても、実技審査、学科審査と並列した重要な審査科目であります。審査のためにあるのではなく、剣道の基本、質の向上を図るためのものであることを認識して、初心者はもちろんのこと、上級者も正しい剣道を習得するためにも、平素から日本剣道形の修練に努めてほしいと思います。

最後になりましたが、受講生の皆様、真夏の暑い中ご苦勞様で

した。また、終始熱心にご指導して頂きました坂下彦之先生はじめ指導者の先生方に厚くお礼申しあげます。

追伸

本県では来年度（二十三年度）の級審査（一級～三級）から「木刀による基本稽古法」の実技審査が取り入れられます。審査員はじめ、指導者はこの稽古法もしっかり練習し、指導できるようにならなければなりません。あくまで日本剣道形がすべて基本ですので、十分に稽古を重ねて錬度を高めて下さいますようお願いいたします。



フランクフルト剣道講演会記録

剣道教士八段 米 倉 滋



(平成二十二年十月二十五日実施)

ご紹介いただきました米倉滋と申します。本日は、日本の伝統文化である剣道のお話をさせていただきますことを感謝いたします。

まずは、剣道とは何かということについて、その歴史を交えて簡単に紹介させていただきます。

剣道は、竹刀をもって戦う競技ですが、この竹刀は、日本刀を模したものです。

一、剣道の歴史

武器としての刀剣の利用は古く、その操法である剣術にも長い歴史があります。

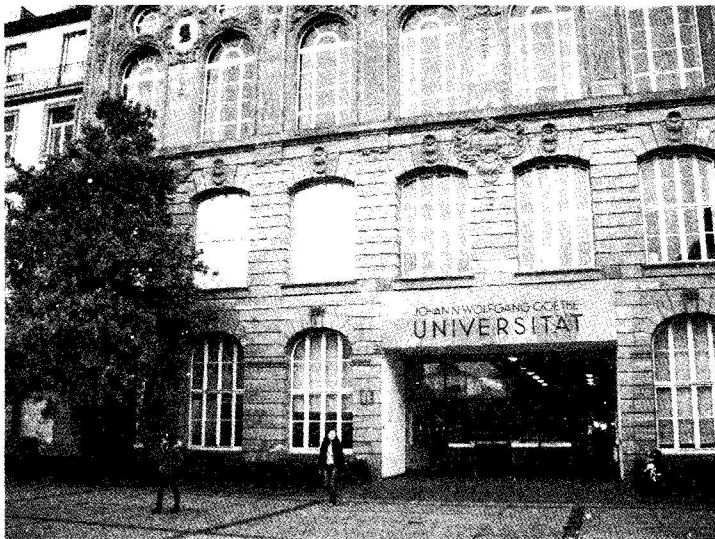
平安時代後期(十世紀後半)武士の台頭により戦の場で役立つ機能を持った日本刀が作られるようになり、その操法である剣術各流派も生まれ、剣技も進歩しました。

しかし、戦場に銃の出現と、さらに江戸幕府のもと、戦乱のない時代を迎え、刀は実践のための武器ではなく、武士の地位および精神面における象徴が主な役割となりました。

江戸時代の中期(十八世紀)のころ、竹刀と防具が工夫され、武士の子弟が、刀の操法を学ぶための打ち合いや試合が可能となる「竹刀打ち剣術」が始められ広がりを見せました。この「竹刀打ち剣術」の出現こそ、それまでの「形」が中心だった剣術の修錬を脱皮させ、現代剣道を形成することにつながる革新の起点と言うべきものでした。

竹刀打ち剣術はもとも戦技を修錬する日本刀による剣術を源流としていますが、その後の社会の変革に伴い次第に戦技から脱皮して独自の道を築き、剣道として人間形成の道として成長しました。秘伝であった剣術の多くの流派を越えすぐれた特性を持つ総合的システムとして構築されました。

江戸時代の後期(十九世紀中頃)には、武士階級に限らず一般庶民へも広く普及いたし



ました。

今日に至っては、老若男女にわたり、広く心身鍛錬の道として社会でも大きな役割を果たす存在となっています。また、ヨーロッパをはじめ広く海外にも広まっておりま

二、現在の剣道

現在の剣道は、先ほど述べましたように、竹刀をもって、定められた打突の場所、「面」「小手」「胴」「突き」を打突して戦う競技ですが、この競技としての剣道を修練するなかで、人間性、精神性の高揚を図ることを目指しています。もちろん、競技としての剣道を楽しみ、六十歳七十歳或いは八十歳でも元気に剣道を続けるという、生涯剣道としての道でもあります。実際に元気に剣道が続けておられる高齢者がたくさんおられます。

さて、競技としての剣道は、それを修練するなかで、人間性、精神性の高揚を図ることを目指すために、「礼に始まり礼に終わる」という行動形態を大切に行っており、それだけではなく、競技における「打突」の規定や試合における「審判」の規定、段位審査における合格の基準、範士、教士、錬士など称号授与の基準など、すべてが「厳しい修練をするなかで、人間性、精神性の高揚を図ることを目指す」ために如何にあるべきかを考え制定しています。

例えば、剣道では対戦相手に対する「敬意」を持ち続けることが大切な要素とされています。試合においては力を出し合って勝



敗を決めるわけですが、勝者が、ガッツポーズなどで、ことさらに「勝った」ことを誇示した場合、三人の審判は、合議のうえで、「敗者に対する思いやりを欠いた」として、その「勝ち」を取り消すことがあります。試合規則二十七条には、試合者に不適切な行為があった場合は審判員は合議のうえ有効打突を取り消すことができる、とはっきり規定されています。実際にガッツポーズを

したために勝ちを取り消されたケースがあります。

ここでおもしろい新聞記事を紹介しておきましょう。日本経済新聞の本年九月二日付の社会面ですが、「放射線医学総合研究所の山田真希子研究員の発表によると、敗者の悲しそうな表情を見ると、勝者のうち「勝ってうれしい」という思いが強い人や自己中心的な傾向が強い人（いわば、自分のことしか考えない人）ほど、脳の特定部位が盛んに活動する、とのことでした。

このことからすると、勝ってガッツポーズなどをする選手は、「勝ってうれしい」という思いが殊更に強い人や、自己中心的傾向が強い人ということになります。

剣道の修錬は、闘争の形態をとっていることにより、時には本能的闘争心が表面化することもあります。しかし、それを理性で調整し、お互いに相手を尊重する態度を維持することが大変重要です。相手を尊重すれば「ガッツポーズ」などとれるはずがないと思います。

本年八月、オランダ人柔道家のアントン・ヘーシンク氏が逝去されました。彼は、一九六四年の東京オリンピックで無差別級に出場し、決勝で日本の神永選手に押さえ込みで一本勝ちを収め、見事優勝を飾りました。

優勝が決まった瞬間に驚喜して試合場の畳に上ろうとしたオランダ人スタッフを手で制止したことから「和」心をもった柔道家として賞賛されました。そして、柔道の国際躍進は、この時点から始まりました。

さて、剣道の話にもどりますが、剣道の試合規則には、こんな条項もあります。

（試合規則十六条・非礼な言動）審判員または相手に対し非礼な言動について規定し、同十八条で、罰則として、非礼な行為を行ったものは負けとして退場を命ぜられるとなっています。

例えば、非礼なヤジを行ったものが試合者であれば負けとなり退場、監督や観客であれば本人の退場となります。また、試合中の応援は拍手のみで、選手、監督は時計の持ち込みを禁止されています。

お話はこのくらいで、ひとまず措きまして、ここで、日本剣道形を披露いたしましょう。

日本剣道形は、一九一二年（大正元年）に制定されました。先人が長い年月と叡智を尽くして築き上げた各流派の様々な技の中から最も優れたものを、太刀七本、小太刀三本に集約したものです。

この剣道形にも、繰り返し修錬することによって、剣道の技術、理合、そして礼儀作法を習得することができるような内容が盛り込まれています。更には、対戦相手の内面的な気の動きを察することができることや、気位（鍛錬を積み重ねて得られた自信から生れる威力、威風）を生み出すことができるものでもあります。

日本剣道形の演武は、二人で行います。一人は、打太刀と名付けられています。先に攻撃を開始する側です。師の位とも呼ばれ、対戦する仕太刀（弟子）に受けた攻撃に対応して勝つところを教



える役割を持っています。

本日の演武は、打太刀・米倉滋、仕太刀・クンプ七段（フランクフルト在住）です。

演武終了後、日本剣道形の神髄についての説明を行う。日本剣道形は、「勇気と気力と技量と礼」を磨き上げる修練であることを説明する。

ご覧頂きましたように、打太刀も仕太刀も、接近した中で攻防を展開いたします。攻撃を受けても、逃げずに、ぎりぎりの距離を見極めて対応します。例えば、一本目の攻撃、打太刀が左上段から面を打ちました。仕太刀は、攻撃に対してバタバタと逃げないで、正対して最小限の距離の動きで対応しました。相手の刀から、一ミリ離れば切られないわけですから、一ミリの距離を見極める勇気と気力と技量が要求されるのです。見極めが間違えば切られてしまいます。木刀の演武でも怪我をします。一ミリの距離を見極めることは簡単にはできません。修練です。

小太刀の形も、小さな刀で大きな刀に対して戦ってゆくという点にご注目ください。小太刀の入り身（氣勢が充実して相手に対して打太刀がやむなく打ちこんでゆく。その打太刀の太刀を、逃げずに相手に正対して小太刀で受け流して勝つ。）これも勇気と気力と技量が無ければできない技です。

日本剣道形が、剣道の神髄を表すものであるということがお分かり頂けたと思います。そして、この日本剣道形に込められた精神を現代剣道は継承しています。剣道の目的は「剣の理法の修練による人間形成」です。競技結果にとらわれず、武道として修行する過程を大切にし、競技力の向上に努めながら、伝統性を維持し、精神面の充実を図ることにあります。

剣道は、闘争の形をとり続けているため本能的なものが出易い競技でもあります。そのため、理性をもって本能を超えてゆく努力が必要となります。お互いに相手を尊重する態度を維持し、そ

れを育てるため、礼儀作法を守ることを伝統としています。

有効打突も、偶然「あたった」とうものではなく、意識的に必然性に裏打ちされた打突でなければなりません。素晴らしい打突ができるかが稽古の目標で、毎回の稽古で最高の一本を求め続けています。実は、こうしたことが皆さんには少し分かり辛いところではないでしょうか。

二〇〇六年十二月東京で行われた第五回剣道文化講演会で、ニューヨークの剣道家アレクサンダー・ベネット氏（現在剣道七段）

は、「私が剣道を始めた時は、稽古がきつ、非常に分かりにくく感じた。特に有効打突は、ただ当てるだけではだめで、当る瞬間だけではなく、打つ前、打っている途中、打った後といったプロセスと態度が整っていないと審判に認められません。西洋スポーツの合理的、数量的な特徴と違って非常に分かりにくい要素が多かった。しかし、それこそが剣道の『美』であり、その道徳とは絶対を守るべき伝統である。外国人剣道家は、そのことに剣道の魅力を感じている。」と述べました。

おかげさまで、剣道は現在、世界四十七カ国、一九〇万人以上の人々によって生涯スポーツの一環として親しまれるまでに普



及いたしました。生涯剣道、生涯スポーツについては、冒頭にも触れましたが、七十代、八十代の高齢者が若者に伍して剣道を楽しんでいきます。それは、競技年齢が高まっても精神的、技量的に向上し続けることができる可能性を持っているからといえます。日本剣道形からも、その可能性を垣間見ることができたのではないのでしょうか。

剣道を構成する要素を「心技体」と考えた場合、体力の低下を「技法、心法」で補うことが可能です。長期間、剣道の修行をす

ればするほど、心法が充実してきます。心法が充実した攻めは、相手との間合いを詰め、相手が身動きできないようにできます。

相手の心身のバランスを崩し、十分な動作ができないようにすることで、常に優位な立場を確保できるのです。こうした剣道を、日本の企業は社員研修として取り入れているところもあります。

毎年、東京の日本武道館において、約三百チームが参加した、全日本実業団剣道大会が開催されています。同大会出場企業は、それぞれクラブチームを有しています。社員研修のため剣道を取り入れている企業は、その理由として、剣道は体と同時に心、つまり精神的成長に価値を置いており、精神性の向上を期待し、それを意識的に育てようとするためです。

昨年の第五十二回全日本実業団大会で準優勝を飾ったパナソニック電工の社長の長江周作氏は剣道教士七段の腕前で十歳からはじめた剣道を現在まで約半世紀続けているとのこと。同氏は、全日本剣道連盟発行の月刊剣窓二〇一〇年九月号において「剣道の苦しい稽古に比べたら、会社生活でのストレスなんかいくらでも我慢できるといのが、私のバックボーンになっています。剣道と共に会社生活を続けてきて、やめたいと思ったこともなく、今は生活の一部となり、剣道のない生活は考えられません」と語っていました。

古い歴史をもつ剣道の源は武術です。武術は真剣勝負。つまり、命のやり取りであり息の根の止め合いです。その中に人間の根本的な「生きる」が入っています。

私は二〇〇四年（六年前）に電気保安管理会社を設立し、代表取締役に就任しました。既得権を有し、約七十五パーセントのシェアを占める特殊法人が君臨する業界に不転の決意をもって参入しました。「生きる」こと、会社を存続させるためには毎日が真剣勝負であり、やり直しがきかないという気持ちで仕事に取り組みました。当初三名の社員で始め、契約事業所数五十事業所からスタートした会社でしたが、現在は、社員六名契約事業所数一八〇事業所になり、今なお成長し続けています。電気技術はもちろんです。そこには剣道で培った精神が生かされています。その精神とは、「信義、誠実」と「克己心」です。つまり、約束を守って義務を果たし、まごころと礼儀をもって人と接し、自分に克つ心、困難に打ち克つ心をもつことであり、この精神を大切にしています。

終りに

剣道の試合や練習では同じことは二度とありません。どうするか分らない相手に対し、いつも新たな気持ちで対応しなければなりません。反省はできますが、過去の時間を取り戻すことはできません。「日々是新」なのです。そこで一番大切なことは「今を一生懸命生きる」ことです。

剣道、生活、仕事等すべてにおいて、今現在を精一杯、一生懸命に生きることがもっとも重要なことだと思えます。

徳島の剣道史

阿波刀の歴史（新刀編）

坂本憲一



はじめに

慶長初年（一五九六）以前の刀剣を古刀、以降のものを新刀と呼び、さらに幕末のものを新々刀と呼ぶが、本稿では、阿波の新刀期に活躍した刀工たちを系統的にとらえ、この稿では刀工たちの概要と代表刀工の作品について述べる。

全国的に見た新刀期の動向

新刀期の刀鍛冶の性格は大別して二様ある。慶長五年の関ヶ原役の後に新しく領国を得た新興大名は城下町の経営に着手し、そこに刀鍛冶を呼び寄せ作刀させるようになるが、その一つが幕府・大名から給米を得て作刀する御抱鍛冶。もう一つは大都市で不特定多数の武士たちの需要に応じて作刀した刀工たちである。

前者の例としては、越前松平家の康継・奥州仙台伊達家の国包、

安芸広島淺野家の輝広、肥前佐賀鍋島家の忠吉、薩摩島津家の波平などが上げられる。後者は、大都市（京都・大阪・江戸）で、古い鍛錬法「五ヶ伝」を超えた新しい伝法「新刀特伝」と称される作風を生み出す鍛冶集団の事で、京都は、桃山時代まで政治の中心であり、そこには諸国より新たな刀工が続々と集まり、埋忠明寿（新刀鍛冶の祖）を頂点として埋忠吉信・堀川国広・和泉守国貞・肥前忠吉等の系統が生まれ、美濃国より兼道が来て、いわゆる京五鍛冶が興る。

豊臣秀吉の大坂城の完成と共に商業の中心として発達した大坂には、全国の大名、武士、帯刀を許された商人たちの注文が殺到し、津田助広、井上貞改、河内守国助、一竿子忠綱、伊勢守国輝等の名工が生まれる。

一方、江戸に徳川幕府が樹立されると、越前国から下坂康継（大坂城炎上での焼失刀を復元、その功績で家康より葵紋の使用を許される）、中曾彌虎徹・駿河国から野田繁慶、近江国から石堂是一、但馬国から法城寺正弘等が移住、江戸鍛冶繁栄の基礎を築く。また、諸国の城下町にも事情は異なりながらも多くの刀工たちが集まり、ある者は御抱鍛冶となり、中央著名刀工の影響を受け入れながら、新刀鍛冶としての作風を生み出し、以後、それぞれの道統が築かれてゆくことになる。

阿波における新刀期の動向

室町末期の阿波では、細川氏・三好氏が相次いで滅亡し、土佐

の長曾我部氏の三年間にわたる阿波支配の後、天正一三年（一五八五）の蜂須賀氏の入国とその後の兵農分離（祖谷の刀狩り等）といった激動が刀剣界に大きな打撃を与えた。

蜂須賀氏は、入部してしばらくは、富国強兵に力を注いだはずだが、この期の刀剣に関わる文献は皆無に近い。阿波藩が外様大名故か、慶長から元和年間に至る間の作刀の事実を意図的に抹消した形跡すらある。

例えば備前国より阿波国の池田に駐槌し、以後、後代が同地で刀工を営んだ横山彦兵衛尉祐定の後裔家に伝わる古文書「系図」（図版1）には、「江戸初期、池田城番中村右近に使えた横山彦兵衛尉祐定は、姓を大西と改め、藩主より、祐定の二代目與左衛門祐定までは無銘にて作刀御用を務める」とあって、この文言からは、阿波藩が軍制強化につながる刀工の存在を意図的に秘匿したとも解釈でき、無銘刀の製作は、豊臣恩顧の大名取り潰しを画策する徳川幕府に対する一種の対抗策であったとも考えられるのである。ちなみに藩の御抱工の存在がはっきりと分かるのは、四代藩主蜂須賀光隆公の万治年間からである。

それでは江戸初期作の現存刀はどうか。古文獻には、海部城主八代目で刀工としても著名な左近将監吉清についての記述が「元和・寛永ノ頃ノ名人也」と見えるが、その現存作も刀剣の記録として残す押形（拓本）も見えない。そのほかにも慶長、元和時代の阿波刀はほとんど見ることがない。寛永年代に入ると年紀銘のある国綱・盛綱・具氏・義氏などの刀が確認出来るようになるが何

れも海部刀の流れをくむ刀工の作刀である。しかし、前時代に名の知られた海部氏吉や泰吉の後代もこの時代には数多くいたはずだが年紀のある在銘の遺作は乏しく、特に鎔造りの刀を見ることができない。が、この時代の海部刀には、氏吉や氏次銘の片切刃

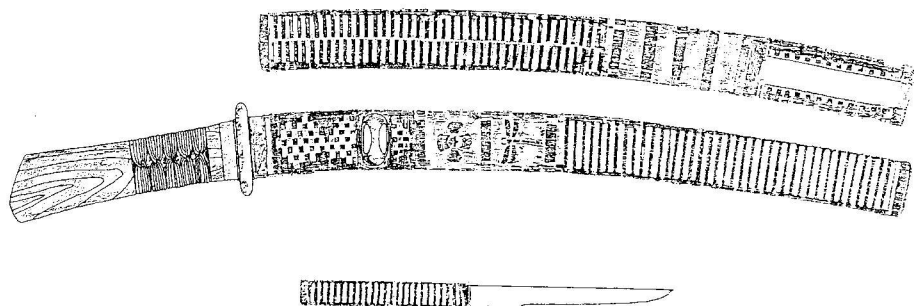


図版1 備前長船住彦兵衛尉祐定の後裔家に伝わる系図（部分）

造りの脇差で、「海部
樺卷鞘拵」(図版2)

という外装に納められ
た、いわゆる陣鉈・海
部包刀と呼ばれる幅広
の実用刀が生まれるの
も特徴の一つである。

阿波の新刀期のもう
一つの特徴は、江戸初
期に大西池田城番を務
めた中村右近の御抱鍛
冶となった、先述の備
前国の彦兵衛尉祐定を
皮切りに、他国の刀工
が阿波に来て槌音を響
かせるという現象であ
る。特に寛永期から元
禄期にかけての阿波の
刀剣界は、駐槌刀工が
繁く往来した時代といっ
て良いだろう。



図版2 野趣味豊かな外装「海部樺卷鞘拵」拓影

新刀期の阿波刀工概要

新刀期の阿波刀工は、同名・代下がりの刀工も含めると四十有
余人を数えるが、これらを系統的に分類すると、海部系・福島系・
園瀬系・他国系・他国からの駐槌刀工系に分けることが出来る。

海部系の刀工では、室町時代から続く海部氏吉の末流で、代表
的なのが、万治三年(一六六〇)に四代藩主蜂須賀光隆に召出さ
れて海部の地から徳島城下に移った海部氏吉。この氏吉が藩工に
列して以後の名跡は十代の継承をみるが、歴代氏吉のうち新刀期
に該当するのは初代海部実兵衛、二代宅左衛門、三代兵次郎、四
代弥左衛門、五代宅左衛門の各氏吉である。

地場の海部で活躍した氏吉には西山氏を名乗る氏吉もあり、こ
の系統も明治期まで連綿と代を重ねる。また、同系には、寛永・
寛文期に徳島城下で活躍した国綱や盛綱、具氏、吉国、義氏、正
永、氏久。宝暦頃には国宗、那賀郡木頭村で作刀した国吉などが
いる。

福島系の鍛冶は徳島城下を拠点に活躍した刀工たちである。銘
鑑に「俊長の族」とあり、海部系の分派と見る刀工たちで、戦国
末期、阿波の軍勢と共に畿内に進出していた刀工の帰郷組と目さ
れ、現在の徳島市福島で作刀した。代表刀工には慶長頃の俊長、
寛文頃の山城守歳長、陸奥守歳長、武蔵守歳長、宝永頃の永次、
歳次がいる。山城守歳長兄弟は、本国は阿波ながら京と阿波を往
復し作刀した刀工である。

園瀬系の刀工には助信がいる。助信は園瀬川河畔に住み作刀した。寛文から幕末まで数代続いた刀工で、大阪の河内守国助、同地域からの駐樋刀工伊勢守国輝の縁者とも伝える。その他前記三系統に属さない刀工に髪・髭・鬚と銘を切る刀工がいるが、二代三代があるとも、一人の刀工が三様の銘を切るとも伝え、いずれも寛永以後寛文以前の刀工である。

他国系の刀工は、他国より阿波に来国、その子孫が阿波に定住した刀工たちである。例えば天正年間に来国した備前国の彦兵衛尉祐定は池田に移住、子々孫々幕末まで続いた刀工で、内四代目までが新刀期の刀工である。また、延宝頃には備中国より水田三郎兵衛国重が弟子新十郎国重と共に来国、新十郎以後三代が阿波に住み代々国重を名乗り作刀する。越前から移住の下坂を名乗る刀工や近江大掾藤原重政の存在も見逃せない。

他国からの駐樋刀工系には、寛永初期に肥前国から弘利が、元禄期には大坂の伊勢守国輝、紀州より相模守則広などが駐樋する。中でも大阪より駐樋した伊勢守国輝は、津田越前守助広・一竿子忠綱と共に元禄期の大坂新刀の三羽鳥として賞賛された名工で、この刀工を阿波に招聘したのは、当時阿波藩きっての武家目利きとして知られた藩の中老阿波藩水軍総帥森甚五兵衛村建(一、四一三石)である。

元禄九年(一六九六)三月、参勤交代の海上輸送の任を終え帰路につく栄光丸(阿波藩水軍旗艦)に国輝も便乗し阿波入りを果たし、阿南市椿泊にある森家下屋敷(松鶴城)に滞在、森家の氏

神佐山神社の奉納刀と当主甚五兵衛村建の佩刀を鍛えた。

国輝の大阪と阿波の往復はしばらく続き、森家の依頼以外にも藩の高禄武士たちの注文に応じて作刀している。その期間は、遺作の年紀銘からすると元禄九年から元禄十三年の約四年間と推定され、その間、甚五兵衛村建は、水軍作事方より鍛冶職の仁兵衛なる人物を選び国輝に入門させている。そして仁兵衛は国輝の一字「輝」を授けられ刀工名を輝実と名乗る。この仁兵衛に関して『森家系図并成立書』には、「正徳五年乙未年十月晦日 仁良院様為御慰椿泊村建宅江被為掛 御腰候節狩野周信筆三幅対御掛家来物則所持仕候並御小袖一重拝領仕候其節木地鞍一背辻辯次衛門作新藤郷輝實作刀一腰右輝実儀ハ村建家来仁兵衛ト申者ニテ伊勢守國輝門人ニテ御座候 指上申候」とあり、村建が藩主に返礼として輝実作の刀を贈ったことが記されている。残念ながら本刀は現存しない。

この他にも元禄期には、備中から水田与五郎国重が来国、この国重にも椿打ちの遺作があるが、これも阿波水軍総帥森氏の招聘によるものか。なお、駐樋の記録はないが暫定的に阿波藩主が御抱鍛冶とした刀上に、大阪新刀屈指の名工一竿子忠綱がいる。三尺近い長寸もので刀身に昇り龍・下り龍に蜂須賀家の家紋「丸に出紋」を刻した旧国宝の献上刀が今に伝わる。

阿波の新刀期の主なる刀剣と海部拵

ここでは、新刀期の代表的刀工を選び、その作例を紹介する。

阿波刀紹介1

名称 刀 銘 阿州海部住氏吉作

法量 刃長七・一・八セ、反り二・二セ、元幅三・二セ、先幅一・〇セ、

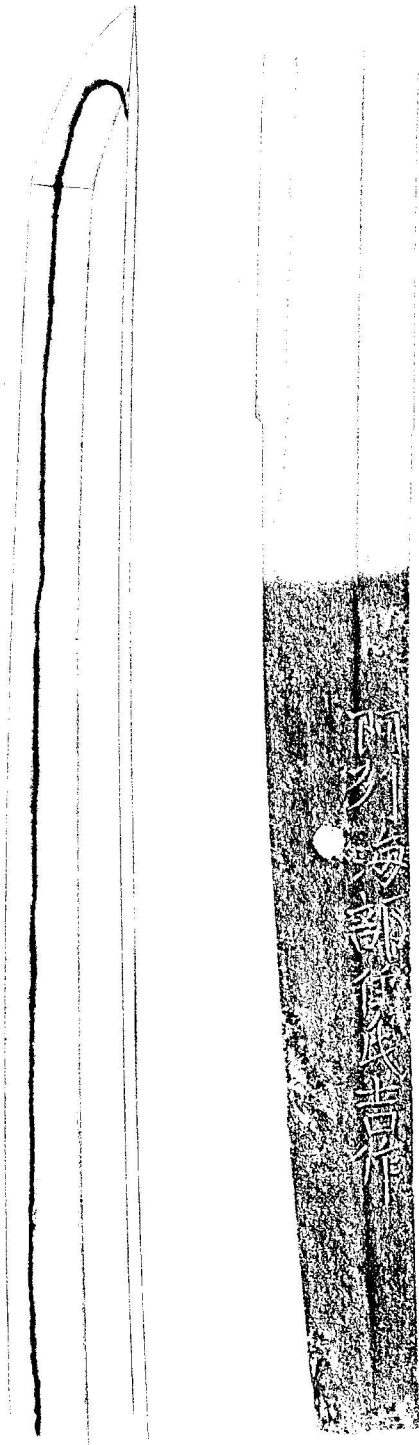
切先長三・三セ、元重〇・九セ、先重〇・五セ、茎長八・三セ。

解説 形状は、鎬造、庵棟、身幅広く、鎬が高く重ねは厚め、中切先延びる。刃文は、中直刃調で小乱に小互の目が交じり、刃縁に小沸つき、足入り、ほつれ、砂流の変化がある。帽子は、表は直ぐに小丸で、裏は直ぐに焼詰となる。茎は、先を僅かに摺り上げ、目釘孔一個、鑢目は勝

手下がり、指表目釘孔上から鎬地に「阿州海部住氏吉作」の銘がある。

この氏吉の刀は、地对共に健全で、特に地鉄は古風を示し、一見すると古刀に見まがう新刀初期の海部氏吉の作である。この期の海部氏吉には古くから代別があるといわれてきたが、現存年紀作がほとんどなく詳細を明らかにし得ない。本刀の作風及び切銘は、室町最末期の藤原を冠する氏吉に似通うものがあり、その後代と鑑することができ氏古代別研究の上からも好資料である。

押形



阿波刀紹介2

名称 短刀 銘 阿州住人氏次作

法量 刃長二七・七セ、反り一・〇セ、元幅三・〇セ、先幅二・九セ、

元重〇・七セ、先重〇・五セ、茎長二二・五セ。

解説 形状は、片切刃造、庵棟、地鉄は、板目肌で刃よりに流れ肌が交じり、ザングリし白けぎみとなる。刃文は、中直刃調に小湾れ刃が交じり、匂口締めまりごころで、刃縁に僅かな二重刃の変化が現れる。帽子は、表裏共に直ぐに小丸で、返りはやや深い。彫刻は、指表に棒樋、裏に護摩著に不動明王の梵字。茎は、生ぶ。茎先は入山形、鐔目切り、目釘孔一個、指表目釘孔上から棟よりに「阿州住人氏次作」の銘がある。

押形



新刀期の氏次は、海部川筋御及び穴喰・日和佐・木頭においての作刀が見られる。また、土佐に移住した氏次（中島氏次）がある。作風は、丸棟で片切刃と平造の協差が大半で、未だ大刀は見ない。

この氏次の刀は、表裏に不動明王などの彫刻があり、海部刀としては珍しい。海部ものの片切刃造は、一般的な片刃とは形を異にし、指裏が片刃になるのが特徴である。この種の造り込みのものには、切れ味本意の実用刀が多く、これが「陣鉦」あるいは「海部の山刀」などと酷評される所以でもある。それに比して本刀は、入念に造られた元禄期の氏次と鑑定される一刃である。

(整理番号709号)

阿波刀紹介3

名称 脇差 銘(刀身銘) 阿州海部住氏吉

法量 刃長二六・八寸、反り〇・二寸、元幅一・五寸、先幅一・〇寸、

元重〇・五寸、先重〇・四寸、茎長八・七寸。

解説 解説 形状は、片切刃造、丸棟、身幅細く、重ねは厚め、反りは深い。地鉄は板目、柰目が交じり総体に流れて刃より棟よりに疋肌交じり、わずかに白け立つ。刃文は、小湾れに小互の目刃が交じり、足入り、匂い出来、総体に匂口冴え小沸つき物打ち辺で二重刃となり、湯走りが入る。帽子は、直ぐに小丸、沸よくつき返りは深い。茎は生ぶ、目釘孔一個、茎尻は細くなり入山形、鐔日は勝手下がり、刀身に「阿州海部住氏吉」の銘がある。

押形



本刀は、典型的な片切刃造りで、いわゆる海部包刀と呼ばれるもの、外装はこれまた典型的な拵が付けられている。

新刀の海部派(氏吉・氏次)の刀工では、海部包刀の作刀に加えて、拵の製作を「家伝」としたことが窺われ、この拵は正確には「海部權卷鞘拵」(図版参照)と呼ばれ特徴は野趣味豊かな造り込みにある。柄は主に檜などの堅木を用い、鞘は両側面を薄く剥ぎ取り、その部分に別材を宛がい、晒した黄桜の外皮を巧みに通して縦縞文様や蜻蛉等の図柄を編み上げる。本刀に付けられた拵はその典型といえるもので、特に入念に造られている。

阿波刀紹介 4

名称 短刀 銘 阿州大西助定

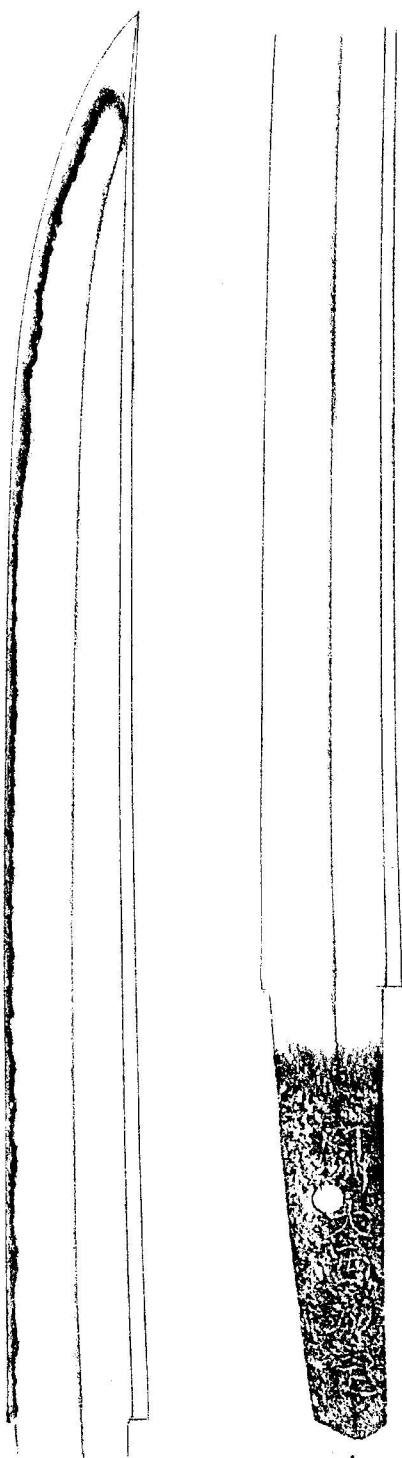
法量 刃長二六・八^セ、反り〇・二^セ、元幅二・五^セ、先幅二・〇^セ、

元重〇・五^セ、先重〇・四^セ、茎長八・七^セ。

解説 形状は、菖蒲造、庵棟、反り浅く、重ね身幅共に尋常。地鉄は、板目肌流れ肌が交じる。刃文は、直刃調に小互の目に小乱が交じり、鉤元でかけ出し刃となり、匂口は沈む。帽子は、表裏共に直ぐに小丸。

茎は生ぶ、目釘孔一個、茎尻は入山形、鍔目は切り、指表、目釘孔上より鎧筋に「阿州大西助定」の銘がある。

押形



作者「助定」は、天正年間に阿波に來国した横山彦兵衛尉祐定が畠西

の池田に駐槌した後、その子孫は同地域で代々刀工となって、横山（大

西）一門の道統を築く。初代彦兵衛祐定は、藩命により、大西と姓を改

めてからは、二代目の與左衛門祐定まで無銘刀の作刀を余儀なくされ、

在銘刀の製作は、三代目からと子孫宅に遺された系図は語る。

本刀は、三代目彌五衛門祐定あたりの弟子筋の作と鑑せられ、作品は

極めて少ない。大西の姓を名乗り「祐」の字を「助」としているところ

に特徴があり、同一門研究の好資料である。

(整理番号269号)

阿波刀紹介5

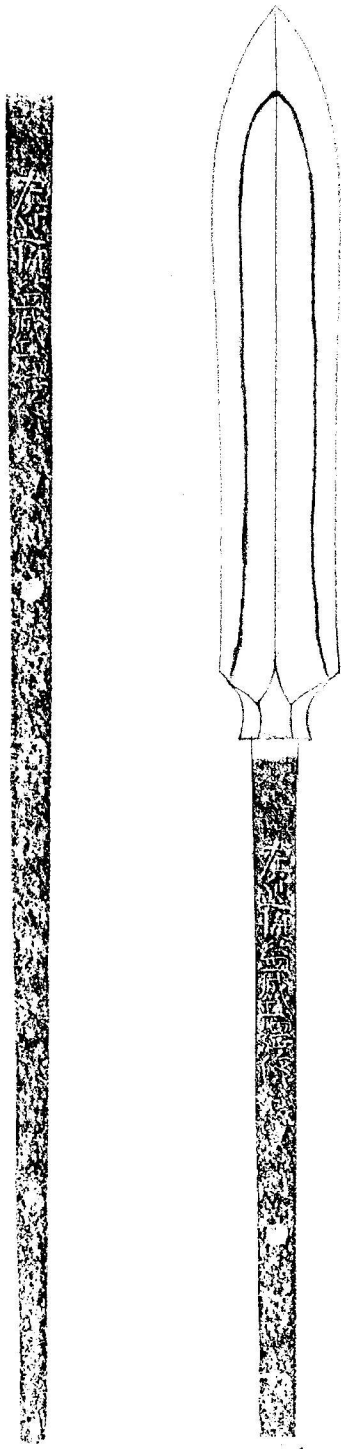
名称 槍 銘 左近将監盛綱作

法量 刃長一五・五寸、元幅二・五寸、先幅二・六寸、元重一・〇寸、

先重〇・六寸、茎長二七・五寸。

解説 形状は、両鑄造の槍。地鉄は柃肌に僅かに杳目が交じり総体に地沸がつく。刃文は、直刃調の浅い湾れ、刃縁は匂い深く小沸がつき匂口は明るく冴える。帽子は、丸く返って掃きかける。茎は生ぶ、茎尻は切り、目釘孔一個、鐔目は筋違い、銘は目釘孔上に「左近将監盛綱」と切る。

押形



作者「左近将監盛綱」の活躍期は寛永頃、海部末流で徳島城下で作刀、表銘永次と裏名盛綱の合作刀があることからみて同時代の二村左近歳長一門との技術交流があったことが窺われる。

現存作は脇差・槍が多くあるが刀は極めて少ない。刀・脇差の造り込みは身幅が広く、反り重ね頃合で豪壮な姿が多い。古刀期の海部伝を継承している刀工だが、刀・脇差には沸・匂い口があまり冴えないものが多い。むしろ槍には出色の出来を示すものがあり、この槍はまさにそれで、姿がよく特に地刃の出来が優れている。

阿波刀紹介6

名称 脇差 銘 阿波国具氏

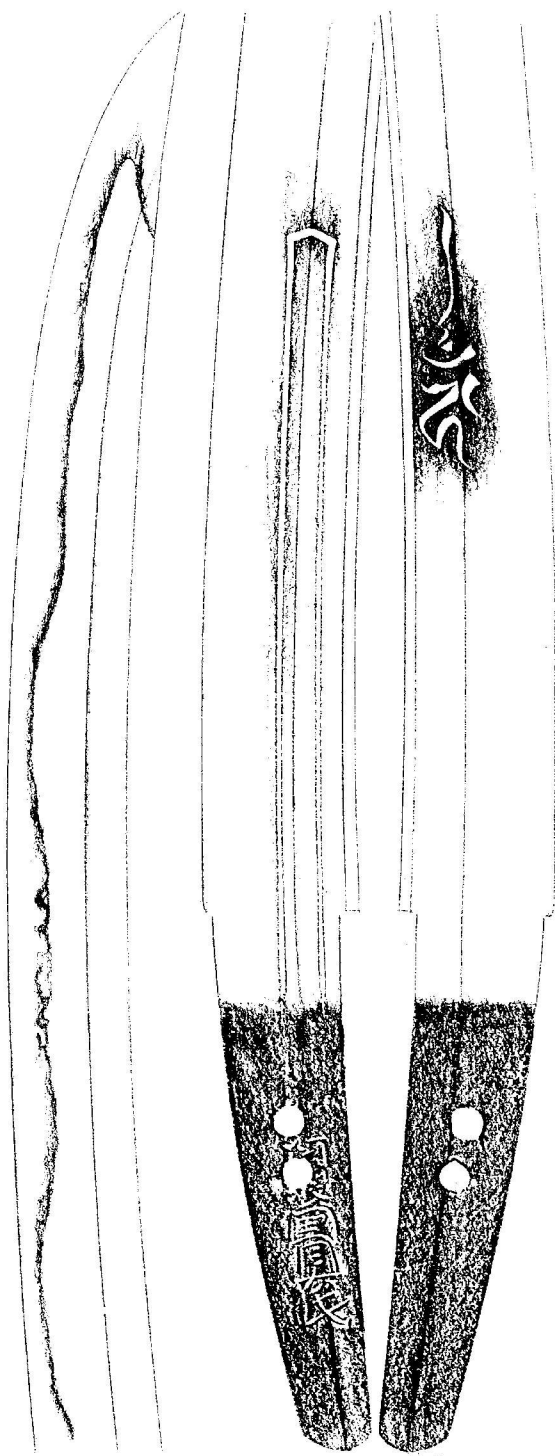
法量 刃長四〇・七セ、反り一・七糎、元幅二・九セ、先幅一・一セ、

元重〇・六セ、先重〇・六セ、茎長一〇・八セ。

解説 形状は、菖蒲造、庵棟、反り深くつく。地鉄は、板目肌に奎目が交じり肌立ち、鎬地に疋肌が現れ、全体に地沸つく。刃文は、湾れに互の目が交じり、刃縁には小沸がつき、砂流かかり、匂口明るく冴える。

帽子は、指表、直ぐに尖りところで小丸に返り、先掃きかける。指裏は、先尖りところで小丸に返る。彫刻は、表に素剣、裏には不動明王の梵字

押形



がある。茎は生ぶ、茎尻は刃上がり栗尻。鑓目は檜垣、目釘孔は二個、指表、目釘孔下鎬筋に大振りに「阿波国具氏」と銘を切る。

作者「具氏」は、海部系の鍛冶で徳島城下で主に作刀する。刀は少なく脇差・槍・短刀・薙刀などがある。作風は海部伝が顕著で、板目肌に流れ肌が交じり細かい地沸がつき、よく練れた地鉄が多い。中には、備前伝をねらったものもあり、駄作刀が少なく出来の良い作品を多く遺す。銘には「阿波国具氏」「阿州住具氏」「阿波国滑津住具氏作」などと切ったものがある。

(整理番号409号)

阿波刀紹介7

名称 刀 銘

(表) 阿州徳島住藤原国綱主藤本権左衛門

(裏) 於武州江戸大袈裟落土壇切込地入 (花押)

切手山野勘十郎

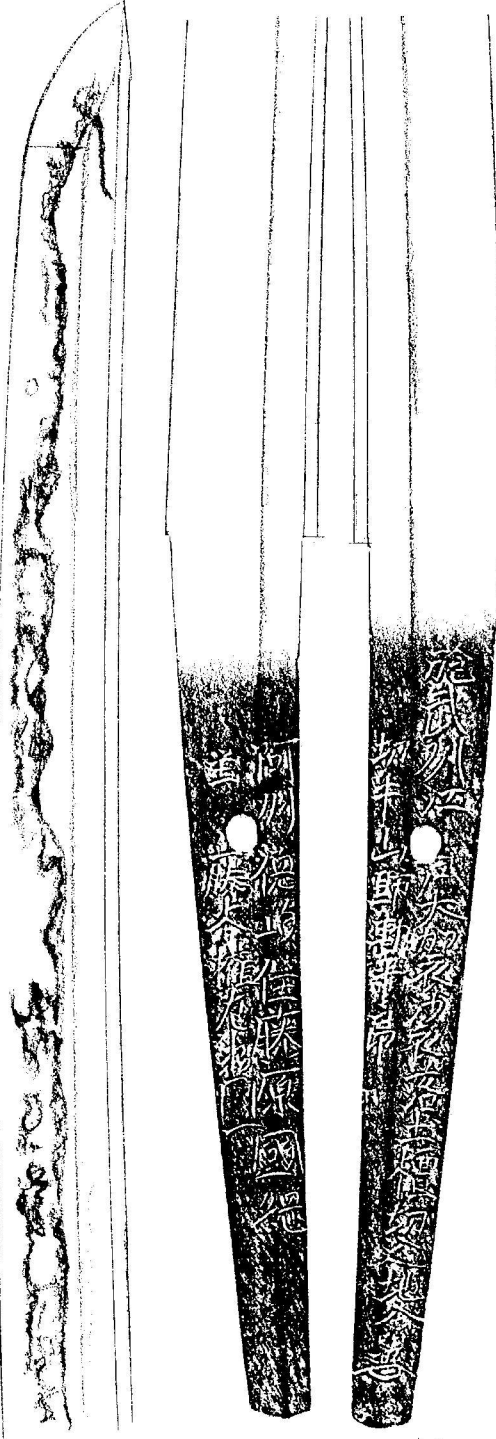
法量

刃長六七・六^サ、反り一・五^サ、元幅三・〇^サ、先幅二・〇^サ、切先長三・四^サ、元重〇・七^サ、先重〇・五^サ、茎長一八・三^サ。

解説

形状は、鑄造、三ッ棟、重ね厚く身幅は尋常、元幅と先幅はやや差がつき、反り浅く、小切先。地鉄は大板目肌が詰み、地沸つき地景入り、ザングリとする。刃文は、焼き深く湾れに互の目が交じり、足入り、縞刃・葉の変化があり、刃縁には砂流し、金筋入り、所々飛焼入り、棟焼が中ごろに点在し皆焼風になるなど頗る変化に富む。帽子は指表、焼

押形



き深く直ぐに小丸、指裏は、一枚風で小丸に返り表裏共に返りは深い。

茎は、生ぶ。茎先は栗尻、鑢目は大筋違い、目釘孔一個、指表の棟寄りに長銘とその横に注文主の添銘、裏には二行に裁断銘と花押がある。

作者国綱は、寛永・寛文期の刀工で、大阪より帰国し、徳島城下に住し作刀、新刀初期の阿波を代表する刀工である。

本刀は、寛文新刀然とした姿に相州伝を焼き、地刃共に出色の出来を示しており、茎にある裁断銘は、刀の切れ味を試した記録で、切り手は、試刀で山田浅右衛門と共に有名な山野勘十郎である。優れた切れ味だったのだろう。人体を斜めに袈裟切りしたところ、刀が刑場の土壇場まで切れ込んだ旨が記されている。

阿波刀紹介 8

名称 刀 銘 阿州徳島住人二村左近藤原歳長於洛陽作

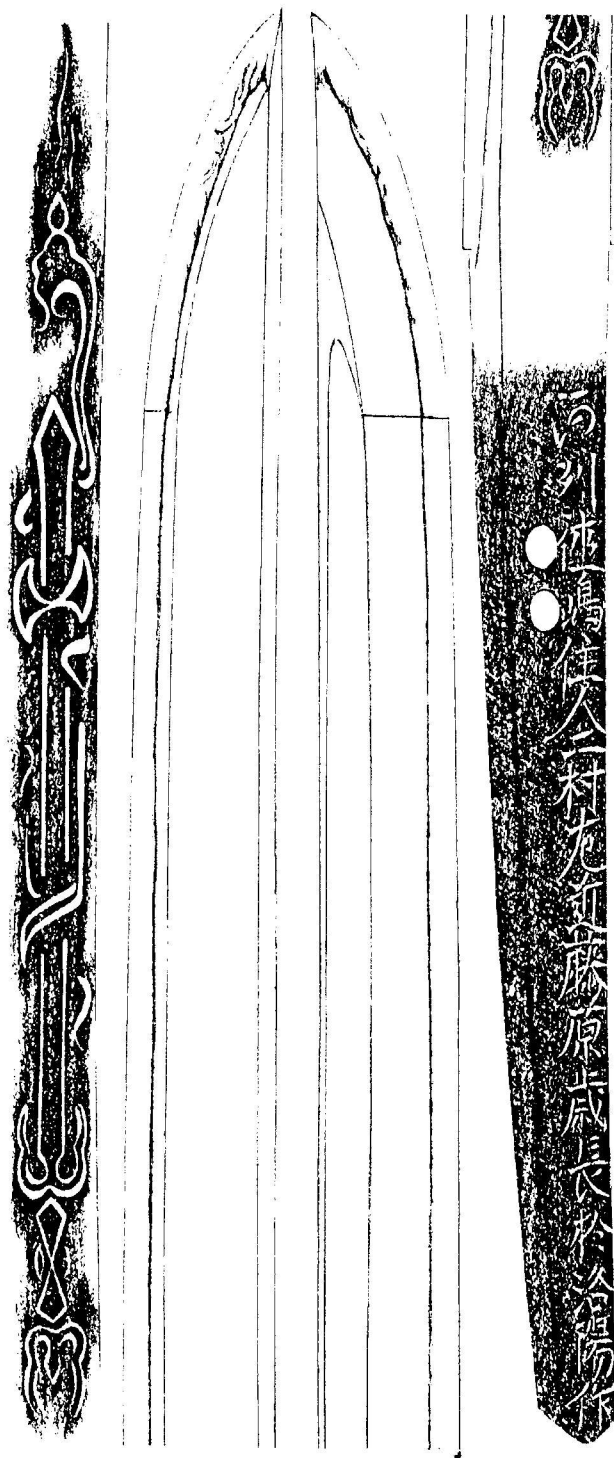
法量 刃長七一・二サ、反り一・七サ、元幅三・五サ、先幅二・二サ、切先長四・〇サ、元重〇・八サ、先重〇・六サ、茎長二・三・五サ。

解説 形状は、異形で、表は横手のある片切刃造、裏は鑄造。地鉄は、小板目肌に大肌が交じり地沸つく。刃文は、中直刃で小沸つき匂口が締まる。帽子は表裏共に小丸に返り先掃き掛ける。彫刻は、表に草の俱利伽羅竜と梵字一字を彫る。裏は、棒樋を掻き通す。茎は、生ぶ、目釘孔は二個、鐔日は筋違、茎尻は刃上がり栗尻。目釘孔上より鑄地に「阿州徳島住人二村左近藤原俊長於洛陽作」と長銘がある。

作者「二村左近歳長」は、寛文期に活躍した海部系の鍛冶で、俗名を義左衛門、初銘は広次。刀銘に「阿州福島住広次」「洛陽住山城守於阿波城下福島藤原歳長」などがあり、阿波国と京を往復して作刀した刀工である。歳長は三人兄弟で、兄弟そろって京の堀川系の刀工に入門、次男は陸奥守、三男は武藏守を受領し、それぞれが歳長銘で作刀する。

本刀は、山城守歳長の作と鑑せられ、小板目が詰み地沸をよくつけた美しい地金に中直刃を焼くなど山城伝が顕著に表れ、表裏異形の造り込みの入念作の一振りといえる。特に刻銘は京と阿波の往来を示しており歳長刀研究の上でも好資料である。

押形



(整理番号 513号)

阿波刀紹介9

名称 太刀 銘 (表) 髪作

(裏) 寛永十八年二月吉日

法量 刃長一〇一・八寸、反り三・四寸、元幅三・七寸、先幅一・四寸、

切先長三・一寸、元重〇・九寸、先重〇・五寸、茎長三〇・〇寸。

解説 解説 形状は、鑄造、庵棟、長寸で身幅広く、反り高く、中切先。

地鉄は、板目肌に奎目肌が交じりよく詰み、地沸つき、地景入る。刃文

は、中直刃、刃縁には小沸付き締まりどころで明るく冴える。帽子は表

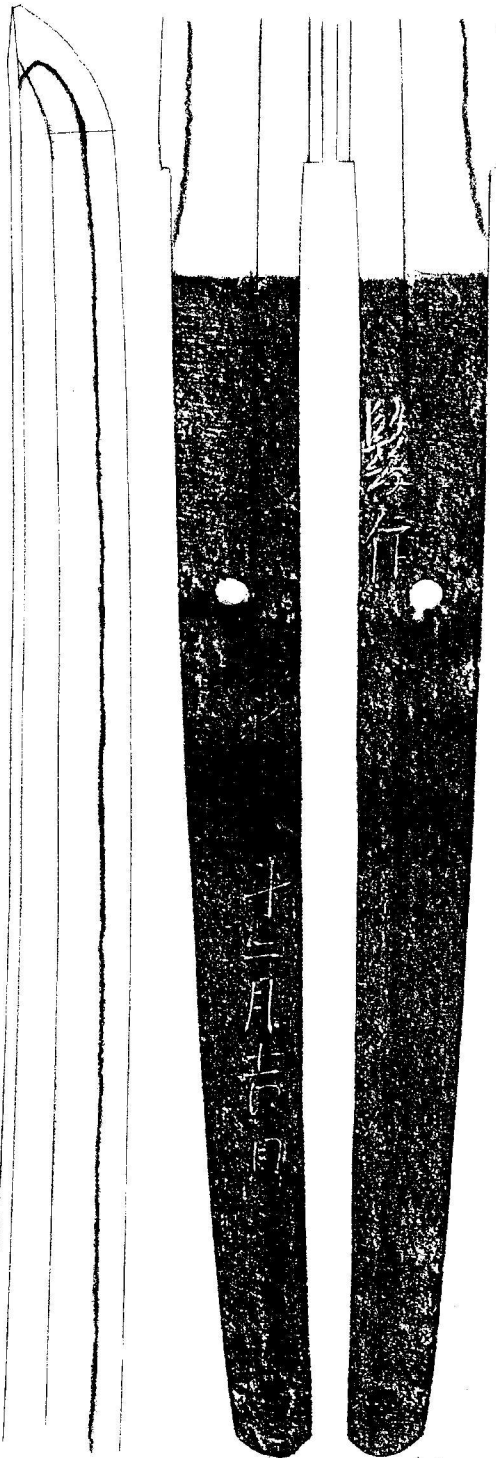
裏共に直ぐに小丸。茎は、生ぶ、目釘孔は一個、鐔口は大筋違い、茎尻

は刃上がり栗尻、目釘孔一個、鐔口は切り、佩表目釘孔上鑄地に「髪作」

の作者銘、佩裏に「寛永十八年二月吉日」の年紀銘がある。

作者「髪」は、『新刀弁疑』「阿波住人也、髪作、髪継等切、播州にも

押形



住す」とあり、現存刀の年紀銘からすると寛永・寛文期が活躍期である。

銘には髪・髪継・髭・髭継・鬚・鬚継が有り、かみ・ひげ・かみつぐ・

ひげつぐと読み区別する。また地名を冠したものは阿州・讃州・播州

などがある。いずれも同一人物と思われるが、年紀の上がるものは大半

が「髪」で、下がるものが髭・鬚となっている。

作風は、地鉄は板目に奎目交じりの肌がよく詰み、刃中が明るくさえ

たもの、刃縁に荒沸を交えたもの、丁字刃のものなどがあり、山城・相

州・備前伝を器用にこなす。本刀は、長寸の大作にかかわらず地刃に破

綻がなく、秀逸な各品となっており、寛永十八年二月吉日の年紀も資料

的に貴重である。

(整理番号113号)

阿波刀紹介10

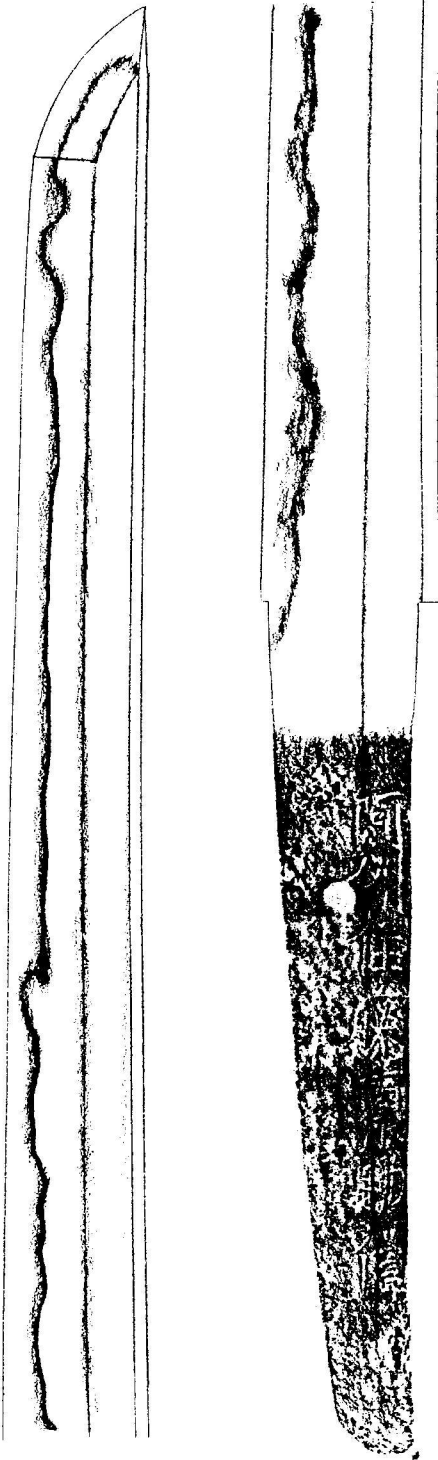
名称 脇差 銘 阿州住藤原助信

法量 刃長五八・八寸、反り〇・九寸、元幅三・〇寸、先幅一・〇寸、

切先長二・八寸、元重〇・八寸、先重〇・五寸、茎長一五・五寸。

解説 形状は、鑄造、庵棟、重ね厚く、元先の幅に開きあり、反り浅く
中切先詰まる。地鉄は、板目肌流れ肌が交じり、地沸つき肌立ちザン
グリとする。刃文は、小湾れに互の目が交じり、所々荒沸交じり、湯走
り、砂流しかかる。帽子は、直ぐに小丸、先僅かに掃き掛ける。茎は生
ぶ。茎尻は、刃上がり栗尻、目釘孔は一個、鑿目は大筋違い、指表、目
釘孔上より鎬地に「阿州住藤原助信」の銘がある。

押形



作者「助信」は、寛文・元禄期に活躍した刀工で、徳島市を流れる園

瀬川河畔で作刀したことから「園瀬鍛冶」の別称がある。大阪新刀の河

内守国助の子供、伊勢守国輝の縁者などと伝えるが、大阪新刀風の作域

と、国助の「助」を刀匠銘に冠することなどからこの発想が生まれたと

思われる。作風は大阪新刀然としており、地鉄は小本目肌がよく詰み、

刃文もあり、これらには沸出来のものが多い。銘は、「阿州藤原助」「阿

州助信」「阿波国園瀬住藤原助信」などと切る。

本刀は、反り浅く、元先の差が開くなど寛文新刀姿で、特に茎などは

大阪風を示しており、地刃共にその傾向が顕著である。

(整理番号113号)

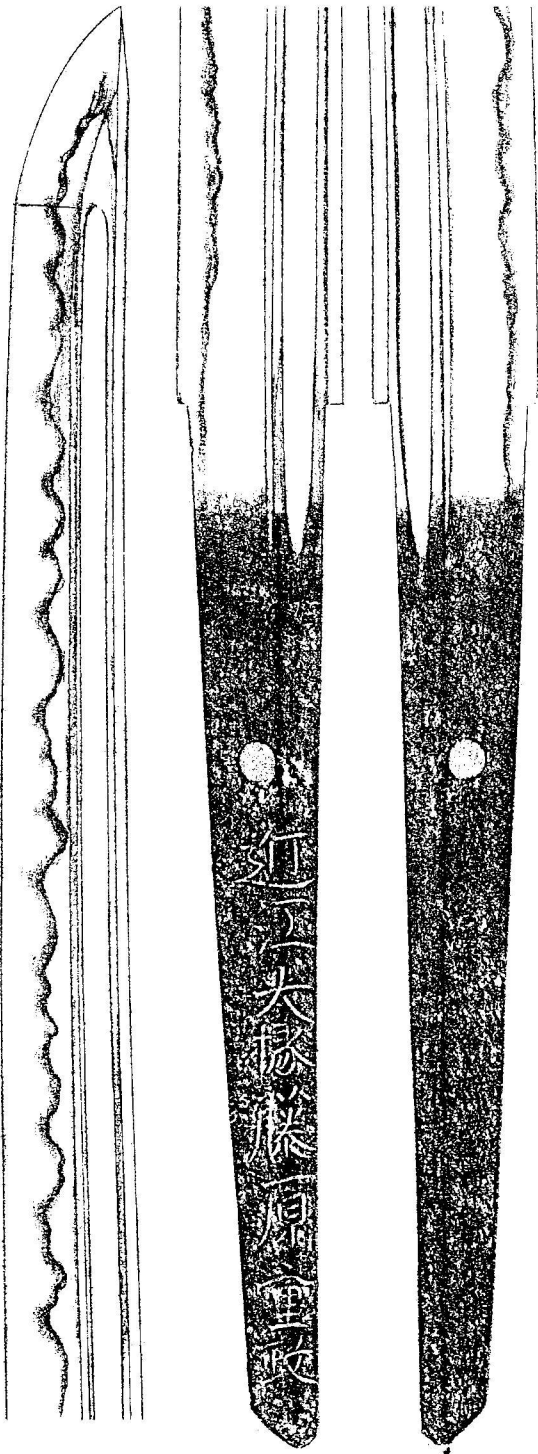
阿波刀紹介11

名称 刀 銘 近江大椽藤原重政

法量 刃長六八・五サ、反り一・四サ、元幅三・一サ、先幅二・一サ、切先長〇・〇サ、元重〇・六サ、先重〇・五サ、茎長一九・七サ。

解説 解説 形状は、庵棟、鑄造、浅い鳥居反り、中切先。地鉄は、板目肌詰み、わずかに杢目肌が交じり、地沸つく。刃文は、湾れ互の目、焼刃高く物打ちあたり鑄筋に達する。刃縁は沸出来、所々、荒沸つき谷間に砂流し長く掛かり変化に富む。彫刻は、棒樋に添樋を掻き流す。帽子は、わずかに湾れ込んで小丸、先砂流し状の変化がある。茎は、生ぶ、目釘孔は一個、鑢目は鷹の羽、目釘孔下より鑄筋に「近江大椽藤原重政」

押形



と大振りの銘を切る。

作者「重政」は、寛文・元禄期に活躍した阿波刀工である。「近江大椽藤原重政、寛文・元禄頃の二人有り、阿波」と古書にあるが未だ国名を冠したものは見ない。

作風は、大阪風を加味した美濃伝で、地鉄は板目が詰み、湾れ互の目に尖り刃が交じる刃文などを焼き、刃縁には小沸がつき明るく冴える作品が多い。本刀は、地刃共に出来すこぶる良く、茎の鑢目を鷹の羽にするなど美濃伝色が顕著な一振である。

阿波刀紹介12

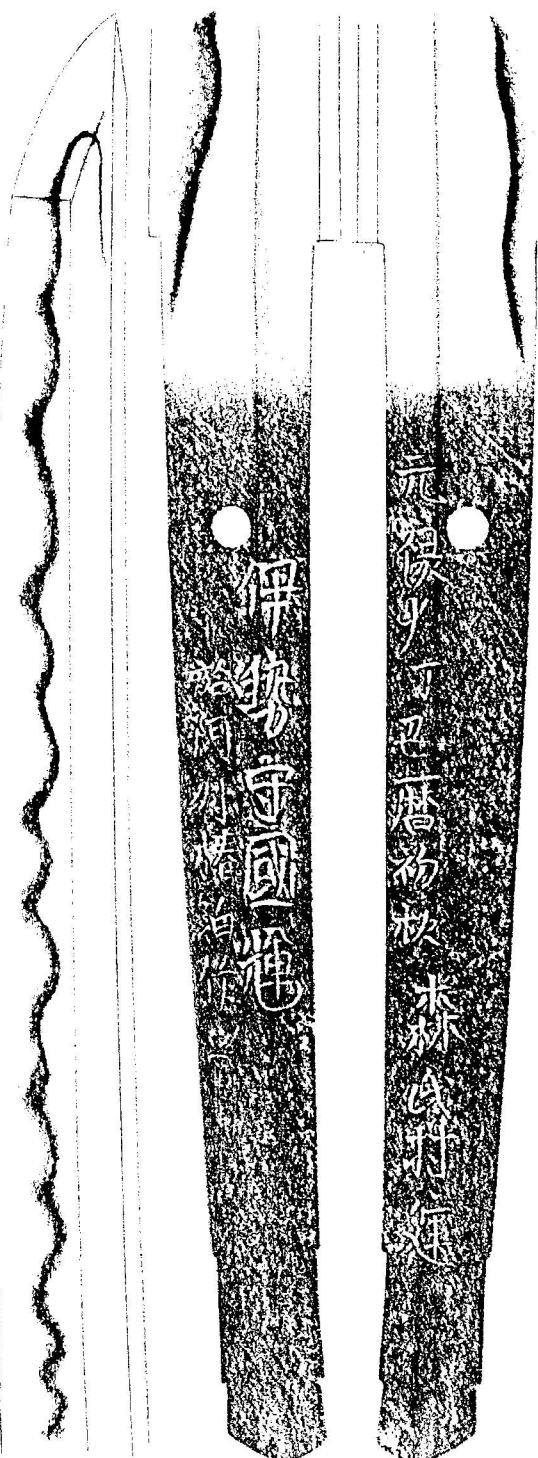
名称 刀 銘 (表) 伊勢守國輝於阿州椿泊作之

(裏) 元禄十丁巳曆初秋森氏村建

法量 刃長六九・五寸、反り一・三寸、元幅三・〇寸、先幅一・九寸、切先長三・三寸、元重〇・七寸、先重〇・四寸、茎長一〇・一寸。

解説 形状は、庵棟、鑄造、身幅・重ね共に尋常、中切先。先幅と元幅の差開く。地鉄は、小板目肌よく詰み、地沸が厚くつく。刃文は、大互の目乱れが濤瀾風となり、足繁く入り、刃縁は、匂い極めて深く、沸よくつき、荒沸交じり匂口明るく冴える。帽子は、直ぐに小丸で深く返る。茎は、生ぶ、目釘孔は一個、茎尻は、この刀工独特の御弊茎で、鑄目は化粧鑄かかり以下筋違い。銘は、指表面釘孔や上より鑄地に「伊勢守國輝」と作者銘、その横に「於椿泊作之」と添銘、指裏に「元禄十丁巳

押形



歴初秋森氏村建」と年紀と注文主銘がある。

作者「国輝」は、寛文・元禄期を代表する大阪新刀屈指の鍛冶である。作風は、当時一世を風靡した濤瀾乱に互の目を交えた作風を得意とした。現存刀の年紀銘からすると元禄九年から元禄十三年頃が阿波国での駐蹕期間になる。この刀は、刃文の匂口はあくまで深く明るく冴え、名刀たるに相応しい出来である。茎に刻まれた銘文は、東国年代と注文主(阿波藩水軍総帥森氏七代甚五兵衛村建、鍛刀場所(阿南市椿泊)がわかる好資料であり歴史的にも価値が高い。本刀は、その理由を以て昭和二十八年、徳島県の文化財に指定されている。

(整理番号117号)

阿波刀紹介13

名称 太刀 銘 阿州住水田大月國重作

法量 刃長七〇・二弍、反り三・四弍、元幅三・五弍、先幅一・六弍、

切先長四・〇弍、元重〇・九弍、先重〇・六弍、茎長一七・八弍。

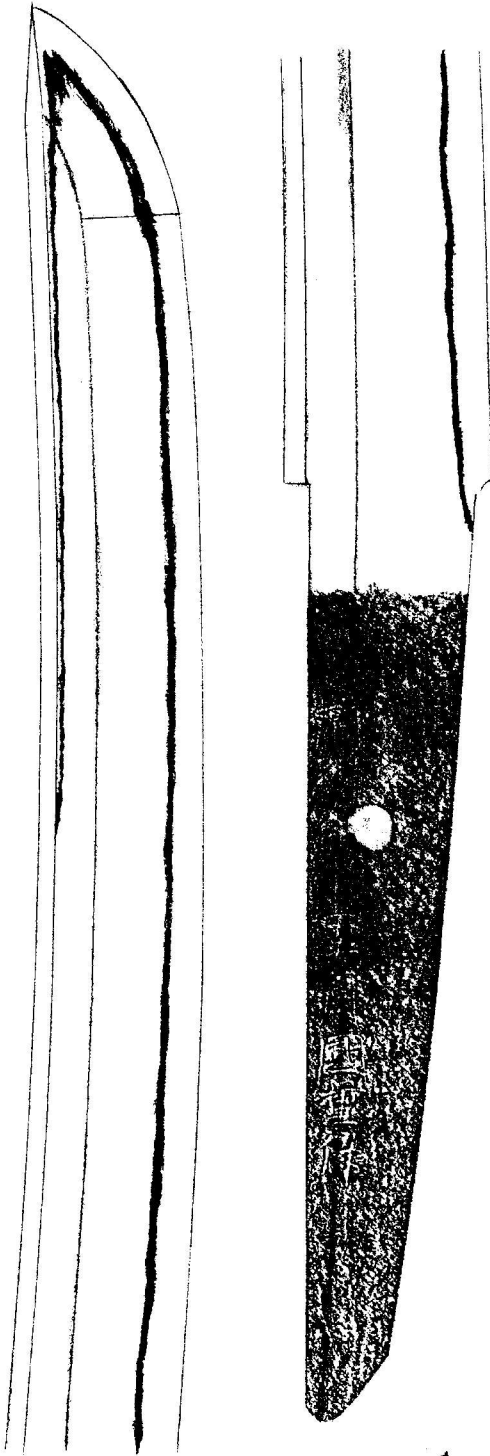
解説 形状は、鑄造、庵棟、身幅広く、重ね厚く、鑄幅狭く、反り深く、中切先延びる。地鉄は、板目総体に流れて、やや肌立ち、刃寄りに柃気強く、地沸厚くつく。刃文は、中直刃、刃縁には、打のけ、金筋入り・喰違刃交じり変化に富み、棟焼かかる。帽子は、先火焰風で深く焼き下げ棟焼につづく。茎は、生ぶ、目釘孔は一個、鑿目は筋違い、茎尻は深い入山形、目釘孔上より鎊地に「阿州住水田大月國重作」と大振りの銘

押形

を切る。

備中国より阿波にきた最初の国重は備中三郎兵国重の弟子新十郎国重である。その子が延宝頃の与五右衛門国重で元禄頃には与右衛門国重がいる。

本刀は、椿打ち刻銘の新十郎国重の刀と作風が酷似している。阿波水田の作は大湾れや皆焼風に乱れ刃を焼く相州伝風が多いのに比して、本刀は、珍しく打ちのけや喰違刃が交じる大和伝の作風を見事に表現している。国重はしばしば阿波国内の神社に自ら鍛えた刀を奉納しているが、この刀もその一振である。



あとがき

古刀期、海部城主の庇護のもと栄えた海部の刀工群は、天正三年（一五七四）の長曾我部元親の海部侵攻によって四散してしまふ。その後の阿波国は、天正十三年の蜂須賀氏の入国、大坂の陣等を経てようやく偃武の世となるが、入国後の新藩主がとった武器製造の秘匿政策は、さらにこの現象に追い打ちをかけ、古刀期の流れをくむ新刀期への残存刀工たちは、急足に影を潜めてしまふことになる。

慶長期の数少ない刀工には、新刀期の海部鍛冶に位置づけられる氏吉と氏次、海部城主の裔「吉清」、後に福島系の祖と位置づけられる「俊長」がいる。中でも海部系の鍛冶が阿波藩の御抱鍛冶になるなど名実共に始動し出すのは万治年間からで、福島系の鍛冶の活躍は寛文頃からである。

元禄期は、自国鍛冶に加えて他国より来国して滞在、作刀後再び自国に帰る刀工たちや、その刀工の次世代がそのまま阿波に定住するという、いわゆる駐槌刀工の一種と地場刀工が共存し、また、それらが技術交流を行い、多くの伝法が阿波に移入され、阿波における新刀特伝（海部伝と山城伝が融合等）が生まれた時代といつてよい。ともあれ、江戸初期から新々刀鍛冶が始動しだす寛政期までに、阿波の新刀鍛冶は、海部系・福島系・園瀬系・他国系・他国からの駐槌刀工系と五分類するに値する多くの刀工を輩出した。

最も長い伝統をもつ海部鍛冶は、室町末期の動乱で壊滅的打撃を受けたとはいえ、新刀期の氏吉・氏次・具氏・盛綱等に引き継がれ、特に氏吉・氏次の名跡は江戸末期の新々刀鍛冶に及んでいふ。そして海部伝を基盤とした福島系の鍛冶たちは、他国の伝法を加えた新しい作風をもって開花する。

園瀬系の助信と他国系の大西祐定の道統も耐えることなく連続として幕末まで続いてゆくのである。

（次回は古刀編）



大会所感

第四十二回全日本歯科学学生 総合体育大会剣道部門の 開催を終えて

徳島大学歯学部

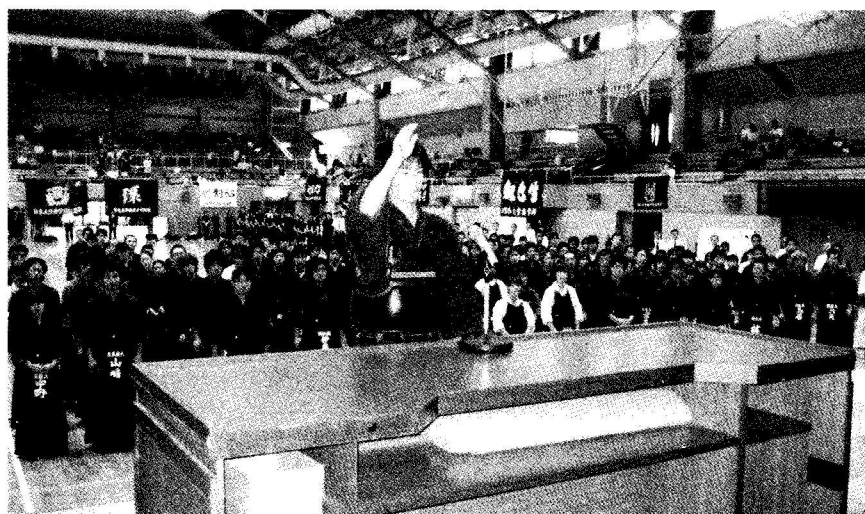
剣道部主将 鎌谷和樹

今年、ここ徳島の地で第四十二回全国歯科学学生総合体育大会剣道部門を、我々徳島大学歯学部が主管として開催させていただきました。本大会は全国の歯学部の学生が参加し、三〇〇〇四〇〇人ほどの規模の歴史ある大会で、我々歯科学生にとっては日頃の研鑽の成果をお互いに試しながら、剣を交えることによって各大学との交流を深めるといふ意義をもつ、とても重要な大会です。このような大会を自分の慣れ親しんだ土地で開催できましたことを、本当にうれしく思います。

しかし、徳島大学は過去に本大会の主管

の経験がなく、また私個人としてもこれまで大会の運営に携わったことがなかったため、結局のところ終始戸惑いながら進めているような状態でしたが、そのたびに木原先生が手伝って下さり、適切な助言を頂けたこと本当に感謝しております。

思い起こせば、本大会を我々が主管するとはじめて聞かされたのは三年ほど前だったと思います。そのころまだ新人生だった自分はこの重大さを全く理解していなかったのですが、学年が上がっていくにつれ責任の大きさを実感していったことを覚えています。そして、一番最初に大会準備の仕事として行ったのが試合会場の確保だったのですが、例年では八月の第一週の土日に開催していたのが、今年は中体連の試合や他の競技の開催口と重なってしまい、うまく体育館を予約することができず、例年より一週間早めて大会を開催することとしました。この話し合いはかなり難航したのですが、体育館の関係者のご尽力により結果的には徳島市立体育館という、立地条件や設備面も優れた場所をお借りすることがで

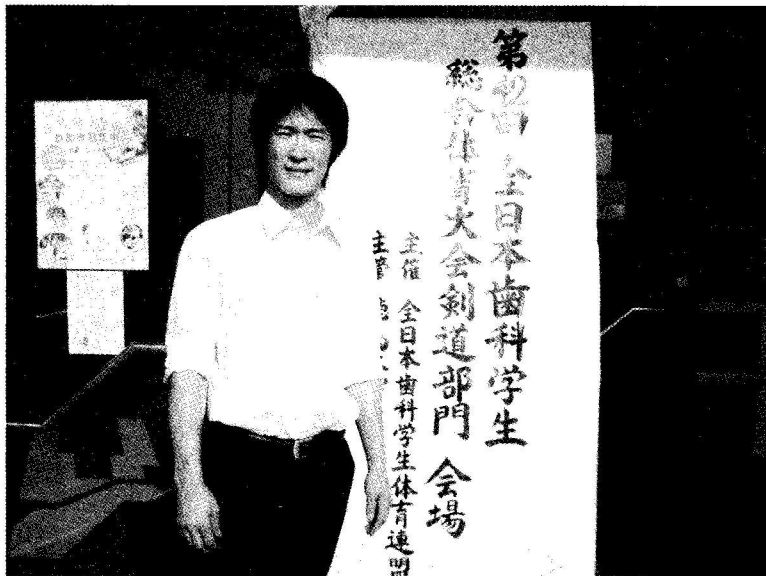


きたこと、深く感謝しております。

無事日程と場所が決まり、次の仕事は審判員の確保でした。私は、過去に大会を開催したことがあるさまざまな方から、この審判員の確保が最も大変であるというお話を聞いたことがあり、本大会では目標七〇〜八〇人の先生に審判をお願いするつもりでしたので、苦勞することを覚悟していたのですが、実際のところは思っていたよりも先生方に快く引き受けていただけました。これは木原先生や師範の河田先生のご協力のおかげであるのはもちろんのこと、徳島県の剣道連盟が常日頃から学生剣道に協力的に動いて下さっているからだということを実感し、改めてありがたく感じております。

大会当日は初めての経験ゆえ、行き届かない点も多く、先生方には多くのご迷惑をおかけしたとは思いますが、ご容赦いただきたく存じます。大会も大きな問題もなく無事終えることができ、他大学の方にもいい大会だった、徳島にこれでよかったなどのお声もいただくことができました。これ

もご協力していただいた諸先生方、県内の大学の剣道部員の皆様のおかげだと、深く感謝しております。これからは、この御恩を少しでもお返しできるよう徳島の剣道界にお力添えできればと思っております。お世話になった方々、本当にありがとうございます。ありがとうございました。



韓国少年団を迎えて

北井上剣道教室

美馬州一



八月十九日に、

韓国の小学生が国際交流で徳島へ来て、剣道の稽古を見ることがになりました。

した。ぼくは、その交流に参加し、少年部強化生の代表として歓迎のあいさつをするということになりました。

もちろん外国の人の前であいさつをしたことが無かったし、韓国の皆さんに剣道のことがかうまく伝えることができるか大変心配でした。

当日は、立っているだけでも汗が流れる暑い日でした。ぼく達は各道場から集まった六十三人で韓国の皆さんを迎えました。韓国の友達は百人位いて、あいさつでは、剣道は日本の武道であることや防具の説明、世界大会が行われていることなどを話しま

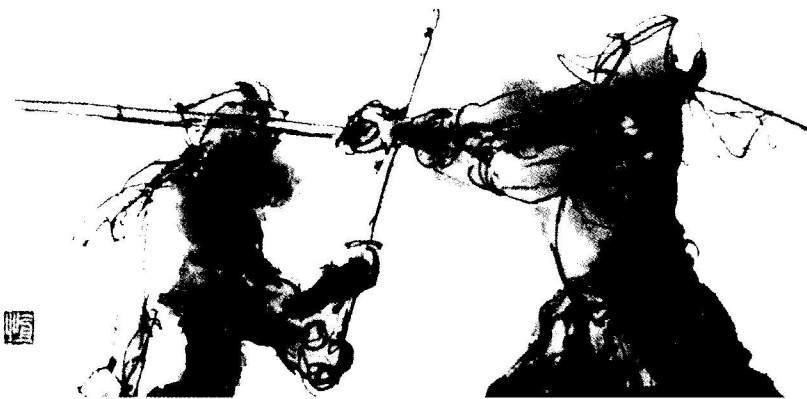
した。その後、ぼくたちの稽古風景を見てもらいましたが、剣道の気迫や打ち方を伝えるため、気合いを入れて稽古をしました。ぼくたちの気迫に韓国の友達はびっくりしていたようでした。韓国の友達もぼくが日本で見ただけのことない空手の様な演舞を見せてくれました。

最後に韓国の友達に剣道の構えを教えめました。言葉は通じなかったけどお互いに身ぶり手ぶりで教えました。韓国の友達もすぐに竹刀を構えることができました。

二時間という短い交流でしたが、ぼくは外国の人と交流することが初めてだったので、とてもいい経験になりました。

今、剣道は世界でたくさんの方が稽古をしていて世界大会も行われています。今回交流した韓国も世界大会に出場したりしていて、活やくしている選手がたくさんいます。

今回の交流を経験して、これからも一生懸命に稽古をして外国の人と一緒に稽古をしたり試合をしたりして、世界中に剣道の友達を作りたいと思いました。



各種大会に参加して

第五十八回全日本都道府県対抗

剣道優勝大会に参加して

富岡西高等学校

井上幹大



平成二十二年四月二十九日、大阪市中央体育館において、第五十八回全日本都道府県対

抗剣道優勝大会が開催されました。本大会は、各都道府県剣道連盟から、年齢別、職業別の代表者によって構成されたチームにより、互いの技を競い合います。本県からは、監督・米倉滋先生、先鋒・井上幹大（富岡西高校二年）、次鋒・山本義征（大阪体育大学四年）、五将・日和田慈海（医光寺僧侶）、中堅・白木洋一（石井中学校教諭）、三将・山名信行（徳島県警察機動隊）、

副将・山本康史（日亜化学工業）、大将・近藤巨（徳島県警察本部）、この八名で大会に臨みました。

私は、前年十一月に行われた県の選手権大会において、幸運にも優勝し、大会への切符を手にすることができました。年が明け三月、警察学校体育館での徳島県剣道連盟稽古会に参加するようになりました。水・土曜日の二日間の稽古会は、はじめの頃は

不安と緊張でいっぱいでしたが、いつの間にか自分にとって新鮮な気持ちで竹刀を握ることができるようになっていました。そして、稽古会の日を持ち遠くさえ感じるようになっています。というのも、近藤先生をはじめ、チームの方々が優しく、そして時には厳しく教えて下さり、小手すりあげ面等の高度な技にも挑戦し始めたからです。徳島県を代表する先生方と共にとたかう機会を与えていただき、先鋒として少しでもチームの役に立てるよう稽古に励みました。

チームとしての初めての試合は、京都で行われた近畿近県練習試合でした。ここで

は、大会に向けてチーム力の強化に努めました。京都に向かう車中では、緊張して固まっていた私に、先生方は言葉をかけて下さり、緊張の糸をほぐして下さいました。年齢の離れた私に対して、練習場面以外でもお心づかいいただき、ほっとすると同時に自分の居場所を確認することができました。とても感謝しています。

そして、大会当日を迎えました。一回戦は佐賀県でした。私の対戦相手は、同じ高校二年の選手でした。先鋒である自分が一本でも取り、次鋒の山本さんに繋げたいと思います、試合に臨みましたが、互に技が決まらないまま引き分けに終わりました。次鋒・五将・中堅と一本ずつ取られ、続く三将・副将は引き分け。すでに勝敗が決まっていた大将戦ですが、見事一本面を取りました。チームとしては、残念ながら一勝（一本）対三勝（三本）で敗戦しました。近藤先生の気迫のこもった攻めの剣道は今も目に焼き付いています。

今回の大会に参加するにあたり、私自身の精神面の弱さが大きな課題でした。選手

第二回全日本都道府県対抗 女子剣道優勝大会に参加して

鳴門支部 竹 内 佳代子

監督 平野 誠司 先生

先鋒 岡内 拓末 (富岡西高校二年)

次鋒 平野 千尋 (大阪体育大学三年)

中堅 前田奈々枝 (阿波支部)

副将 北村 環 (阿波支部)

大将 竹内佳代子 (鳴門支部)

七月十七日、日本武道館で行われた本大会に、以上のメンバーで出場しました。

さまざまな年齢層から構成される大会なので、まずはチームワーク作りを大切にしました。五人の日程が合うのはなかなか難しかったけれど、可能な限り一緒に活動できる機会を作っていました。毎月の女子部の稽古会、大阪、京都への遠征、四国四県大会参加など。平野先生、河田先生のご指導のもと、こういった機会に恵まれたことに感謝しています。だから、チームワークはバッチリで大会に臨めました。

しかし、結果は一回戦敗退。宮城県に一一の本数負けで、かなり悔まれる結果になってしまいました。以下、試合内容・感想についての、各選手のコメントです。

先鋒 岡内選手

「練習試合を含め本番までの間、さまざまな所へ連れて行ってくださいました。そして、その場その場で剣道のことはもちろん、人との付き合い方や礼儀など剣道以外のこともたくさん教えてくださいました。また、遠征先では他県の先生方とも出会うことができました。本番の試合では、何とか一本を取りましたが、先鋒としてチームに流れを引き込めるような試合ではなく、とても悔しく思いました。先生方、先輩方の試合を見て、ただ打つのではなく、自分から攻めて相手を動かして打つ大切さを教わりました。今回学んだことをこれからも活かして稽古に精進していきたいと思えます。」

次鋒 平野選手

「団体と同様、各年齢層の方とチームを組むのは大変勉強になるので、とても楽しみにしていた大会でした。一回戦、先鋒が

勝ってきてくれたので、その流れに乗ろうと挑みました。でも、その気持ちが強すぎ、攻めが浅い中での技ばかりとなり、空回りした感じです。自分も何か気持ちが悪くならず、次に良い流れで回せなかったことが残念でした。」

中堅 前田選手

「二人目が産まれてから、初めての全国大会でした。稽古や遠征のたびに協力してくれた主人や子供たち、母に感謝しながら挑んだ試合でした。結果は、自分ではいい感じで攻めれていたと思うけど、残念ながら引き分け。でも、前夜も試合もとても楽しかったです。次回に向けてまた一から頑張ろうと思っています。」

副将 北村選手

「一本リードの試合展開。さらに波に乗ろうと勝ちを意識して試合に臨んだが、途中から相手ペースの試合展開となってしまい、メン二本を取られてしまいました。自分の不甲斐無さに腹がたつと共に、みんなに迷惑をかけて申し訳ない気持ちでいっぱいです。でも、日本武道館で試合ができる

感動を味わえたり、試合会場での先輩・後輩たちとの再会、他県の同年代の選手の活躍に刺激をいただいたり、参加してとても勉強になりました。

大将 竹内

「私が一本でもとってあげれば、勝てた試合だったのに、引き分けにしてしまった自分がとても情けないです。五分あるので、とにかく落ち着いて一本を狙いにいきました。しかし、相手は絶対打たれまいと守りを強めてきます。鏢迫り合いも放すことができず、相手をくずした技も出せず、本当に自分自身が不甲斐無かったです。どんな時でも一本がとれる頼りになる大将になりたいという思いが強まりました。」

悔しい結果に終わってしまいましたが、この大会に参加できたことで、得られたものは大きいです。それぞれが感じたことをこれからの自分の剣道に活かしていきたいと思います。

このチームの仲間と出会え、試合に臨めたことに感謝しています。また、東京まで応援にかけてくださった、大石先生、

岡内さん、北村さん、前田さん、平野悦子さん、応援ありがとうございました。監督の先生をはじめ、諸先生方、また女子部のみなさん、ご指導ありがとうございました。今後ともよろしくお願いします。

徳島	1	1	宮城
		(本数負け)	
岡内	②一本勝	1	磯田
平野	×	×	菅野
前田	×	×	佐藤
北村	1	⊗ ⊗	大山
竹内	×	×	菅野

第①回 全日本都道府県対抗 女子剣道優勝大会



平成22年7月17日(土) 午前9時20分開会
日本武道館
主催 財団法人 全日本剣道連盟・茨城県剣道連盟
 協賛 財団法人 東京都剣道連盟
 後援 文部科学省・東京都・財団法人 日本武道館・日本武道協議会・日本女子七段連盟・報知新聞社
 協賛 八ツツウホ本

全国高等学校選抜

剣道大会に出場して

城北高校三年 笠 井 栄 一



平成二十二年三

月二十七日と二十

八日に愛知県春日

井市で第十九回全

国高等学校剣道選

抜大会が開催されました。今回城北高校は初出場となります。

県予選では一回戦から苦しい試合が続きましたが、準決勝では代表戦、決勝では大將までもつれるも、粘って二―一と、チーム一丸となった試合をすることができ、何とか優勝することができました。

出場が決まってからは、徳島県の代表として恥じない試合をするように、また、少しでも良い結果を残せるように、部員同士切磋琢磨しつつ、今まで以上に日々の稽古に励みました。

予選リーグの対戦相手は、茨城県の水戸

葵陵高校と、京都府の東山高校でした。水戸葵陵高校、東山高校ともに伝統ある高校で、特に水戸葵陵高校は、前年度のインターハイ王者であり、今回の大会でも優勝候補のひとつでした。しかし、私たちはそのような相手と当たっても自分たちの実力を発揮すれば決して引けを取らず、必ず勝機はあると意気込んで試合に臨むことができました。

第一試合目の東山高校戦では、先鋒が幸先良く二本勝ちし、次鋒、中堅、副将と引き分けて、勝利は目前と思われました。しかし大將戦で二本負けを喫してしまい、一―一で本数も同数と惜しくも引き分けてしまいました。

続く第二試合目の水戸葵陵戦では、勝てば決勝トーナメントへ進めるということもあり、相手がどんなに強くても絶対に勝つという気持ちで戦いました。結果、それぞれ惜しい場面はいくつかあったものの、要所を抑えられ、〇―五で負けると同時に予選リーグ敗退が決定しました。

今回の大会では、「全国初勝利」を達成

することができず、とても悔しかったですが、全国の強豪校の試合を見て、また実際に試合をすることで多くのことを学ぶことができました。そして自分たちの課題もたくさん見つけることができる貴重な経験となりました。

このような経験ができたのも、今までご指導して下さった先生方や先輩方、常に応援して下さいた保護者の方々のお陰だと思っています。また、私のような頼りない主将に快くついてきてくれたチームメイトに感謝したいです。

これまで剣道を続け、技術はもちろん、礼儀や精神力、感謝の気持ちなどたくさんを学びました。これから先の人生でも、剣道を通じて学んだことを活かして、さらに成長していきたいと思うと同時に、城北高校剣道部が今後ますます発展していくことを心から願っています。

全国選抜大会

「絶対、勝って全国に行く」

富岡東高校三年 栗野文那



一月十七日に行われた選抜予選。十九連覇の重圧もあって、不安と緊張で迎えました。

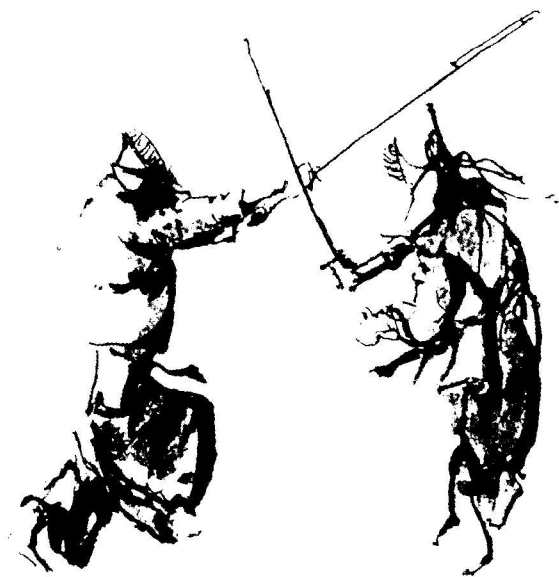
一回戦、二回戦と順調に進んだ後の決勝戦。相手は富岡西高校。試合は、思い通りにいかず、初めて劣勢で回ってしまった大将戦。岩原が一本取れなかったら、全国には行けないという状況でした。でも、「岩原なら、二本取って帰って来る。」と信じていました。試合が始まり、まず相面での一本。大きな拍手が上がり、それまでの不安が一気にふっ飛びました。そして、二本目の完璧なまでの出小手。あの時の感動と、仲間に対する感謝の気持ちは、今でも忘れることができません。九人全員で掴み取った全国への切符です。

「目標はベスト四。」昨年のベスト八越えを目標に挑んだ全国大会。たくさんの先生方や、友達、保護者の方々に見送られ出し、会場入りしてから、入場行進が終わるまで、心臓が飛び出してしまうようになるくらいの期待と緊張でいっぱいでした。そして、予選リーグ。相手は宮城県の仙台育英高校と、強豪校の一角、茨城県の守谷高校でした。大会の一ヶ月ほど前に、組み合わせが発表され、「守谷高校」の名を目の当たりにした時、正直、一瞬目を疑いました。あの時はたぶんみんな「最悪だ。」と思ったはず。練習が終わって家に帰り、父に、「選抜の組み合わせ決まったんやけど、予選リーグから守谷と当たる。くじ運悪いな。」と言うと、父は、「守谷を倒すチャンスやな。適わん相手でない。」と強い口調で言いました。確かにそうかもしれない。もし守谷を倒すことができれば、目標のベスト四に近づくことができる。と前向きに考えることができました。

予選リーグ一回戦。緊張のせい、一本を上手くつなげることができず、チームとしては引き分けに終わりました。そして迎えた予選リーグ二回戦。守谷高校との対戦。私は先鋒で出場し、相手は中学校以来の「剣友」の西でした。お互い手の内を知っているというのもあり、とてもやりにくい相手でした。西から一本取ることができず、引き分けに終り、次の次鋒戦では守谷が一本。中堅は引き分け。副将の工藤が逆転の二本勝ちを収めました。本数勝ちでの大将戦。勝てるかもしれないと思った一瞬の心の乱れが勝敗を分けたのかもしれませんが。周りで応援してくださる人たちに結果を残すことができず、キャプテンとしても、とても悔しい思いをしましたが、今回、守谷高校と最後まで競り合えたことは、これからのチームへの大きな自信と経験になりました。弱いところをたくさん打たれ、自分の剣道をまた一から見直すきっかけにもなりました。九人で全国の剣友たちと戦うことができたこと、目標に向かって一生懸命汗や涙を流したこと、本当にいい思い出になり、自分自身の成長につながりました。この悔しさを忘れず、稽古に励みたいと思



います。四月からは、新しいメンバーも加
わります。新チームになって、また高い日
標を掲げ、それに向かって、邁進します。



美ら島沖繩総体に出場して

城北高校 福 居 壮 太



平成二十二年八月三日〜六日「青天届く君の風みなぎる闘志が夏に輝く」のスロー

ガンのもと、沖縄県名護市二十一世紀の森体育館で第五十七回全国高等学校剣道大会が行われました。

時は臈総体二週間前に遡ります。練習中、レギュラーの一人がアキレス腱損傷、全治一年という怪我に見舞われました。チームの中心的な選手だった分、残された私たちは精神的に追い込まれました。それでも全国総体出場はどこにも譲れず、選手全員が「あいつの分まで」と今まで以上に緊張感を持って練習に励み出しました。一週間後の愛媛遠征では、一人一人が今までと違った動きを見せ、チーム力の高まりが実感できました。そして迎えた県総体、気がつく

と私たちはチーム全員で涙を流していました。結果は逆転優勝。城北高校にとっては県総体初優勝となりました。

全国総体での私たちの目標は予選リーグ突破でした。自分たちの剣道が出来れば敵わぬ相手ではなかったので、いかに大会までに心身の状態を調整するかの勝負でした。大会初戦は石川県金沢桜ヶ丘高校でした。予選リーグ突破には絶対負けられない試合だったので、チーム内に緊張のムードが漂っていました。先鋒・次鋒・中堅が善戦するも一本取りきれず引き分け。副将は惜しくも一本負け。大将の私に繋いでくれるも、期待に応えることが出来ず一本負け。チームの結果は二―〇で負け。私の焦りが生んだ隙が敗因になっただけに、悔しさが残りました。二戦目は強豪校の長崎西稜高校でした。先鋒が負け、次鋒が勝ち、流れを戻そうとするも中堅・副将・大将が負け。チームの結果は四―一で負け。二敗で予選リーグ敗退となりました。全国総体では強い選手ほど心技体が一致していると学びました。帰県後、私たちは強くなるために、特に心

の強さが必要と感じ、次に向けて動き出しました。

私たちが目標に向かい、挑戦し続けることが出来たのは、日々熱心に御指導して下さった、西谷先生、川原先生、他の先生方、いつも温かく見守り、励まして下さった保護者の方々、熱く応援して下さい下さる先輩方、そして何よりも辛い時、苦しい時には励まし合い、楽しい時、嬉しい時を共に過ごし、走り続けてきた仲間達のおかげだと思っています。この貴重な経験、この気持ちを生涯忘れることなく、これからも精進していきたいと思っています。本当にたくさんの方々に支えられてきた三年間でした。心から感謝しています。ありがとうございました。

インターハイ 「高校最後の夏」

富岡東高校三年

栗野文那



私たち十五人は、春の選抜大会での悔しさをバネにして、この日まで、毎日一生懸命、稽

古に励んできました。途中、スランプで思うようにいかず、とても苦しんだ時期もありました。県総体間近の五月には、左手首と左足首と腰の三ヶ所に大きな怪我をし、毎日病院に通い、十分な稽古ができず、精神的にも肉体的にもボロボロでした。それでも予選の日は近づき、日に日に不安が大きくなっていきました。

そして迎えた県総体。決勝の相手は、一月に行われた選抜予選と同じ富岡西高校。私は先鋒で出場しました。昨日の個人戦での悔しさもあり、「団体では絶対勝つ。勝つ

てみんなを沖繩に連れていく。」キャプテンとして、三年生として、いつも以上に勝つことに対する強い思いがありました。結果は一本勝ち。続く次鋒の一年生の湯浅は見事な二本勝ち。中堅、副将、大将と引き分け。二一〇で富西に勝利し、インターハイの切符を手にしました。

八月二日、いよいよ沖繩へ出発。春の選抜大会では予選リーグ敗退に終わり、その悔しさを晴らすべく、挑んだインターハイ。

「目標は、ベスト八」でした。沖繩インターハイは私たち三年生にとっては最後の大会でもあり、今まで一緒に頑張ってきた仲間と共に戦える最後の大会でもありました。

予選リーグの相手は、春の選抜大会で二位の実力を持つ、神奈川県代表の東海大相模高校と、京都府代表の久御山高校でした。予選リーグ一回戦は久御山高校との試合。久御山高校とは、昨年のインターハイでも戦いました。勝者数、取得本数とも同数で、代表決定戦にまでもつれ込みましたが、残念ながら勝利を逃しました。昨年の悔しさを胸に、「絶対勝つ。」と自分達に言い聞か

せて試合に臨みました。結果は二一で勝利。続く二回戦は、強豪東海大相模。三年生主体のこの高校は、体も大きく、スピードや打ちの強さもある手強い相手でした。私は先鋒で出場。四分では勝負がつかず、延長にもつれ込みましたが、一本を取り切れず引き分けに終わりました。次鋒は一本負け。中堅、引き分け。二一〇で東海大相模に敗れました。

悔しさとともに、「あつという間に、最後の夏が終わったんだなあ。」と少し寂しい気持ちになりました。目標だったベスト八入りを果たすことができないばかりでなく、選抜での悔しさをインターハイにぶつけることもできませんでした。改めて、「全国」という壁の高さを実感しました。

「徳島でみんなと剣道がしたい。そして、もう一度、日本になる。」と言って、親の反対を押し切り、入学した富岡東高校での三年間は、嬉しさや楽しさよりも、言葉では言い表せないくらい、悔しくつらい思いをしたような気がします。高校三年生での剣道は、今までの十二年間の中で、正直、

一番きつかった一年でした。昨年の八月の先輩の引退後、生まれて初めてキャプテンを任せられ、どうチームを引っぱって行けばいいかわからず、苦しみ、たくさん泣きました。チームワークがバラバラな時期も幾度となくありました。でも十四人の仲間にも助けられながら苦しさを乗り越え、インターハイにも出場し、全国の舞台で戦うこともできました。目標とは程遠いですが、後悔はありません。これが、三年間、仲間と共に一生懸命取り組んで得た結果です。三年間、たくさんの人々に見守られながら、仲間とともに流した、汗や涙、最高でした。三年間、本当にありがとうございました。

平成22年度全国高等学校総合体育大会

全国高等学校剣道大会

美ら島沖縄総体2010



記録報告書

青天居、老風、みよる、闘志、夏、輝

原画 東野純 夏太(沖縄県立名護南工高等学校)

大会期間 平成22年8月3日(火)~8月6日(金)
大会会場 21世紀の森体育館(名護市)

- 主催 全国高等学校体育連盟 全日本剣道連盟 沖縄県 沖縄県教育委員会 名護市 名護市教育委員会 沖縄県教育委員会
- 後援 文部科学省 財団法人日本体育協会 財団法人日本剣道連盟 財団法人日本剣道連盟 財団法人日本剣道連盟
- 主審 全国高等学校体育連盟剣道部 沖縄県高等学校体育連盟 沖縄県高等学校体育連盟
- 特別協賛 コカ・コーラ 協賛 日南食品

平成22年度全国高等学校総合体育大会 名護市実行委員会 〒905-0014 沖縄県名護市港二丁目1番1号2階
TEL(0980)53-5443 FAX(0980)53-5426 http://www.city.nago.okinawa.jp/6/5576.html

全国中学校剣道大会に

出場して

徳島文理中学校三年

玉田 理沙子



「全中に行く！」

これは、私が中学生になった時の夢でした。学校でやっていたメンタルトレーニングの際、チームで目標を作る

ことになりました。私たち中学女子の目標は「全中優勝！日本一！」でした。最初は「無理だろうな」とか思っていました。メンタルトレーニングや稽古をしているうちに「努力すれば、大丈夫なんじゃないかな」とまで思えるようになったのです。そして、今年ついに「全中に行く！」という中学生になった時の夢を叶えることができました。

全中の日。今年は第四十回。島根県出雲市で開催されました。私が出た団体戦は二

日目でした。緊張はほとんどしませんでした。その時の私は、やっと出られた全中で試合をすることができることがうれしかったのです。

一試合目は、福島県代表の平第一中学校。この試合はみんなリラックスして試合に臨んでいました。結果は接戦の末、本数差でなんとか勝ちました。「この調子で行けば、次の試合も勝てる！」そう思いました。

二試合目は、茨城県代表の茗溪中学校。この試合に勝てば予選を突破し、決勝リーグに出場できることもあり、みんなは硬くなっていました。私は、「大丈夫だよ！勝てる勝てる！」とみんなに声を掛けました。大将の私は、試合をして勝つことができました。ですが、この試合はチームとしては負けてしまいました。他のチームの人たちは負けても、みんな写真を撮ったり、泣きながら笑顔でいましたが、私は「試合前にきちんとミーティングをしていれば、みんなこれほど緊張しなかったのでは」と思いました。試合が終わってもしばらくの間、悔しくて涙が止まりませんでした。その時は

「本当に終わってしまったんだ。もう全中には来られないんだ。」「みんなで決めた目標は何だったんだよ。」という思いでいっぱいでした。

でも、今ではこのメンバーで頑張ってきたことは無駄ではなかったと思っています。なぜなら、最初は文理中学校女子といえば、団体メンバーの五人が揃わず、県外では誰



第40回全国中学校剣道大会

平成22年8月22日～24日
島根県立浜山体育館

9157

も知らない無名校だったのに、人数が揃うようになり、地道に稽古を続けた結果、全中に出場することができたからです。これは互いに励まし合った仲間と、私たちを支えてくださった多くの方たちのおかげだと思っています。これまで、ご指導くださった先生方。お世話して下さった関係者の皆様、ありがとうございます。

ところで、全中には本当に強いと思える人が何人かいました。「同じ中学生なのにこんなに強いんだ。すごいな。」と感動しました。そして、「私もいつかこの人たちのように、人を感動させられる試合がしたい。」とも思いました。今の私はまだ弱いし、感動を与えるような試合はできませんが、これから頑張っそうなりたいです。全中ではいい結果は残せませんでした、中学生生活最後の年にとっても良い経験ができました。来年は高校生になります。目標はもちろん、「今度も同じメンバーでインターハイに出場してみんなで笑って帰ってくる！」ということですよ。

予選リーグ ○組 第1試合

学校名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	対戦結果	代表
徳島文理中 (徳島)	川原	玉田(真)	佐々木	栗野	玉田(理)	5 2	
平第一中 (福島)	白石	金子	大島	横幕	新妻	3 2	

○組	徳島文理中 (徳島)	平第一中 (福島)	茗溪学園中 (茨城)	得点	勝本数	順位
徳島文理中 (徳島)	5 2	4 1		1	3	2
平第一中 (福島)	3 2	1 1		0.5	3	3
茗溪学園中 (茨城)	5 2	1 1		1.5	3	1

予選リーグ ○組 第3試合

学校名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	対戦結果	代表
茗溪学園中 (茨城)	朝山	富永	大木	進藤	近藤	5 2	
徳島文理中 (徳島)	川原	玉田(真)	佐々木	栗野	玉田(理)	4 1	



第40回 全国中学校剣道大会 平成 22 年 8 月 22 日～24 日 島根県立浜山体育館

第五十二回全国教職員

剣道大会に参加して

福多雅英

平成二十二年八月十日に第五十二回全国教職員剣道大会が、山口県山口市にある山口県スポーツ文化センターアリーナで開催されました。試合は、都道府県対抗による団体試合と個人試合の女子の部、幼・義務教育の部、高・大・教委の部があり、各県を代表する選手によって熱戦が展開されました。本県の試合結果は以下の通りです。

○個人試合（幼・義務教育の部）

一回戦

西山伸二（小松島中）メ

メコ 新村圭介（鹿児島）

○個人試合（高・大・教委の部）

一回戦

山田浩史（徳島北高）

メメ 田崎智春（福島）

○団体試合 出場選手

先鋒 山本雅裕（城東高）

次鋒 長井 薫（川島高）

中堅 福多博史（阿南一中）

副将 玉田晋作（徳島文理中高）

大将 福多雅英（城西高）

団体試合は、一回戦長野県と対戦し、勝者数・取得本数共に並ぶという大接戦でした。大会規定により引き分けの対戦から抽選で代表戦出場者を決め試合をした結果、辛うじて勝利することができました。二回戦は、第二シード前年度準優勝の京都府と対戦しましたが、惜しくも一対二で敗退しました。

今回で五十二回口の大会でした。過去に本県勢が個人試合では、数名の先生方が優勝および入賞していますが、残念ながら団体試合においては未だ入賞していません。何とか優勝や入賞したいというのが目標であり悲願であります。その為には、稽古の充実が大切だと思います。

プロ野球楽天の元監督野村克也氏の著書に「組織はリーダーの力量以上に伸びない」

団体試合結果

【2回戦】

	先	次	中	副	大	代
徳島	山本	長井	福多博	玉田	福多雅	
1		メ	メ			
2	ココ		メ	メ		
京都	山本	小川	森田	遠山	篠原	

【1回戦】

	先	次	中	副	大	代
徳島	山本	長井	福多博	玉田	福多雅	福多博
1					ココ	コ
1		メメ				
長野	藤原	丹羽	後藤	塩崎	野口	後藤

という言葉がよく出てきます。これは、野村氏の持論であり、組織論の原則です。この言葉を剣道指導の場面に照らして考えてみると、部員は、指導者である監督の力量以上に伸びないし、監督の器以上に大きくならないということになります。

「力量」の根幹をなすものは、レベルの高い剣道技能や豊富な剣道知識と深い理合であると考えられます。日々の部活動の中で部員と共に汗を流しながら研鑽に努め、各種の講習会や稽古会を通して指導者としての「力量」を高めて行きたいと考えています。また、そのことが本県学校剣道界のレベルアップになると共に、全国教職員大会団体試合での入賞につながって行くのではないかと思います。



全国高専女子剣道大会にて

三年連続準優勝

阿南高専剣道部

顧問 湯城 豊勝



第九回全国高専
女子剣道大会が、

八月二十一日(土)

福井県立武道館で
行われました。こ

のような立派な会場で試合できるだけでも感激一杯というような素晴らしい武道館でした。試合結果は三年連続準優勝となったので、定位置という悔しさ半分と全国2位だからという嬉しさ半分でもあります。

今年もまたそれなりに考えさせてくれる材料の多い大会でありました。今年のチームは学年進行に伴い四・五年生のチームです。それぞれの学生は各種の活動で忙しいため、チーム編成から苦労がありました。まず、メンバーの一人は、小学校時代から活躍しているスポーツ少年団での功績が認

められてドイツへの派遣が決まり、もう一人はインターシップと重複してしまったことです。このため、最初から補欠の余裕がない三人丁度のチームとなり、大会直前には選手三人のうち二人は本校で開催する中学生ロボット競技会の手伝い、残りの一人も四国の高専で共同開催する環境講座への出席という異常事態になりました。関係する先生方をお願いして、とにかく三人には剣道大会の参加と練習を優先させてもらうようにしました。

そしてお盆から強化練習ですが、最初は四年生の市瀬・船越と私の三人で練習しました。この状態ではモチベーションも上がらないので、三日目には男子選手も練習に参加させました。さらに、環境講座から帰ってヘトヘトの五年生村田にも、少しでも後れを取り戻すように防具を着けさせました。このような練習不足の不安を抱えつつ福井へ出発しましたが、このままではまずいと思い、試合前夜には地元の剣道教室を訪れて練習させてもらいました。大会当日直前の練習になって、ようやく3人も竹刀が

振れる状態になり、やっと間に合ったという感じでした。

予選リーグは四チームで二試合戦うリングリーグ戦です。対戦しなくて目に見えない敵とも戦うので、勝者や取得本数に気をつかいます。先鋒・市瀬、中堅・船越、大将・村田の布陣で臨み、サレジオ高専に一一〇、大島商船には三一〇で勝つことが出来ました。目に見えない敵の苦小牧高専は二敗となったので、本校は三たび決勝に進みました。決勝リーグの初戦は鶴岡高専、先鋒のリードを中堅と大将が粘って引き分け、泥臭い試合ながらもとにかく勝利にこだわった一勝でした。そして、次は事実上の決勝戦となった鈴鹿高専。過去八連覇している強豪で、この三年間どうしても勝つことができません。今年こそはと思っていたのですが、相手の先鋒は女子個人戦優勝者。姿勢が崩れなくて次から次へと技を繰り出されて完敗。中堅は二年前の個人戦優勝者、これも速射砲のような技にて完敗でチームとしても勝負あり。そして、おまけの試合となった大将も一本負けという結果でした。



二年前には鈴鹿に引き分けであったものの、徐々に差を広げられている感じがします。ここ数年、鈴鹿に阿南が挑むシーンが続きました。今年も鈴鹿の牙城は揺るがなかったというのが印象です。

選手はもちろんのこと、今までずっと一緒に練習した仲間・男子部員たちもよく頑張りました。女子部員数の関係で、この大会には来年が最後の大会になりそうです。

来年こそはの気持ちを強く持って、あと一年練習に励みたいですね。

第九回 全国高等専門学校女子剣道大会

阿南高专 準優勝 (三年連続準優勝)

(村田奈津季・船越怜奈・市瀬祐季奈)

一、日時 平成二十二年八月二十一日(土)

二、場所 福井県立武道館

三、結果

◇一回戦

阿南 1 (2) | 0 (0) サレジオ

先 市瀬 | × 宮本

中 船越 | × 富永

大 村田 | × 太田

◇二回戦

阿南 3 (3) | 0 (0) 大島商船

先 市瀬 | | 諏訪

中 船越 | | 重岡

大 村田 | | 上名

◇決勝リーグ

阿南 1 (1) | 0 (0) 鶴岡

先 市瀬 | | 余語

中 船越 | × 阿部

大 村田 | × 阿部

◇決勝リーグ

鈴鹿 3 (5) | 0 (0) 阿南

先 田中 | | 市瀬

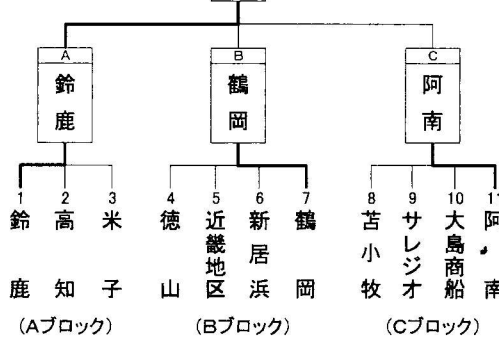
中 松岡 | | 船越

大 加藤 | | 村田

組合せ表 (女子団体戦)

優勝

鈴鹿



第五回全日本都道府県対抗 少年剣道優勝大会

監督 中山 繁輝

○期日 平成二十二年九月十九日

○会場 大阪府舞洲アリーナ

○徳島県 中学選抜チーム

監督 中山 繁輝(徳島文理中)

選手 先鋒 岡田 春希(木頭中)

次鋒 松本美紗樹(那賀川中)

中堅 谷本 晃佑(徳島文理中)

副将 高木 勝己(徳島文理中)

大将 山本 大介(鳴門第一中)

○試合結果 ベスト十六

予選リーグ 一試合目

徳島 5(9) - (0)0 富山

先岡 田 メド - 竹内

次松 本 メコ - 佐渡

中谷 本 メ - 嶋田

副高木 メメ - 青山
大山本 メメ - 石田

予選リーグ 二試合目

徳島 2(5) - (2)0 岐阜

先岡 田 - × 木島

次松 本 メド - 岩佐

中谷 本 - × 紺谷

副高木 メ - × コ尾関

大山本 メメ - メ 泉

決勝トーナメント 一回戦

徳島 1(1) - (5)3 福岡

先岡 田 - メ反糸島

次松 本 - メ大西

中谷 本 メ - 萱島

副高木 - × 今村

大山本 - メメ 勇

○所感

大会前日、住吉第一中にて大阪府選抜A・

Bチームと練習試合。二試合ともに引き分

け。強豪チームと互角に戦えたことに、大

いに自信を持った。試合内容と気力の充実
に、明日への手応えを感じた。

いよいよ大会当日、全員が期待どおりに

足が良く動き、打突の機会を逃さず有効打

突を奪う。先鋒・次鋒が流れを作り、中堅・

副将・大将が落ち着いて勝負し、富山・岐

阜に勝利した。実に大会五回目にして、初

の予選リーグ突破であった。

続く決勝トーナメント一回戦では、本大

会において過去二回優勝の福岡県と対戦。

全日中男子個人優勝者などが出場している

全国トップレベルのチームである。

本県の選手にとっては力を試すには願って

もないチャンスであり、「絶対勝つんだ」

という強い気持ちで戦いを挑んだが、善戦

むなく涙を吞んだが、「負けて悔いなし」

の清々しい気持ちであった。

福岡県チームの「常に自分の打ち間に入

り、一本を取る攻撃力」は実に見事であっ

た。本県中学生剣上においても、この攻撃

力を鍛えることが、今後の課題であると考

えられる。

今回共に戦った五名の選手の皆さんの更



なる精進と活躍を心よりお祈り申し上げます。



第五回全日本都道府県対抗

少年剣道優勝大会に出場して

中堅 塚田圭吾

出発の時、「いよいよ全国大会出場できるんだ」という、わくわくした気持ちでバスに乗りました。バスの中では、まだ緊張もせずに、同じメンバーと学校の話題でもりあがっていました。

大阪に近づくにつれて、心臓がドキドキしてきました。このドキドキとは、少ししか全国の強い人たちが集る大会に参加したことがなく、その強い人たちの剣道を見たリ、いっしょに試合ができたり、同じメンバーとの思い出がたくさんつくれるからだと思います。

大会当日、前の練習試合では引き分けばかりだったので、本番では絶対に一本取るうと思っていたけれど、予選リーグで一試合目で、最強の大阪Aチームとあたり、「どうしよう」という気持ちで挑みました。先鋒、次鋒と試合が進んできました。応援

していましたが、二分がとても早く感じました。

負けているので、流れを変えなければ、という気持ちと負けるのはいやだという気持ちでいっぱいでした。

ぼくの番になりました。無我夢中で戦いましたが、相手も同じように向かってくるので、引き分けて終わってしまいました。心の中で、「あゝ。」と叫びました。

二試合目は、どの位のレベルの強さかわからない長野県チームとあたりました。メンバーそれぞれ調子良くいくのでは、と思いました。ぼくは一本も取れずに、引き分けで副将にまわしてしまいました。くやしい気持ちと、もっとうどうして体を動かす事ができなかったのかという気持ちで、帰りたくなりました。しかし、予選リーグでは残る事ができませんでしたが、その結果より、同じ学年の県下のメンバーと一緒に、寝食を共にして試合をする事ができたのが、ぼくにはいい結果だと思いました。

中学生は予選リーグを突破して、決勝トーナメントまで行けていたのでとてもすごい

と思いました。とくに、予選リーグでの、富山県との試合で全員が勝利していたので、応援にも力が入りました。ぼくにも、あんな試合ができるようになりたいと思いました。

帰りのバスの中では、負けた気持ちを吹き飛ばす勢いの、にぎやかさでした。でも、みんなの心の中では自分の反省する所はわかっていて、これからの目標も決めているんだなど、伝わってきました。

普通では、できないいろいろな事を経験でき、全日本の大会に出場させてもらったのも、松村先生や生田先生や、他の先生方のおかげです。徳島から、ずっと一緒に練習していた友達や家族の人もわざわざ応援に来てくれて、うれしかったし、ありがたいという気持ちでいっぱいです。お世話になりました。ありがとうございました。

監督 生田 浩章

先鋒 湯浅 滉平

次鋒 川田 将也

中堅 塚田 圭吾

副将 長谷川瑞実

大将 丸岡由理奈

「初優勝」

関西女子学生剣道選手権
大会に出場して

大阪体育大学三年

平野 千尋

五月十六日、大阪・舞洲アリーナで行われた第四十回関西女子学生剣道選手権大会に出場しました。この関西大会には、各大学から代表者が選抜されて出場します。この大会で勝ち上がることが出来れば、全日本大会への出場権を得ることができるので学生にはたいへん大切な大会の一つです。私はこの大会に出場するのは三回目ですが、まずは全日本への切符を得るベスト一六を第一目標とし、最終的にはベスト四を目指していました。

大会の二週間前から学内での試合稽古が行われ、その毎日の試合をどう取り組んで調整していくかがポイントでした。今回は特に常にモチベーションを高くして、集中力を高めることを大切にしていました。

大会目前となった壮行式で、総師範である作道正夫先生から、

「やりにくい相手や苦手な相手に対して嫌だと感じるのではなく、どのように対応すればいいのかを考えれば良い。厄介という言葉は厄解とも言い、どのような物事に対しても嫌なことをどう解していくのが大事である。」という激励を頂きました。勝ち上がっていく中で色んな相手と対戦しながら、その戦いの一つ一つを楽しみむくらの気持ちでいいんだという考え方に変わり、試合当日がとても待ち遠しくなっていました。

大会当日はとても緊張をしていましたが、その中でもしっかりと集中が出来ていたの自信を持って試合が出来ました。例えば長戦に入っても、どこか落ち着いている自分がいて、充実した攻めの中から技が出せていたように思います。

気付いてみれば次は決勝戦となっていました。相手は同じ大学の一つ上のとても尊敬している先輩です。まさかこの場で先輩と試合が出来るとは思ってもいなかったの

で、胸を借りる気持ちで思い切って挑みました。終盤、先輩が諸手突きを出してきたところをすかさず自分も面に飛び込みました。するとその面が有効打突となって、無我夢中のまま勝ち取った優勝でした。

今回このような大きな大会で優勝が出来たことは、本当に信じられないくらいに嬉しく、また大変大きな自信にもなりました。結果だけでなく、いかに目の前の一試合一試合に集中して、無心で試合することが大切なのかを学ぶことが出来たように思います。

今大会までに取り組んだことを自分の形として、どの大会でも継続してできるように大切にしたいと思っています。学生剣道も残すところ一年です。大会で力が発揮できるように一日一日を大切にして頑張りたいと思います。

父である平野誠司さんも昭和六十年に
関西学生選手権大会で優勝されており、
親子二代にわたる優勝となりました。

「夢の大会」

全日本女子剣道選手権

大会に出場して

大阪体育大学三年

平野 千尋

私は、九月二十六日静岡県藤枝市（静岡武道館）において行われた、第四十九回全日本女子剣道選手権大会に出場しました。

この大会は学生から教員、警察、主婦と幅広い職種や年齢層の女性剣士が出場する一番大きな大会です。そのため、剣道をする女性なら誰もがあこがれる大切な大会でもあります。

私は二度目の出場となりますが、昨年は三回戦（ベスト一六）で負けてしまったので、今回はもう一つ上まで勝ち上がることを目標にしていました。

まず、一回戦は現在通っている大阪体育大学で私が一回生の時に四回生の先輩で、新潟県代表の樋渡選手でした。先輩との試合になるので、あまり意識をせずに胸を借

皇后盃授与
第49回
全日本女子剣道
選手権大会
平成22年9月26日(日)
午前9時00分 開会 / 午前9時20分 試合開始
静岡県武道館
静岡県藤枝市前庭2丁目10-1 電話 054-636-2332

主催：財団法人全日本剣道連盟 主管：社団法人静岡県剣道連盟
後援：文部科学省/静岡県・静岡県教育委員会・藤枝市・藤枝市教育委員会/毎日新聞社

りる気持ちで思い切って勝負をしようと思っ
ていました。

試合序盤は立ち上がりから何かとても落ち
ち着いていて、徐々にペースを掴み始めた
中盤、相手が下がったところに機会良く飛
び込み面が決まり先行しました。二本目に
なっても相手がよく見えて、相手が小手に
来るところを落ち着いて面に乗ることがで
き、幸先のよい二本勝ちが出来ました。

続く二回戦は、東京代表・警視庁の山下

選手です。警視庁の選手であるため、身体
も剣道もすごく鍛えられているとわかっ
ていたので、とにかくこの一戦がヤマ場
と思って集中してのぞみました。

結果として、間合にうまく入られ、受け
になったところを裏から面を打たれてしま
いました。この一本だけで負けてしまいま
したが、自分の中では序盤の攻め合いは気
合い負けもしていなかったし、自分の攻め
も打ちもしっかりできたという感じがあっ

たので残念な試合となりました。

しかし、序盤あそこで有効打突を決めきれないということは、まだまだ力不足であり、逆にワンチャンスを生かすことができるといふことは力がある証拠です。惜しい惜しいではまだまだです。

今回の大会は昨年よりも試合内容では良かったように思いますが、やはり攻め口がワンパターンになっていることや決め方の不足等を課題にしてまた頑張っていきたいと思えます。

自分の剣道というものを大切にしながら、その中で自分の勝ち方を創り上げていかなければ、勝負しても勝てません。自分で自信が持てるような技をしっかり考えて、そしてパターンをいくつか作り、仕上げていくことを目標にして頑張っていきたいと思っています。

来年は学生最後の年となるので、悔いの残らないような勝負をしたいと考えています。そして、県代表として再度頑張れるように残りの学生生活をより充実したものにしていきたいと思います。



第五十五回全日本東西対抗

剣道大会に出場して思うこと

警察支部 平野 誠 司

最近、「日本伝剣道の継承」という言葉をよく目にしますが、現代における勝利至上の剣道ではなく、事理一致した競技剣道を如何に見出していか、また人間形成に繋がる奥行きのある武道的実践を如何に継承していくか、多様化する現代剣道の価値観の中でまさにそのあり方が求められている現われであると思います。

命のやりとりから始まった殺人剣が、時代の変遷とともにその本体たるものを模索してきた剣の道筋を、現代に相応しい活人剣の道として繋げていかなければならないということなのです。

そういった意味においても、この東西対抗に選ばれ出場できるということは「最高の場所」で「最高の勝負」ができるということであり、自然と身の引き締まる思いがします。

若い時、まだまだ未熟であった私は、「勝負は相手にただ勝てばいい」「とにかく自分勝手でも打てればいい」という感覚があり、技術・体力は自分の勝利に直結するものであると思っていました。「一方通行的な剣道でただ打つという一面しか考えない」、これでは単なるスポーツ的感覚であり、武道として得られる本質は何一つないのではないのでしょうか。

元全国高等学校体育連盟理事長（剣道部名誉部長）であられた故湯野正憲範士は、「剣道を習うとは自己を習うなり、自己を習うとは自己を忘るるなり」と喝破されています。

合気という無意識の中に自分を放り込みながら相手と対峙する。自分で自分を知り、自分を越えていく。お互いが昇華させながら有効打突を競い合う剣道こそ、真剣勝負の醍醐味があるのです。これこそが今の時代の正しい道筋であると思っています。

私は今大会七度目の出場ですが、八段として始めて対戦する相手は七歳年上の千葉県梶原直人選手でありました。千葉県警

の指導者である梶原先生は背丈は低いものの、動きが繊細であり、独得な拍子と間の入りを持つ勝負師である印象を持っていました。

とにかく八段戦の最初の試合であること、年齢差があること、身長差があること等様々な違いをどのように対処しようかと悩みましたが、とにかくあらゆる差異もこの合気になることで解決できると考えて試合に挑みました。後は心気力を高めながら一打に集約するだけです。

初太刀、お互いに間合いの攻防から機会を探り合います。しばらく攻防があった後、無意識に放った諸手突きが相手の突き垂を的確に捉え一本となりました。続いてすぐさま合気となり、再び間合いの攻防が再開されます。身長差が三十センチもあるうかという二人の打ち間は異なります。今度は梶原先生が小手から面へと渡って入り、自分の正面を見事に割られてしまいました。

勝負。攻め合いからもう一度間に入ろうとした相手の手元を、今度はしっかりと小手を捉えることができました。一〇分三本

勝負のこの対戦、四分四十三秒で二対一の勝利です。

結局、最終結果は西軍一八勝、東軍一七勝。自分も一つの勝ちを献上することができ、西軍の優勝に貢献することができました。

私自身もまだまだ修業途上の身ではありませんが、この伝統的な競技文化を剣の正しい道筋として体現していくことを目標とし、一人一人の剣道家が「日本伝剣道」たるものを正しく見抜くことが剣の正しい道筋を次世代へ繋げていくことであろうと思いません。

この大会に出場できること、また自分の剣道を表現できる場所を与えて戴いたことに感謝しながら、向上向下、師弟同行の修行を継続していきたいと考えております。ありがとうございました。



第五十六回
全日本東西対抗
剣道大会

とき 平成22年9月19日(日)
午前9時開始
ところ 佐賀県総合体育館

主催/財団法人 全日本剣道連盟
主管/佐賀県剣道連盟
後援/佐賀県、佐賀県教育委員会、(財)佐賀県体育協会、佐賀市、佐賀市教育委員会、朝日新聞社、佐賀新聞社、NHK佐賀放送局、STSサガテレビ

第六十五回国民体育大会

(剣道競技)

徳島支部 中尾正輝

今年の国体は、平成二十二年十月二日(土)から四日(月)の三日間、秋晴れの絶好の天候に恵まれ、房総半島南端千葉県立館山運動公園体育館において開催されました。

私はこの度、総監督という立場で参加させて頂きました。昭和四十八年この地で開催された国体に選手として参加したことが懐かしく思い出された次第でした。

さて、今年も昨年同様成年男子のみの出場になりました。平成二十三年は、県剣道連盟あげて稽古に励み四国ブロックを勝ち抜き、是が非でも全種目に出場を期したいところでもあります。

大会には、

先鋒 山本義征 三段(大阪体育大学)

次鋒 山名信行 六段(徳島県警察)

中堅 前田秀一 六段(徳島刑務所)

副将 平野誠司 八段(徳島県警察)
大将 近藤 巨 八段(徳島県警察)

の近年にない、最強の布陣でベスト八を目標に臨みました。

試合には、第二回戦から出場しました。相手は、第一回戦で大分県に四対一で大勝していきあがる茨城県です。

先鋒、山本選手は立ち上がりから激しく攻め、面二本を連取してチーム勝利の流れをつかみました。

次鋒、山名選手も落ち着いた太刀さばきで、面二本を決め不安なく二勝しました。

中堅、前田選手はやや緊張気味で、川上選手(国士館大学)に面一本を奪われ敗戦。

副将、平野選手は、立ち上がり平山選手が放った面をもの見事に胴に返し勝利が見えてきました。

試合を有利にすすめながら、相手の変則な攻めによって面、小手を決められ五分で大將戦となりました。

近藤選手は、相手の大将斎藤選手を寄せつけず、立て続けて厳しい攻めから面二本を連取してベスト一六に。

第三回戦は、ベスト八をかけて強豪京都府と対戦でした。

先鋒、山本選手が敗れ、山名選手が巻き返して中堅戦へ。京都戦のすべては、中堅前田選手と礒合選手の一戦でありました。

互いに、それぞれ面を取って死力を尽くした好試合。激しい攻防の中、前田選手のみごとな突き相手の咽喉部に決まったが何か審判旗は挙がらない。正に「なんでや」という感じでした。勝敗は、前田選手が面に出たところ小手が入って敗れました。

副将、平野選手双方相手を知り尽くした間柄です。平野選手の健闘を期待するも敗れる。大将、近藤選手は、藤元選手に引き面二本を連取して勝利する。

文字通り、もう一步のところまで目標に届きませんでした。しかし、京都府を相手に大健闘をした選手に感謝する次第です。

勝負の世界は、強者でも敗れることもあり、弱者でも勝つこともあります。只、勝つための技術を修得するのではなく、剣道の本質を見誤らないように今年も県剣道連盟が一致団結して実力向上を目指したいも

全日本居合道大会に参加して

居合道部 福井 勝

平成二十二年十月二十三日(土)新潟市東総合スポーツセンターにおいて第四十五回全日本居合道大会が開催されました。

本県から監督・坂本憲一、七段・福井勝、六段・森将夫、五段・西本忠司が参加しました。

全日本の試合方式は、各連盟の代表三選手を格段毎三試合に分けてトーナメント方式により試合を行い、勝者には勝つごとに一点を与え各連盟選手三名の得点合計数を以って団体成績を決定する方式で行われました。

徳島県の成績として、七段は大阪府、六段は開催県新潟と対戦し、僅差で一回戦で敗退。五段は栃木県と対戦し、二回戦で敗退しました。

総合優勝は新潟県、二位に神奈川県、三位に千葉県でした。

全日本の選手選考は毎年二月に県卜大会

を開催し選手を決定、居合道部の合同練習を毎月第四日曜日に開催するとともに全日本の強化練習日を設定、各道場の毎日の練習に加えて月二回の練習を行いました。

また、夏には木頭にて合宿を実施、全国大会直前には監督が香川県に声をかけ、香川選手団との合同強化練習を開催しました。

試合結果としては、トーナメントのくじ運にもよりますが、格段全員が上位入賞出来なかったことが残念でなりません。

優勝の新潟県は三年前から選手強化をしていたとの事。本県も四段位の若手選手を全日本選手として強化する必要があります。強化練習会で中央審査受審予定者も合同稽古をし、十一月の東京審査で六段・一村先生、七段・森先生が合格されたことを居合道部一同嬉しく思います。

今年十月に愛媛県で開催されます。英信流の本場である四国勢の一員として背水の陣で望む決意です。



憧れの夢舞台に立って

第五十八回全日本剣道

選手権大会に出場して

警察支部 敦 賀 晋 平



小学校五年生から始めた剣道、幼いころから憧れた夢の舞台、全日本剣道選手権大会の

出場権をついに得ることが出来ました。

中学、高校と憧れだけの舞台でしたが、二十歳の頃から予選に出始め、警察官になり剣道特別訓練生の指定を受けてからは、毎年今年こそはと思うものの結果は出せず三十一歳になっていました。

日々行う稽古では課題も多く、強くなるためにはどうしたらいいのだろうか、試合で自分の全力を出すためには等、色々と考え、試しては見るものの迷うばかり。元々マイペースですが焦りもありましたし、とにかく結果を出したいと思っていました。

「毎年同じことの繰り返しではいけない、いつかではなく今日、今を頑張らなければ。」と練習に取り組みました。

そして迎えた今年の選手権予選はとにかく集中していました。準決勝に残った時、「今日絶対に勝つんだ、今日勝てなかったらもう全日本選手権には出れないぞ。」と自らに強く言い聞かせました。

決勝戦は尊敬する先輩との試合、全力を出し切ることが出来ました。憧れの選手権への切符を手に入れたとき、格別の嬉しさと達成感、そして今までの迷いがその瞬間晴れた気がしました。面の中では思わず涙が溢れました。試合後、二階で応援してくれていた妻と子供を見ると、「試合見たら緊張するけん嫌。」と言っていた妻の顔には、笑顔の中にどこかほっとしたような表情がありました。

夢に見た全日本剣道選手権大会当日、日本武道館は二試合場、今までに見た



ことのない観客の多さに圧倒されそうになりました。しかしこれが全日本選手権、やってやるぞと気合も入り、程よい緊張感を持ち落ち着いていました。相手は茨城県代表の海老原選手、試合巧者と聞いていましたが、「相手は関係ない、自分の全力を出し切るだけだ。」と自分から攻め続けました。しかし攻めてもこといったときに思い切った技に繋がりません。そして延長に入り数分、こちらが攻め込み、私の足が一瞬止まった時、「アッ」と思った瞬間相手の竹刀が面に来ていました。

試合後、応援に来てくださった近藤師範から「最初の面なんできめんかったんな、捨てきっていたらなあ。惜しかった。」と言われましたが自分ではどの面のことかも分ならず、無意識で試合をしていたのだと思います。

憧れた夢の舞台は素晴らしい場所でした。しかし出場だけではなく、もっと上に行きたかった、もっとこの場所で試合がしたかったと、悔しきで一杯です。ここで勝つためには自分の剣道をもう一度見つめ直し、よ

り一層努力しなければならぬと感じました。

最後になりましたが、今回の選手権出場にあたり本当に多くの方に声をかけていただき、応援していただきました。先生方、先輩方、同級生、後輩たち、そして家族に心から感謝しています。本当にありがとうございました。

結果を残すことは叶わず悔しいですが、今回の経験は私にとって非常に良い経験になりました。この経験を糧とし、良い反省

の材料として「剣道」という道を少しずつですが究めて行きたいと思っています。今後ともご指導、ご鞭撻の程宜しくお願ひします。

第六回全日本剣道選手権大会

とき 十一月三日(祝)

主催 財団法人 全日本剣道連盟

主管 財団法人 都剣道連盟

後援 財団法人 剣道連盟



第五十三回全日本

実業団大会結果報告

日亜化学工業剣道部

中尾幸雄

平成二十二年九月二十日、第五十三回全日本実業団大会が日本武道館で開催されました。この大会は、実業団剣道部として活動している者にとって最高の舞台であり、全国各地より三〇〇チーム以上が参加し、社名の榮譽をかけ白熱した戦いを繰り広げました。

創部十年目の節目を迎えた日亜化学剣道部は二年ぶり五度目の出場で、平成十六年のベスト十六を上回るベスト八入りを目標として、日々の稽古に励んできました。

夏季合宿では、大塚製薬(株)剣道部との合同稽古、練習試合を実施しました。稽古後は懇親会も行い、剣道談義に明け暮れまして。今後は県内実業団剣道を一緒に盛り上げていければと思います。また、城ノ内高校剣道場でも合宿を行い、内容の濃い稽古

を実施することが出来ました。両剣道部には、この場をおかりし感謝したいと思えます。ありがとうございます。今後ともよろしく願っています。

さて大会当日の布陣は次のとおりです。

先鋒・多川

次鋒・舛田

中堅・山本

副将・仁木

大将・呉羽

一回戦の相手は、全国屈指の強豪チームであるNTTDコモと対戦。

先鋒・多川は、対戦相手にスピードのある相手であったが、持ち前の長身からのスピード溢れる剣道を展開。多川の攻めと強い気持ちで勝り、相手の手元が空いた瞬間に取った見事な一本でした。

この流れに続き、次鋒・柘田の相手は上段。社会人になってから上段と試合する機会も非常に少ない中、よく攻め込み、多川が取った一本を次に繋ぐ戦いでありました。有効打突なく引き分け。

続く中堅・山本、相手は山本の剣道に合

わせてくる、やりにくい相手でありました。厳しい攻めを展開し、何本も一本ではないかという技もありましたが、引き分け。気持ちや技術面では、山本が優勢でした。

副将・仁木は取られてはならないという状況で闘志溢れる、気持ちで厳しい攻めを展開し、何本も惜しい技がありました。しかし一瞬の隙をつかれ、間に入られ、少し手元が浮いたところを、小手でとられてしまいました。

大将・呉羽は、五分五分の絶対に負けない状況で攻めの剣道を展開しました。気持ちや試合状況、攻めなどは呉羽が勝ってましたが、少しの空いた隙をつかれてしまいました。

残念ながら、今回は初戦で涙をのむことになりました。試合内容は互角の戦いぶりでありましたが、結果を残せなかったことが悔やまれます。

勝負は時の運とも言いますが、強豪チームと比べあとかたが足りないのかを部員一同で再度分析し、課題を見付け、今後の稽古を重ねていきたいと思えます。

毎年、数名の中途入社・新入社員の入部を迎えており、今年も高校・大学時代に全国大会で活躍された方の入社予定と聞いておりますので、是非入部してもらいたいと思います。

現在、県内剣道は社会に出ると、警察・教員・県下各支部・道場での稽古が主流ですが同じ会社で仕事をしながら実業団チームで剣道を将来したいという方が増えてくれば、更に県剣道も盛り上がってくると思います。

弊社売り上げも過去最高となり、従業員数も県内屈指で、剣道経験者も多数在籍しております。小・中・高・大学生諸君、将来どうでしょうか？一緒に日亜化学剣道部で日亜旋風を巻き起こしませんか？是非お待ちしております。剣道だけでなく、色々な楽しいイベントも実施しております。

今後は、日亜化学剣道部員が徳島県剣道連盟の支えとなり、活気ある組織づくりに貢献できますように、今後とも先生方のご指導、ご支援をよろしくお願い申し上げます、ご報告とします。

	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	結果	
	多川	柘田	山本	仁木	呉羽	本数	勝数
日亜化学工業	コ					①	①
NTTドコモ				コ	コメ	③	②
	西牧	安藤	瀧本	平野	萩本		



日亜稽古会

夏季合同合宿での練習試合前 挨拶
県内ライバル実業団の白熱した試合を展開した。
大塚製薬・白亜化学工業（城東中学剣道場）



夏合宿で、大塚製薬と合同稽古会
（城東中学剣道場）



夏季合宿（城ノ内中・高武道館にて）



全国警察剣道大会

山名 信行

平成二十二年十月十五日、日本武道館で全国警察剣道大会が行なわれました。

この大会は、皇宮警察と全国四十七都道府県警察の四十八チームが、三部（一部十ニチーム、二・三部十八チーム）に分かれてトーナメントリーグ方式で行われ各部門で優勝を争います。また、最初の一次リーグの結果によって来年度の入替えが行われるシステムになっています。

今年は、二部昇格をめざし三部で岩手県と滋賀県と戦いました。

初戦は岩手県戦です。

先鋒の六條（勝）選手、足を使い果敢に攻めるも足の止まった一瞬に諸手突きをもらい一本負け。先鋒戦を取られ悪い流れになりそうな場面で踏ん張ってくれたのが次鋒の六條（洋）選手、得意の引き面で一本勝ち。続く中堅の敦賀選手、副将の近藤選手、共に慎重になり、決めて無く引き分け。

勝負は五分の大将戦となりました。

大将の私はどんな形でも良いから一本をもぎ取るつもりで勝負に挑みました。

非常に緊張する場面でしたが試合を序盤に相手の諸手突きに合わせて面に乗り一本をもぎ取ることができました。その後も押し気味に試合を進めることが出来ました。時間となり、結果二対一で岩手県に勝利することが出来ました。

次く滋賀県戦ですが、この試合に勝利すれば二部へ昇格することが出来ます。滋賀県戦も岩手県戦と同じオーダーで臨みましたが。

先鋒の六條（勝）選手、試合序盤に引き面を奪取するも終了間際に飛び込み面を喰らい引き分け。またもや悪い流れになりそうな場面を救ってくれたのが次鋒の六條（洋）選手、得意の引き面で一本勝ち。続く中堅の敦賀選手、相手もここでの一本が大きく勝負を左右する事もあり互いに慎重になり、引き分け。副将の近藤選手、試合終了間際に小手面の差し合いで一本を奪われ一本負け。奇しくも勝負は初戦と同じく

五分の大将戦となりました。

ここでの一本の意味が自分に大きくのし掛かります。

試合前半、積極的に技を仕掛けます。

何度か私の方に旗が挙がりますが、一本にはならず、逆にそれがプレッシャーとなって自分に襲い掛かります。そして、決め手の無いまま延長戦になりました。その時には私は完全にプレッシャーに押し潰されてしまいました。いつの間にか気持ちを受けにまわってしまいました。受けにまわってしまった結果、面に乗られチームも敗退となってしまいました。

試合を終え、この一年間の二部昇格に向け必死にやって来たことを思い返すと涙がとまりませんでした。

この悔しさを絶対に心から忘れることなくもう一度稽古に励み、必ず結果を出したいと思います。

平成二十二年 度

徳島県高齢剣友会活動状況

事務局長 笠 井 勝



徳島県高齢剣友会は、遠藤一美会長のもと、八十三名の会員（平成二十二年四月末現在）

で活動を進めてきた。

平成二十二年度は、主な行事として次の活動をした。

- （四月） 第二十五回徳島県高齢者剣道交流大会開催
- （五月） 第二十二回土佐生涯剣友会交流大会参加
- （六月） 第三十二回全日本高齢者武道大会参加
- （七月） 西部地区稽古会開催（吉野川市）

（九月）

- ・第十六回徳島県健康福祉祭剣道交流大会（二〇一〇とくしまねりんピック）開催
- ・愛媛県剣友会稽古会参加（西条市小松武道館）

（十月）

- ・第二十三回全国健康福祉祭いしかわ大会（ねりんピック石川二〇一〇）剣道交流大会参加

（十二月）

- ・南部地区稽古会開催（阿南市）（毎月）

- ・原則として、第二、第四土曜日の午後二時から、松茂町第二体育館で、定例の稽古会を開催

以上の行事の内、「第二十二回土佐生涯剣友会交流大会」、「第三十二回全日本高齢者武道大会」、「愛媛県剣友会稽古会」、「第二十三回全国健康福祉祭いしかわ剣道交流大会」については、直接関係する会員の先生方からご報告いただくことにして、その他の活動について事務局の方から報告することとした。

こととした。

◎第二十五回徳島県高齢者剣道交流大会
平成二十二年四月十八日（日）午前九時から県立中央武道館で実施した。

開会式の後、日本剣道形が、打太刀・六段泊利治先生、仕太刀・五段笠井勝により行われ、その後、三十八名の参加選手を年代順に二分して、紅白戦を行なった。

試合結果は、紅組七勝（二〇本）白組五勝（八本）で紅組の勝利となった。

紅白戦が終了した後、徳島県高齢剣友会総会が開催され、平成二十一年度の事業報告及び会計収支決算報告並びに会計監査報告がなされ、続いて、平成二十二年事業計画案及び回予算案が審議された。

午後からは、全日本高齢剣友会（高崎慶男、小川末吉、橋本保治、小保明二、大屋正利、室屋正博、室屋悦子、坂田文子）の八名の先生方、土佐生涯剣友会（三谷義守、戸田七夫、岡本守雄、松岡弘城、栗尾博義、中野金夫、山本進、渡辺三則、大久保正生、小松武利）の十名の先生方、愛媛県高齢者同好会（三好耕二、藤田守也、杉本和巳、



第25回徳島県高齢者剣道交流大会 H22年 4月18日

渡辺道徳、川村博昭、向井健司、水野晴彦、戸梶巖、古谷龍夫、織田端、馬越博、後藤辰雄)の十二名の先生方、兵庫高齢剣友会(栗山博行、伊澤章、北二郎、谷川成輝、岡本浩、河原田良一、岡本洋子)の七名の先生方の参加を得て、親善交流試合を実施した。

試合結果

土佐生涯剣友会 対 兵庫高齢剣友会

六勝(八本) ○勝(二本)

兵庫高齢剣友会 対 愛媛高齢者同好会

一勝(二本) 四勝(五本)

全日本高齢剣友会 対 徳島県高齢剣友会A

○勝(一本) 六勝(十二本)

愛媛県高齢者同好会 対 徳島県高齢剣友会A

五勝(九本) 三勝(六本)

全日本高齢剣友会 対 土佐生涯剣友会

二勝(三本) 六勝(十二本)

親善試合後、全参加者による合同稽古を実施して、お互いに良い汗を流した。

本県会員による試合だけでなく、全日本、土佐生涯、愛媛県、兵庫県の各先生方との親善試合・合同稽古も行うことが出来、大

変売りの多い一日となった。

午後六時からの第二道場は、ホテルグラインドパレス徳島において懇親会が開催され、全日本、土佐生涯、愛媛県、兵庫県、徳島県の高齢剣士五十一名が杯を片手にして剣道談議に花を咲かせた。

◎西部地区稽古会(吉野川市)

平成二十二年七月二十四日(土)午後二時から川島町体育館において、県剣道連盟麻植支部の先生方のお世話で、西部地区稽古会を実施した。

稽古会は、土用稽古を兼ねていたことから、高齢剣友会員及び、地元麻植支部会員の先生方並びに小・中学生合わせて五十四名が集い、体育館内を一杯に使って、酷暑の中、心地よい汗を流した。

稽古会の後、有志の先生方は、第二道場である美郷ふれあいセンター温泉において、剣道談議に花を咲かせた。

なお、七月二十五日(日)午前九時から美郷体育館において、有志による土用稽古を納めた。



第16回徳島県健康福祉祭剣道交流大会（2010とくしまねりんピック） H22年9月12日

◎第十六回徳島県健康福祉祭剣道交流大会
（二〇一〇とくしまねりんピック）

平成二十二年九月十二日（日）午前九時
から松茂町第二体育館において実施した。

開会式の後、日本剣道形が、打太刀・錬
上七段平間幸信先生、仕太刀・錬士七段原
田進先生により行われた。

準備運動の後、会員選手三十五名による
交流試合が、団体戦・個人戦の順に展開さ
れた。

団体戦は、十チームによりトーナメント
戦が行われた。

・優勝：徳島C（東徳美、忠津和憲、沢井

勝之）

・二位：麻 植（日野利之、出葉成一、三

木毅）

・三位：板野東（平間幸信、原田進、川田

武志、西堀和文）

・三位：徳島B（別宮憲治、中村稔裕、東

内勉）

個人戦は、三十五名の選手が年齢別の四
グループに別れてトーナメント戦を行った。

〔特組〕優勝（遠藤一美）、二位（川井豊



南部地区稽古会（阿南市） H22年12月11日

吉)、三位(中山啓男、糸谷文雄)

(A組) 優勝(川田武志)、二位(有賀秀

敏)、三位(東内勉、張西政晴)

(B組) 優勝(中村稔裕)、二位(沢井勝

之)、三位(久次米繁興、泊利治)

(C組) 優勝(出葉成一)、二位(佐野博

志)、三位(谷博、忠津和憲)

◎南部地区稽古会(阿南市)

平成二十二年十二月十一日(土)午後二

時から阿南市武道館において、県剣道連盟

阿南支部の先生方のお世話で、南部地区稽

古会を実施した。

参加者は、高齢剣友会会員及び、阿南支部

会員並びに少年・少女剣士合わせて四十九

名が参加し、熱気溢れる稽古会となった。

なお、午後六時からの第二道場は、ホテ

ル志な川において、有志参加の懇親会が行

われ、年間の反省、更には次年に向けての

希望など、剣道談議に花が咲いた。

◎定例の稽古会

定例の稽古会は、毎月第二、第四土曜日

の午後二時から、松茂町第二体育館におい

て実施しており、毎回十数名からに十数名

の会員が参集し、熱心に心技体の向上を目
指して稽古が行われた。



高知、愛媛剣道交流会に参加して

徳島高齢者剣友会

兵頭 新平



高知生涯剣友交流
会

平成二十二年五

月二十日(土)、

高知県立武道館に

て開催され、私も今回初めて参加させてい
ただきました。徳島高齢剣から九名。愛媛
剣友会から十三名、そして地元高知の三県
の高齢剣士が集まり、各自準備運動後、ま
ず三県對抗交流試合(徳島―高知、徳島―
愛媛)を行いました。交流試合終了後、道
場いっぱいになり、合同稽古、私は新人
(一番若い)という事もありまして、高知、
愛媛の先生方に積極的に稽古をお願いし、
一生懸命稽古をさせていただきました。
(稽古不足もあり、正直疲れまして……)
その後、シャワーを浴びて、懇親会会場
へ。会場のテーブルの上には、大皿に盛ら

れたカツオのタタキ、ボリュームたつ
ぶりの皿鉢料理、その他、いろいろ
あり……。 (その美味しそうな料理
を目前にして、私は、乾杯の音頭が
待ち遠しかった。)そして、懇親会
も大変盛り上がり、テーブルのあち
こちで三県の先生方が入り混じり、
剣道談議、世間話、またアルコール
も三酒(ビール、日本酒、焼酎)の
混合で稽古の疲れも、時間がたつ
も忘れて大いに盛り上がり楽しい懇
親会でありました。

高知生涯剣友会の先生方、大変お
世話になり有難うございました。ま
た、来年も参加できればと、楽しみ
にしております。

翌日、私たちは、朝食を済ませて、日曜
市に出かけ、ゆっくりとした時間を過ごし、
各自徳島に帰ってきました。

愛媛県剣道交流稽古会

平成二十二年九月二十五日(土)、西条
市小松武道館にて開催されました。
今年はじめて愛媛県の高齢剣友会から徳



大山祇神社の御神木として境内中央に聳える
国指定天然記念物の大楠の前にて

島高齢剣友会に稽古会の案内がありました、
徳島高齢剣友会から十一名が参加しました。
中型バス一台に乗り込み、徳島を出発、小
松武道館に午後一時過ぎに到着。準備運動
終了後、まず、愛媛、徳島の「ねんりんピッ
ク石川大会」出場者による交流試合を行
いました。(愛媛県では、今年のねんりんピッ
ク石川大会で全国優勝をめざして、早々と

出場選手を決定し強化練習を行って頑張っている。

交流試合終了後、徳島高齢剣が元立ちとなり、合同稽古を約一時間行いました。愛媛の先生方には、いい稽古をさせて頂き有難うございました。その後、東予温泉にて入浴し、宿泊先のホテルへ移動。それからホテル近くの居酒屋「明月庵」にて懇親会、店内貸切で、地元料理で酒を酌み交わし、大いに盛り上がりました。「交剣交酒」今後も、愛媛の先生方からのご指導よろしくお願いいたします。最後になりましたが、今回の稽古会に案内していただいた森正典先生、また会場等でお世話していただいた東予地区の近藤克美先生、大久保博光先生方にお礼申し上げます。

翌日、私たちは、朝食後、大三島一大山祇神社」等をゆっくり観光して帰県いたしました。出発から帰県までバスを安全運転してくださった松村和宏先生、大変お疲れだったと思います、有難うございました。



土佐生涯剣友交流大会 平成22年 5月 8日

第三十二回

全日本高齢者武道大会

徳島県高齢剣友会

東 徳 美

平成二十二年六月七日(日)、日本武道館において、剣道、銃剣道、なぎなたの三武大会が盛大に開催されました。

午前九時より 開会式

午前九時三十分より 演武

一、日本剣道形

二、居合

三、銃剣道(木銃対刀の形)

四、なぎなた合同演武

午前十時 試合開始

選手総数五百九十二名が日本武道館一杯十二会場に各部、各組に分かれて熱戦が繰り広げられ、剣道では、十二会場の内十会場で、団体戦と個人戦が一斉に始まりました。

団体戦は、全国から十五チームが参加、徳島県チームは一回戦、茨城県チームと対

戦して、試合結果は三対〇で敗れました。

団 体 戦

	大将	副将	中堅	次鋒	先鋒	取得本数	勝者数
茨城県	渡辺 〇〇	増尾	平根	宮田 ②③	真谷 ①②	6	3
徳島県	欠場 遠藤	有賀	川田	高島	東	0	0

私は、先鋒で出場して一分たらずで二本負けしてしまい、チームに貢献できず大変迷惑をかけました。試合の行方を一生懸命応援していたけど、他の先生方が勝ったのか負けたのか引き分けたのかぜんぜん覚えておらず自分の不甲斐なさに呆然と反省ばかりしていました。昼食時にもう一度プログラムを見た時、茨城県チームの先鋒、真谷さんは前年度剣道C組の優勝者でした。しかしこの悔しさを、個人戦で挽回しようと引き締め、個人戦に挑みました。

個人戦は、四名一組のリーグ戦で二試合

行い成績の良い選手が決勝トーナメントに進出し、決勝を争うという方式である。

剣道A組(七十歳から七十四歳まで)全国から八十七名が出場。徳島県からは、有賀秀敏先生と川田武志先生の二名が出場。

剣道B組(六十五歳から六十九歳まで)

全国から百五十五名が出場。徳島県からは、高島稔之先生と三木毅先生と笠井勝先生と泊利治先生の四名が出場。

剣道C組(五十五歳から六十四歳まで)

全国から九十九名が出場。徳島県からは、日野利之先生と三木弘子先生と東徳美の二名が出場。そして予選リーグを突破して、決勝トーナメントに進出した選手の結果は、川田武志先生は惜しくも二回戦敗退。

笠井勝先生も惜しくも二回戦敗退。

三木弘子先生は残念ながら一回戦敗退。

東徳美は六勝一敗で決勝戦まで勝ち進み惜しくも準優勝でした。団体戦の悔しさが、良い結果につながったのだと思います。六十歳になって、徳島県高齢剣友会に入会させて頂き、四月には徳島高齢者剣道交流大会、五月にも十佐生涯剣友会交流大会、そ

して六月の全日本高齢者武道大会と三ヶ月連続して試合に出場したことは、今日まで私の剣道人生になかった事で良い剣道修業をする事が出来ました。特に剣道修業する者にとって日本武道館で試合をする事は、夢の舞台に立てるだけで、最高の幸せです。これも、徳島県高齢剣友会の一員に加えて頂き、諸先生、先輩各位から御指導を賜り深く感謝しております。ほんとうにありがとうございました。



追伸

私も生涯剣道を求め「継続は力なり」をモットーに頑張ります。後輩の皆さまも積極的に徳島高齢剣友会に入会して、一緒に剣道人生を楽しみませんか、宜しくお願ひします。



第二十三回全国健康福祉祭

剣道交流石川大会に参加して

中村 稔 裕



標記大会が平成二十二年十月九日から同十二日まで「光る汗！輝くいしかわ 笑顔の輪」

のスローガンのもと、石川県内十七会場において二十四種目に熱戦が繰り広げられた。初日の総合開会式は、金沢市の石川県西部緑地公園陸上競技場に、全国から選手や役員約八千名を集め盛大に開催された。当日はあいにくの雨、雨合羽を着ての式典となったが、地元小学生の声を限りの歓迎応援や、地元消防隊員による加賀式の演技等、数々のアトラクションも降りしきる雨でずぶぬれになりながらの演技に感謝の気持ち一杯の拍手をおくった。

開会式終了後選手団は各競技場へ移動した。剣道競技は金沢市から北へ車で一時間の

羽咋市武道館において行われた。試合場四コートが余裕をもってとれ、更に広いスタンドのついた立派な武道館にまず目をみはった。

試合は都道府県代表四十七チーム、政令指定都市代表十チームの計六十七チームによって予選リーグ戦から行われた。試合は四コート同時進行となり、徳島県チームは大阪市、鳥取県、石川県Bの四チームでリーグ戦を行った。第一試合は大阪市チーム。実力のある相手だけに我々も先鋒から全力でぶつかったが惜しくも〇対一で敗れた。第二試合は地元石川県Bチーム、地元とあって強化が充分に出来ており、各選手に勢いがあり、更にスタンドの声援もすごく、〇対五と完敗しました。選手一同予選突破を目標に練習を重ねてきましたが今一步力およばず予選敗退となりました。

少し余談になりますが、今回我々の宿舎は羽咋市から車で約四十分の和倉温泉でした。日本一の観光ホテル「加賀屋」を中心に高層ホテルが林立する中で、特に目を引く大正四年建築の数寄屋造りの木造二階建



ての「渡月庵」という旅館でした。初代当主が財産をつぎ込んだといわれるだけあり、各部屋の欄間は屋久杉、ケヤキの彫刻がふんだんに使われ大正ロマンを十分に味わう事の出来る建築物でした。又、二階中央廊下に乃木希典大将の写真(約一米の高さ)と共に同大将の辞世の句である

「うつし世を 神さりましし大君の

御あと慕ひて 我はゆくなり」

が掲示してあり、一瞬その場に立ちすくみました。近代的な温泉街にもこの様な古風な一面もあつたかと心の安らぎをおぼえた旅でもありました。

徳島県選手

- 先鋒 兵頭新平 七段(六十一歳)
- 次鋒 笠井 勝 六段(六十七歳)
- 中堅 中村稔裕 七段(六十八歳)
- 副将 泊 利治 六段(六十九歳)
- 大将 有賀秀敏 六段(七十五歳)



随想

剣道とは

大澤 孝 彰

東京の剣道仲間との交際（稽古）を通じて知り合った埼玉県の剣士に師とされて、数年間にわたって関東で東京で徳島の私宅で寝食を共にして切磋琢磨しました。剣士の氏名は伏して居きますが、大学剣道部で活躍しました。実業家になり、剣道は若干疎遠となりましたが、少しずつは続けていたそうです。大変な勉強家であらゆる事に通じ、私等足もとにも及ば無い幅広い人間性を持たれた剣士です。数年間の手紙のやりとりの中で俳句・川柳・短歌等々百二十首余を書いて参りました。その中の約五十作品を紹介させて頂きます。年代は順不同です。

。面奥に師の汗光る土用蟬
。師と踊るやがて剣理の阿波の盆

。師の形の気合いに動く紅葉かな
。重ねきし事理は入神古稀を越えいよいよ華やぐ剣の道かな

。師の気合虫の音止まる秋の風
。大和屋に師の顔輝く大向

。師の極意先に乗りたる真すくな面と教わり胴を打つ君
。古枯も師と暖くどじょう鍋

。教わりし審判で面一本深き縁の薫る風かな
。な

。幡隨の殺陣見る師の眼に射抜かれて太刀筋冴える吉衛門
。リクエスト師の思い出のツゴイネル・桜

。盛りによみがえる青春
。倒れてなお手を取りて剣理説く死して後止む熱き師の恩

。山を越え生命ふたたび病床に師の顔輝く
。梅雨のこもれ陽

。かにかくに飲む酒美味し師の笑顔十五夜更ける鉄舟の宿
。掛け声は気力の元と師の教えのど荒れ癒す甘き伊予柑

。遠き道歩みの遅き我が手をば誰が引く見

れば師の笑顔
。死して後止む道の意命かけ背中で示す師のありがたさ

。病癒え仏がごとき師が竹刀をとるや鬼人の絶妙剣

。審査落ち試合も負けて我疲れ師の立合いで闘志再び
。お迎えの間魔様への出ばな小手驚き逃げる師の気合

。ええ面や立ち合い終えて袴折りたたむ耳元師のお声
。病超え発する気攻め面奥に命みなぎる師の眼

。流れでる汗に濡れにし面とれば残心薫るくちなしの花
。打つべきにあらずを打たぬ師の教え忘れて急ぎ枯葉散る

。師の便り受けて稽古に熱が入り汗拭く顔に春一番
。命かけ弟子に伝える師の気合電光影裏春風を斬る

。無心での後ろ姿の師が動く三度の打ちにどよめく観客

。大江戸の花火輝く師の笑顔

。大輪の花火輝き師の声は病吹きとび早
三年

。師が作る朝餉の音に目が覚める阿波の稽
古にただ感謝

。初稽古終えて繰り出す阿波の宵類には清
し新春の風

。流れ落つ汗がしたたる面の中気合溜に
ひぐらしの声

。柄頭ニミリ短かく名人の工夫を聞き
我が剣を恥ず

。袴折る手によみがえる阿波の盆みちの
く稽古外はこがらし

。熱気満つ武道館での審査会剣士の顔に人
生模様

。六十路過ぎ審査会にて見わたせば剣友の
笑顔に薄き白髪

。鬼籍より出でし我が師の裂帛の気合で逃
げる閻魔大王

。縁ありて生受け剣を志し面一本に燃える
魂

。演武会終えて見わたす東山むせぶ瀬音
に緑色濃し

。使わない左足しびれて車止め開ける窓辺
に舞う落葉かな

。落ちて舞い黄に燃え上がり我が足をなだ
めるようにいちよう貼り付く

。朝の気の冷たさ感じた足に触れ怪我あと
さする我が手のしわ見る

。刃引き持ち一人打つ形剣先に現われきた
る師の顔姿

。遠く聞く太鼓のひびき盆踊阿波の稽古に
うづく足腰

。傷癒えてふつうの稽古できる身のありが
たさ知る初春の梅

。これらの歌にある剣道への情熱に答える
べく私も必死になってお交際し、教えたつ

もりです。しかし、剣士は必死の余り足を
悪くしてしまいました。そして、私もまた

大病を患い、稽古が出来なくなりました。
私の亡父（善二郎）が「剣道は『心と身体』

を健康にする為にやる」のだと言う教えを
逸脱したようです。



この道

影山 美雄



「人間一つのこ
とすらなかなかで
きないものです。
だから、わたしは、
一つのことを一生

懸命やっているのです。」
「ずいぶん昔、上
産に買った菓子折のなかにあつた製菓会社
の社長さんの言葉です。

わたしにとって剣道は一つのこと、「こ
の道」となっています。才能型では決して
なく、努力型の自分ゆえ、一つ事、一本道
をひたすら努力してこの道をたどってきま
した。

例えば第二次世界大戦が終わり、剣道が
解禁された頃私の地域でも剣道が復活し、
私も友達と白転車をこぎながら稽古に通い
ました。小学校三年生、この道の始まりで
した。先生にかかっていたっては打たれ打た
れ、くやしくてよく面の中で涙を流してい

たことをなつかしく思い出します。

教職に就き、剣道部の監督になってから
この道の第二章が始まりました。子どもた
ちといっしょになり剣道に熱中しました。

試合が頻繁にあり、出場する以上は勝ちた
かったのですが、剣士としても指導者とし
ても未熟な自分であったため、チームはな
かなか優勝までいりませんでした。人並
みでは勝てない、人の倍で人並み。人の三
倍でやっと勝負できると考えました。稽古
は一年間ほとんど休み無しで努力しました。
「人並みでは人並み」「継続は力なり」をモツ
トに稽古に励みました。

最も華々しい戦績が、木頭中学校のとき
にありました。県下でも激戦地であった那
賀郡の県総体予選において団体、個人戦
(全学年)優勝。県総体でも団体、個人戦
(全学年)ともに優勝することができまし
た。大輪の花が咲いたときでした。ちなみ
に、一年生優勝は吉田博文君・現県警。二
年生優勝は佐々木和人君・現阿南工高教員、
三年生は松葉秀俊君でした。あのころは調
子が良くて県と郡の優勝旗全部を学校の玄

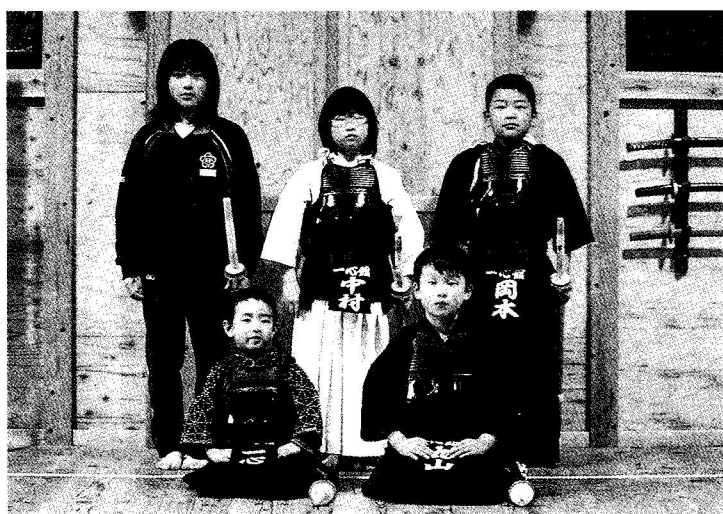
関に飾ったことがありました。長い監督稼
業においては負けたこともたくさんありま
した。そして、勝ったことからよりも負け
たことの方から多くを学びました。監督を
して一が一番つらかったことは、レギュラー
選手と同じように稽古し、あるいはそれ以
上に努力しているのを痛いほど知ってい
ても、レギュラーに入れることができない部
員がいたことです。そういう部員をたくさ
ん見てきました。人生、いいことからより
も、負けたり失敗した事からの方が多く学
ぶと思います。

それぞれの学校に赴任し、剣道部の子ど
もたちと強くかかわっていると、子どもた
ちとは勿論ですが、保護者や地域の人たち
との親交がたくさんありました。今でも強
い絆となっています。この道を歩んでいる
といろんな人と、そして、多くの人との出
会いがあります。厳しい道ではありますが、
ぬくもりのある道でもあります。

ありがたいことに、いっしか今まで私が
関わってきたそれぞれの学校の剣道部の部
員たちが一つにまとまり、「闘魂会」を立

ち上げています。何かあるとみんなに呼びかけ稽古会、親睦会を催しています。教師冥利に尽きる次第であります。この道を歩んできて本当によかったと思います。人生何かに夢中になって打ち込むことの大切さをしみじみ実感しています。

退職後、念願であった剣道場「一心館」を自宅内に建てました。開館六年目になる



うとしています。かつての教え子たちが時々来館してくれます。教え子との稽古は何ともうれしい時間になります。竹刀を交えて会話をします。まさに「交剣知愛」を実感します。大石正志先生が高校の剣道部を引率しての来館もあります。一心館道場には一角に「いろり」を構えています。大変有効なものでたびたび酒宴が催されています。中には防具を持たずに布団と酒だけ持参してくる強者もいます。ときには家族のだらんの場になったり、地域の人たちの会合の場になったりし、一心館は、「多目的コミュニティ道場」となっています。とにかく人が集まってくれるのが嬉しいかぎりです。

開館以来一般の人が数名稽古に通ってき
てくれています。そのうちの一人、近藤浩
文氏が昨年の暮れに六段に合格しました。
一心館道場から六段が誕生したわけで道場
としてこの上ない慶びであります。何か、
プロボクシングの感覚からすれば、一心館
ジムから世界チャンピオンが誕生したよう
な心境であります。彼は中学時代の教え子



であり、一心館道場が開館してから欠かさ
ず稽古に通っています。「努力は人をうら
ぎらない」という言葉がありますが、まさ
にそのとおりであります。彼は非常な努力
家で今回の結果となりました。

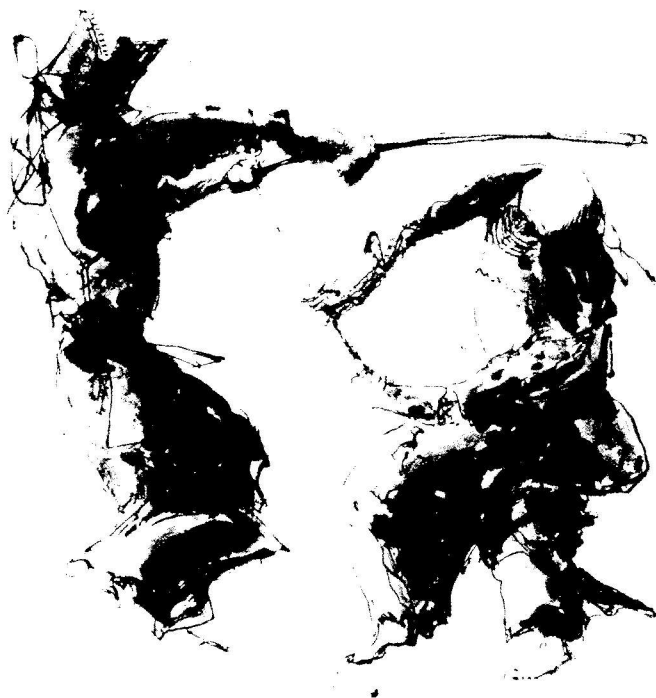
つい最近、一心館道場待望の小学生が入
門してきました。私の地域も少子化が著し

く進み、我が道場は一般の人だけだったのですが、小学生四名の入門があり、やっと少年剣道教室が始まりました。四名の上にもう一人私の息子が加わり総勢五名になりました。昨年の夏に初めて二年生の男子が一名入門してきたときに、息子もいっしょに剣道をしたいと言ったので四歳ではあり少々早かったのですが、この機会にと思い、「この道」を歩ませることにしました。息子の名前は一心といまして、息子が生まれた翌年に開館し、道場名を子どもの名前から「一心館」としました。また一つ大きな目標が生まれました。わたしの「この道」の第三章の始まりです。

第四十八回団体の前年にねんりんピックが徳島県であり、みごとに本県が優勝しました。そのときに来県していたそれぞれの選手の方に「あなたは、いつの頃が一番強かったですか？」と訊ねました。すると、どの人もためらわず、「今です。」という言葉がかえってきました。

剣道。この道は終わりのない道であります。完成のない道であります。そして、極

めきれないままに修行を終える道であります。生涯剣道、一つ事、一本道を精進し、「この道」を少しでも前に進みたいものです。



遍路人

別宮 憲 治



昨年の秋、十月十日午前六時四十分、私は土佐くろしお鉄道御免駅で下りの電車を待つ

ていた。二年ほど前から歩き遍路を始めていて、この日は、前回七月十九日の続きで二十七番神峯寺下の唐浜から二十九番国分寺までの四十キロ余りを歩く予定でいた。

私にとって「お四国」の巡拝は二巡目である。三十年ほど前に家族で車で廻ったことがある。退職して時間にゆとりができれば、今度は歩いて廻ってみよう。高野山奥の院の参拝を済ませたときから、密かに温めていた計画を実行に移す時が来て、今回二巡目になった。

解説書によると、「お四国の道程は、約一四〇〇キロ、歩いて四十日から六十日ほどの日数がかかる」と説明されている。

四十日も家を空けられるのか、そんな環境を待っていたら体力の方がもたなくなっているかも知れない。日帰りでは、本当の歩き遍路とは言えないだろうが、車で巡るのは違った何かが見えるかも知れない。そんな、こんなで数年をかけての「つなぎ遍路」で大窪寺を目指すことにしたのである。

一昨年の五月に霊山寺で菅笠、金剛杖、輪袈裟、頭陀袋といった一応の巡礼装束を整え、この日は九日目の「歩き」であった。

駅の時刻表で確認すると先の電車は十五分ほど前に出た後で、次の電車まで三十分余りあった。

待合室のベンチで休んでいると遍路姿の同年輩の男性が上がってきた。朝の挨拶をすると隣に腰を下ろし、やおら話しかけてきた。

愛知県からやって来たこと。定年後も再雇用されて、かつての部下の下で働いているが、やる気が湧いてこないこと。一度自分を見

つめ直そうと思いい、会社には一週間の休暇を出して出かけて来たが、家族には心配をかけたくないので四国巡礼のことは言わずに家を出たこと、などを説明した。

愛知氏は同年輩である私の遍路姿に、同じ匂いを感じ取ったのだろうか。見ず知らずの私に、静かな口調で満たされない自分



四国第28番霊場 法界山 大日寺 山門

の心の内を淡々と語った。短い時間でもあり、具体的なことは話さなかったが、私は愛知氏の胸のつかえがよく分かった。

愛知氏は、話し終えると、ほどなく高知行きホームに向かった。

近年、季節を問わず歩き遍路をよく見かけるようになった。年間一万人の人が歩いて四国を巡っているともいう。人はそれぞれの事情を背負って生きているものであり、遍路の動機や目的も様々なのだろう。

歩いている途中や休憩所などで話しをする機会はあるけれども、私はその人が遍路に出た動機などは問わないことにしている。隣の人に、あなたはなぜ生きているのですかと聞くのと同じで、とても失礼なことのように思われるからだ。

愛知氏も、私が行きずりの遍路人だからこそ、だれにも言わなかった胸の内を明かしたのだろうか、自分のことは話しても、私になぜ遍路姿でここに居るのかについては一言も触れなかった。

この日、万歩計はこれまでで最高の七二、二九二歩を記録していた。



剣道に出会って

海部支部 丸 岡 偉 人

私が剣道に出会ったのは十八歳、大学入学の時でした。今では小学生、中学生と剣道をやってきた子供達が、高校生になって止めてしまう場面がよく見受けられますが、当時でも大学生の初心者は少なかったと思います。

入学後は、何か武道がやってみたくて、合気道や空手部の見学に行き、どちらにしようかと迷っていたところ、結局、隣で練習していた剣道部に高校の一つ先輩がいて、誘われて剣道部に入部してしまいました。この出会いが今の私の人生に大きく影響することになりました。入部した剣道部は同級生がたった五人と少なく、すぐに仲良くなり初心者の方は素振りばかり、後はかかり稽古しか憶えていないほど苦しい練習でしたが、何とか四年間が過ぎ、剣道三段の免状が残りしました。

せっかく始めた剣道ですが、卒業後は機

会がなく（いや、機会をつくらなかったのでしょうか）仕事などに追われて十年余りが過ぎました。この間、結婚して帰省、郷里の南海町で特別養護老人ホームに勤める機会に恵まれました。

その頃当地では、公民館単位でバレーボールやソフトボールが盛んに行われていて、私も毎日のように夜になるとバレーやソフトに熱中していました。そんな時、長男が一年生になり、何かスポーツをさせたいと思っていたところ、たまたま剣道をする少年を見かけました。当時、西山勝喜先生が始められていた海部川剣道教室です。見ているうちに十数年前、素振りに明け暮れた剣道を懐かしく思い出し、迷わず長男を入会させていました。

送迎し見学しているうちに、自分もまたできそうな気持ちになり、西山先生に頼んで練習生にさせてもらいました。私の剣道具はとっくに行方不明となってしまうので、当時、家にあった父親の剣道具一式を持ち体育館へ行ったものの、十三年ぶりの、しかもたった四年の経験です。面々

オルの付け方も忘れていて面ヒモを結んでもらったみじめな思いがあります。再開してみると昔と違って稽古は楽しく、すぐに夢中になり、週二回の稽古日が待ち遠しくらいでした。

西山先生が自身で西山錬心館を開設されてからは、海部川剣道教室を山崎直光氏と佐藤和久氏の三人で続けてきて現在に至っています。この間、西山勝喜先生と一緒に汗を流し、ご指導頂いた森本好美先生が相次いで他界され、つらい思いもしました。『子々に教え、我も学びて五十年、教学一如の剣を楽しむ』と酒を飲むとよく教えていただいた平岡竹雄先生、剣道と剣道をする子供達が好きでたまらなかった西山勝喜先生ら大先輩が築いてこられた海部郡の剣道、その中で海部川剣道教室を守り、育て、後に続く若い人に引き継いでいくのが私の役目だと思っています。

三年前から県の高齢県友会に入会してまた新たな出会いがあり、円熟し卓越した剣道に感嘆しています。大人になってから始めた剣道ですので、試合経験は殆どなく負

けてばかり、相手を喜ばせています。昇段も五十歳から挑戦している七段は今年でもう十二年目になり、不合格を継続中ですが、子供達に教えているうちは自分も向上心を持ちたいと、今後も竹刀を振れる限り挑戦したいと思っています。剣道を再開するきっかけを作ってくれた長男、嫌とも言わず剣道をしてくれた次男や三男、剣道に行くと言うといつも気持ちよく送りだしてくれる妻にも感謝しながら、これからも下手な剣道が続けていく覚悟です。この紙面をお借りして海部支部の剣友の皆様、県下の剣道家の皆様、今後ともよろしくご指導くださいますようお願いして、私の拙文を閉じたいと思います。

剣道と絆

麻植支部 藤川 和 秋



平成二十二年の春、警察生活四十年にピリオドを打って退職し、新たな職場に移りはや一

年が過ぎた。私の場合、他の警察官と違ったのは、職場の中で剣道に正面から取り組ませてもらったことだ。警察学校の初任科卒業後は剣道特練員として十三年間剣道に打ち込み、その後の各警察署の赴任先では幹部のご理解もあり、各支部の先生方に稽古をお願いし互いに技を磨きあうことができた。また少年剣道にも関わり、子供達、指導者、保護者のみんなと意気投合し、楽しく指導させてもらい、当時の皆さんとの絆は今でも切れることなく続いている。

今年も正月に三好市のある少年剣道教室の保護者の方から年賀状をいただいた。この方とは忘れられない思い出がある。平成

十二年、私が三好警察署に赴任し、管内の少年剣道教室の指導にたずさわっていた時のことである。自宅のブロック塀を当て逃げされた被害者の方が駐在所に届出をしたことから駐在所員が現場に向った。夜間のため十分な現場検証ができなかったため、駐在所員は「明日の朝また見に来ます。」と言って一旦帰所することにした。翌朝、被害者の方は仕事にも行かず駐在所員が来るのを待っていたが、昼頃になってもう一向に来る気配がないことから駐在所に連絡を入れた。しかし、駐在所が不在だったため本署に連絡が入り、署員が駐在所員の所在を確認すると、現場に行くことも忘れて私用で管轄外に出ていることが判明した。これを知った被害者の方は、さすがに怒りが爆発し、本署に怒鳴り込んできた。この被害者の方が毎年年賀状をいただいている少年剣道教室の保護者の方である。

当時、私はパトカーや駐在所の警察官を指導監督する立場にあったことから、被害者の方に謝罪をすべく歩み寄ったところ、私の顔を見るなり「先生、剣道で子供がい

つもお世話になっていきます。」と急に頭を下げ態度が軟化した。被害者であるこの少剣の保護者の方から駐在所員についていろいろ聞いてみると他にも問題が発覚し、さらに困ったことにこの事案をきっかけに駐在所員に対する不満が一気に沸き上がり、駐在所員のボイコットまでに発展してしまっ

た。
このため署長からの指示を受け、副署長と私が地元の会合に出席し、謝罪するとともに、本署の今後の対応について誠意を持って説明したところ、やっと地元の方のご理解をいただき、ボイコット事業は沈静化した。もちろん水面下では、この少剣保護者の方の多大なご尽力があってこそその結果であった。

この少剣保護者の方は、地元では別名「マツタケ名人」と呼ばれている。この事案が一応解決し、私はマツタケ名人の自宅にお礼に伺ったところ、待ってましたばかりにマツタケ料理を心行くまでご馳走になり、官舎まで送り返された次第である。

私はこの時ほど心から剣道が続けてい

良かったと思ったことはない。竹刀を通じ、心と心との触れあいができるのが剣道と昔からよく言われるが、広い意味で剣道により周りの人達との絆が生まれ、それが力となつてさらに前に向かって進んでいくことができるものと思う。
私は今後も剣道で得た絆を大切に、さらに剣道に精進していきたいと思っている。



剣の道

新野中学校教頭

村井正志



「剣道は剣の理法の修練による人間形成の道である」
これは剣道の目指すところの「剣道

の理念」である。剣道を始めた動機は人それぞれ違うと思うが、剣道修練の課程で、これからの人生をどう歩んでいくかということが大切になってくる。

ところで、最近のマスコミでかなり日本中の話題を集めている野球選手がいる。その選手は野球のセンス、実力とも誰もが認める抜群の選手である。しかし、その選手はそんな姿を微塵も見せず常に謙虚で誠実な心の持主である。しかも仲間を自分の宝としている素晴らしい選手である。私たち剣道人でなくても日本中の人々がお手本とするような素晴らしい人物である。勿論剣

道界にもマスコミに取り上げられていないだけでこのような剣道家は多く存在している。

私も縁あって現在剣道を始めて四十年近くになる。いろいろな経験を経て今の自分がある。若いときは選手として勝てば当然嬉しいし、負ければくやしい。勝てばやる気も出るが負けるとやる気も失せる。これは人間として誰もが持っている当然の感情である。また監督としても勝利主義に走っていた若い頃があった。過程をおろそかにしていたわけではないが、当時随分と勝負にこだわっていたように思う。一人ひとりの選手の個性や将来性などを考慮した指導ができていただろうか、今考えてみると、それは一監督の自己満足に過ぎなかったのではないかと自省する。

監督としてここ数年離れて思うことがある。それは優秀な結果を得るということではなく非常に素晴らしい名誉なことではあるが、指導方法によっては失うものも多くなるということである。一歩間違えれば将来のこどもたちに対して取り返しのない事態

を引き起こすことにもなりかねない。その点をどれだけしっかりと考えたかや信念で指導できるかが、本物の指導者であり本物の剣道家ではないかと考える。剣道を学んでいるこどもたちの未来はその指導に携わっている監督や大人たちにかかっている。

私は剣道を通して現在まで多くの生徒たちに支えられ生きてきた。教師として監督として、年数が経つにつれ生徒たちを支えているつもりが、実は支えられていることに気づいた。家族やまわりのいろいろな人にも支えられてきた。人はなにかによって生かされ幸せに生きている。そして人はひとを幸せにすることにより自分も幸せになれるのである。今話題になっている素晴らしい野球選手のように、人としてどう生きていくかを指導者や大人たちは、今のこどもたちに範を示していかなければならないのではないかと考える。武道は「人生に応用が効く」「規範意識を涵養する」といわれ、その期待は大きいものがある。まさに『日本人の心』そのものだと考える。

平成十八年十二月に公布・施行された改

正教育基本法、平成二十年一月に示された
中教審答申、これらの動きを受け、中学校
においても平成二十四年度から武道が必修
化される。人々の価値観も多様化し、より
複雑化していくこれからの時代は、今まで
以上に混迷の度を増してくると考える。

この厳しい時代を生きぬいていくために、
今こそ剣道を通じて学んだことを後世にしっ
かりと伝えていかなければならない。日本
人の心をしっかりと伝え、剣道人としての
道子どもや剣道仲間たちと共に歩んでい
かなければならない。私も現在まだまだ修
行の身である。今後も多くの方の教えを頂
き、しっかりとした道を歩んでいかなけれ
ばと考えている。



こころ

警察支部 吉田昌彦



私が剣道を始め
て早四十五年の歳
月が過ぎました。
私の父が警察官
であったことから

小学生の時に脇町に転校になり、地元の中
学校で剣道を始め高校・大学、更に徳島県
警察機動隊で剣道特錬生として十年間稽古
をしました。

現役を引退した後は、城東中学校の武道
場（黎明館）を使用させていただき滑東少
年剣道教室・滑東剣友会・月曜会と剣道の
稽古に励んでおります。

長い年月の間には、何回か大きい怪我を
経験しました。

最初は、三十年前に荘厳にして由緒ある
皇宮警察（済寧館）での練習試合中にアキ
レス腱を断裂しました。「バシッ」と何か
がはじけたような鋭い音、左足に感じる違

和感、審判員から負傷による負けを宣告さ
れて「勝負あり」……。剣道着のまま病院
に直行となりました。

再度昨年の第三十九回徳島県社会人剣道
大会左アキレス腱を断裂するというアクシ
デントに見舞われました。

剣道は、一日休むと元に戻るのに三日か
かると言われており、半年間も休んでいる
と、筋肉が落ちてくるため元の体に戻るま
で大変な努力が伴うものであります。

しかし、「怪我の功名」と言いますか、
怪我をしたことにより私の剣道も変化した
ように思います。それまでは、がむしゃら
に「打って勝つ」剣道でしたが、それ以降、
気攻めによる「勝って打つ」剣道を心掛け
るようになりました。

私の目指す打突とは単に打った打たれた
だけでなく「心に響く打突」です。従って、
その「打ち」は、まさに対峙した相手の心
の中を完全に読み、心に響くものでなくて
はなりません。今後そのような打突を心
掛けて行きたいと思っています。

剣道は、「書道」と同様に大切なのは

「心」だと言われております。

「書」は、人それぞれの日々の移ろいの
中でこの有様を写し出し表現するもの
であります。

「剣」も同じで、その日の体調や心の中
の潜在意識が大きく影響します。この二つ
の道は、読み方は違えど本質は似通ったも
のであると思っています。

私が剣道を始めた中学時代は、指導して
いただける先生がおらず、白いトレパンを
着用し茶色の竹胴をつけて仲間と自己流で
叩き合いの剣道を続けていました。

高校時代には、滝下勝先生の指導のもと、
基礎体力を作り、剣道の「いろは」と楽し
さを教わりました。

大学時代は、警視庁の河島巖先生等の指
導により、勝負の厳しさを教わり四年生の
時に団体戦で全国大会ベスト八まで駒を進
めることができました。

県警の特練時代は堀江先生を始め、諸先
生や先輩方との旧武道館での朝稽古や激し
い稽古・遠征や合宿により、生涯剣道とし
ての地力をつけたと思います。

なかでも私の剣道人生で特に印象に残る先生がいます。

その先生は、今までに何度か本県にも剣道の講習会で指導に来ていただいている、私の出身高校の大先輩にあたる岡山県の範士八段松井明先生であります。

松井先生は、高校を卒業後に岡山県警察に奉職し、岡山県警察の師範をされておりました。現在、岡山県剣道連盟理事長・全日本剣道連盟評議員をされております。

松井先生とは、毎年年末に脇町高校剣道部（芳越剣友会）の恒例行事である滝下勝先生、柴田稔夫先生らの面影を偲び、感謝の気持ちを込めて、先生ゆかりの出葉成一先生（現麻植支部長）ら卒業生によって募参りと稽古会が行われていますが、松井先生は毎年出席されており剣道を御指導していただいております。

厳しい稽古をされてきた松井先生の稽古は非常に品位というか風格があり、姿勢・態度・着装・構えの他、息の修め方、技の出し方、足運び、体さばき、間合い、左手の修め方、かけひき等、その一挙手一投足

は、まことに言葉に言い表せない美しさがあります。

剣道は一見、大胆な技やスピードで大雑把な武道のように見えますが、実は繊細で、「心技体」全て揃って完成する武道であります。特に「心」の占めるウエイトは大きなものがあると考えます。

「心正しければ剣もまた正しい。」という言葉に表現されるように、私も松井先生や出葉先生を目指すことが理想であります。

これまでに剣道を通して教えを受けた先生方や後輩・道場で指導した子供達や保護者の方々との様々な出会いがありました。このような出会いを通して人間は成長するものだと思います。

その意味で「剣の道」は、私にとってはなくてはならない、かけがえのないパートナーであり精神的な「心の支え」だと言う事をはじめと実感すると共に、各種大会・昇段審査や寒稽古・土用稽古等で春夏秋冬の季節を感じ、人との出会いの機微を感じ取れる年代になってきたことを嬉しく思い

ます。

これも剣道の修行を続けてきたおかげだと思っています。

宮本武蔵の「五輪書」には、剣の道は、行き着くところは「無心」であるとあります。「構え」は「心」であり、武蔵の剣は「構えの無い剣」すなわち「無心」と言えます。

私は現在、五十代後半。剣道によって喜怒哀楽をしみじみ感じ取れ出した年齢でしかございません。

数年後、警察官を退職した後は、この道を極めるべき精進を重ね、又、一方では「人を育てる剣道」を目指し後進の指導にもあたりたいと考えています。これが私の課題です。

そして、一人でも剣道愛好者が増える事を強く願って止みません。

私の剣道について、諸先生や先輩・同僚のあたたかい御指導により、ここまで剣道を続けていくことができたことに感謝いたします。

中高年から剣道

鳴門支部 武山 茂



青大の霹靂とは、

まさにこのことか！

原稿の依頼が届い

たとき「なぜ、私

に」と、戸惑うだ

けでした。編集部に問い合わせたところ題

目は何でも良いということなので、あれこ

れと考えた末、私のことについて書かせて

いただくことにしました。

私は中学・高校時代剣道部に所属し、六

年間稽古に励みました。練習を続けるうち

に試合では絶対に勝ちたいという一念で、

一生懸命稽古に励んだことを憶えています。

高校卒業後は、歌の文句ではありません

が、時の流れに身を任せ、剣道どころかス

ポーツ自体まったく無縁の生活を送り、三

十五年の歳月が経ちました。肥満体系とは

これか！というくらい完璧な肥満体となっ

ていました。そんなある日、高校剣道部の

同窓会で、「また、剣道を始めてみないか？」と友人に誘われました。その時私は「運動不足解消に楽しくできればいいか」というような軽い気持ちで承諾しました。

ところが、待っていたのは、松村和宏先生を筆頭に寒川博文先生、木原資裕先生の厳しい稽古で、私の楽しくできればという安易な考えでは稽古に付いていくことは難しいと感じました。ましてや五十歳を過ぎ

ての剣道は、非常に辛いものがありました。体力は無いし、息はすぐ切れていました。そこで、剣道をする目的を何にするかと考えました。まず、体力をつけ健康な身体を作ること。次に、やはり強くなることです。

強くなるためには、基本を守り正しい剣道を身に付けること、その為には稽古しかないという考えに到りました。その日以来、週五日を目標に稽古に励み、愛情溢れる？

先生方のご指導の下、あっという間に三年の月日が経ちました。その甲斐あって、現在体重も十八キロ減量し、健康診断でも全く問題無いと言われました。

今思えば、なぜここまで剣道を続けてい

るのか？剣道の魅力とは何なのか？自問自答した結果思うことは、一対一の真剣勝負の中で、相手に勝つのではなく、己に勝つ。すなわち自分を見つめ直し、弱い自分、弱い精神面を鍛え直すことであると考えます。今後、稽古の中で、何か新しい自分、新しい人生観が見つければ、素晴らしいことであると思っています。

また、剣道は生涯スポーツと言われていきます。昔剣道をしていただけ、今は無縁という方は、多数いらっしゃると思います。しかし、五十歳過ぎてからでも十分再開できるということを知っていただき、そのような方々をお誘いいただければ、中高年の剣道人口も増え、その結果、小学生・中学生の剣道人口も増えるのではないかと思います。

最後に、この紙面をお借りして、誘ってくれた友人、ご指導して下さっている先生方に深く感謝申し上げます。

称号・段位合格者

自分にはあまりに大きすぎる

目に見えない目標に向かって

徳島支部 寒川 博文



平成二十二年四月三十日、京都審査で剣道七段に合格することができました。六段に合格したときは、自分がどの様にして前後の方にお相手を願ったかしっかりと記憶していましたが、七段審査のときは、一人目の方とお願いしている途中から無心になり、自分がどの様な立合を審査でできたのかまったく覚えていません。

七段合格に至るまでの道を書かせていただきますと、入田中学一年生から松村和宏先生と一緒に始めました。この時、剣道の一から松村明文先生にご指導いただきました。

した。高校では高下先生に三年間ご指導いただき、三段までいただくことができましたが、卒業後は練習場所が今のようには無く、時間の余裕もありませんでした。十六年ほどの月日が過ぎ時間の余裕ができはじめた頃、三十四歳になっていましたが、松村和宏先生に電話し、再び剣道を始め一般の剣道を一から松村先生に習いました。

私は不器用なので努力は目いっぱいしました。松村先生は「お前がまた剣道始めてくれて嬉しいわ」と言ってくれ、旧知の友だからこそ言ってくれる温かい助言に随分助けられました。六段合格してまもなく松村先生も徳島錬心館に来られるようになり「お前七段に向かって今から練習せんか、まずは面打ちからぞ」と言われ、二人で面打ちの練習に取り組みました。二、三年が過ぎた頃、松村先生の面打ちに目が慣れ面を打つ時の動きが少し見えるようになったことで今まで指摘されていたことが理解できはじめ、それから面打ちの練習方法が少しずつ見えてきました。手首肘肩を意識した練習はしっかりと行っていましたが、こ

れだけでは駄目だと気づきました。そこで基本を応用に変えて攻め足を一寸の攻めからじりじりと入り、一足一刀の間合からまだ攻め足を中結が合うまで入り、その瞬間の左の腰に体重を乗せ一瞬の溜めとし、力足を踏ん張ると同時に肩を上げ手首で打つことの練習に徹しました。この練習の切っ掛けとなったのは神奈川県警の小林英雄範士八段先生が東山警察に来られ、ご指導されていた際に拝見したとてつもなく鋭い速い面に衝撃を受けたことです。その後、私も少しご指導いただき、さらに、井上晋一範士九段先生からあの面を習いたかったらこうしろとご指導いただきました。自分なりに少し変えて練習し、八年目に少し形が見えてきました。自分にはない松村和宏先生の手の内の冴え、剣先の走り、技の冴えをどうしたらいいか考えて練習し、七段合格へ向かって理に合った攻めなど色々勉強しました。攻めは私の場合、じりじり間合いを詰めながらも相手に「こいつ面が空いているな」と感じさせて面に乗れると思ってくれるようにしました。相手に対しての

自分の中心線は握り拳ひとつくらいにとり、相手の打ち気を誘うと下がって間を切られることが少ないように感じました。自分の機会は相手も機会とお教えをいただきましたが、この言葉「間」の「間」を打てれば「勝ち」とは深い言葉だと思いました。二度審査に不合格になった時、松村和宏先生に「こんな難しいことできるか、やめたやめた」と愚痴を言ったことを思い出します。

最後になりましたが、七段合格に至るまで徳島県剣道連盟の先生方、他府県の先生方、私の師大沢孝彰先生（範士八段）、多くの先生方に感謝致しますとともに厚く御礼申し上げます、今後ともご指導下さいます様お願い致します。

恵まれて剣道七段合格

板野東支部 原 田 進



今回で四回目の挑戦である。妻には受験は今回で終わりにするからと納得させての受験

であった。年齢も六十四才を過ぎ、仕事が忙しくても夜遅く稽古に行くので約一年前から体重が四キロ落ち、頬がやせ、厳しい顔つきになっているので、妻は私の身体のことを気遣い、常々から無理をしないようにと言っていたからである。

密かに心の中では五回は挑戦してみたいと思っていたが、妻の顔を見るといえなかった。しかし、おかげで、妻も同伴しての受験となる。

審査会場は京都である。三回とも名古屋で受験し、今回も名古屋で申し込んでいたが、仕事の都合で受験出来なくなり、事務局に取りやめの連絡に行くと、長谷川さん

から京都でもまだ変更できますよと勧められ、心の準備が十分できないままでの受験となった。

私が今回合格出来たのは、次の三つのことに恵まれていたからだと思う。

一、剣道を稽古する先生方に恵まれていたことである。板野東支部では伊賀支部長を始め川田先生、田村先生、平間先生、本村先生等立派な先生方が指導に当たっている。

私は基本稽古から始める。基本稽古の相手はいつも武田先生である。いやな顔を何一つせずお相手をしてくださった。ご苦労をおかけしましたと心から感謝している。

切返し、面打ち、相面打ち、小手面の二段打ち等、基本に忠実な技の取得と基礎体力づくりが目的である。

また、スピード感ある素早い動きの稽古には若手の岩本先生にお願いした。

当支部には約四十名の先生が在籍し、年齢も二十代から七十代と実に幅広く、さまざまな技をもっている先生方が大勢揃い、稽古するには最高の支部である。

加えて、審査の直前には美馬先生から審査の心得についてのご指導を頂いた。

二、稽古する道場に恵まれていることである。手前味噌になるが、松茂町の第二体育館である。この体育館は平成十七年四月に完成したもので、設計は建築家で大阪市立大学教授竹原義二（徳島県出身）氏によるものである。日本建築学会の作品選奨に選ばれた立派な道場である。私たち住民だけが利用するのでなく口コミで町外からも大勢の方に利用して頂いている。そのおかげで、県庁剣道部、高齢者剣友会の常設の道場として、また国際剣道連盟の稽古にも利用されている。私はその都度、指導にこられる遠藤会長、米倉先生を始めとする県内外の一流の先生方から指導をいただく機会が多くあり、出稽古をしなくても十分稽古ができる環境に恵まれている。

最後に、妻に恵まれていると言うと笑われるが、妻に理解してもらっていることが大きい。稽古は週に二回程度。審査前になると週に三回から四回となる。週二回の支部稽古会では、午後八時半から十時である。

自宅に帰るのが十時三十分になる。風呂に入って寝るのが十一時三十分。それでも妻はいやな顔ひとつせず夜遅くまで付き合ってくれる。六十才を過ぎても働いているので、好きな剣道ぐらい大目に見てくれるのだろう。

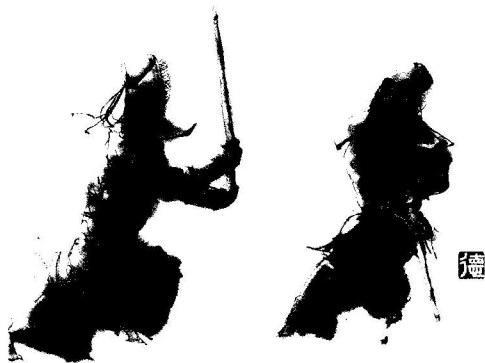
仕事と剣道で家庭で過ごす時間は少ない。妻には頭の下がる気持ちで一杯である。

初めての京都会場は名古屋会場に比べて広い為か静かに落ち着いて感じた。

審査前には、久次米先生から頑張っていると背中を押され緊張がほぐれた。審査が終わると久次米先生から合格間違いなしといわれ、内心嬉しかった。二階の観覧席に行くと、剣道のことをよく知らない妻が笑顔で「お父さん合格したと思うよ」と話しかけてきた。どうしてと聞くと、妻は私の立ち会いを見るより、審査員を見ていた様子で、「お父さんの場合、審査員の手が一斉に動いた。他の人の場合にはそういう光景がなかった。」と言うのである。

今回の合格は、大勢の先生方にご指導を頂いたことは言うまでもないが、長谷川さ

んの勧めで審査会場を変更したこと、対戦相手に恵まれたこと等も起因しており、実力で七段に合格できたとは思っていない。今後、妻に理解を得ながら、諸先生方に指導を仰ぎ、自己研鑽を怠らないようにして参りたいと考えておりますのでご指導下さいますよう宜しくお願い申し上げます。



剣道七段に合格して

阿南支部 池田 洋一



平成二十二年十一月十三日、名古屋審査において、

剣道七段に合格させていただきました

た。これもひとえにご指導下さった、県連、阿南支部の先生方、また、あこう剣志会の先輩方、地元大野の稽古会で共に汗を流してくる先生方、皆様のおかげだと、心より感謝しています。

さて、私の七段への挑戦は、前年の名古屋より始まりました。最初の審査では合格するのには、こんな構えで、こんな風に攻め、こんな感じに打ち込み、こんな技を使うなどと、勝手にイメージを作り、臨みましたが、全く思うよう出来ず不合格。二回目の京都、今度こそと臨むも、自分の思う剣道が出来ずやはり不合格でした。どんな所に気をつけなければならないのか、どのような稽古が必要な

のか、迷い、自信を失いかけていた私に、ある剣道講習会后、久しぶりにお会いした先生に「いつもどおりの剣道でいかな、よそ行きの剣道しようとするから出来ないんだよ。」と指導していただきました。

その話を、いつも稽古と一緒にしている仲間達に話すと、二人の先生が口をそろえて「私もそう思っていた、池田はいつもと違う剣道しすぎではないか、いつもどおりの剣道で受けたら」と言われました。そういうえば過去二回の審査を振り返り考えると、何か窮屈な感じがあったり、ギクシャクした動きで、思うところでの打突が出来なかったり、簡単に打たれたりしていたなと思ひ、形だけにこだわり中身の無い剣道をしてしまっていた事に気づきました。

その後、三回目の新潟審査では、よそ行きの剣道でない、いつもどおりの剣道でと臨みましたが、有効打が余り取れず不合格。しかし、自分の剣道が出せた感じがありませんでしたので、自分はどんな評価なのか、初めて全剣連の成績開示のハガキを出してみ

ました。後日（もう一歩です）の評価をいただき、しっかり自分の剣道をすれば合格に近づけると、自信が持てました。

二カ月後、名古屋で四回目の挑戦。頭の中に平常心で自分の剣道と言いつけながら立ち会い、一人目の相手は、初太刀は取れないものの、中盤、面と返し胴が決まり、まずまずの出来でした。二人目も同様にと思っても、手強い相手最後まで会心の一本が決まることはありませんでした。しかし、過去三回の審査に比べると、思いっきり自分の剣道が出来た達成感はありません。今回はどうだろうか、また、駄目だろうか、思いながらも見た合格発表、自分の番号を見つけたときには、体中に嬉しさがこみ上げてきました。

このたび七段に昇段させて頂きましたが、自分の剣道は、まだまだ七段の扉を開けたばかりで、課題も沢山あります。これからも感謝の気持ち忘れず、七段として恥ずかしくない剣道が出来るよう、日々精進して行きたいと思ひます。今後ともご指導宜しくお願いします。

七段に合格して

徳島刑務所支部

片山尊史



平成二十二年十一月十三日、名古屋にて実施された剣道七段審査会において、幸運にも合格することができました。

私は現在、松山刑務所へ転勤して五年目を迎えておりますが、平成二十二年四月の所内移動において、勤務終了後に少しではありませんが、自分の時間を持つことができようになります。自己の健康管理のため、可能な日には同所剣道場で稽古に参加させてもらうようになりました。しかし、長年のブランクで思うように体は動きませんが、この歳になり試合がある訳でもなく、焦らず、ゆっくり基本からやり直していこうと稽古に臨みました。

その後は、週末徳島に帰った時も、地元

の小学校の体育館で剣道仲間と共に、じっくり時間を掛けて大きな基本打ち及び打込み稽古等をするようになり、最初は直ぐに息が上がり有意義な稽古ができませんでしたが、酷暑を過ぎたころには体力も持続するようになり、初秋のころ、私は次の七段審査から再挑戦しようと決心しました。

私は過去に、七段審査で二回不合格となっておりますが、その理由について自分なりに分析すると、六段審査に合格した当時、私は、「相手より先に攻め入り、打ち間に入ったなら、躊躇なく自分を捨てて打ち込む。」を信念に審査に臨み、結果、前後の相手それぞれに対し、初太刀に会心の面が決まり、合格することができました。その為、その後の七段審査においても私は同信念を貫き受審しましたが、初太刀は元より、二の太刀、三の太刀と有効打にすることができず不合格となってしまいました。

今回、再び七段を受審するとなれば、受審に対する自分の剣道の考えを変えなければならず、諸先生方から御指導を仰ぎ、また、剣道書籍等を読む中で、剣道は相手が

あり、有効打になるためには理合いがあることを改めて学び、今までの私の剣道が如何に自分勝手に薄っぺらな剣道であったかと言うことに気付かされました。

特に書籍の中で、剣道範士千葉仁先生が「溜めのある打ち」について、『攻める中で、隙が空かない時は空くまで打たない。それが溜めである。溜めた打ちは仕掛けて行くだけでなく、抜き胴や出小手、すり上げ面など適宜応じ技としても違い分ける。』等と説かれているのを目にした時は、失くしていた宝物が見つかった時のような喜びがあり、自分の今の剣道の方向性が決まったと実感しました。

十一月の七段審査まで残り二カ月、
一、姿勢（構え）を正し、崩れないようにする。
一、大きな基本打ちを反復稽古する。
一、返し技及び抜き技を反復稽古する。
一、構えた後は、軽々しく自分から打って行かず「溜め」を意識する。
一、打突は、打ち切るようにする。
を目標に稽古しました。

審査当日は、相手が誰であれ、普段小学生と練習している心持ちで構えるよう自分に言い聞かせ、

一人目 初太刀は、相手が面に打ってきたところを相面に、また、その後は、面に打ってきたところを、すり上げ面に、

二人目 初太刀は、相手が面に打ってきたところを返し胴に、また、その後は、飛び込み面に、

と、自分なりに少しは「溜め」のある剣道ができたように思いました。

最後に、今回の受審に際し、御指導頂いた徳島刑務所森直行先生及び鴨島少年剣道教室並びに松山刑務所剣道部の諸先生方に深く感謝致します。

今後は、七段に恥じない剣道が一日でも早くできるよう努力する所存でありますので、今後共御指導よろしく御願致します。

居合道七段に合格して

森 将 夫



平成二十二年十一月二十日東京審査において居合道七段に合格させていただきました。

これも偏に平尾先生を始め諸先輩、徹心道場の皆様のご指導のお陰と深く感謝しております。

特に先輩吉岡先生、岸田先生の七段高段者の方々によるご指導の賜物です。

居合の審査は、夏は西日本講習会の前日、冬は十一月の東京審査の年二回となっております。審査員は六名で受審者は四名一組で受審します。礼法、古流二本（自由）、全日本剣道連盟居合の中で二本が指定され、六分以内で行われます。

平成七年七月に長崎審査で六段には一回で合格しましたが（まぐれ？）七段は平成十三年の宮崎審査から受審し七段合格まで

十年の月日を費やしました。その期間の十五回目の挑戦で合格しました。

私は審査の当日に自宅を出て朝一番の飛行機に乗り、審査会場の江戸川区のスポーツセンターに行きました。いつも口帰りです。審査を受審しています。審査の受付は十一時二十分からである為です。

十時すぎに着替えて練習場に行くといつもの顔見知りの人が練習をしていました。

今回は自信を持って審査に臨みました。平成二十一年度の全日本居合道大会の六段の選手としての練習と、今年度の全日本居合道大会の六段の選手としての練習が、何と云っても今までとの練習量が違うと思っていました。指定技は全日本居合道大会で指定されていたもので、何度も練習をしたものでした。審査に臨んで緊張や不安は少しもなく担々と抜く事ができました。これでダメなら又もっと練習をすればよいという気持ちで臨みました。終ってみて、もう少しこうしていればとか、ああしていればとかの反省点もなく、自分の居合を抜く事

ができました。練習が自信を生み平常心で抜く事が出来たと思います。

私は居合を始めたのは昭和五十五年の三月頃と思います。それから今日まで三十年間の内で延べ二、三年はまったく稽古をしていない時もあり、休み休み細々と続いてまいりました。

この居合は、人に言われ指導してもらっても本人が本気にやる気にならないと、いくらたっても上達しません。私がこれに気づいて本気にやる気になったのは、この三、四年です。これに気づくのが少し遅かったが……。今まではその内に何とかなるだろうと軽く考えていました。

家で出来ることは何か考えました。それはまず刀を振る事、刀を回数多く振る事でこの振り方は良いか悪いか自問自答して結果を考える事です。場所がない為にただ刀を振るだけです。まだまだ刀の振り方が充分にわかっていません。他の人達に指摘を受けています。とにかく刀を振る事で刀が教えてくれるとある偉い先生が言っていました。これを徹底してやりました。効果が

あったと思います。それから刀を持たず古流二本と一本目から十二本目の連盟居合を真似て練習をしました。

居合をするには健康、仕事、家庭が上手くいっていないとなかなか出来ません。幸いに私はこの機会に恵まれ、七段に昇段する事ができました。

今後もし指導いただいた大勢の諸先輩先生方の感謝を忘れず益々稽古に精進していこうと思っています。



六段に合格して

警察支部 川添 義仁

平成二十二年四月、京都において六段審査に合格することができました。誌面をおかりしまして、日ごろからご指導いただきありがとうございます。

前回不合格に終わった平成二十一年十一月の名古屋審査以降、先生方からご指導、アドバイスをいただき、また自分自身どこが悪かったのか、何が足りなかったのかと模索しながらの稽古が続きました。自分なりに模索した結果、名古屋審査では理合を考えず、自分勝手な剣道をしていたように思います。

そこで今回の審査の前に、自分自身の課題として「理合を重視した剣道を実践する。」と決めました。そして自分の剣道を審査で披露する。それで結果が伴わなければ、再度試行錯誤を繰り返し、自分の追い求める剣道ができるように精進すると誓いました。審査当日は、自分の剣道が審査員に認め

て貰えるだろうか。自分の攻めが相手に上手く伝わるだろうか等不安に駆られました。が、不安は審査に悪影響を及ぼすだけと割り切り、稽古でやってきたことだけを審査で披露することに集中しました。

いよいよ審査が始まる時、先の審査で失敗したことを繰り返さない、稽古でしたことを審査員にみてもらうと自分に言い聞かせ立合いに臨みました。その初太刀、私が相手の間合いに攻め入ると相手は無理に攻撃を仕掛けようとし、その瞬間に自然と面に飛ぶことができました。出頭面が一本決まりました。その後、相手は一本を取り返すべく無理に打突してきたので冷静に対応することができました。二回目の立合いも同じような展開になり、審査に合格することができました。

この時、前回の審査で自分に何が足りなかったのかという疑問に対して、明確な答えが出ました。私は審査の前にならだけ高段者のふりをしていたのです。剣道は年齢の経過、高段者になるほど、技の完成度、所作を含めた品格が求められているのにその部

分を疎かにして稽古をしていました。品格は日々の鍛錬、人生の経験を積み重ねることにより身に着くものであると考えます。この度の昇段審査では、これから進むべき剣道の方向性を修正する機会をいただいたように思います。この機会をいただいたことを忘れず、剣道に取り組み、自分の剣道を確立すべく精進してまいりますので、今後とも変わらぬご指導お願い申し上げます。



剣道六段に昇段して

阿波支部 兼 松 圭 史

平成二十二年四月二十九日、京都での審査会において六段に合格させていただきました。これまで審査会に望むに当たって、生徒との稽古、阿波支部での週一回の稽古と少ない稽古を集中して行っていました。しかし、残念な結果に終わっていました。今回も合格に向け、稽古に取り組んでいましたが、三月中旬に体育の授業で、生徒と共にサッカーをしており、激突して筋挫傷という怪我をしてしまいました。全治六週間という診断で、審査会に申し込みはしていたものの今回の審査会は怪我のためあきらめようと思っていました。

得のできる打ちをしてきたらどうか。」とおっしゃってくださいました。私もその時は、その話に乗り、「それもいいですね。」と答えていました。

今までの審査会は、前日入りし、心の準備もして臨んでいました。今回は、審査を受けるべきかやめるべきか迷いましたが、「今の自分にできる限りのことをやってこよう」と受けることにしました。それは、中尾誠先生に、早く「六段昇段」の報告をしたかったからというのがあります。

会場に到着し、怪我をした足は（前日に治療院でテーピングを巻いてもらった）大丈夫だろうかと確認しながらストレッチ、準備運動を行い、自分の出番を待っていました。出番を待ちながら、他の方々の審査を見ていると、何か打ち急いでいるような、打ちすぎているような感覚にとらわれました。それを見て、私は打ち急がず、先を取り、このこという機会だけを逃さず打とうと心に決めました。そう決めたことで、緊張もさほどせず審査に望むことができました。内容も一人目、二人目ともに相手の先を取

ることができ、相手が飛び出してくる機会をしっかりと打ち切ることができました。

私にとってこの昇段で何よりうれしかったことは、今日の私にいたるまで公私ともにお世話になっていた、中学校の恩師である中尾誠先生に、その日の内に「六段昇段」のご報告をすることができたことです。中尾先生には、早く六段を受けるよう薦められており、挑戦するものの今までの報告ができていませんでした。中尾先生は、三月から体調を崩され、入院されていました。ようやく先生に「六段昇段」のよい報告をさせていただくことができました。先生は大変喜んで下さり、私もこの時、受かって本当によかったと思いました。しかし、この報告が先生とお話をさせていただく最後となりました。中尾先生との最後の会話が「六段昇段」の報告で本当によかったと思います。この昇段は、中尾先生が私に力を貸してくれたものと思っております。中尾先生、今まで私をご指導いただき本当にありがとうございます。今の私があるのも中学での中尾先生の基本に忠実なお教えが

あつてのことだと感謝しております。私は、
いつまでも中尾先生の背中を追い続け、剣
道に精進していきたいと思っております。

また、日頃ご指導いただいている先生方
にもこの場をお借りしまして厚くお礼申し
上げます。ありがとうございます。これ
からもご指導ご鞭撻のほどよろしくお願
いいたします。



六段に合格して

徳島支部 谷 本 晃 成

平成二十二年五月十六日、名古屋審査会において剣道六段に合格することができました。ご報告させていただくとともに、これまでご指導いただいた諸先生方に心よりお礼申し上げます。本当にありがとうございます。

「早く早く、番号あったよ。」と、妻と次男が慌てた様子で声をかけてくれました。突然の腹痛に襲われ、慌ててトイレに駆け込んだけれど、どこも満室状態で右往左往しやっとの思いで観客席へ帰ってきた時のことでした。掲示板を確認するため、急いで支度をして降りると、すでに合格者が形審査のために整列しており、番号を目で見るといふより呼ばれていた状態でした。全く運がついていました。

昭和六十三年、三重県で五段に合格して以来、勤務事情（レスリング・ハンドボールに夢中）や、自分の勝手な都合で剣道か

ら遠ざかっていた十余年間がありました。そんな折、長男が小学校入学と同時に、剣道を始めるとききっかけに、私の剣道の原点である佐古剣道クラブで週三回（火・木・日）剣道を再開することとなりました。師匠でもあり叔父の谷本修先生からは、「何よりも子どもと練習することが、一番自分の練習になる。」と言われ、指導者として受け継ぐことにもなりました。ただ昇段については、思ってもいませんでしたが、転機が訪れました。

平成二十年度、スポーツ少年団全国交流剣道大会へ幸運にも親子で参加させていた際、自分よりも数倍頑張っている息子の姿に感化され、「よし、六段を取るぞ」と強く決意しました。佐古での稽古以外に、水曜日に中央武道館である徳島支部稽古会へ可能な限り参加するようにしました。その中で、たくさんの先生方から指導していただきました。少ない時間を、十分に活かすことができるよう、自ら求める姿勢を意識しました。

審査会は、大学時代の友人がたっくさんい

る名古屋でとっていました。毎回、応援（冷やかし）に来てくれました。長男は、先の二回は心配して応援に来てくれていましたが、「今回は、もう大丈夫だろう。」と言い留守番でした。その一言もプレッシャーでしたが、励みでもありました。審査会直前の講習会では、米倉先生に模擬審査をしていただき、発声の仕方から立ち会いのポイントについて詳しく指導していただきました。また、勤務校である城西高校では、実技や剣道形について福多先生から指導していただきました。本審査では、過去の審査や、指導していただき学んだことを頭に置きながらも考えすぎず、少しの緊張感を持ちつつ、力まずリラックスすることに重点を置いて望みました。その結果、「合格」という報告をすることができました。

佐古の子どもたちを指導できることに感謝しながら、私自身ますます精進していきたいと思っております。今後ともご指導のほどよろしくお願いいたします。

六段審査に合格して

篠原 永光



平成二十二年八月二十九日に福岡で行われた六段審査にて念願の合格を頂くことができました。

ありがとうございました。これまでご指導下さいました諸先生、諸先輩、剣友の皆様のおかげと心から感謝申し上げます。

六段審査は平成十九年より受験して参りましたが、今思うと受験資格ができただけの受験であったと反省しております。初回の審査では会場に集まった受験生の多さや、レベルの違いにとまどったことを記憶しています。案の定、受験しては不合格の繰り返しました。

しかしながら、不合格という客観的な評価を頂くことで自分自身の今までの剣道を改めて見直し、もう一度基本から確認する機会になったことは今後の糧になったので

はないだろうかと考えます。

審査から半年が過ぎ改めて立ち会い内容を反省してみました。立ち会い時間約一分の中でやはり初太刀の重要性を実感致しました。正直細かな内容に関しては無我夢中であり覚えていない部分も多々ありますが、一人目、二人目と初太刀に関しては何かとかわいい形が出せたのではないかと思います。不合格の時の立ち会いでは、初太刀をとれないことでその後の流れを作ることは非常に困難であり、あっという間に立ち会いの一分が終わっていたように思います。

また直前に集中力を高めるための心構えとして、師匠からいただいた言葉で「先をかけ、見極めて捨てる。」を何度も思い返し、言い聞かせながら立ち会いに臨みました。自身の順番がBであったため相手の何の情報もなくて立ち会いでしたが何とか落ち着いて始めることができました。

審査に合格し、気がつけばあっという間に半年が経っていました。審査の時はたま様々な要素がいい方向に転がり合格をいただけたものと感じています。まだまだ

段位に恥ずかしくない剣道をするために模索中です。次回の審査では受験資格ができたから受験するということのないよう、今から一回一回の稽古を大切に組み組んでいきたいと考えております。今後ともご指導ご鞭撻の程よろしくお願いいたします。



剣道六段に合格して

三好支部 喜多 一 幸

平成二十二年八月二十九日、福岡市で行われた審査会で、六段に合格させて頂きました。日頃からご指導頂きました三好支部の先生方、西部地区の先生方には、感謝の気持ちで一杯です。私は週二回川崎少年剣道クラブで稽古をしています。道場には、合田秀實先生、山下敏雄先生、藤本常己先生、堀川修先生がおられ、基本を中心に指導していて、同じ目標に挑戦する先生方が、本番さながらの稽古をして下さいました。

審査当日は、合田先生にご指導頂き、攻め勝って打つ稽古を思い出しながら、緊張の中、一村昌和先生に頂いた「射石飲羽」と書かれた手拭いを頭に巻き気持ちを落ち着かせて審査に臨み、精一杯の自分の力が発揮できたと思います。審査が終わり家族の元に行き、「どうだった。」と聞くと、「審査内容は分らないけど、声はよく出た。」と言うことでした。「ドキドキ」しな

がら審査発表を待ち、掲示板の自分の番号が目に入り、

「ヨシ、ヤッター！」と思わず心の中で叫びました。次の

形審査に臨み全員合格の発表を聞き、今まで稽古して来た事が脳裏に浮かびました。

ご指導いただいた先生方、川崎少年剣道クラブの保護者の方、子供たち、皆様方のおかげでやっと六段に合格することができました。厚くお礼申し上げます。

今後とも、ご指導よろしく
お願いいたします。



六段への挑戦

海部支部 近藤 浩文

平成二十二年十一月十四日、名古屋審査会におきまして幸運にも六段に合格させていただきました。これも一重に熱心にご指導していただいた、一心館館長影山美雄先生（教士七段）をはじめ、剣友、海部支部の先生方、並びに県剣道連盟の先生方のお蔭と感謝し、心から御礼申し上げます。

私は、中学校一年生で初めて竹刀を握り剣道を始めました。中学では、中山啓男先生（教士七段）現至誠館館長に、高校では、西谷啓一先生（教士七段）に剣道のご指導をうけましたが、中学、高校とも不肖の弟子であったと先生には、申し訳ない気持ちでいっぱいでありませぬ。しかし、私は、何故か剣道の楽しさ、奥深さにひかれ、剣道をやめようとは思いませんでした。

五段合格から早や十八年の歳月が流れました。今をもっても従前の剣道好きからは、抜け出しておりませんが、六段受験は私に

とっては、剣道を始めたときからの夢でありましたので、挑戦をすることになりました。しかし、六段の壁は厳しく、何回不合格を繰り返したかはおぼろげに覚えていました。何回か六段受験で落ちていた時に一心館館長・影山美雄先生との中学校以来の剣の手ほどきを受ける幸運の出会いがありました。

しかし、六段の壁は厳しく、何回不合格を繰り返したかはおぼろげに覚えていました。何回か六段受験で落ちていた時に一心館館長・影山美雄先生との中学校以来の剣の手ほどきを受ける幸運の出会いがありました。

一心館道場での稽古は、基本に始まり、打ち込み、切り返しに終わり、今までの私がしていた稽古（地稽古中心）とは、質、厳しさ、基本が違っていました。私が先生にかかっているだけでも只の一本も触れることができない有様でした。

ご指導をいただくようになってから、四年近くなりました。その間、先生からは修行の心構え等御指導していただきました。その中でも、私が一番心に響いた御指導は、「腹で行なう剣道、腰をつかって先の気位で責めること」が大事であるとの教えでした。なかなか思うような剣道ができない私

に、先生は最初から一緒に基本稽古から、切り返しまで、いつも拙い私の打ち込みを、心で受けていただきました。剣の教えに、「師弟同行」という教えがありますが、まさにそのとおりでした。有難い気持ちでいっぱいです。先生の稽古は厳しいですが、（愛）のある御指導のおかげで少しではありますが、剣道がわかったように思います。

今回の名古屋審査では、今までとは違う自分を出せるよう一つ一つの所作から始まり心の剣道、腹の剣道と先生の御指導を、心で繰り返しながら夜行バスで名古屋に向いました。

一人目の立ち会いでは、腹でせて、捨てきった面が一本と、小手、返し胴が出ました。打ち終わりの残心にも注意しました。二人目の立会いは、お互いいい打ちは出ませんでした。構えを崩さず、先の気位で我慢して攻め合いました。結果は合格でした。今回の審査は、たまたま運良く合格することができましたが、まだまだ本物の心の剣道、腹の剣道は、できていないと思います。

今回合格できたのは、良い師匠につき、正しい剣の道を学ぶことの大事さを再認識できたおかげだと思えます。今後も、御指導いただいた大勢の先生方への感謝の心を忘れず、剣の理法の修練に励んでいきたいと思えます。

剣道六段に合格して

板野西支部 月岡陽市

天変地異？青天の霹靂？如何なる例えがふさわしいかわかりませんが、十一月十四日の六段審査におきまして幸運にも合格する事ができました。これも一重に御指導賜りました先生方のおかげかと思えます。ありがとうございます。

十八歳で部活をやめてから二十年間竹刀を握っていませんでしたが、平成九年に板野西支部に入会し、再び竹刀を握るようになりました。

板野西支部の先生方から極めて基本的なことからおそわり、チャンバラから剣道へ変革することができました。当初の稽古は苦しく、辛い事もありましたが、終わった後の爽快感が好きでもっと稽古がしたくなりました。

性格的に、貪欲であつかましい性格。生まれも亥年生まれ猪突猛進タイプ。相手の迷惑顧みず、いろいろな剣道教室の稽古

や稽古会にお邪魔して、『押しかけ稽古』させていただきました。時には、迷惑になったこともあったかと思えます。しかし、一度も「来るな！」とか「帰れ！」って言われたことはありませんでした。先生方ならびに御父兄の皆様の寛大さに心より感謝申し上げます。ありがとうございます。

この『押しかけ稽古』の一端で、不景気で仕事が暇になったのに乗じて、鳴月会の稽古会にも押しかけるようになりました。

そこで木原先生、元木先生をはじめ諸先生方から稽古、御指導頂きました。父剣交酒、楽しく稽古させていただきました。

また、北島少年剣道教室ならびに板野東支部の稽古にも参加させていただきました。ここでは、通常の稽古以外に審査における注意事項を含め御指導を頂きました。

伊賀先生より「残心が悪い！もっと早く残心を取り、打たれないように！」と指導がありました。私には打った後、気を抜く癖がありましたから……。

不思議なことに、それ以降、平間先生や原田先生に稽古をつけていただいた時、打っ



た後、振り返った瞬間必ず打たれました。伊賀先生からの指導が聞こえていたのか、同じ事を感じていられたのかはわかりませんが、この「指導の連携プレイ？」のおかげで打突後の気の緩みをなくすることが出来ました。

また、東先生が、北島少年剣道教室の稽古に来てくださり、「お前に六段取らすために来たからな！」と毎週、真剣に稽古つけてくれました。また、板野西支部の稽古口に電話がかかってきて「今日、稽古行くんか？ お前がおるんだったら行くわ！」と場所が変わっても稽古つけてくれました。

今回の昇段の一番の原動力になったのは、六段審査の一週間前、伊賀先生のご配慮により米倉先生立会のもと、模擬審査をさせていただきました。「慌てずじっくり攻め。けれど自分から仕掛ける。」ということを頭において思い切って打ちました。模擬審査終了後、米倉先生より「うん、マルやな！今の立会なら合格や！一とうれしい言葉をいただき、豚もおだてりや、木に登る状態でした。けれど、これが大きな

自信となり、本審査では、これと同じようにやろうと決め、心の中にあっという間にならぬ迷いや、わだかまりが消えました。

そして、審査本番。木に登っちゃいました。猪もおだてりや、木に登ります（笑）。多少違いはありましたが、模擬審査と同様、じっくり攻め、自分から仕掛けて打ち切る事が出来ました。たまたまのまぐれ当りの合格ですから、まだ六段位には程遠いように思います。今後は、早く段位に負けなような剣道が出来るよう努力したいと思います。

「増え続ける体重をどなんかせなあかん」と思っって再開した剣道ですが、ふと振り返ると早や十三年、あっと言う間に過ぎました。いろんな稽古会に、『押しかけ稽古』させていただきましたが、いずれも良き環境に恵まれ、先生方からやさしく御指導いただき、良き仲間励まされ稽古ができることを幸せに思います。振り返ると、やっぱり恵まれてました。

末筆になりましたが、今まで御指導頂きました先生方に心より感謝を申し上げます。

ありがとうございます。これからも御迷惑をおかけするかと思いますが、御指導の程よろしくお願い致します。

ん？「誰かお礼を言わないかん人忘れとれへんで……？」

毎日、毎日遅そうにもんてくるおまはんの、ごほんの用意しとんのは、だ・あ・れ？
うちの話で恐縮ですが、勿論、家内にも感謝しております（苦笑）。失礼しました。



私の剣道六段

三好支部 藤 本 常 己



今回平成二十二年
度十一月名古屋
での六段審査会に
おいて、三度目の
挑戦で剣道六段に

合格することが出来ました。これもひとえに徳島県剣道連盟の先生方及び三好支部の先生方の温かい御指導のおかげと深く感謝しております。

私の剣道の経歴は、川崎剣道教室で平田照男先生より勧められて、子供と共に三十六歳より剣道を始めたように記憶しています。

二段の審査を受ける前に、山城修練クラブに稽古に行った際、出稽古に来ておられた増田和広先生と出会い、それからは三好淳志館でも稽古に参加させていただくようになりました。その頃から、私自身、だんだんと剣道の魅力にはまっていったように

思います。順調に、二段、三段と昇段して、私が四段を目指して稽古をしていた頃、藤川和秋先生が三好警察署に赴任され、三好淳志館で先生の元、初めて厳しい稽古を体験させて頂きました。構え、基本打、返し技、打突の機会等、藤川先生には色々とお指導頂きました。そのおかげで四段も合格する事が出来たと思います。

さて、次は五段です。私が剣道を始めたときの最終目標でした。五段昇段の為、審査会へも度々足を運ぶようになりました。しかし、審査結果を見るたび五段の壁の厚さを感じていました。そんな時、萩田奉弘先生より五段を受ける際の着装、所作法、構え、攻めの大切さなど事細かく御指導頂きました。私自身、本当に良き指導者に恵まれたおかげで、五段も一度で合格することが出来たと思います。五段に合格してからは正直、昇段審査を受けるのもこれで最後にしようとも思いました。それというのも、六段以上の全国審査の難しさを色々な先生よりお聞きして、私などの実力では無理だと思っていたからです。しかし三好支

部の先生方の強い後押しもあり、また新たな気持ちで私の六段昇段の挑戦が始まりました。

平成二十一年十一月名古屋での審査会で初めて六段を受けたわけですが、まず人数の多さに圧倒されました。私自身緊張したつもりは無いのですが、良いところなく見事に不合格でした。そして二度目の挑戦は京都での審査会です。稽古も十分できず、また、前回の反省も無のままの審査でした。結果は当然の如く不合格です。私自身、一回目、二回目とも仕事の都合上、ほとんど満足な稽古も出来ずに望んだ審査でした。次の六段の審査は十分な稽古ができた時に改めて挑戦してみようと思っていました。そんな時、同じ川崎剣道教室で稽古を共にしています喜多一幸先生が福岡での審査会で見事に六段に合格されました。私自身、同じ道場で稽古をしている喜多先生の合格が非常に励みとなり、私も喜多先生に続けとの思いで、六段昇段への意欲が増してまいりました。運よくそれからは道場での稽古も週四回することが出来るようになり、

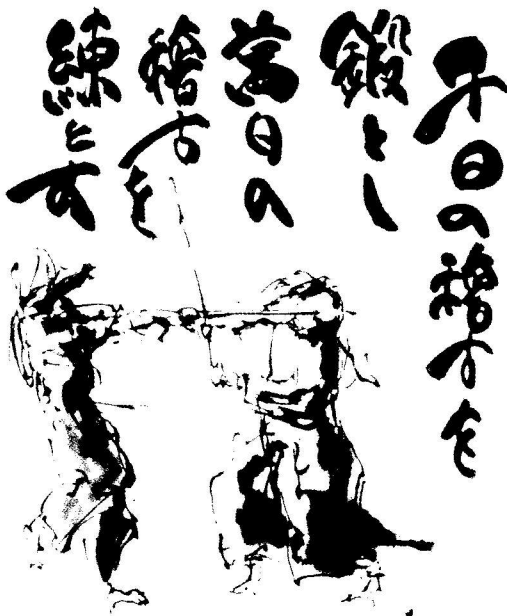
また、一人稽古も毎日行うよう心がけました。合田先生、増田先生の温かい御指導の元、面を中心とした基本打、応じ技の稽古、そして審査を想定した一分間の立会など、その都度、両先生には事細かく的確なアドバイスを頂きました。

そしてついに名古屋での審査会です。今回は十分な稽古もできたとの思いもあり、絶対合格したいと非常に強い思いで審査に挑みました。さて、一人目の方との立会で、初太刀は面との思いで望みましたが、相手の方の動きで無意識のうちに小手を打っていました。その小手が決まり、それで私自身落着きが出来たように思います。結果、一人目の方に面と小手が二本ずつ決まり、二人目の方との立会でも面を二本決めることが出来ました。私としては、過去二回と違い、攻め、打突の機会、残心等、満足のいく立会だったと思いました。そして発表です。ハラハラしながら掲示板を見ると、私の番号がありました。その時の気持ちは今までに味わったことのない感激でした。そして、その後の剣道形でも何とか合格す

ることができ、私の六段昇段への挑戦が終わりまりました。

今回の審査では、喜田先生が大変お忙しい中、名古屋まで私の応援ということで御同行頂きました。道中、的確な審査でのアドバイスを頂き、そして緊張もほぐして頂いたことを本当に感謝しています。また、私の六段審査では、川崎剣道教室、三好淳志館の先生方、保護者の皆様の温かいご支援を頂きました事をこの紙面をお借りしてお礼を申し上げます。

これからは、今までご指導いただいた先生の教えを守り、謙虚な気持ちで六段の段位に恥じないよう精進していきたいと思えます。そして徳島県剣道連盟及び剣道連盟三好支部発展のため、微力ながら協力をさせて頂きたいと思えます。



居合道六段に合格して

勇猛精進

阿波支部・阿波居合道伝習会

一 村 昌 和



平成元年十二月三日に居合道五段を取得してから、二十余年の月日が過ぎました。その

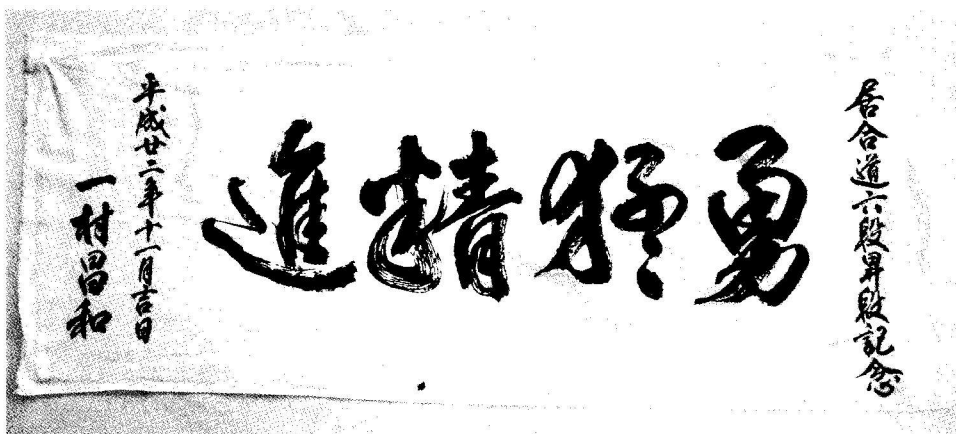
間の居合道への取組みは、年間に数えられる程の稽古回数であり、刀が錆びつく状態で惨たんたる状況でした。それにも関わらず、無謀にも幾度か六段に挑戦しましたが、理合、修業の深さ、品位、風格等が問われる全国審査の難関を突破することができませんでした。

転機は一昨年、剣道七段に合格して一区切りがついたことと、教員生活もあと一年余りとなり、在職中に是非とも達成するべき目標と決め、心を入れ替えて取り組んできました。

平成二十二年七月、姫路で行われた審査においては、自分なりに落ち着いて演武ができたと思いましたが、結果は不合格でした。発表後に多くの人から不合格になったと思われる所作についての指摘を受けました。また、六段に手の届くところまで来ているとの言もあり、東京での合格を期待されました。このことが励みとなり、また重圧としてのしかり、強制的なものとして日々の稽古に取り組みました。加えて、多くの先生方から御指導や御配慮をいただき、六段合格に向けての特訓を受けることができました。

また、不満を持ちながら使っていた刀をこの機に手直しをしました。踏ん張りのつきすぎていた形状を尋常にし、研ぎ直しました。二尺五寸余の長さも少し扱いにくかったので、はばきの飲み込みを深くし、一寸ほど短くしました。九寸の柄は、使いやすい八寸に作り直しました。下げ緒も新調し、審査に備えました。

去る、平成二十二年十一月十日、東京都江戸川区スポーツセンターで審査を受け

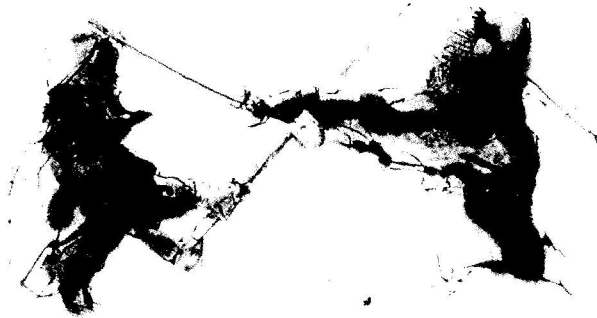


ました。前日に上京し、審査会場を確認して、その足で九段に向かいました。靖国神社に参拝し、遊就館で多くの時間を過ごしました。今回の参拝は、何としてもという天佑神助てんゆうしんじゆの恩恵を授かりたい気持ちからでした。しかし、満を持して臨んだにもかかわらず、今までの剣道や居合道の受審と比べものにならない位、極度に緊張し、最悪の精神状態での挑戦となりました。審査場の入場の際には、右足をすっと出し、滑らかな歩調で開始線まで進む予定でしたが、一步目の足に粘りけを感じ、ぎこちなく慎重に歩まねばなりませんでした。初っ端から足が板につかない状況となり、頭が真っ白になったままで礼式をし、古流「前」・「月影」、指定技「後ろ」・「三方切り」・「四方切り」を抜き終わりました。自分では平常心を失った最悪の出来であったと反省し、発表を見るまでもないという気持ちでした。知り合いの受審者から「良い出来であったよ」との声をかけてもらっても社交辞令的なお世辞としか受け止められない心境でした。

帰り支度をして会場に降りると発表がありました。驚くことに自分の番号があり、嬉しさよりも納得がいかない気持ちで心より喜ぶことができませんでした。私なりに勝手な解釈をすれば、いつもは気ままに演武しているのが、極度の緊張によって固まったことにより、慎重さや対敵意識のある所作として評価してくれたのかもしれない。何はともあれ、念願の六段に合格することができ、一安心したことも事実です。お世話になった先生方に合格の報告とお礼をするなかで、これからも毎日稽古をするようとの助言をいただきました。そのことを忠告として、ほぼ毎日実践し、六段として恥ずかしくない居合ができるよう基本からやり直しています。また、凡そ二二〇〇日後の七段受審に向けて一歩ずつ着実に稽古を積み重ねていくつもりです。

この昇段を機に、数年前までの努力不足を悔い改め、今後の決意を表すために仏教用語の「勇猛精進」を揮毫してもらい、記念の手拭いを製作しました。「勇猛」は物事にひるまず勇ましいこと、「精進」は精

神を打ち込んで努力すること、つまり強い決意をもって精力的に物事を行うことを意味します。この言葉の意味を噛みしめ、肝に銘じながら居合道に精進することを決意するものであります。今後とも御指導と御鞭撻をよろしく願います。



真の剣道教士を目指して

警察支部 佐賀博史



剣道七段審査に合格して三年余りが経った平成二十二年五月六日、剣道教士の称号を受

拝しました。

私は、中学校に入学してから剣道を始め、中学・高校と剣道を続け、高校を卒業後は警察官を拝命し、三十歳まで機動隊で剣道特練員として剣道を続けてきました。

その後、十年位の間は、竹刀をほとんど握ることもありませんでしたが、子供が剣道を始めたことをきっかけに私も剣道を再開しました。

そして、その数年後には七段に昇段し、この度の教士号の受拝に至りました。

この度、私は「剣道教士」という称号を与えられましたが、称号・段位審査規則などによると、

段位は、剣道の技術的力量（精神的要素を含む）を示すもの

称号は、これに加える指導力や識見などを備えた剣道人としての完成度を示すもの

とあり、教士の付与基準として、剣道に熟達し、識見優秀なる者と明記されています。

つまり「剣道教士」とは、剣道の技術的力量に加えて、指導力・識見を備えた剣道人としての完成度が問われるものであります。

果たして、今の私が、剣道教士に値するような指導力や識見を備えた熟達した剣道人であるかどうか？

それは、これからの私自身の修行・努力により、私が剣道教士にふさわしい剣道人になれるかどうかが決まるのではないかと思います。

私は、現在、徳島少年剣道教室の稽古に参加し、子供たちと一緒に汗を流しており、子供たちと剣を交える中で、それまでとはまた違う剣道に出会えたような感覚を持ち

ました。

学生時代や機動隊時代の私は、どうしても勝負にこだわった剣道を求めてきたように思います。

もちろん剣道において、勝負にこだわることも大切なことではありますが、私は、子供たちには、勝負の大切さだけでなく、正しい剣道を伝える必要があると思うようになってきました。

そして、子供たちとの稽古を通じて、礼法・礼節を重んじながら、剣の理法に基づく心気力一致した技を目指し、子供たちと日々の稽古に励んでいるとあります。

また、子供たちには、苦しい稽古や厳しい試合を通じて、心と体を鍛え、剣道の技量を向上させながら立派な剣道人・社会人に成長してもらいたいと願っているところでもあります。

こうして、子供たちとともに学びながら、子供たちに正しい剣道を伝えるためには、私自身が今以上に修行に励み、剣道の技量を磨くとともに指導力や識見を高めなければならず、本当に身の引き締まる思いであ

ります。

この度、私は、教士の称号をいただきましたが、本当の修行はこれからであり、「真の剣道教士」にふさわしい剣道人になれるように、生涯剣道を通じて努力していきますと思っております。

最後になりましたが、私が今日まで剣道が続けてきて、七段に昇段し、教士の称号をいただけたのも、これまでご指導を賜りました先生方、また、ともに汗を流してきた剣友の皆様方のおかげであると感謝しているところであり、この紙面を借りまして厚くお礼申し上げます、教士号を受拝しての投稿とさせていただきます。

錬士号取得の道程と疑問符！

板野東支部 武田 修典

二〇〇九年四月二十九日京都審査にて剣道六段合格後、錬士受審資格の六段受有者で、受有後1年以上経過した者と有り、二〇一〇年十一月二十四日の東京審査に向けての予備審査等合格までの道程を述べてみたいと思います。

徳島剣道連盟で実施される予備審査を受験する必要があるとの事で、二〇一〇年九月十二日に行われた第二回剣道審査会（二段以上、称号）にて実技と形の審査を受審し、その後小論文（平成十九年三月十四日制定の「剣道指導の心構え」を記し、それをふまえたあなたの剣道修行について述べなさい）を徳島県剣道連盟に提出し剣連会長が規則第八条第一項の付与基準に該当し、かつ、実施要領の「錬士を受審しようとする者の備えるべき要件」(①②③)を満たしていると認められた場合、全剣連会長に候補者として推薦する。となっております。

小論文の審査方法として課題に対して適切な内容でまとめられているか、剣道に対する受け止め方と文章の表現能力等について審査が行われ、採点のうえ審査会に付議して可否を決定するとあります。

可否の確認は連盟から通知される訳でもなく、全剣連のホームページの審査会結果欄にて、十二月六日に合格名簿が記載されるとの事でその日確認する事が出来ました。

県剣道連盟に於ける予備審査ですが、前述の審査会にて、称号受審者が私一人であった為、五段受審者お二人に五段実技審査後相手して頂く事になりました。(どうも私の錬士受審は二〇一〇年二月二十一日の第四回剣道審査会（二段以上、称号）時に受審可能の様で、当日は錬士・教士受審者が数名おられました)その後剣道形審査となり、これについても五段受審者をお願いする事になりました。予備審査は実技と形で終了しましたが、今回の受審に当り疑問点があり、全日本剣道連盟への小論文についての感想後に後述したいと思えます。小論文は剣道指導の心構えを記し、それをふま

えたあなたの剣道修行についてですが、自分の指導についての持論を述べがちな為、これに留意して、剣道指導において、竹刀という剣は、相手に向ける剣であると同時に自分に向けられた剣でもある。この修煉を通じて竹刀と心身の一体化を図ることを指導の要点とする。とあることが大変重要で限られた字数内でこれらに言及しつつ自分の剣道修行について述べることは非常に難しかったように思います。

さて今回の県剣道連盟の予備審査ですが、私は財団法人 全日本剣道連盟社会体育指導員剣道（中級）養成講習会（平成十二年十二月十六日交付）を終了しており、この特典の一つとして「剣道錬士称号審査能力認定免除の証」この内容は「剣道錬士審査における日本剣道形・審判法・指導法・学科の知識、技能について、その能力を認定する」とあります。また「全剣連社会体育指導員剣道（中級）認定者の剣道錬士称号申請における加盟団体での受審要件免除の取扱について」にて申請上の注意事項で①全剣連剣道錬士称号審査要領による、白筆申

請書および小論文は提出するものとします。（本件は納得しています）疑問に思えるのは②加盟団体で剣道錬士申請にあたり、「日本剣道形・審判法・指導法等の知識・実技についての能力」の認定以外に定めのある場合は、その部分については登録剣道連盟の方式に従うものとします。とありますが、この内容解釈では錬士の予備審査（実技と剣道形）は不要ではないでしょうか？今回私は不納得ながら受審致しました

が、剣道連盟としては再考して頂きたいと熱望致します。何故ならこれではあまり称号を取得する意味がなくなると思いますが、宜しくお願いいたします。（今年も中級取得しております錬士受審対象者が存在しておりますので！）ただ私は全日本剣道演武大会への出場権ができましたので、今年第一〇七回を楽しみにしております。



平成二十二年 度

称号・段位合格者一覽

― 剣道 ―

【八段】

【教士】

五月二日

平野 誠司

五月六日

【七段】

岩木 一功

四月三十日

寒川 博文

【錬士】

原山 進

五月六日

十一月十三日

池田 洋一

磯部 健治

片山 尊史

塩田 善治

長崎 秀信

十一月十四日

十一月二十四日

近藤 浩文

武田 修典

藤本 常己

【六段】

四月二十九日

川添 義仁

兼松 佳史

吉田 彰夫

五月十六日

谷本 晃成

笠井 勝

八月二十九日

篠原 永光

喜多 一幸

十一月十四日

近藤 浩文

月岡 陽市

十一月十四日

藤本 常己

【五段】

五月二十三日

桜井 一志

九月十二日

松本 慎二

有松 伸也

吉田 一之

石村 行範

十一月二十一日

美馬 一城

岡本 孔晴

富永 ますみ

平成二十三年

二月二十日

宮本 靖之

仁科 文宏

住友 直城

明口 豊

上田 裕則

小川 大造

松葉 諸勝

山下 敏雄

喜浦 理砂子

【四段】

五月二十三日

松本 和起

九月十二日

谷口 真央

大西 健太

十一月二十一日

真嶋 健司

児玉 隼人

平成二十三年

二月二十日

高田 厚史

岩雲 大樹

林 義真

佐藤 一貴

吉岡 陵次

綾部 文明

蛇目 英樹

石丸 直澄

大石 藍子

中野 由貴

白木 彩

長地 千景

【三段】

五月二十三日

工藤 魁
久米 紫穂
高石 大暉
長崎 恭平
前田 浩
佐藤 晃久
島田 憲一郎
大西 佐季
前田 紘子
岩本 葉子
安藝 智子

山西 浩平
小野 竜弥
朝井 智奏
井上 稔大
井上 幹大
森 康二
工藤 麻美
青木 万里子
松浦 名穂
佐藤 綾佳
井上 亜美
岡内 拓未
山本 千尋
小川 瑞季
那佐 萌

新宅 真士
立石 啓悟
民 善樹
寺野 仁
岡川 広佳
原田 直樹
河野 結花
中西 綾華
小笠原 周子
村上 遥香
安井 可奈子

桑原 和也
谷田 雅彦
市瀬 薫子
大園 伊織

平成二十三年

二月二十日

炭谷 幸一
神元 真樹
中田 雄斗
住友 勇輝
新居 大翼
藤坂 拓道
川野 賢太
小藪 京蔵
片岡 宙輝

【二段】

五月二十三日

宮川 尚士
坂本 達郎
近藤 恭平
沖野 悠太
田中 邦明
平田 達也
竹内 優介
近藤 康平
高木 勝己
西谷 拓人
高野 俊一郎
山本 政志
武岡 正悟
坂野 晃太
大内 幸一
上野 元貴
西川 航平
井内 達也
田村 隆晟
住友 皓紀

小川 虎太郎
桑原 知弘
藤本 優
本田 将大
西田 和弘
福田 篤己
金川 京平
山本 大介
中崎 正章
杉本 純
岩原 将平
福田 傑
土手 聡
福居 周平
岩佐 信之介
上田 雅大
畠中 雄人
藤本 凌平
谷野 佑海
天野 佑亮
久保 潤一郎
石本 哲弥

西岡 涼平
真鍋 彰吾
井若 敦
小西 貴大
小笠原 直孝
吉田 将教
鮎川 晃一
橋本 千里
吉田 歩生
永野 みきみ
鶴江 唯里
福井 ともこ
前川 真里奈
勝浦 さとみ
大岩 千紘
玉田 理沙子
藤本 結衣
栗野 安香音
川野 百佳
篠原 瑠莉
岡田 春希
西川 知見

大塚邦紘	尾上紘司	市川瑛士	堀拓馬	森建介	吉田航	森岡翔	豊永賢太	岡本雄太	宇山洋史	高松隼人	西野智輝	米川雄貴	西田凌介	竹原慎弥	山田溪太	佐賀誠典	坂東岳人	明石直也	阿部正典	大西修平	荒瀬拓也	九月十二日
廣永竜希	瀧浦颯	中村亨	島田凜一郎	田村幸太	志賀龍一	十一月二十一日		宮本由貴	播田茜	楠本由美菜	佐藤真央	阿部美月	三島花織	河野優季	石川実可子	美馬汐里	甘利あかね	松浦園	島田都希子	山本響	稲村慶祐	菊野裕介
				田上和男	佐藤智洋	松村拓矢	延清実	西岡康代	下込昭人	中島孝仁	重井孝仁	中澤朋耶	平成二十三年 二月二十日		松本美紗樹	榎丸浩志	岩佐純也	福永龍祐	岡本健太	藤井一有	吉岡賢志	
楠和馬	木下玄久	木内啓介	中西英樹	河野周作	朝田大樹	箭田真成	林文武	野口一	田上修平	丸岡勇斗	山下裕生	竹内透	藤本風汰	加賀田瑞輝	川上達也	高橋遼	野村翔輝	篠原聡	永濱大智	四月二十九日	【初段】	
岩佐武蔵	藤坂直道	須見雄基	喜多大樹	後藤廉	峰本勝也	魁生誠	井形優	中川拓弥	上田雄大	杉山拓之	下籾竜一	古屋海歩	庄村莉緒	鎌田幹大	中野恭平	岩浅和輝	杉本勝弥	中西陸王	平尾秀典	田中直人	中村溪一郎	岩佐岳大
加藤大貴	太田裕貴	坂本佳基	吉田夕拡	三木夕路	田和隼人	東祐大朗	河野人紀	飯田時生	藤井淳平	猪野翔太	福野将希	湯浅和紀	尾崎光	井本光紀	大津祥次郎	工藤真人	納田竜希	大城和哉	田邊翔磨	谷本晃佑	助道郁海	川邊智樹
大岩史奈	佐藤みなみ	杉本小春	藤井光莉	天羽美夕紀	松原由季	小川美空	鳴川ちひろ	小川桐花	江川美郷	藤田美生	尾関友衣	小笠直人	大久保雅也	中山慎治	横井辰徳	浅田拓未	関貫聖史	原田尉志	行天康平	細谷広志	松本知也	河原将人

― 居合道 ―

【七段】

十一月二十日

森 将夫

【六段】

十一月二十日

一村 昌和

【五段】

五月十五日

安友 健雄
川人 政利
平瀬 進也

【四段】

五月十五日

吉原 均
村井 恒治
勝野 晴孝
徳山 豊
吉田 節雄

【三段】

五月十五日

池田 隆

【二段】

五月十五日

近藤 修生
栗岡 明日香

十一月二十日

上田 圭吾
外礪 千博
山田 師正

【初段】

五月十五日

荒瀬 拓也
多田 晃弘
村上 裕一
江口 実希



がんばろう徳島

部活だより

阿波中学校剣道部

阿波中学校剣道部顧問

兼 松 佳 史

本校は、阿波市の西部吉野川の中流域の北岸に位置し、自然環境に恵まれた場所にあります。昭和五十六年に武道館ができ、

平成十六年に新設された体育館の一階にも、武道場ができました。現在は用途によって道場を使い分けるといふ大変恵まれた中で、毎日基本を大切に稽古に励んでいます。この恵まれた環境は、阿波中学校の諸先輩方の功績によって成り立っています。過去、男子、女子ともに全国大会へ何度も出場し、女子は四国大会優勝などの輝かしい実績があります。それも全ては、笠井選先生、中尾誠先生、塩田昭治先生のすばらしいご指

導と、保護者の方々のご協力があったからだと思えます。私自身も、阿波中学校剣道部の出身で、中尾誠先生にお教えを頂きました。私が今、教員をしているのも中尾誠先生にご指導いただいた影響が多々あると思います。その中尾誠先生も昨年五月に亡くなられました。中尾誠先生にお教えいただいたことを基礎とし、これからも阿波中学校剣道部の生徒たちに剣道のすばらしさを伝えていきたいと思えます。中尾誠先生の阿波中学校剣道部への功績をたたえ、この場をかりましてご冥福をお祈りしたいと思っています。

現在の剣道部員は、男子六名、女子八名計十四名で、男女ともにチームを組むことができています。しかし昨年は男子が一人、一昨年は女子が一人でチームを組むことができませんでした。阿波中学校も一昔前は想像できなかった部員不足に悩まされています。

剣道部を指導していく中で、私が常に生徒に言っていることは、「凡事徹底」と「百錬自得」です。そして、毎日の稽古は

この二つを目標に行っています。「凡事徹底」とは、「やるべきことをきちんとやる」という意味で、これは剣道だけでなく、学校生活や全ての生活において大切なことだと思います。また、挨拶をする、決められたことは守るなど社会生活をしていく中で基礎であると思っています。「百錬自得」は、「何百回も練習することで自分のものにする」という意味があります。素振り一つでも何十回も何百回も一生懸命練習しないと上手になりません。こつこつと努力していくことが大切です。この二つを大切に指導を行っています。「剣道は剣の理法の修練による人間形成の道である」という言葉があるように、この二つのことをきちんと指導していくことで生徒の人間形成に繋がります。将来の生きて働く力になると信じています。

普段の練習では、初心者が多いこともあり、基本を大切に稽古を行っています。基本を忠実に身につけることで、正しい剣道に繋がります。また、生徒の将来の公明正大な剣道に繋がっていくと信じているからです。

そのおかげか卒業しても剣道を続けている者も多く、指導者としてはうれしい限りです。

今現在の阿波中学校剣道部の活動が円滑に進んでいるのは、OBの方々、またOBの保護者の方々、現在の保護者の方々の物心両面による支えのおかげだと思います。生徒の送迎、応援など保護者会あつての阿波中剣道部だと思います。今までの指導の中で、不十分な点や失礼なことが多々あったとは思いますが、温かくご協力いただいた現役を含め保護者会OBの方々に感謝の気持ちでいっぱいです。我が阿波中学校剣道部は、多くの人に支えられ、今までの伝統が築きあげられたのだと思います。

これからも生徒と共に汗を流し、伝統を汚さないように日々精進していきたいと思っております。阿波中学校剣道部の活動に関わっていただいた全ての方々に感謝し、変わらぬご理解とご協力をお願い致しまして、阿波中学校剣道部の活動報告とさせていただきます。



阿南工業高等学校剣道部

阿南工業高校剣道部一同

那賀川沿いに徳島県一の敷地を有する阿南工業高校は、すべて男子生徒の三二〇名が在籍しています。その約七割が就職を希望しており、それぞれの目標を叶えるために、また、自分のよりよい未来を実現するために勉強や部活動に取り組んでいます。

私たち剣道部も同様に、全国大会出場を目指すことはもちろん、将来、幸せな人生を勝ち取る事のできるように、日々稽古に励んでいます。時には厳しく、時には楽しく！

阿南工業高等学校剣道部は現在一年生四名、二年生九名の計十三名（二十三年二月現在）で活動しています。早朝トレーニングはもちろん、放課後の稽古にも全員が休むことなく参加し、個々に目標を持ちながら頑張っています。

さて、昨年の県高校総体では二回戦敗退という大変悔しい思いをしました。その悔

しさを胸に、十三名の部員が日々稽古に励んでいます。悔しさを思い返せば、「負けるはずがない。」そんな甘えがあったのかもしれない。悔しさのあまりに言葉もなく、部員の誰もが落胆の表情を浮かべていたことは忘れられません。しかし、翌日の個人戦では二年生の松村拓矢君が団体の無念を晴らすべくベスト四に勝ち上がり、決勝リーグでは見事全勝で優勝し、インターハイ出場を決め、阿南工業高校剣道部の意地を見せてくれました。

昨年は酷暑という言葉がどおりの夏でした。どこの剣道部も同じだと思いますが、私たち剣道部も暑さ対策には万全を期して稽古に取り組んできました。そのような八月、沖繩インターハイに松村君が出場しました。遠路であり全員で応援に行くことはできませんでしたが、徳島県の代表として、阿南工業剣道部の代表として上位を目指して欲しいと願い、部員一丸となり、合宿を実施し、強化に努めてきました。対戦者は福島県代表の鶴岡選手（上段）（準優勝）で、結果は一回戦延長の末、メンを奪われ



敗退しましたが、最高の舞台上で試合ができたことは彼にとっても剣道部にとってもこれからの活躍に重要な意味を持たせてくれたと感じています。

月日は早いもので、夏が過ぎれば秋、そして冬がやってきます。そんな寒さ厳しい一月、ソイジョイ武道館で徳島県高校新人

剣道大会兼選抜予選大会が行われました。

しかし、一度手から離れたものを取り返すことや全国大会への権利を勝ち取ることは、そう容易い事でないことを改めて痛感させられました。完敗でした。夏からやってきたことは間違いでないことは確かです。しかし、まだまだ足りないものがあることも確かです。それらをこれから数ヶ月間に自分のものとして、夏の総体では全国大会に出場ができるよう頑張ってみようと思えます。

私たち剣道部は、勝つことはもちろんですが、一人ひとりが当たり前のことを当たり前にできることや、苦しいときや逆境に立たされたときにも自分を見失うことのないような強い精神力を養うことを目標と

して稽古に取り組んでいます。また、人に対する思いやりや感謝の心をもって人に接することができるよう人間を目指して頑張っています。それを達成するために、「インターハイ出場」を目標として今後も頑張りたいと思います。応援よろしくお願いたします。

追伸 毎週火曜日十九時〜二十時（長期休業中は除く）には道場を開放して地元

の

先生方を始め、周辺の中学生が多数参加し、大変充実した稽古会が実施されています。

稽古に来ていただく先生方には大変感謝しており、有り難く思っています。この場をお借りしてお礼申し上げます。今後もしくお願いいたします。



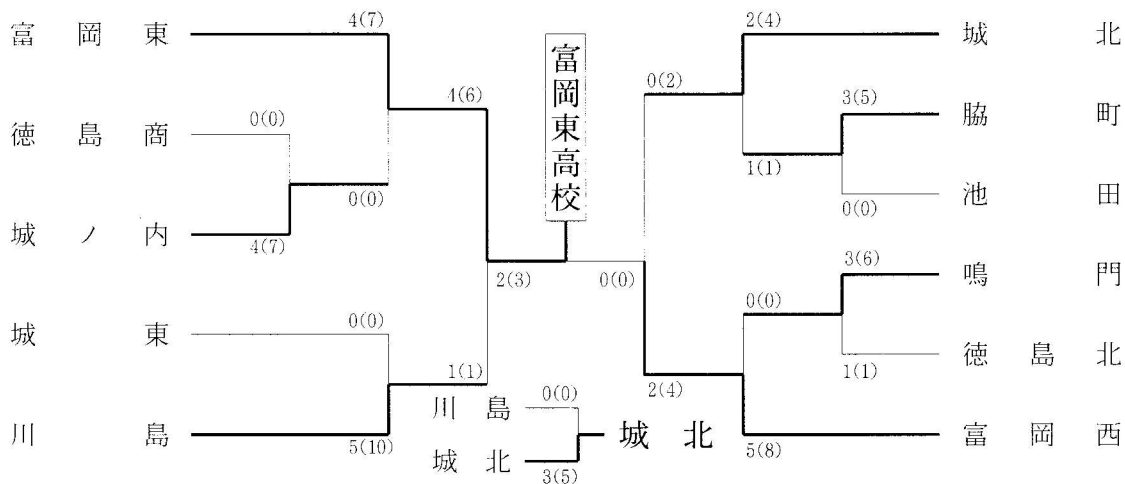
平成22年度 大会記録

平成22年度 徳島県高等学校総合体育大会 剣道競技

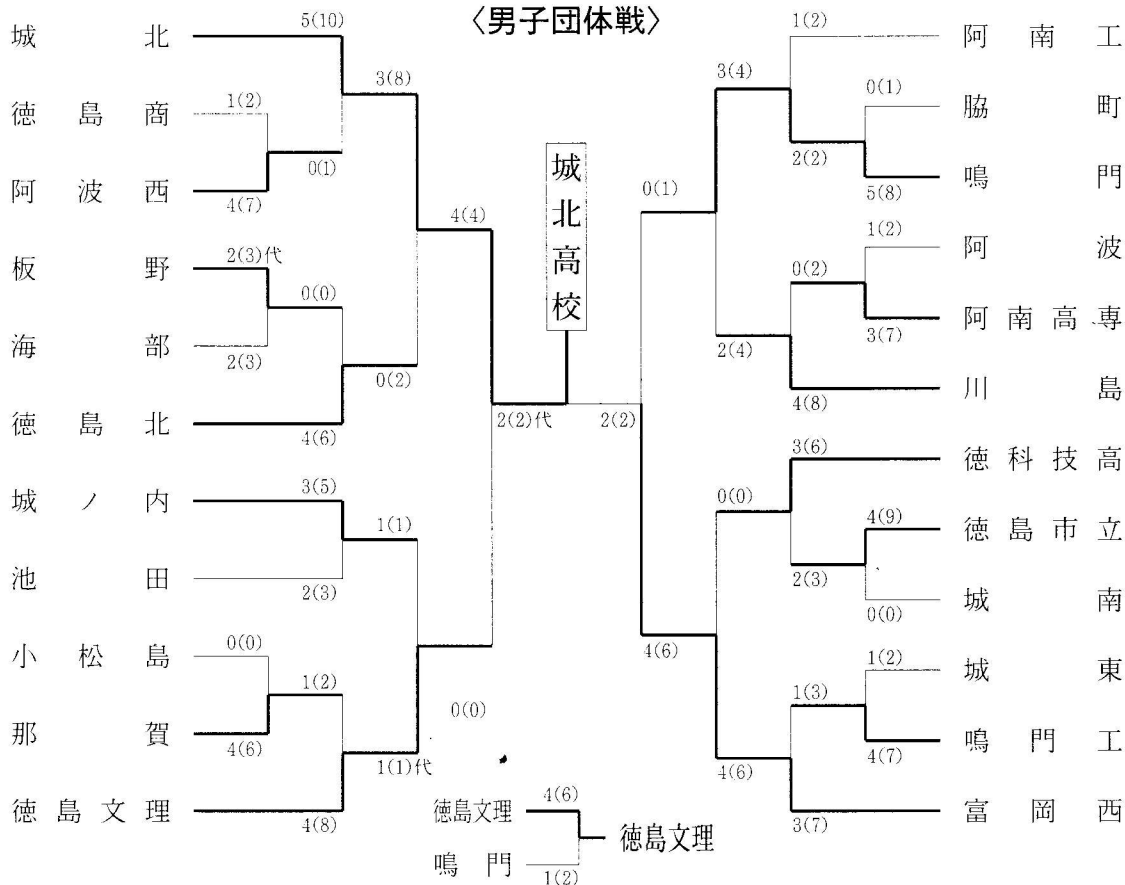
日時 平成22年6月5日(土)～6月7日(月)

会場 城西高校体育館・ソイジョイ武道館

〈女子団体戦〉



〈男子団体戦〉



〈女子団体戦〉

準 決 勝

校名	先	次	中	副	大	勝数	本	代
富岡東	栗野	湯浅	中山本	工藤	大岩原	4	6	
	⊗一本勝	⊗	⊗		⊕一本勝			
川島				一本勝 ⊗		1	1	
	猪岡	酒卷	河野	村上	大館			

校名	先	次	中	副	大	勝数	本	代
城北	井上亜	高橋	迎	中川	大井上愛	0	2	
	延長	延長	延長	⊗	⊕			
富岡西	佐藤	那佐	原	長谷川	岡内	2	4	
				⊕	⊕			

3 位決定戦

校名	先	次	中	副	大	勝数	本	代
川島	猪岡	酒卷	河野	村上	大館	0	0	
		延長						
城北	一本勝 ⊕	井上亜	⊕	⊗	井上愛	3	5	
		高橋	迎	中川				

決 勝

校名	先	次	中	副	大	勝数	本	代
富岡東	栗野	湯浅	中山本	工藤	大岩原	2	3	
	⊗一本勝	⊗	延長	延長				
富岡西	佐藤	那佐	原	長谷川	岡内	0	0	
			▲	▲				

〈男子団体戦〉

準 決 勝

校名	先	次	中	副	大	勝数	本	代
城北	岡田	森	笠井	小野	大福居	4	6	
	⊗		⊕一本勝 延長	▲	⊗			
徳島文理	青木	久保公	田中	福田	松本	1	1	
		一本勝 ⊗						

校名	先	次	中	副	大	勝数	本	代
鳴門	平野	岩木	宇井	矢野	大宮浦	0	1	
	⊗		延長					
富岡西	上田	岡田	安部晋	井上幹	安部晃	4	6	
	⊗	⊗	⊗一本勝	一本勝 ⊗				

3 位決定戦

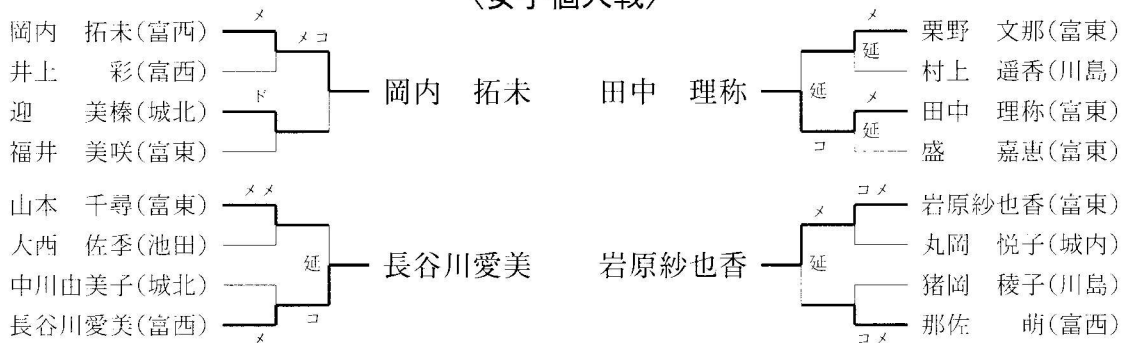
校名	先	次	中	副	大	勝数	本	代
徳島文理	青木	久保公	田中	福田	松本	4	6	
	⊕	⊗		⊗一本勝	一本勝 ⊗			
鳴門	平野	谷	宇井	矢野	大宮浦	1	2	
			⊗					

決 勝

校名	先	次	中	副	大	勝数	本	代
城北	岡田	森	笠井	小野	大福居	2	2	福居 ⊗
		⊕	延長		⊗			
富岡西	一本勝 ⊗	上田	▲岡田	安部晋	井上幹	2	2	上田
			延長	一本勝 ⊗	延長			

決勝リーグ

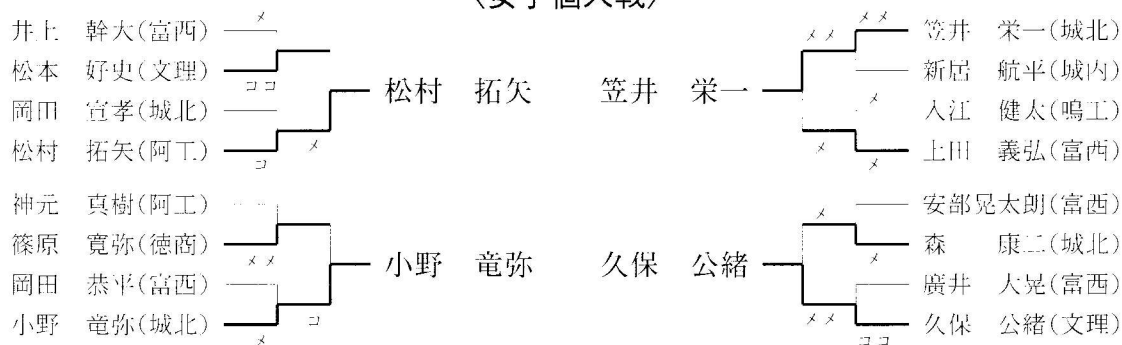
〈女子個人戦〉



	岡内 (富西)	長谷川 (富西)	田中 (富東)	岩原 (富東)	勝数	勝本数	得失差	順位
岡内 (富西)		⊙延長	⊙ ⊙	△	2	3	2	1
長谷川 (富西)	△延長		⊙ 本勝	⊙延長	2	2	1	3
田中 (富東)	△	△		△	0	0	-4	4
岩原 (富東)	⊙ 一本勝	△延長	⊙ 一本勝		2	2	1	2

2・3位決定 長谷川(富西) - ⊙ 岩原(富東)

〈女子個人戦〉



	松村 (阿工)	小野 (城北)	笠井 (城北)	久保 (文理)	勝数	勝本数	得失差	順位
松村 (阿工)		⊙延長	⊙ ⊙延長	⊙ ⊙	3	5	3	1
小野 (城北)	△延長		△	△	0	0	-4	4
笠井 (城北)	⊙延長	⊙ ⊙		△延長	1	3	0	3
久保 (文理)	⊙	⊙ 本勝	⊙延長		2	3	1	2

第62回 四国四県剣道大会

日 時 平成22年 5 月 23 日(日)

場 所 愛 媛 県 武 道 館

県名	順位	先鋒	次鋒	13将	12将	11将	10将	9将	8将	7将	6将	5将	4将	3将	副将	大将	得点
徳島県	氏名	前田	北村	竹内	六條	高橋	日和田	山名	山室	岩木	平野	生田	福多	近藤	木原	北條	5
	取得部位	▲		⊗一本勝									⊖ ⊗		⊗	⊖	2
愛媛県	取得部位	一本勝⊖	一本勝⊗		X		X	X	X		X	X		一本勝⊗	⊖ ⊗	⊗ ⊖	11
	氏名	本田	松木	山崎	今井	上甲	鎌村	豊水	馬越	門田	新谷	濱田	渡部	遠藤	大城戸	上垣	7

県名	順位	先鋒	次鋒	13将	12将	11将	10将	9将	8将	7将	6将	5将	4将	3将	副将	大将	得点
徳島県	氏名	前田	北村	竹内	六條	高橋	日和田	山名	山室	岩木	平野	生田	福多	近藤	木原	北條	8
	取得部位	⊗		⊗	⊖		⊗							⊖ ⊗	⊗一本勝	⊖	2
高知県	取得部位	⊖ ⊗	一本勝⊗	X	X		X	X	X		X	X	一本勝⊖			X	12
	氏名	小谷	大崎	濱口	小原	西山	宮地	大崎	井口	小笠原	宮本	小谷	恒石	小松	野中	渡邊	5

県名	順位	先鋒	次鋒	13 将	12 将	11 将	10 将	9 将	8 将	7 将	6 将	5 将	4 将	3 将	副将	大将	得点
徳島県	氏名	前田	北村	竹内	六條	高橋	日和田	山名	山室	岩木	平野	生田	福多	近藤	木原	北條	12 — 7
	取得部位	㊦ ㊦	㊦ ㊦	㊦ ㊦	㊦一本勝			㊦一本勝			㊦				㊦ ㊦	㊦一本勝	
香川県	取得部位					X			X	X	X		X				7 — 3
	氏名	藤井	谷本	金丸	松本	木下	木村	小川	小野	美濃	松本	桑原	真鍋	國重	井上	北隅	

	高知県	徳島県	香川県	愛媛県	勝者数	勝本数	順位
高知県		$\frac{7}{4}$	$\frac{12}{5}$	$\frac{6}{2}$	11	25	2
徳島県	$\frac{8}{2}$		$\frac{12}{7}$	$\frac{5}{4}$	13	25	3
香川県	$\frac{7}{3}$	$\frac{7}{3}$		$\frac{6}{3}$	9	20	4
愛媛県	$\frac{12}{7}$	$\frac{11}{7}$	$\frac{14}{7}$		21	37	1

第22回 徳島県剣道選手権大会並びに 第58回 全日本剣道選手権大会県予選会

優勝 敦賀 晋平 (警察支部) 日時 平成22年7月11日(日) 午前9時30分
 準優勝 山室 雅幹 (警察支部) 場所 鳴門ソイジョイ武道館
 第三位 近藤 正章 (警察支部)
 第三位 横手 慶人 (警察支部)



第13回 徳島県女子剣道選手権大会並びに 第49回 全日本女子選手権大会県予選会

優勝 平野 千尋 (大阪体育大学) 日時 平成22年7月11日(日) 午前9時30分
 準優勝 前田 奈々枝 (阿波支部) 場所 鳴門ソイジョイ武道館
 第三位 吉岡 穰 (鳴門教育大学)
 第三位 栗野 文那 (富岡東高校)



第64回 徳島県中学校夏季総合体育大会 剣道競技

日 時 平成22年7月19日(月) 午前8時40分

場 所 鳴門ソイジョイ武道館

[団体戦]

順位	男 子	女 子
優 勝	羽ノ浦中学校	徳島文理中学校
準優勝	徳島中学校	加茂名中学校
第3位	鳴門第一中学校	城ノ内中学校
第3位	徳島文理中学校	那賀川中学校

[男子決勝]

学校名	先 鋒	次 鋒	中 堅	副 将	大 将	代表戦	勝 敗
羽ノ浦	田村	朝田	上田	福田	岩原		4 (6)
	▲☉⊖	☉	⊗一本勝	⊗一本勝	⊗一本勝		
徳島	⊗	⊖⊗					1 (3)
	佐賀	飯田	山田	明石	西田		

[女子決勝]

学校名	先 鋒	次 鋒	中 堅	副 将	大 将	代表戦	勝 敗
徳島文理	川原	玉田真	佐々木	栗野	玉田理		3 (6)
	⊗⊗ 延長	⊗一本勝	△ 延長	⊗⊗	⊗		
加茂名	⊗		△		⊗		0 (2)
	河野	藤島	吉田	藤井	永野		

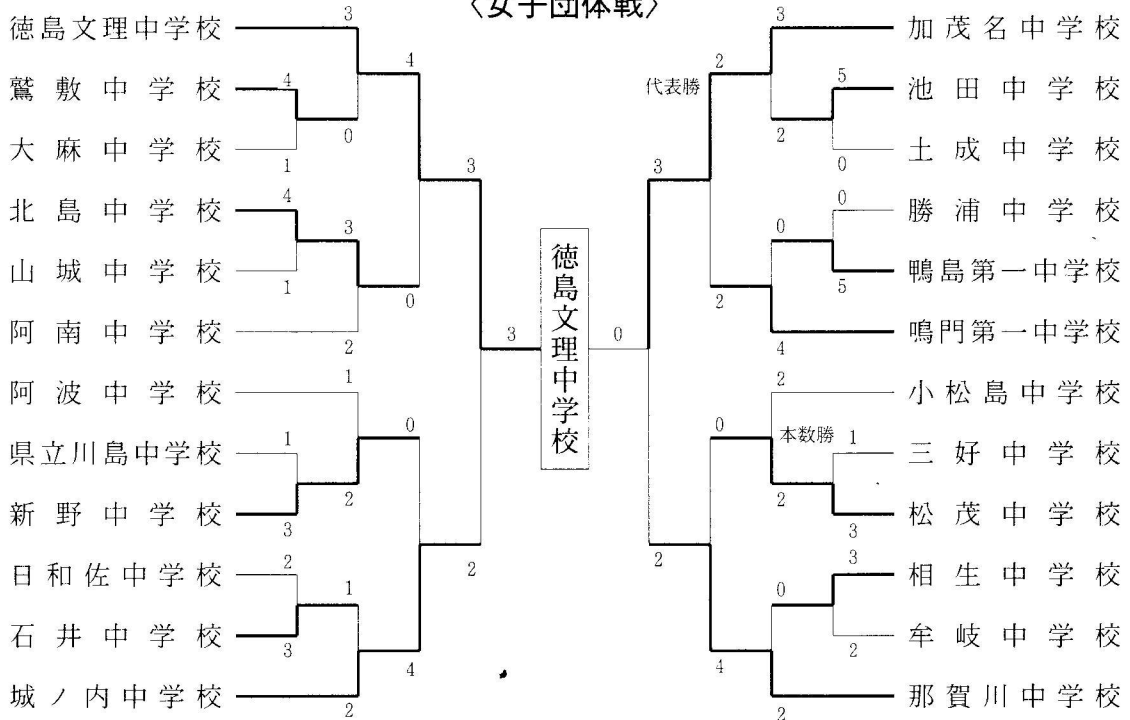
[個人戦]

順位	男 子	学校名	順位	女 子	学校名
優 勝	谷本晃佑	徳島文理	優 勝	岡田春希	木 頭
準優勝	山本大介	鳴門第一	準優勝	松本美紗樹	那賀川
第3位	高木勝己	徳島文理	第3位	玉田理沙子	徳島文理
第4位	大城和哉	木 頭	第4位	永野みきみ	加茂名

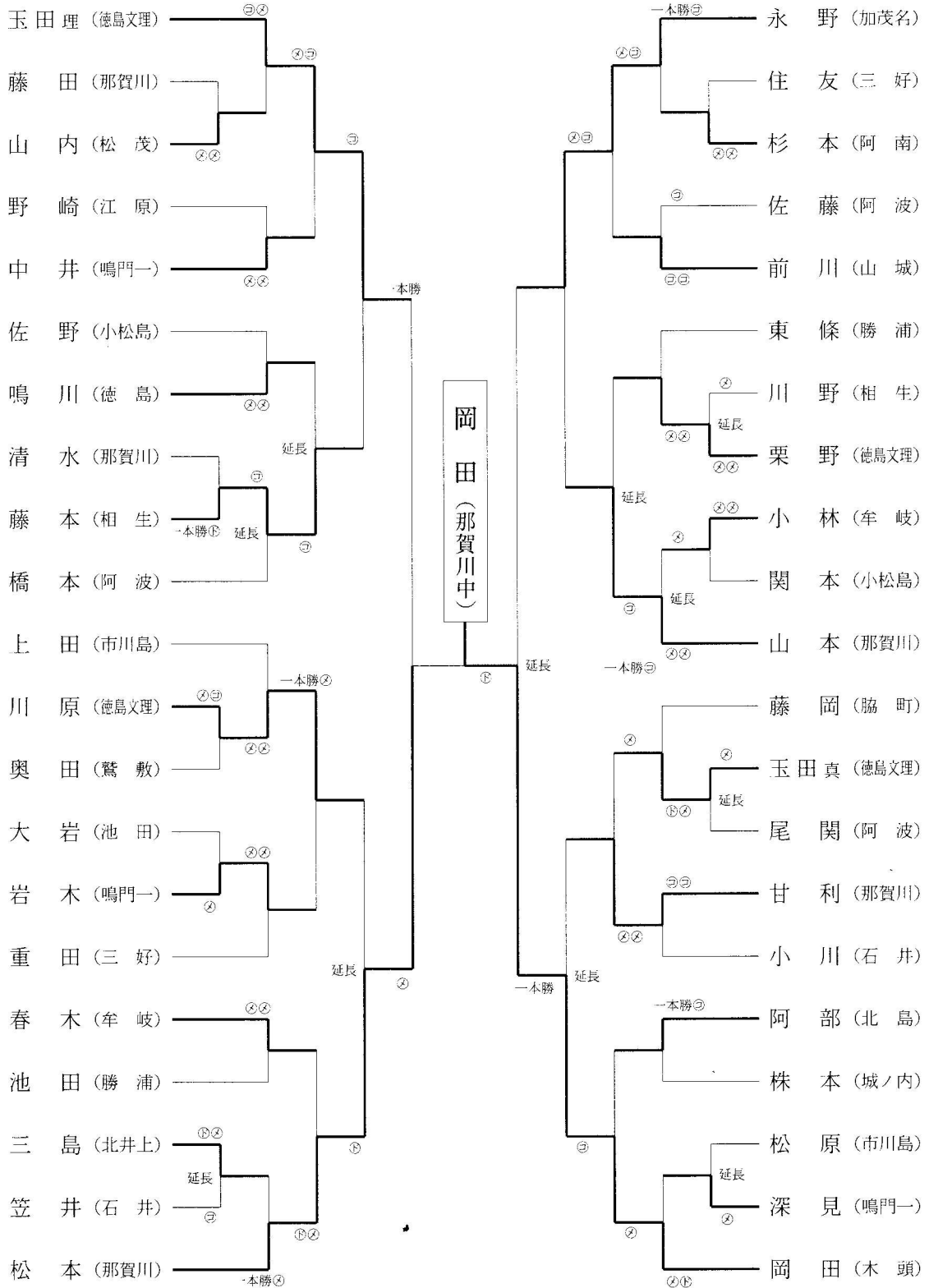
〈男子団体戦〉



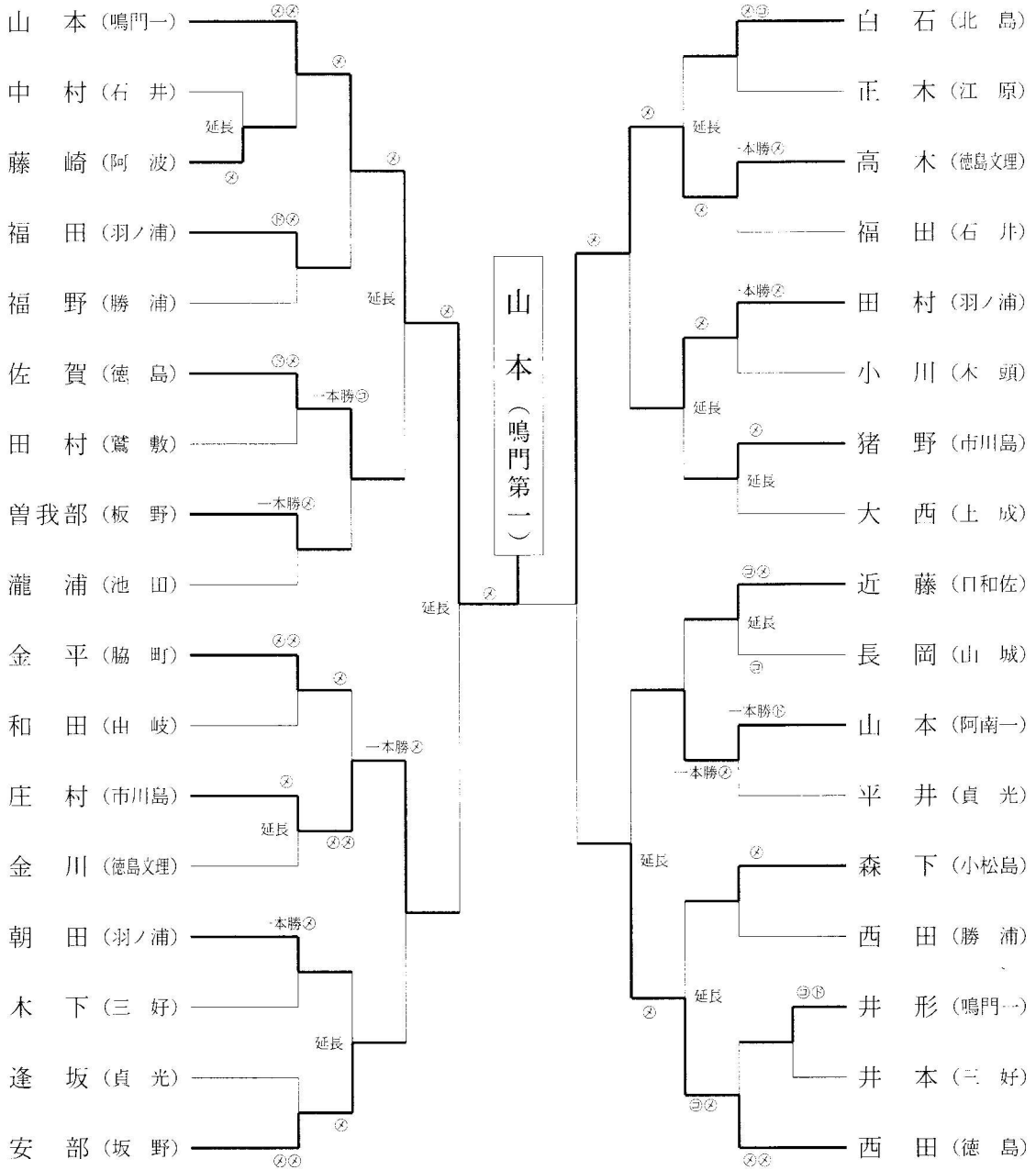
〈女子団体戦〉



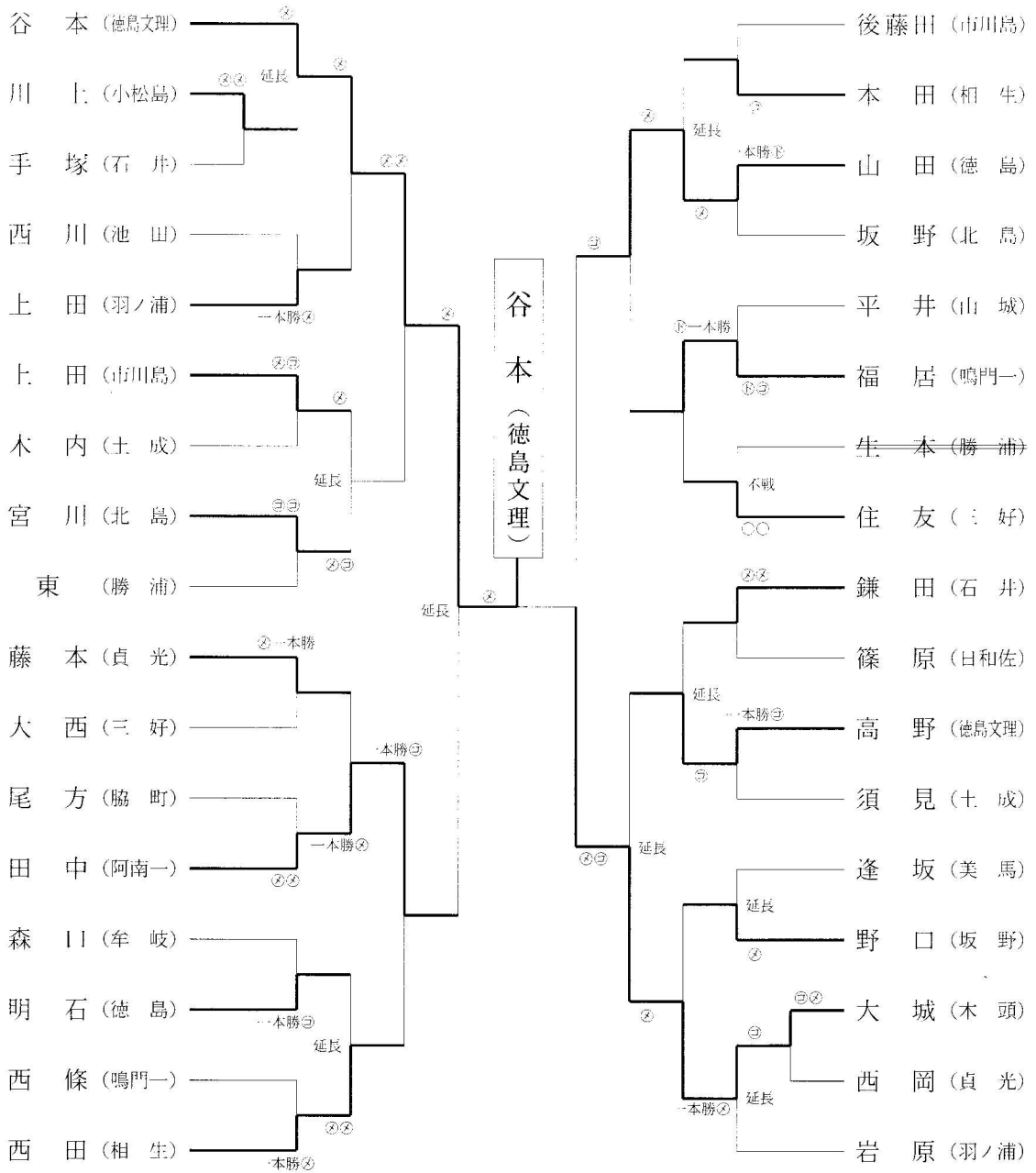
〈女子個人戦〉



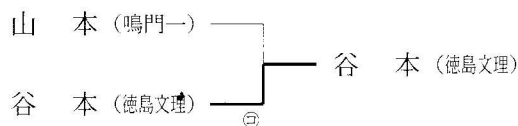
〈男子個人戦〉



〈男子個人戦〉



男子個人決勝



第31回 国民体育大会四国ブロック大会

日時 平成 22 年 8 月 15 日 (日)
場所 南国市スポーツセンター

〈少年女子〉

〈少年男子〉

第 1 試合

県名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	得点
徳島	栗野	岡内	長谷川	田中	岩原	0
						0
愛媛	延長		延長	延長	延長	5
	①二宮	①松浦	②佐野	②柳原	②菊池	5

第 1 試合

県名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	得点
香川	浮田	久米	港	雉鳥	矢野	1
				⊖	▲	1
徳島				延長		5
	⊗土井	×⊗松村	⊗笠井		⊗小松	4

第 2 試合

県名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	得点
徳島	栗野	岡内	長谷川	田中	岩原	3
	メド	メメ			⊖▲	5
香川		延長			延長	5
	⊗三宅	⊗池田	⊗▲山崎	×⊗氏部	▲北谷	2

第 2 試合

県名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	得点
高知	本田	土居	吉村	宮本	森本	4
	⊖	⊗▲	⊗	⊗		4
徳島		延長			延長	1
	▲土井	松村	笠井	久保	⊖松本	1

第 3 試合

県名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	得点
徳島	栗野	岡内	長谷川	山本	岩原	3
		⊖▲		⊗▲	⊖▲	3
高知	延長	延長		延長		3
	⊖西村	▲森岡	×⊗光明	▲福田	▲有澤	2

第 3 試合

県名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	得点
愛媛	山本	小野	黒河	越智	前田	3
	⊗	▲		⊗	⊗▲	3
徳島		延長		延長		2
	土井	⊖松村	⊖笠井	久保	松本	2

〈少年男子〉

	愛媛	香川	徳島	高知	勝数	勝者数	勝本数	順位
愛媛		$\frac{6}{5}$	$\frac{3}{3}$	$\frac{4}{3}$	3	11	13	1
香川	$\frac{0}{0}$		$\frac{1}{1}$	$\frac{0}{0}$	0	1	1	4
徳島	$\frac{2}{2}$	$\frac{5}{4}$		$\frac{1}{1}$	1	7	8	3
高知	$\frac{3}{2}$	$\frac{9}{5}$	$\frac{4}{4}$		2	11	16	2

〈成年女子〉

第1試合

県名	先鋒	中堅	大将	得点
高知	福田	森	濱口	$\frac{1}{2}$
		コメ		
徳島	コメ平野	山崎	平野	$\frac{4}{2}$

〈少年女子〉

	愛媛	香川	徳島	高知	勝数	勝者数	勝本数	順位
愛媛		$\frac{4}{3}$	$\frac{5}{5}$	$\frac{3}{3}$	3	11	12	1
香川	$\frac{2}{2}$		$\frac{5}{2}$	$\frac{4}{3}$	1	7	11	3
徳島	$\frac{0}{0}$	$\frac{5}{3}$		$\frac{3}{3}$	2	6	8	2
高知	$\frac{2}{2}$	$\frac{4}{2}$	$\frac{3}{2}$		0	6	9	4

第2試合

県名	先鋒	中堅	大将	得点
香川	目見田	谷本	金丸	$\frac{1}{3}$
		メ	メ	
徳島	延長		延長	$\frac{3}{2}$
	コメ平野	山崎	平野	

〈成年女子〉

	愛媛	香川	徳島	高知	勝数	勝者数	勝本数	順位
愛媛		$\frac{2}{1}$	$\frac{3}{3}$	$\frac{2}{2}$	2	6	7	1
香川	$\frac{2}{2}$		$\frac{3}{1}$	$\frac{2}{2}$	2	5	7	2
徳島	$\frac{0}{0}$	$\frac{3}{2}$		$\frac{4}{2}$	2	4	7	3
高知	$\frac{1}{1}$	$\frac{1}{1}$	$\frac{2}{1}$		0	3	4	4

第3試合

県名	先鋒	中堅	大将	得点
愛媛	本田	三木	山崎	$\frac{3}{3}$
	メ	メ▲	メ	
徳島			延長	$\frac{0}{0}$
	平野	山崎	平野	

第31回 徳島県女子剣道大会

団体戦

日時 平成22年9月19日(日) 午前9時30分
場所 中央武道館

優勝 教員剣美会
準優勝 徳島大学蔵本 A
第3位 徳島大学蔵本 C

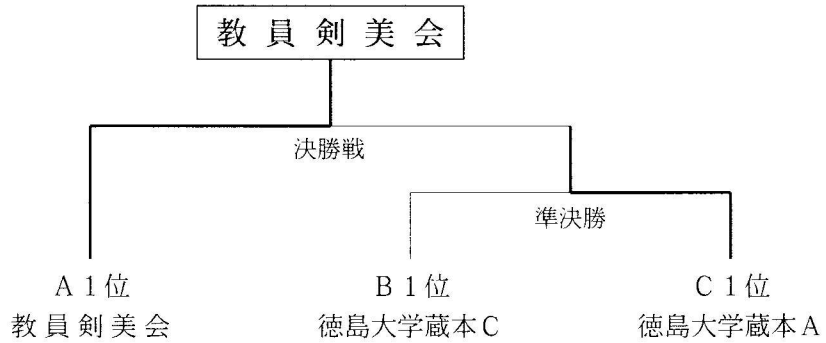
〈団体戦予選リーグ〉

A	教員剣美会	徳島大学蔵本 D	板野東部支	徳島大学蔵本 B	勝数	勝本数	得失差	順位
教員剣美会		$\frac{6}{3}$	$\frac{5}{2}$	$\frac{6}{3}$	8	17		1
徳島大学蔵本 D	$\frac{0}{0}$		$\frac{3}{2}$	$\frac{4}{2}$	4	7		2
板野東部支	$\frac{1}{0}$	$\frac{2}{1}$		$\frac{4}{2}$	3	7		3
徳島大学蔵本 B	$\frac{1}{0}$	$\frac{2}{1}$	$\frac{2}{1}$		2	5		4

B	鳴門教育大学 A	徳島文理大学 B	徳島大学蔵本 C	勝数	勝本数	得失差	順位
鳴門教育大学 A		$\frac{0}{0}$	$\frac{3}{1}$	1	3		3
徳島文理大学 B	$\frac{1}{1}$		$\frac{2}{1}$	2	3		2
徳島大学蔵本 C	$\frac{4}{2}$	$\frac{2}{1}$		3	6		1

C	徳島文理大学 A	鳴門教育大学 B	徳島大学蔵本 A	勝数	勝本数	得失差	順位
徳島文理大学 A		$\frac{2}{1}$	$\frac{0}{0}$	1	2		2
鳴門教育大学 B	$\frac{0}{0}$		$\frac{0}{0}$	0	0		3
徳島大学蔵本 A	$\frac{4}{2}$	$\frac{6}{3}$		5	10		1

決勝トーナメント



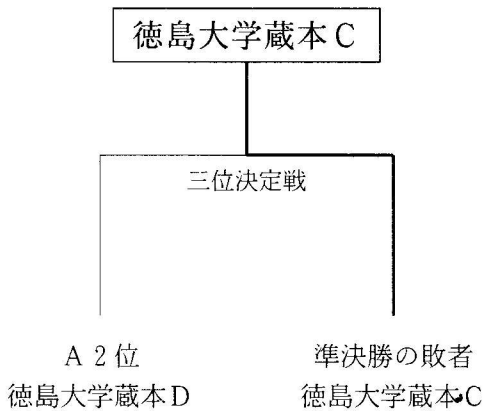
決勝

	先鋒	中堅	大将	代表戦	勝本数 勝者数
教員剣美会	山下	生田	福田		6 3
	⊗ ⊗	⊙ ⊙	⊚ ⊙		
徳島大学蔵本A	⊚				1 0
	安井	大西	樋口		

準決勝

	先鋒	中堅	大将	代表戦	勝本数 勝者数
徳島大学蔵本C	七條	北村	中川		2 1
			⊚ ⊙		
徳島大学蔵本A	⊚ ⊙	⊗ ⊗	⊗		5 2
	安井	大西	樋口		

三位決定戦



	先鋒	中堅	大将	代表戦	勝本数 勝者数
徳島大学蔵本D	藤田		酒井		2 1
	⊙ ⊗				
徳島大学蔵本C		○ ○	⊗ ⊗		4 2
	七條	北村	中川		

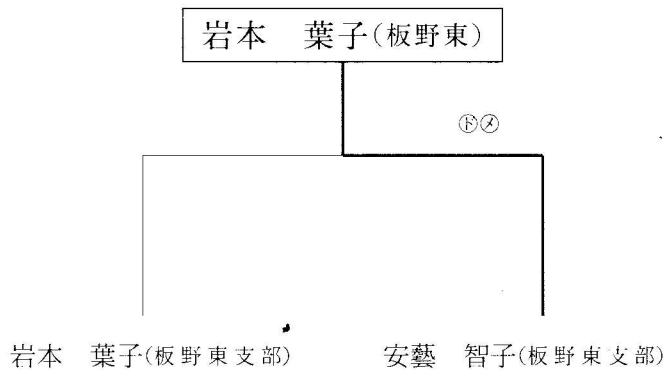
個人戦 <三段以下の部>

優勝 長栄 知佳 (鳴門教育大学)
 準優勝 山下 純子 (鳴門支部)
 第三位 内山 世璃奈 (鳴門教育大学)
 第三位 三宅 由莉 (徳島文理大学)



個人戦 <区分2>

優勝 安藝 智子 (板野東支部)



第39回 徳島県社会人剣道大会

予選リーグ

日 時 平成22年10月17日(日) 午前 9 時30分
場 所 鳴門ソイジョイ武道館

A	板野西部B	海部支部	徳島県庁	勝数	勝者数	勝本数	順位
板野西部B		$\frac{6}{3}$	$\frac{4}{2}$	2	5	10	1
海部支部	$\frac{3}{2}$		$\frac{3}{2}$	0	4	6	3
徳島県庁	$\frac{4}{1}$	$\frac{4}{2}$		1	3	8	2

B	阿波支部(竹)	小松島B	振武館B	勝数	勝者数	勝本数	順位
阿波支部(竹)		$\frac{2}{1}$	$\frac{2}{2}$	1	3	4	2
小松島B	$\frac{5}{3}$		$\frac{3}{2}$	1	5	8	1
振武館B	$\frac{2}{1}$	$\frac{3}{2}$		0	3	5	3

C	徳島支部A	三好支部(梅)	板野東支部A	勝数	勝者数	勝本数	順位
徳島支部A		$\frac{7}{4}$	$\frac{7}{4}$	2	8	14	1
三好支部(梅)	$\frac{0}{0}$		$\frac{7}{4}$	1	4	7	2
板野東支部A	$\frac{1}{1}$	$\frac{3}{1}$		0	2	4	3

D	徳島刑務所	渭東剣友会	麻植支部B	上八万剣道倶楽部	勝数	勝者数	勝本数	順位
徳島刑務所		$\frac{5}{3}$	$\frac{8}{5}$	$\frac{7}{3}$	3	11	20	1
渭東剣友会	$\frac{2}{1}$		$\frac{3}{2}$	$\frac{6}{3}$	2	6	11	2
麻植支部B	$\frac{0}{0}$	$\frac{1}{1}$		$\frac{4}{2}$	1	3	5	3
上八万剣道倶楽部	$\frac{1}{0}$	$\frac{1}{1}$	$\frac{1}{0}$		0	1	3	4

E	阿南支部B	美馬支部A	北井上剣道教室	勝数	勝者数	勝本数	順位
阿南支部B		$\frac{8}{4}$	$\frac{2}{1}$	1	5	10	2
美馬支部A	$\frac{0}{0}$		$\frac{1}{0}$	0	0	1	3
北井上剣道教室	$\frac{3}{2}$	$\frac{7}{4}$		2	6	10	1

F	名西支部	三好支部(松)	徳島錬心館	勝数	勝者数	勝本数	順位
名西支部		$\frac{7}{3}$	$\frac{2}{1}$	1	4	9	2
三好支部(松)	$\frac{2}{1}$		$\frac{0}{0}$	0	1	2	3
徳島錬心館	$\frac{4}{2}$	$\frac{6}{3}$		2	5	10	1

予選リーグ

G	大塚製薬	美馬支部 C	小松島 C	清風館	勝者数	勝者数	勝者数	順位
大塚製薬		$\frac{8}{5}$	$\frac{6}{3}$	$\frac{9}{4}$	3	12	23	1
美馬支部 C	$\frac{2}{0}$		$\frac{5}{3}$	$\frac{2}{1}$	1	4	9	3
小松島 C	$\frac{2}{1}$	$\frac{2}{1}$		$\frac{3}{1}$	1	3	7	4
清風館	$\frac{1}{0}$	$\frac{7}{4}$	$\frac{2}{1}$		1	5	10	2

H	麻植支部 A	徳島支部 C	板野東支部 B	勝者数	勝者数	勝者数	順位
麻植支部 A		$\frac{5}{3}$	$\frac{9}{5}$	2	8	14	1
徳島支部 C	$\frac{2}{1}$		$\frac{7}{4}$	1	5	9	2
板野東支部 B	$\frac{1}{0}$	$\frac{3}{1}$		0	1	4	3

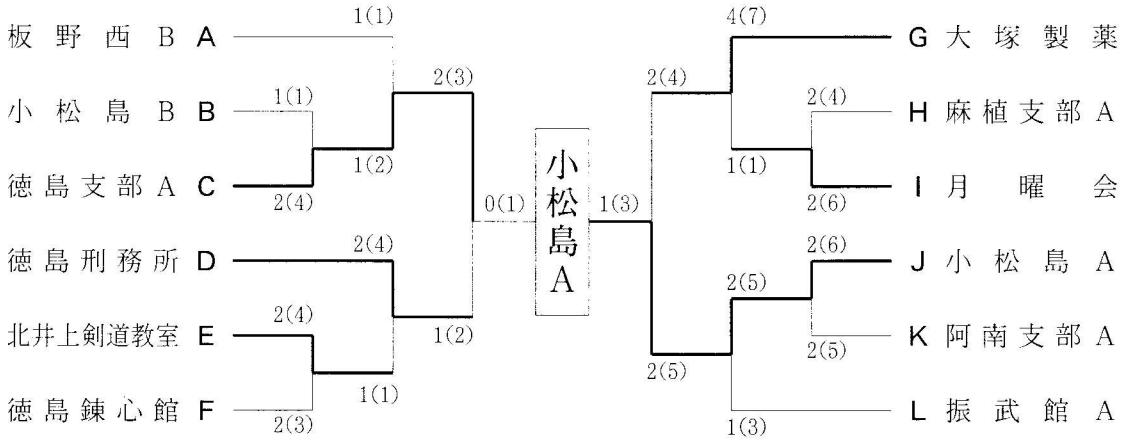
I	月曜会	阿波支部(梅)	鳴門支部	勝者数	勝者数	勝者数	順位
月曜会		$\frac{2}{2}$	$\frac{3}{2}$	2	4	5	1
阿波支部(梅)	$\frac{2}{1}$		$\frac{9}{4}$	1	5	11	2
鳴門支部	$\frac{2}{1}$	$\frac{3}{1}$		0	2	5	3

J	小松島 A	三好支部(竹)	板野西 A	勝者数	勝者数	勝者数	順位
小松島 A		$\frac{5}{2}$	$\frac{6}{4}$	2	6	11	1
三好支部(竹)	$\frac{3}{1}$		$\frac{10}{5}$	1	6	13	2
板野西 A	$\frac{2}{1}$	$\frac{0}{0}$		0	1	2	3

K	阿南支部 A	美馬支部 B	徳島支部 B	勝者数	勝者数	勝者数	順位
阿南支部 A		$\frac{4}{3}$	$\frac{5}{3}$	2	6	9	1
美馬支部 B	$\frac{2}{1}$		$\frac{8}{4}$	1	5	10	2
徳島支部 B	$\frac{1}{1}$	$\frac{0}{0}$		0	1	1	3

L	振武館 A	板野東支部 C	阿波支部(松)	蔵本剣道クラブ	勝者数	勝者数	勝者数	順位
振武館 A		$\frac{9}{5}$	$\frac{8}{4}$	$\frac{8}{4}$	3	13	25	1
板野東支部 C	$\frac{0}{0}$		$\frac{1}{1}$	$\frac{0}{0}$	0	1	1	4
阿波支部(松)	$\frac{0}{0}$	$\frac{2}{1}$		$\frac{2}{0}$	1	1	4	3
蔵本剣道クラブ	$\frac{4}{1}$	$\frac{9}{5}$	$\frac{9}{5}$		2	11	22	2

決勝トーナメント



準決勝戦

チーム名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	代表	得点
徳島支部 A	河村	井村	玉田	生田	福多		3 2
	⊗ 一本勝				⊙ ⊙		
徳島刑務所		⊙ ⊗					2 1
	高橋	金野	前田	片山	森		

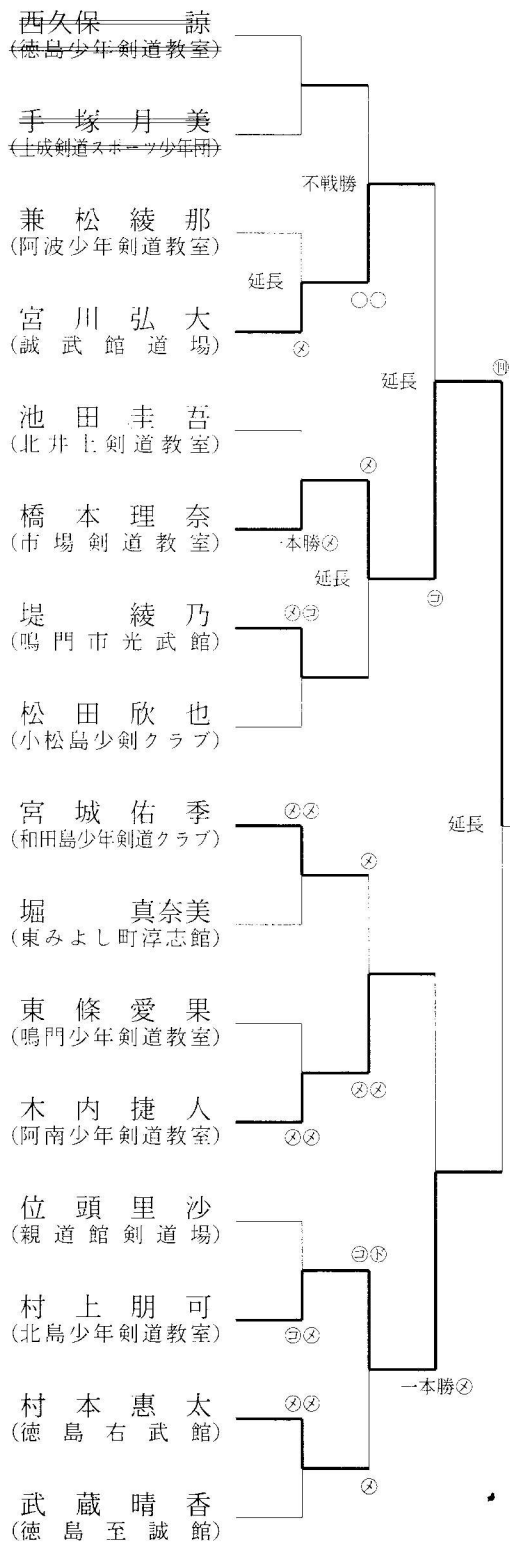
チーム名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	代表	得点
大塚製薬	櫻木	西田	奥田	櫻井	元木		4 2
	⊗	⊗ ⊙			⊙ 一本勝		
小松島 A		⊙ ⊗	⊗ ⊗ △	⊙ ⊗			5 2
	⊙ ⊗	原	武蔵	園田	佐藤	本田	

決勝戦

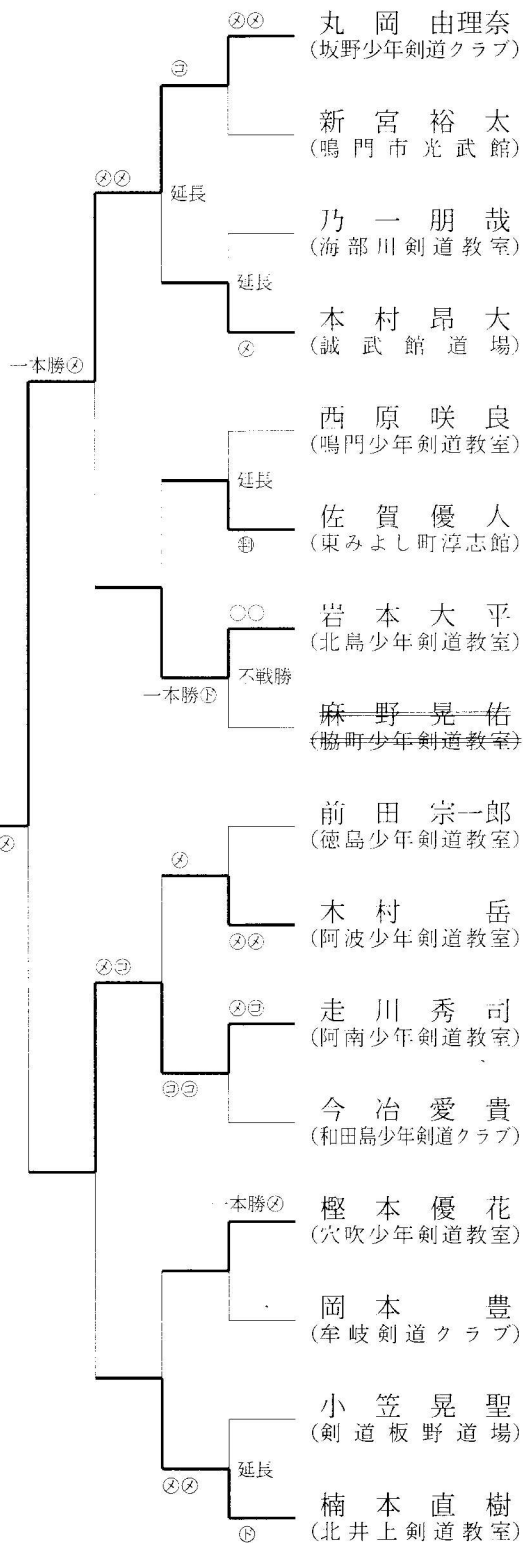
優勝 小松島 A
 準優勝 徳島支部 A
 第3位 徳島刑務所
 第3位 大塚製薬

チーム名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	代表	得点
徳島支部 A	河村	井村	玉田	生田	福多		1 0
				⊗			
小松島 A	⊗ ⊗			⊙ ⊗	△		3 1
	原	武蔵	園田	佐藤	本田		

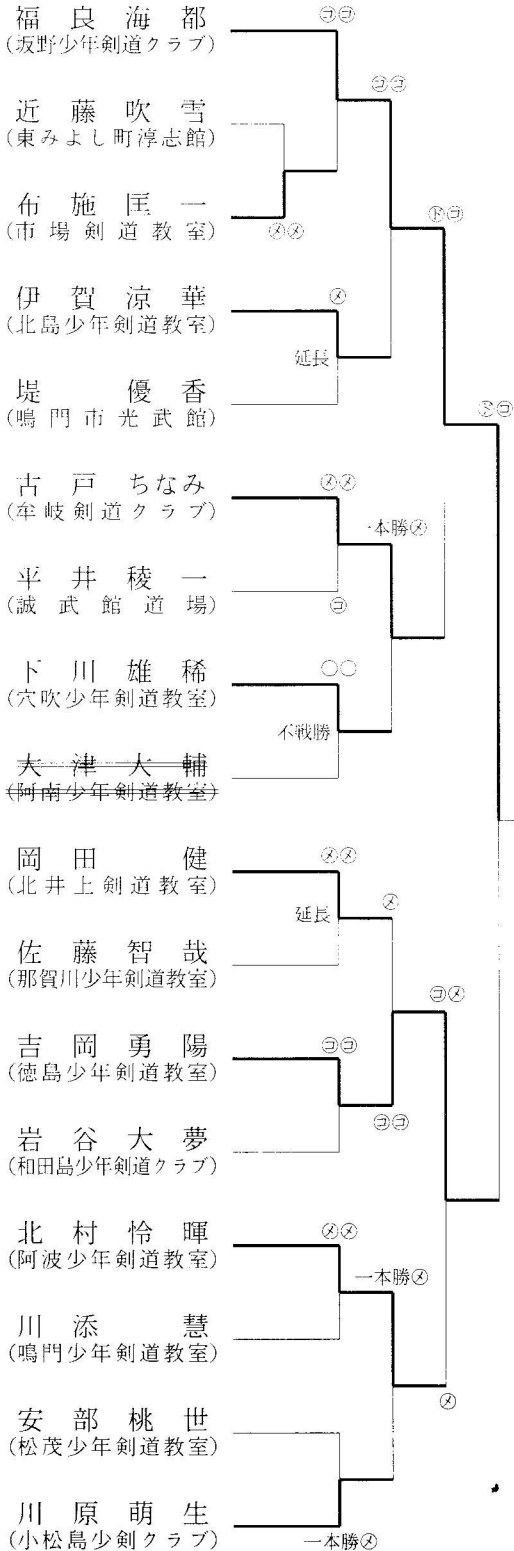
〈個人戦B組〉



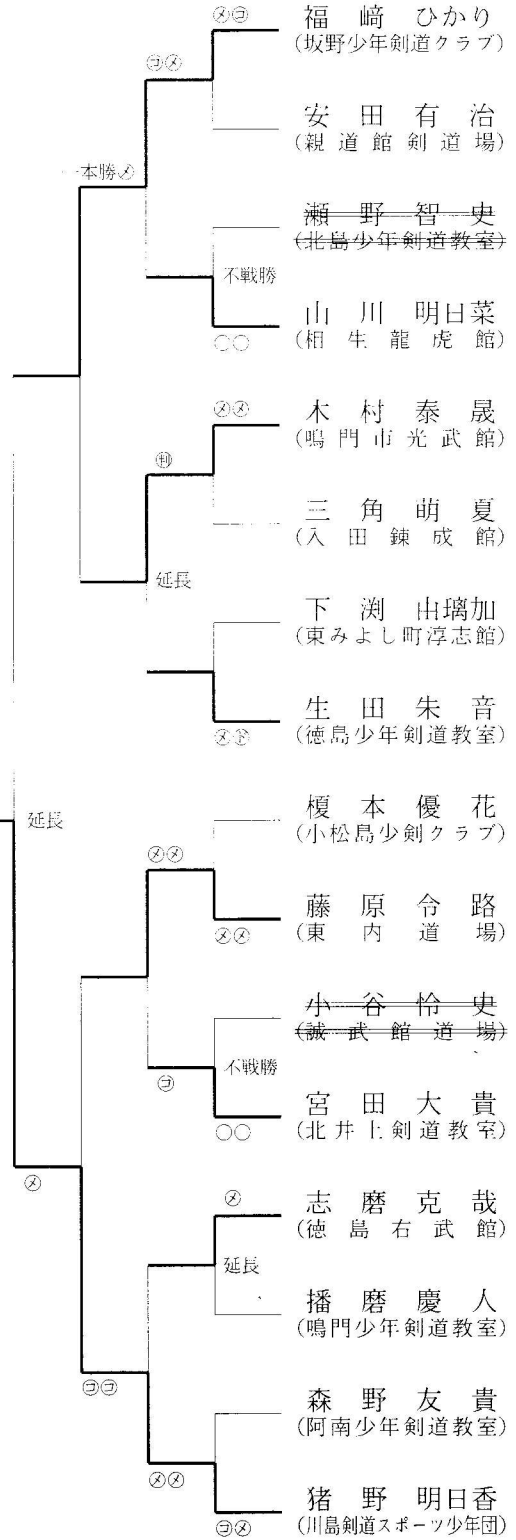
〈個人戦A組〉



〈個人戦D組〉



〈個人戦C組〉



準決勝戦 (団体戦)

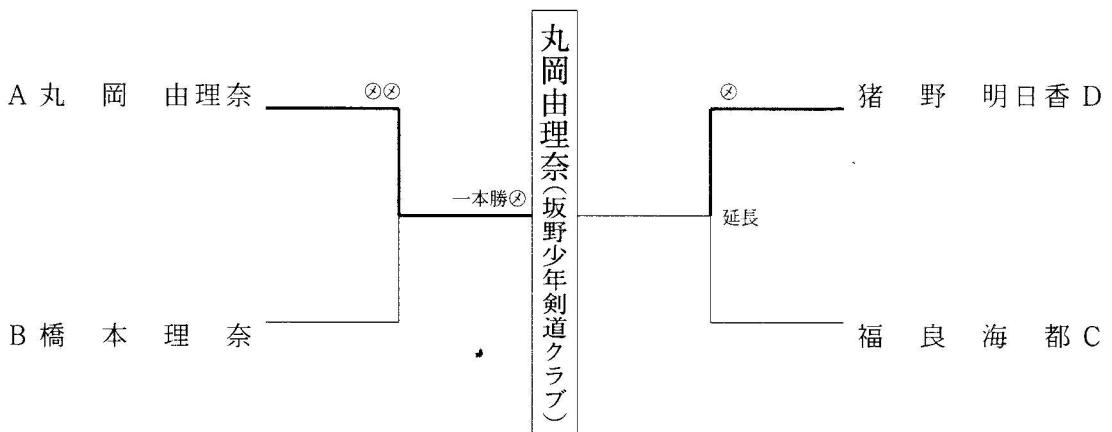
チーム名	先鋒	次員	中堅	副将	大将	
徳島至誠館	朝田	後藤	川田	西名	湯浅	2 1
	△	△	Ⓣ Ⓣ	△	△	
徳島少年剣道教室	△	△	Ⓣ	△	△	1 1
	秋田	熊橋	高瀬	水谷	塚田	

チーム名	先鋒	次員	中堅	副将	大将	
北井上剣道教室	鎌田	行譜	行譜	富田	美馬	3 2
	△	Ⓣ Ⓣ	Ⓣ 一本勝	△	△	
小松島少剣クラブ	Ⓣ Ⓣ	△	△	△	Ⓣ Ⓣ	4 2
	松山	井内	鳴川	喜多	長谷川	

決勝戦 (団体戦)

チーム名	先鋒	次員	中堅	副将	大将	
徳島至誠館	朝田	後藤	川田	西名	湯浅	4 2
	Ⓣ 一本勝	Ⓣ 一本勝	Ⓣ △	△	Ⓣ	
小松島少剣クラブ	△	△	△	△	Ⓣ Ⓣ	3 1
	松山	井内	鳴川	喜多	長谷川	

決勝戦 (個人戦)



第21回 徳島県小・中学校剣道強化錬成大会

女子の部

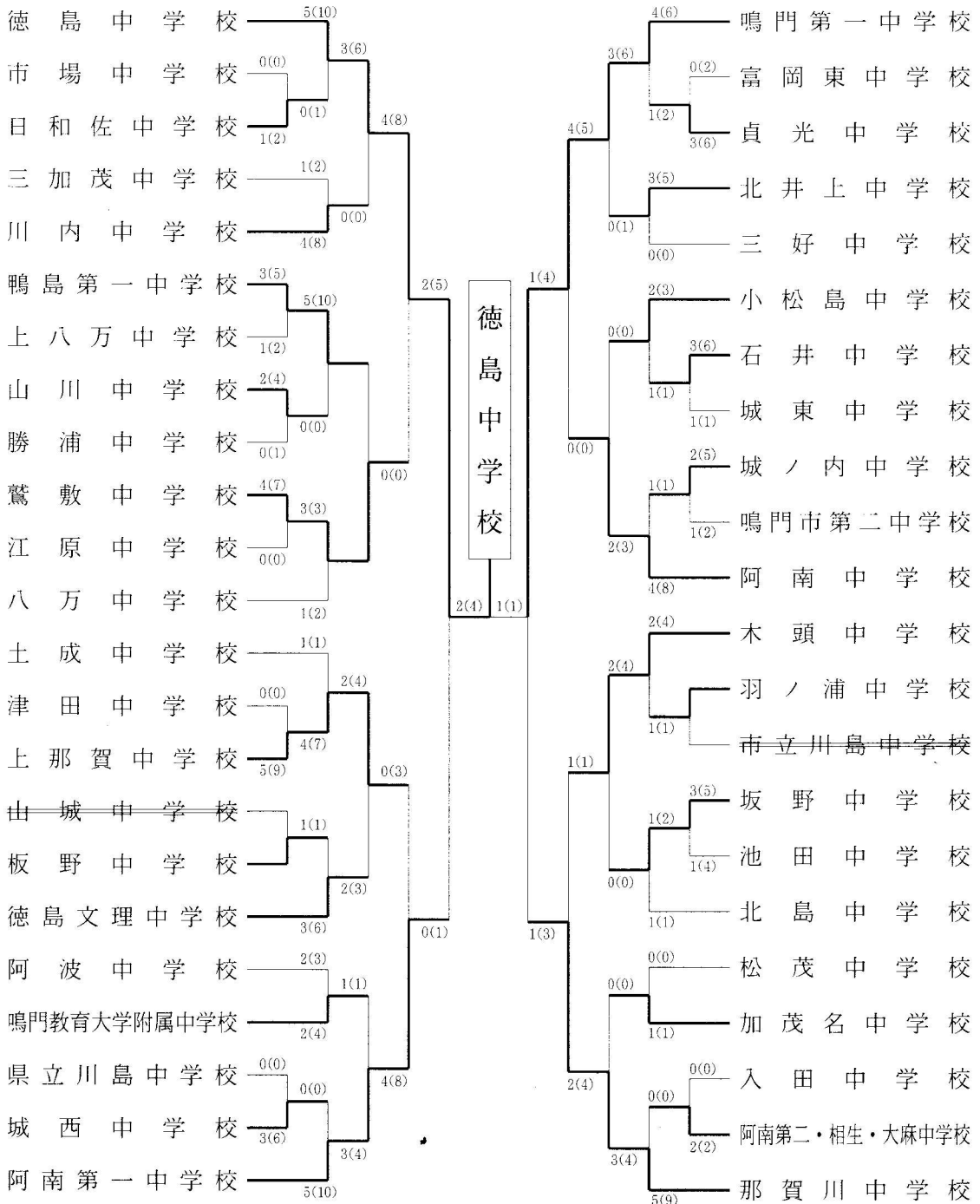
日 時 平成23年1月23日(日) 午前9時30分
場 所 鳴門ソイジョイ武道館

優勝 徳島文理中学校
準優勝 鳴門第一中学校
第3位 阿波中学校
第3位 新野中学校



男子の部

優勝 徳島中学校
 準優勝 鳴門第一中学校
 第3位 阿南第一中学校
 第3位 那賀川中学校



準決勝戦 (男子の部)

チーム名	先鋒	次員	中堅	副将	大将	
徳島中学校	中西	古屋	南谷	中川	平尾	5 2
	△	△	⊖ ⊗	⊗ ⊗	△ △ ⊗	
阿南第一中学校	△	△			△ ⊗	1 0
	野村	田上	田邊	金澤	田中	

準決勝戦 (女子の部)

チーム名	先鋒	次員	中堅	副将	大将	
徳島文理中学校	佐々木	平島	玉田	大嶺	川原	7 4
	△ ⊖ ⊗	△	⊗ 一本勝	⊗ ⊖	⊗ ⊖	
阿波中学校		△	△		△ ⊗	0 0
	竹内	岡田	佐藤	秋山	尾関	

チーム名	先鋒	次員	中堅	副将	大将	
鳴門市第一中学校	井形	玉川	川邊	玉川	西條	4 1
	⊕ ⊗	△ ⊖	⊗	△	△	
那賀川中学校		△ ⊗	⊖	⊖ 一本勝	△ 藤坂	3 1
	松本	坪井	庄野	濱田		

チーム名	先鋒	次員	中堅	副将	大将	
新野中学校	馬見	島村	船木	林	江川	0 0
	△	△	△	△	△	
鳴門市第一中学校		⊗ ⊗	⊕ ⊕	⊖ 一本勝	⊖ 一本勝	6 4
	岩木	石村	藤田	中井	深見	

決勝戦 (男子の部)

チーム名	先鋒	次員	中堅	副将	大将	
徳島中学校	中西	古屋	南谷	中川	平尾	4 2
	⊗ ⊗	⊗ ⊕		△	△	
鳴門市第一中学校	△ △		⊖ 一本勝	△	△	1 1
	井形	玉川	川邊	玉川	西條	

決勝戦 (女子の部)

チーム名	先鋒	次員	中堅	副将	大将	
徳島文理中学校	佐々木	平島	玉田	大嶺	川原	1 1
	△	△	⊗ 一本勝	△	△	
鳴門市第一中学校		△	△		△	0 0
	岩木	石村	藤田	中井	深見	

徳島新聞に見る戦いの跡

男子6人女子4人全国切符

剣道

都道府県対抗県予選

剣道の全日本都道府県対抗優勝大会の徳島県予選が28日、鳴門ノイシヨイ武道館であり、男子6部門、女子4部門で県代表が決まった。

男子代表は次鋒(じほう)が山本義征(大徳大)、五将に日和田藤海(麻植支部)、中堅は白木洋一(中西支部)、三将は山名信行(警察支部)、副将は山本泰史(徳島支部)、大将は近藤巨(警察支部)。

女子は次鋒を平野千尋(大徳大)、中堅を前田奈々枝(阿波支部)、副将を北村瑠(阿波支部)、大将は竹内佳代子(鳴門支部)となった。

先鋒(高校生)は昨年11月の県高校選手権を制した男子・井上輝大(富岡西)と女子・岡内栞未(富岡西)が務める。

男子の全日本都道府県対抗優勝大会は4月29日に大阪市中央体育館で、女子は7月17日に東京の日本武道館でそれぞれ行

われる。

【男子】次鋒(大学生)の部

決勝 松本(中央)3-1 西白木(メー) 徳島支部

【女子】次鋒(高校生)の部
決勝 山本(大徳大)2-0 伊勢(高知森大) 徳島支部

日和田(メー) 櫻木(山本)

【中堅(教員)】の部

決勝 山本(大徳大)2-0 伊勢(高知森大) 徳島支部

【副将(35歳以上)】の部
決勝 山本(大徳大)2-0 伊勢(高知森大) 徳島支部

山本(大徳大) 佐々木(山本)

【大将(50歳以上)】の部

決勝 山本(大徳大)2-0 伊勢(高知森大) 徳島支部

【女子】次鋒(大学生)の部
決勝 平野(大徳大)2-0 伊勢(高知森大) 徳島支部



男子三将の部で優勝した山名三将(鳴門ノイシヨイ武道館)

一振りにかける
○：精銳がさるる男子三将の部で県内唯一の二刀流の使い手・山名が頂点に立った。決勝は大学の1学年先輩で、県警でともに練習した山名

が相手。手の内を知り尽くした者同士の対戦は延長戦までもつれ込んだ。「我慢比べで一振りにかけては、最後は体が勝手に反した」と山名。相手の振り左の小太刀で抑え、右の小太刀で

コテを打ち込み勝負を決めた。都道府県対抗大会をはじめ、全国警察大会などで上位を目指す。「小太刀が二刀流の生命線。攻めのパリエーションを広げたい」と意気込

前田(古岡) 副将(35歳以上) 徳島支部の
北村(山本) 阿波支部
大将(50歳以上) 徳島支部
女子次鋒(大学生) 平野(大徳大) 徳島支部

「小学生のときからやり合ってきた相手は竹刀を出したら大抵勝った。大



27人出場の部門で優勝(決勝) 相手には昨年コテを取られ、たので手を上げないように注意を払った。迷ったすきを逃さずメンを打ち込めた



男子羽ノ浦 徳島文理初V

剣道

四国中学新人大会

剣道の第5回四国中学校新人大会は28日、阿波中体館で各県の上位4チームが参加して行われ、男子は羽ノ浦、女子は徳島文理がいずれも初優勝した。県勢のアベック優勝は4大会ぶり。

【男子】予選リーグA組(羽ノ浦) 徳島文理 2-1 高知 徳島文理 2-1 高知

【女子】予選リーグB組(徳島文理) 徳島文理 2-1 高知 徳島文理 2-1 高知

【男子】予選リーグC組(羽ノ浦) 徳島文理 2-1 高知 徳島文理 2-1 高知

ライバルに快勝

ライバルに快勝

○：徳島同士の対決となった男子決勝を羽ノ浦が制した。予選リーグと決勝トーナメントで5戦5勝。岩原主将「写真」は「全員で勝ちにいった。気持ちをつなぐ剣道ができた」。



決勝の相手は小学校の剣道教室(徳島全誠館)時代から腕を競ってきたライバル徳島中。11月の新人大会では次鋒までリードしながら逆転を許していた。「あの時の二の舞いにならないよう気合を入れた」と4-0の快勝。徳島中との直接対戦成績も3勝2敗と、一つ勝ち越しに成功した。

3月1日

少年剣士384人 健闘を誓う 鳴門

全国大会が開幕

全国スポーツ少年団剣道交流大会が27日、鳴門市の鳴門アミノバリューホールで開幕した。3日間の日程で、都道府県代表の48チーム384人が熱戦を繰り広げる。



宣誓する阿南市チームの福田選手(左)と玉田選手(右)＝鳴門アミノバリューホール

この日は開会式があり、徳島県代表の阿南市の鳴門両市のチーム計14人をはじめ、選手全員が会場を行進。阿南市チーム

の福田峻斗君(12)と岩脇小6年と玉田真子さん(同)と、野小6年が「全国の剣友と交流を深め、正々堂々と最後まで戦います」と宣言し、健闘を誓った。

大会は小学4年生から中学3年生が対象。小学生は団体戦、中学生は個人戦でそれぞれ戦う。28日に予選リーグ、最終日の29日に決勝トーナメントが行われる予定。

県警で女性初 術科指導員に

北署・臼木さん

徳島県警に女性では初の術科指導員が誕生した。徳島北署の巡査部長臼木あゆみさん(36)事務課1で、4月から署員に剣道と逮捕術を指導している。剣道4段の臼木さんは「署員が現場で力を発揮できるように、指導の場になります」と意気込んでいる。

警察官は鍛錬のため、練があり、それぞれの種目から剣道、柔道、目撃技術に秀でた警察官逮捕術、拳銃といった術から7人を指導員に指定。科に取り組み。県警本部 臼木さんは女性では初めと県内署で定期的に訓練指定された。



臼木さんは1996年、県警警務部に、女性初の柔剣道大会では、女性の部で2006、07両年度に連覇した実力者だ。

今春の異動で警察学校から北署に赴任し「男性を含めて署内で一番強い」と臼木の矢が立つた。

警察学校時代は、助教として術科などの指導経験を積んだ。普段は物静かだが、「竹刀を持つと人が変わる」と高い集中力で、一目置かれる臼木さん。「自分の身だけでなく、住民の安全を守るのが警察官。心身ともに鍛えたい」と話している。

「心身ともに鍛える」

術科指導員
逮捕術
速剣

術科指導員は、剣道と逮捕術を指導する臼木巡査部長(徳島北署)

4月15日

都道府県対抗剣道・県代表

得意技に磨き 8強狙う

剣道の第58回全日本都道府県対抗優勝大会(20日・大阪市中央体育館)に出場する徳島県代表チームが、上位進出を目指し最後の調整に励んでいる。

メンバーは県予選を勝ち抜いた7人。五将(35歳未満の社会人)の日和田慈海(吉野川市教育委員会)以外の6人が昨年から入れ替わったが、例年に劣らず、能力の高い布陣となった。

先鋒(せんぽう)は高校生。昨年は11月の県高校選手権を制した井上幹大(高岡西)次鋒(じきよう)は山本義征(たいせい)五将(ごしょう)は日和田、中堅(ちゅうけん)教員(きょういん)は白木洋一(びやくちゆういち)三将(さんしょう)警察

山名信行(やまなのぶゆき)副将(ふくしょう)は35歳以上の社会人。山本幸史(やまもとゆきし)大将(だいしょう)は日亜化学(にっあけがく)の社員。教士(きょうし)七段(しちだん)以上。近藤巨(ちか)は県警(けんけい)剣道師範(けんどうしはん)。

選手たちは本番を前に、週2度の合同練習で気合の入った竹刀(たけとう)さばきをみせ、それぞれの得意技に磨きをかけている。米倉滋監督(よこむらたけ しげ)は「どの選手も練習量が多く、団体などで全国経験も豊富。先鋒(せんぽう)次鋒(じきよう)で勝てれば波に乗れる」と期待する。

1回戦は強豪の佐賀で勝てば昨年準優勝の京都と当たる。大将(だいしょう)の近藤(ちか)主将(しゅしょう)は「まず初戦突破を目指す。次は一戦一戦全力で挑み、ストロ(ストロ)を狙う」と話した。

4月18日



20日の本番に向け最終調整に余念がない県代表選手。警察学校体育館

剣道連盟の審判指導講師

米倉さん(徳島市)認定



米倉滋さん

日本剣道連盟は審判講習会の指導講師に徳島県の教士(きょうし)八段(はちだん)・米倉滋(よこむらたけ しげ)さん(55)に徳島市八万町馬場(うまばたけ)の13人を認定した。指導講師は審判員を養成する人材で、米倉さんの審判経験や剣道に対する真摯(しんし)な姿勢が認められた。

県内の認定者は2人目。米倉さんは今後、同連盟の講習会に応じて全国規模の講習会に参加、培ってきた審判技術を伝えていく。

指導講師は審判能力の向上と優れた剣道人の育成を目的に2000年度から同連盟が認定してきた。八段以上の有段者で、全国大会の審判経験者から選ばれる。

米倉さんは県内大会はもとより、昨年の新潟県体を含め団体2度、都道府県対抗優勝大会2度、全国家庭婦人大会1度など、全国規模の大会で審判員を務めた。県警時代は剣士として活躍。退職後は自宅で剣道場を開き、若手の育成に力を注いでいる。

県内2人目「人材育成に尽力」

今回の13人の認定で全国(けんこく)の指導講師は計1155人になった。米倉さんは「レベルの高い審判員の育成に力を尽くし、剣道の発展に貢献したい」と話している。

4月20日

4月30日

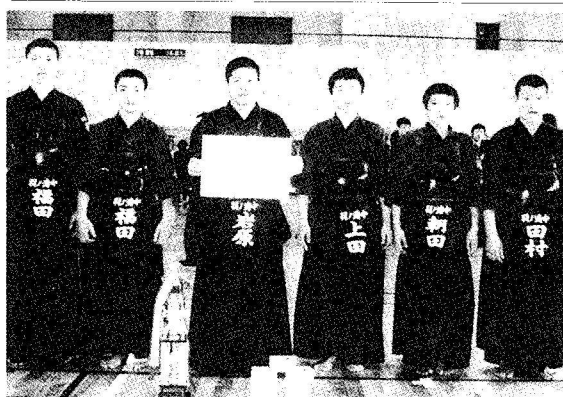
徳島1回戦敗退
 都道府県対抗剣道
 剣道の全日本都道府県
 対抗優勝大会は20日、大
 阪市中央体育館で行わ
 れ、徳島は1回戦で佐賀
 に1-3で敗れた。決勝
 は東京が福岡を5-0で
 下し2年ぶり10度目の優
 勝を果たした。

東	▽1回戦	佐賀	徳島
京	5-0	井上	井上
福		山本	山本
岡		日和田	日和田
		白木	白木
		山名	山名
		山本	山本
		近藤	近藤



男子羽ノ浦中が3位

第15回比婆連峰旗選抜
 大会(4日・広島県庄原
 市立体育館)は中・四国
 をはじめ近畿、九州など
 から中学男子57チーム、
 同女子42チームが参加し



て争われた。徳島県の男
 子・羽ノ浦は準決勝で二
 名(奈良)に敗れたが、
 3位入賞と健闘した。
 (奈良)2-0羽ノ浦

5月23日

比婆連峰旗剣道選抜大会で3位入賞した男子
 ・羽ノ浦中

**子文理中に栄冠
 女富岡東高V3**

第35回山家旗県大会
 (4月25日・鷺敷B&G
 海洋センター体育館)は
 中学47チーム(男26、女
 子21)、高校31チーム
 (男22、女9)の計78チ
 ームが参加。中学は男子
 が羽ノ浦、女子は徳島文
 理が栄冠に輝き、高校は
 男子が富岡西A、女子は
 富岡東Bが制した。富岡
 東高女子は3連覇となっ
 た。
 【男子】中学○羽ノ浦(田村隆
 展、朝田大樹、上田雅大、福田篤
 己、岩原将平、福田峻斗)○徳島
 文理
 【女子】
 ①富岡西A(安部晃太
 朗、上田義弘、岡田恭平、小笠原
 高) 5
 ②富岡東B(山本千尋、
 工藤麻美、松浦名穂、青木万里
 子、杉谷雪、山本悠、中村亜梨
 沙) ②富岡東A○城北・那賀
 【個人賞】勝ち抜き賞 筈井栄
 一(城北高)10、小笠原蔵(阿南
 工高)9、平野智将(鳴門高)
 8、栗野文那(富岡東高)7、松
 本好史(徳島文理高)、安部晋太郎
 (富岡西高)、松村拓矢(阿南工
 高)6、上田義弘(富岡西高)安
 部晃太郎(同)、井上亜美(城北
 高)中川由美子(同)、黒木景太
 (同)、松浦名穂(富岡東高)谷優
 佑(徳島科技高)、木下裕貴(香蘭
 高)上田勇輝(阿南高専)、湯浅鼓
 太郎(阿南工高)、村島智也(鳴門
 工高)5

10 県高校総体
青春キラリ

2009年春に活動を始めた徳島商剣道同好会が県高校総体の男女団体戦に挑む。正式な部として活動していた時以来で男子が17年ぶり、女子は11年ぶり。廃部を乗り越えてつかんだ舞台上に、6人の剣士は「最低でも1勝」と闘志をみなぎらせている。

徳島商・剣道同好会

復活果たし6人一丸

なつた。昨春、磯部健治教諭が赴任し転機が訪れた。四国高校選手権個人優勝などの経歴があり、錬士六段の磯部教諭。剣道に対する強い思いから同好会を立ち上げた。しかし入会したのは篠原寛弥主将と鷺池明日希(ともに当時2年)の男子2人だけ。同好会のため練習場所の確保に苦労した。練習も少人数で鷺池は「寂しかったので何度も辞めようと思った」と話す。

勧誘活動が実った今春に男子・四宮宏記、女子・仁木彩佑主将、天野真吏、中村啓子の1年生4人が加わり、団体戦に必要な男女各3人がそろった。「徳島商」として出られることは誇り」と篠原主将は喜ぶ。

ただ初戦突破の道は険しい。県総体剣道の団体戦は通常5人が出場。勝ち抜き戦でないため、すでに2敗(4本負け)スタートとなる。仁木は「1人でも負けると時点で終わりだからプレッシャーは相当。でも可能性が1%でもある限り全力を尽くす」と力を込める。

男子の初戦は阿波西で女子が城ノ内。「徳島商の剣道を復活させたのが自分たち。必ず勝って歴史の1ページを刻みたい」と篠原と鷺池は誓う。今日も竹刀がぶつかり合う音が体育館から響く。

(阿部研一)

第50回徳島県高校総体が一部競技を除いて6月4日に開幕する。32競技で展開される熱戦の主役は部員不足に苦しむチームや、県外から強豪校へ進学したり、練習環境に恵まれなかったりする選手などさまざま。頂点を目指してひたむきに練習する姿を紹介する。



県総体を前にミーティングをする徳島商剣道同好会の選手たち。同校体育館

男子 鳴門一初V 徳島文理 女子

剣道

県中学選手権

剣道の第39回徳島県中学校選手権は12日、鳴門ソイジョイ武道館で男子46校、女子34校が参加して団体戦を行い、男子・鳴門一、女子・徳島文理が初優勝した。

【男子】1回戦 梶5-0新野、阿波3-2勝浦、阿南4-1日和佐、入田3-2松茂、土成3-2上板、那賀川4-0付属、三好4-0津田、坂野5-0市場、石井3-2山川、板野2-1北井上、加茂2-1池田、八万2-1小松島、国府4-0県立川島、上那賀4-0城東、2回戦 羽浦3-0相生、阿波3-1瀬戸、阿南3-2川内、徳島2-本教勝、阿南2-1市立川島、徳島文理4-1三好、鳴門4-1坂野、石井3-1白光、北島4-1坂野、上八万2-1加茂名、木頭4-0山城、八万4-0脇町、城ノ内3-1園府、徳島5-0上那賀、3回戦 羽浦5-0阿波、徳島1-本教勝、1回戦 阿南、阿南1-

2-0土成、徳島文理3-0那賀川、鳴門4-0石井、北島3-1上八万、木頭3-0八万、徳島3-1城ノ内、準々決勝 羽浦3-1徳島、徳島文理4-1阿南、鳴門4-0北島、徳島5-1木頭、準決勝 徳島文理0-代表勝、0羽浦、鳴門2-代表勝、2徳島

▽決勝
鳴門 2-2 徳島文理 (本教勝)
西條 1-0 阿部
○井形 3-0 高野
福居 1-0 高木
川邊 1-0 金川

○山本 1-0 谷本
【女子】1回戦 三好3-0付属、土成5-0(棄権) 〇山城、2回戦 徳島文理4-0牟岐、松茂2-1(本教勝) 2木頭、新野2-1大塚、阿波5-0(棄権) 〇阿南、池田3-1相生、県立川島3-1小松島、八万2-1(代表勝) 2瀬戸、北井4-1三好、加茂名4-1土成、津田3-1坂野、阿南1-0(本教勝) 1日和佐、城内1-0(本教勝) 1徳島、鳴門4-0城東、北島1-0(本教勝) 1鳴門、石井4-0三好、那賀川4-0城野、3回戦 徳島文理4-0松茂、阿波2-0新野、池田1-0松本



女子決勝・徳島文理対那賀川 副将戦でメンの一本勝ちで勝利に貢献した徳島文理の栗野(左)鳴門ソイジョイ武道館



男子決勝・鳴門一対徳島文理 大将戦を一本勝ちした鳴門一の山本(右)

コテで競り勝つ

○：鳴門一男子が競り勝った。先鋒(せんぼ)を落とすとして迎えた次鋒戦。一絶対取り返すと井形は積極的の攻め、コテの二本勝ち。得意のドウ、メンに加え練習したコテが生き、攻撃の幅が広がった。

副将戦で負け1-2となり、勝負の行方は大将戦に。「主将として踏ん張らなければ」と山本は、井形とともに技を磨いたコテで一本勝ち。勝敗で徳島文理と並んだが本数で1本上回り優勝。緊張していた選手たちの表情が一気に喜びに変わった。

那賀川V4阻む

○：徳島文理女子が那賀川の4連覇を阻んだ。先鋒から中堅まで引き分け。副将栗野は「みんながつかないでくれた。自分が一本取らなければ」得意のメンを狙った。

最後まで集中力を切らず相手のすきを突きメンの一本勝ち。大将の玉田主将は前へ前へと出て引き分けた。「チームみんなが勝つ思いを強く持っていたので負けなかった」と振り返った。

6月13日

県人学生 地区大会で活躍

インカレでも好成績を期待

7月10日

徳島県出身の大学生が西日本各地で行われた学生選手権などで優勝するなど大活躍した。地区大会を勝ち抜いた強豪が集う7、8月の全日本学生選手権（インカレ）でも好成績が期待できそうだ。（阿部研一）



剣道 関西選手権で初優勝

平野（大鳴門高3年出）全日本大会へ

剣道の関西女子学生選手権（5月・大阪）で大体大3年の平野千尋3段（鳴門高出）が初優勝を果たした。3、4の両日、日本武道館で行われる全日本女子学生選手権に出場する。関西女子学生選手権には173人が参加。平野は決勝まで危げなく勝ち上がり、決勝で日本代表強化指定選手の藤山（大体大4年）と対戦。一進一退の攻防が延長戦まで続いたが、一瞬のすきをついた平野が得意のメンを決めた。

平野は鳴門一中時代に県総体個人戦で3連覇。鳴門高では1年生ながら県総体個人戦を制した。大体大進学後も団体戦は西日本女子学生大会で優勝し、個人戦も関西新人大会で頂点に立った。

全日本女子学生選手権に向けて平野は「二戦一戦思い切りぶつかって上位を目指したい」。17日の全日本都道府県対抗女子優勝大会（東京）も徳島県代表の次鋒（しほ）として出場する。



堀金旗少年剣道大会で活躍した剣士たち

低・高学年とも 徳島教室制す

7月11日



第10回堀金旗少年大会（5月30日・小松島市立体育館）は小学生29チーム、277人が参加して行われ、団体戦は低学年、高学年ともに徳島教室が制した。高学年は小松島少剣クラブが昨年に続く準優勝だった。

【団体】小学校低学年は徳島教室、北條智、北條弘、水谷、山室、徳島宇誠館（飯沼、松葉、岩本、大城、後藤）

▽高学年は徳島教室（秋田、熊橋、高瀬、水谷、塚田）、小松島少剣クラブ（松山、川原、鳴川、齊多、長谷川）、鳴門市光武館（北井上教室）

【個人】小学1、2年①福田優那（至誠館）②松本真起（藍住）③北條琢己（徳島）④住友太洋（至誠館）▽3年①島海匠（川島）②齋和佳（至誠館）③久保佳（同）④斎幸佑（同）▽4年生①森本直希（藍住）②藤島里（麻小）③常永康生（鳴島）④橋本ころ（那賀川B&G）▽5年①山本寛大（阿南）②白木利幸（鳴門）③前田宗一郎（徳島）④森榮大（羽通）▽6年①丸岡田理奈（坂野）②福良海都（同）③瀧頭日香（川島）④嶋崎ひかり（坂野）

北島Aが3連覇
中学男子団体
第20回北島ライオンズクラブ少年大会（5月16日・サンフワードーム北島）は小・中学生が団体戦と個人戦を行い、中学男子の団体戦は北島Aが3連覇した。個人戦は小学5年の坂野弘気（北島）が3年連続、同4年の森本直希（藍住）が2年連続で1位になった。

【団体】小学校北島教室、武館道場、中学男子北島、坂野女子、小学校の北島

男子 敦賀(警察支部) 女子 平野(大体)

剣道

全日本選手権県予選

剣道の全日本選手権徳島県予選を兼ねた県選手権は11日、鳴門ソイジヨイ武道館に男子44人、女子23人が参加して行われ、男子は敦賀晋平(警察支部)が初優勝を果たし、女子は平野千尋(大体大)が2年連続2度目の栄冠に輝いた。敦賀は全日本選手権(11月3日・日本武道館)、平野は全日本女子選手権(9月26日・静岡県武道館)に出場する。

【男子】準々決勝 近藤(警察支部)メー 仁科(警察支部)、敦賀(警察支部)トー 山名(警察支部)、横手(警察支部)メー、コ日和田(麻植支部)、山室(警察支部)コー 川添(警察支部)▽準決勝 敦賀メー 近藤、山室コー 横手

【女子】準々決勝 平野(大体大)メー 近藤(環太平洋大)、吉岡(鳴門大学院)メー 藤井(徳島文理大)、栗野(富岡東)

高メーメ星野(徳島文理)盛(富岡東)▽準決勝 平野コト、前田(阿波支部)コメー 吉岡、前田コーコ栗野



男子・敦賀(延長戦を制し初優勝)「先輩との対戦だったので胸を借りるつもりで思い切っていた。身長185センチの高さを生かし、メンを決めることができた」



女子・平野(2連覇を果たし)「相手より先に取っていくことを心掛けた。昨年の全国大会はベスト16。今年は一戦一戦大事にして、ベスト8に入りたい」

7月12日



小松島警察署管内防犯少年剣道大会の上位選手

小・中学生7人 県大会へ

2010年度小松島警察署管内防犯少年大会(6月19日・小松島警察署道場)は管内の剣道教室などに所属する小学5年生から中学2年生までの30人が参加。小学生上位4人と中学生上位3人が県大会(8月1日・鳴門ソイジヨイ武道館)出場を決めた。

【小学校】①丸岡由理奈(坂所園教室は全廃) ②森本優希(吉野) ③志磨雄大(上板) ④仲野和樹(板野) 以上が県大会(8月1日・鳴門ソイジヨイ武道館)へ出場。



剣道

7月17日

野少剣ク、坂野) ②長谷川瑞実(小松島少剣ク、北小松島) ③山和樹(小松島少剣ク、小松島) ④福崎ひかり(坂野少剣ク、坂野)

【中学】①川原真実(徳島文理) ②野口一(坂野) ③川上達也(小松島)

◆第17回坂野防犯少年大会(6月20日・坂野勤労者体育センター) 【小学校】①三浦凛(藍住北) ②矢代宗一郎(藍住東) ③西角春那(同) ④長田和樹(藍住北) Ⅱ

徳島文理

女子 最優秀賞 鳴門一連覇



剣道

第40回相生市少年親善大会兼第27回白虎旗練成大会(6月20日・兵庫県相生市民体育館)の中学生団体戦は、男子36チーム、女子22チームが参加。徳島県は女子の部を制した徳島文理が試合、応援態度などを総合的に評価され、本大会最優秀賞に輝いた。

男子は鳴門一が2連覇を遂げた。男子・徳島文理と女子・加茂名は3位に入賞した。

◇徳島関係の上位



【中学男子】準々決勝 鳴門一 優、中堅II福屋周平、副将II山邊(先鋒II西條翔太、次鋒II井形 智樹、大将II山本大介)5-0総 園田東(兵庫)、上郡(兵庫)3



剣道の相生市少年親善大会兼白虎旗練成大会で【上】最優秀賞を受賞した徳島文理・女子と3位入賞の同男子【下】男子2連覇の鳴門一

社東(岡山)、徳島文理(先鋒II阿部正典、次鋒II高野俊一郎、中堅II高木勝己、副将II金川翠平、大将II谷本晃也)3-2飾磨西

【同女子】準々決勝 徳島文理(先鋒II川原真美、次鋒II大畑菜利子、中堅II佐々木南波、副将II栗野安香音、大将II玉田理沙子)5-0喜連(大阪)、加茂名(先鋒II河野優季、次鋒II藤島信香、中堅II吉田歩生、副将II藤井光莉、大将II永野みき)3-2魚住(兵庫)▽準決勝 徳島文理3-1上郡、総社東3-2加茂名▽決勝 徳島文理3-2総社東

▽最優秀賞 女子・徳島文理

徳島は初戦敗退

徳島は初戦敗退

都道府県対抗女子剣道剣道の第2回全日本都道府県対抗女子優勝大会は17日、東京・日本武道館で行われ、福岡が岡山を2-1で下し、初優勝した。

徳島(岡内、平野、前田、北村、竹内)は1回戦で宮城と対戦し、1-1の本数差で敗れた。

第64回徳島県中学校総合体育大会(県中体連、県教委、徳島新聞社主催)第3日は19日、県内各地で5競技が行われ、バスケットボールの男子は南部が7年ぶり2度目の優勝を果たし、女子は小松島が初の栄冠に輝いた。剣道は男子・羽ノ浦、女子・徳島文理がともに初制覇。ソフトボールの男

県中学校 総合体育大会

第3日

子は鳴教大付属が6年ぶり5度目の頂点に立ち、女子は美馬・岩倉が2連覇した。ハンドボールは城東がアベック優勝し男子は3年ぶり2度目、女子は2年ぶり6度目。20日の休養日を挟み、第4日の21日は卓球、バドミントン、軟式野球、サッカーの4競技が行われる。

羽ノ浦男子 徳島文理女子 初V

剣道

【男子】団体1回戦 土成2-1
 ○勝野、驚数3-1○山城、上八万
 3-1○小松島、八万2-1真光
 坂野5-1○由岐、市川豊1
 三好、鳴島5-1○瀬戸、石井2
 (本数勝ち)2江原、池田5-1
 勝浦、坂野5-1○日佐、相生2
 (本数勝ち)2北島、那須川5-1
 ○阿波2回戦 鳴門5-0土成、驚数3-1上八万、八万2
 (本数勝ち)坂野、羽ノ浦4-0
 市川島、徳島文理3-1○鳴島、石井2-1池田、相生2-1坂野、徳島3-1那須川準々決勝

【女子】団体1回戦 驚数4-1
 ○新野、加茂2-1代表勝ち2
 鳴門、那須川4-0松茂、徳島
 勝、徳島文理3-1城ノ内、加茂
 各3-2那須川

【男子】準々決勝 山本(鳴門) 4-0 高木、谷本、大城
 1-1 相生、徳島、羽ノ浦5-1
 鳴門、徳島3-2 徳島文理
 △決勝
 羽ノ浦 4-1 徳島
 ○田村 コドメ 飯田
 ○朝田 コドメ 飯田
 ○上田 メー 山田
 ○福田 メー 明石
 ○若原 メー 西田
 △個人準々決勝 山本(鳴門) 2-1 庄村(市川島) 高木(徳島文理) メー 西田(徳島) 谷本(徳島文理) メー 田中(阿南) 大城(木頭) メー 山田(徳島) 準決勝 山本(鳴門) 4-0 鳴門 4-0 鳴門

【女子】準々決勝 山本(鳴門) 4-0 高木、谷本、大城
 1-1 相生、徳島、羽ノ浦5-1
 鳴門、徳島3-2 徳島文理
 △決勝
 羽ノ浦 4-1 徳島
 ○田村 コドメ 飯田
 ○朝田 コドメ 飯田
 ○上田 メー 山田
 ○福田 メー 明石
 ○若原 メー 西田
 △個人準々決勝 山本(鳴門) 2-1 庄村(市川島) 高木(徳島文理) メー 西田(徳島) 谷本(徳島文理) メー 田中(阿南) 大城(木頭) メー 山田(徳島) 準決勝 山本(鳴門) 4-0 鳴門



女子決勝・徳島文理対加茂名 先鋒戦を制した徳島文理の川原

苦しんで大きく成長

徳島文理
昨年1、2年生部員5人だけで苦しんだ徳島文理が、この1年で大きく成長し初優勝を手にした。玉田理主将は「今年こ

そうれし涙を流そうと諦み、実現できてうれい」と話した。「総体は何が起きるか分からない」と1回戦から気を引き締めていた。迎えた決勝の加茂名戦。先鋒(せんぼう)の川原は早々とメンを取られ「びっくりした」。しかし、慌てなかつた。「時間はある」と気持ちを切り替え逆転。流れをつくと玉田真も勝ち、佐々木は追い通り引き分けに持ち込んだ。玉田理と2人でチームを引っ張ってきた副将の3年生栗野は「私が勝てば全中に行ける」と気迫で相手を圧倒。2本連取して勝負を決めた。

(高杉)

栗野 メー 藤井(本那賀川)、岡田(木頭) コー玉田理 メー 永野 甘利(那賀川) 準決勝 松本メー 玉田理、岡田 一本勝ち 永野 文理) コー 藤本(相生)、松本野 (那賀川) ドー 川原(徳島文理)、永野(加茂名) メー 山岡 田ドー 松本

県選手権の雪辱
○：初優勝した羽ノ浦は全員が気持ちを一つにして優勝できなかった新人大会、県選手権の雪辱を果たした。先鋒の田村が幸先良く勝った後、唯一の2年生朝田が敗れて1勝1敗。続く中堅・上田は引き揚げる朝田に「任せておけ」と視線を送った。「自分が流れを変えたかった」とメンで勝利すると福田、岩原も続いた。川尻監督は「岩原がチームをよくまとめた」。



その岩原が口うるさく部員に説いたのは「勝つて絶対に全中に出る」。5人は県内最後の大会で抜群の集中力を発揮した。

7月20日

8月1日

全国高校総合体育大会（インターハイ）は28日～8月20日まで沖縄県などで行われ、徳島県からはヨットを除く29競技に参加する。

予選を勝ち抜いた436人（男子265人、女子171人）が全国の精鋭に挑む。活躍が期待されるチームや選手を紹介する。

羽ばたけ 目標

2010 沖縄インターハイ

19年連続26度目の出場。過去3度の3位入賞を誇るが、昨夏は予選リーグを終え勝率で並んだ久御山（京都）に代表戦で敗れた。今回は因縁の久御山、強豪の東海大相模（神奈川）と同組。飯田監督は「3校とも力の差はない。ここ数年、本選まであと一本に泣いているので今度こそ」と予選突破に全力を注ぐ。

「つなく剣道」を掲げ先行逃げ切りが勝ちパターン。うまくはまった真総体は宿敵・富岡西に快勝した。しかし3連覇を狙った6月の四国選手権は決勝で2-0から逆転負け。以来、選手の間目つきが変わったという。

重厚な竹刀の音が部の売りの。打突が深くなるよう素振りや基本練習を徹底。15人が一丸となって振り込

予選突破に全力注ぐ

剣道女子 富岡東

1



気合を入れて素振りに励む富岡東の選手たち＝同校剣道場

んでいる。
先鋒（せんほう）栗野、大将・岩原は那賀川中時代に全国制覇したが、ほかの登録メンバー5人は1、2年生。経験を積むため県外遠征で強豪校と剣を交えて勝利で流れをつくる。

いる。
18日には四国の代表校と強化試合を行い、態勢は整った。栗野主将は「挑戦者の気持ち忘れず、メダル獲得に挑みたい」と自らの勝利で流れをつくる。

8月5日

全国高校総体（インターハイ）第8日は4日、沖縄県各地で9競技を行い、徳島県勢はカヌー男子500mスプリント・カヤックペアの中西恒・中西遼（那賀）、同カヌーディアンペアの佐藤・玉木（那賀）がともに準決勝に進んだ。レスリング個人74kg級の高橋聖也（池田）、同84kg級の藤山徳馬（池田）は、それぞれ3回戦で敗れ8強入

全国高校総体

美ら島沖縄

第8日

りを逃した。剣道女子団体の富岡東は予選リーグで敗退した。体操男子の団体総合は鯖江（福井）が初優勝した。女子は大智学園（東京）が世界選手権個人総合銅メダルの鶴見虹子を欠きながら2連覇。個人総合の男子は2年の岡準平（鯖江）が制して2冠に輝き、女子は大滝千波（大阪・四天王寺）が優勝した。



女子団体予選リーグ・富岡東対東海大相模 最後まで攻め続ける富岡東の岩原（一名護市の21世紀の森体育館）

富岡東女子予選敗退

剣道

（護国の森体育館）
 富岡東 対 久保公徳
 福岡 対 山本
 北 対 栗野
 トーナメント 富岡東勝1

強敵と力の差

鬼門の予選リーグで二戦は先行逃げ切りのシナリオが崩れ、一本が差が一枚上手。仕方ないと淡々と話した。

初戦は緊張で力子力子だった。しかしいつになく全員が攻めていたと岩原。相手は昨夏、代表戦の末に決勝のいすを奪われた因縁の久御山（京都）。1、2年生が奮起し1-1で競り勝った。

リベンジできた余韻に浸ることなく、全力で強敵に臨んだが「打つても打つても相手が合わせてきた」と力の差を痛感。涙を流す選手は一人もいなかった。山本は「先輩と上に行きたかった。来年は必ず工藤、湯浅らと決勝に行く」と誓いを誓った。（同部）

城北初陣飾れず 男子

剣道

【男子】団体選リーグエロ
(名護市21世紀の森体育館)

○山嶋	○野村	○竹越	○松本	○米尾	○石山	○金沢
③	③	③	③	③	③	③
コ	メ	イ	イ	イ	②	①
福	小	笠	森	徳	城	城
居	野	井	田	島	北	北
③	②	②	②	②	②	②
○松	○神	○川	○清	○長	○西	○長
尾	開	宮	浦	崎	崎	崎
③	③	③	③	③	③	③
ド	ツ	メ	メ	メ	④	④
福	小	笠	黒	岡	城	城
居	野	井	木	田	北	北
③	②	②	②	②	②	②

桐蔭学園	神奈川	阿部美波	▽向敏	高橋勇志	茨城・守	徳島・高	岡内雅之
メ	メ	メ	メ	メ	メ	メ	メ
西	東	高	西	西	西	西	西

男子予選リーグ・城北対西陵 気迫あふれる攻めをみせる城北の笠井君
一名護市の21世紀の森体育館



剣道着に刺しゅうされた「為(な)せば成る」。校訓を胸に戦った男子団体の城北は初陣を飾れなかった。緊張の中、全試合が延長にもつれ込んだ初戦を落とすと、最終戦も1-4で黒星を喫した。
スタンドで見守った2年生の南谷。本来はレギュラーながら真鍮体前に左足アキレスけんを断裂した。毎日欠かさず見舞いに行ったメンバーは「あいつのために勝とう」と心

「来夏勝つ」 志は次代へ

を一つにした。
試合の後、笠井主将が南谷に「すまない」。だが昨年まで県内で4強止まりのチームが、選抜大会に続いてインターハイに出られるまで急成長した。新チームの主将となる森は「来夏必ず戻ってきて勝つ」。笠井主将は「頼んだぞ」。新しい一ページを歴史に刻んだ城北剣道部の志は次代へ受け継がれた。

(阿部)

8月4日

剣道

(名護市21世紀の森体育館)

【男子】団体決勝
安房 3-1 高千穂
千葉 3-1 宮崎
安房は5年ぶりの3度目の優勝。
▽個人決勝
千葉由勢 鶴岡貴大
千葉・安ココメ 福島・湯本

【女子】団体決勝
筑紫台 3-1 熊本

筑紫台は4年ぶりの度目の優勝
▽個人決勝
松本弥月 高橋勇志
福岡・筑 谷 茨城・守
筑紫台 谷

玉竜旗に続き制覇
○：剣道の女子団体は筑紫台が制した。7月に玉竜旗大会で優勝。「最大の目標はインターハイの優勝」と緊張感を維持し、見事に2冠を達成した。個人でも優勝した大

将の松本は「個人戦より団体で優勝したい気持ちがあった。チームのみんなにはありがとうしかない」と笑顔だった。
筑紫台は先月、1年生の男子剣道部員が学校で自殺。女子部も監督が代わった。就任してから間もない江田監督は「校長からは出るなら勝つてこい」と言われていた。やっ

柔道と剣道
小中生熱戦
鳴門で県防犯大会
第23回県防犯少年剣道
柔道大会が、鳴門市撫養



剣道で熱戦を繰り広げる選手＝鳴門市のソイジョイ武道館

8月4日

町のソイジョイ武道館で開かれた。県内の警察署管内こと学生192人が熱戦を展

開。技が決まるたび歓声が上ががり、会場は熱気に包まれた。柔道は阿波署チーム、剣道は小松島署チームがそれぞれ優勝した。

【柔道】①阿波②阿南
③板野▽特別賞 鳴門

【剣道】①小松島②阿南③徳島西▽特別賞 那賀

第48回四国中学校総合体育大会は8日、4県で15競技が行われ、島県勢はサッカーの川内が初優勝した。ソフトボール女子は美馬倉が、三加茂との県勢対決を制し初の

第48回
四国中学総体

最終日

栄冠。男子は鳴教大付属が3位に入った。新体操女子の生光学園は4連覇。陸上は男子砲丸投げで武田歴次(美馬)が14.94を投げ、県中学記録を24センチ上回り頂点に立った。

8月9日

剣道

(高知県南門市立スポーツセンタ)
【男子】団体手廻り①大組①三津浜(愛媛)2勝1分け②羽浦(徳島)2勝1分け③大方(高知)1勝2敗④高知(高知)3敗11、2位は勝教による▽B組①明徳義塾(高知)3勝2分け(愛媛)1勝2敗②徳島1勝2敗③宇多津(香川)1勝2敗④3位は勝教による。
▽決勝トーナメント1回戦 各組1、2位が決勝トーナメントへ。
▽決勝トーナメント1回戦 大川3-1坂辺決勝 高知2-1大川、高知は2年連続4度目の優勝。
▽個人準々決勝 大井(高知)メー 玉田(徳島文理)、森岡(明徳義塾)メー 山本(高知)川、藤本(相生)メー 水野(加茂)メー 栗本(高知)メー 土居

【女子】団体手廻り①A組①高知3勝②大川(香川)2勝1敗③加茂(徳島)1勝2敗④高知(高知)1勝1敗⑤愛媛2勝1敗⑥徳島文理勝部分け⑦大井(高知)1勝1敗⑧丸東(香川)2敗1分け⑨箱1、2位が決勝トーナメントへ。
▽決勝トーナメント1回戦 高知3-2徳島文理、大川3-1坂辺決勝 高知2-1大川、高知は2年連続4度目の優勝。
▽個人準々決勝 大井(高知)メー 玉田(徳島文理)、森岡(明徳義塾)メー 山本(高知)川、藤本(相生)メー 水野(加茂)メー 栗本(高知)メー 土居

創部10年目の節目を迎えた日亜化学剣道部が第53回全日本実業団大会(20日・日本武道

館)に出場する。2年ぶり5度目の出場で、初のベスト8入りを目指している。

20日・全日本実業団剣道

日亜化学初の8強狙う

9月16日



全日本実業団大会に向け練習に励む日亜化学剣道部(阿南市武道館)

練習は阿南市武道館で毎週木曜日に午後7時から約1時間。団体や全国高校総体などの出場経験を持つ20〜30歳代を中心に、男性14人、女性1人が汗を流す。中尾幸雄さん(40)＝徳島市新浜本町3、5段Ⅱらが呼び掛けて2001年に創部した。7年前のベスト16を上回る成績を残すため園田慎吾監督(39)＝小松島市和田島町、6段Ⅱは「チームワークで乗り切りたい」と力を3交代制勤務のため(斎藤邦彦)

「練習にみんなが集まるのは難しい」と中尾さん。時間を無駄にせず集中して技を磨いて



阿南高専 3年連続準優勝



剣道

第9回全国高専女子大会(8月21日・福井県立武道館)は全国から11チームが参加して行われ、徳島県の阿南高専は3年連続準優勝を果たした。阿南は決勝リーグ第1戦で鶴岡(山形)に1-0で粘り勝ち。第2戦は大会8連覇中の銚鹿に挑んだが、崩すことができなかった。

△上位・徳島勢
 ◎団体1手選組(リングリーグ戦)チーム名(試合) 阿南1(市瀬祐季奈、引き分け) 鶴岡、船越裕奈、メメ、富永、村田、メメ、上老、O大島(商船山口)▽順位(阿南)勝11決勝リーグ進出
 △決勝リーグ 阿南1(市瀬) 〇余語、船越、引き分け 阿南2(村田) 引き分け 阿南3(阿南) 〇鶴岡(山形)、銚鹿(三重) 3(田中)メメ、市瀬、松岡、メメ、中メメ、加藤、〇村田、〇阿南
 △順位(銚鹿)勝(阿南)勝1敗1
 ◎鶴岡2敗

9月19日



9月20日

団体と個人で活躍した教員剣美会の山下が個人準決勝でメンを決める＝県中央武道館

教員剣美会が連覇

個人25歳未満の部 **長栄**（鳴教大大学院）**頂点に**

剣道

県女子大会

21 徳島大蔵本C

▽決勝

教員剣美会 3-0 徳島大蔵本A

○山下 メメド 安井

○生田 コー 大西

○福田 ドコ 樋口

【個人】25歳未満の部準決勝

山下（教員剣美会）メー 内山

（鳴教大）、長栄（鳴教大大学院）

院 コー 三宅（徳島文理大）

▽決勝

長 栄 コー 山下

▽25歳以上40歳未満の部決勝

安 蔵 岩 本

板野東支ドメー 板野東支

鳴教大大学院・長栄

（個人25歳未満で優勝

し）「一本

本一本を

大切にす

る剣道を

心掛け

た。個人優勝は初めてだ

と思う。うれしいという



予選しから全勝

よりの、ほっとした」

予選しから全勝

○：団体を制したのは

発足2年の教員チーム、

剣美会。リーグ戦から黒

星はなかった。城ノ内中

で指導する大将の福田は

「中堅のメンバーが急ぎ

よ変わったが、先鋒（せ

んぼう）がいい流れをつ

くってくれて、のびのび

と試合ができた」。

先鋒を務めたのは今春

に大学を卒業し、八万中

に勤務する山下。竹刀を

鋭く振り抜き、小気味よ

いメンを連発。個人戦で

も準優勝した。「3人制

の団体は初めてだったの

で、攻めて攻めて思い切

りいった。手先だけでな

く足を使って前に出る戦

いができた」と話した。

10月3日

徳島文理3位の女子



剣道

【男子】1回戦 協和2-1 徳島文理、那賀川4-0 大川▽準々

第19回小豆島土庄町杯西日本中学生選抜大会(8月28日・フレトピアホール)は西日本各地から男子42チーム、女子31チームが参加して攻防を繰り広げた。徳島県勢は女子の部で徳島文理が3位入賞を果たしたほか、男子是那賀川が8強入りした。

◇徳島県関係の決勝トーナメント

小豆島土庄町杯西日本中学生選抜剣道大会で3位入賞した女子・徳島文理



決勝 東陽3-1 那賀川

【女子】1回戦 徳島文理4-1 土庄▽2回戦 徳島文理2-1 鳴門▽準決勝 佳吉2-2(本数勝ち) 2 徳島文理(先鋒▽佐々木南波、次鋒▽石井優奈、中堅▽玉田真子、副将▽大領美利子、大将▽川原真実)

高校生男女で城北勢が連覇

第38回阿北地区大会(8月29日・名西高体育館)は小中学生の男女全48チーム226人が参加して団体戦を行った。中学生は男子が城ノ内・市立川島連合、女子は阿波が制した。高校生は男女とも城北勢が連覇した。

【男子】中学校①城ノ内・市立川島連合(先鋒▽庄村莉緒、次鋒▽大島稜平、中堅▽箭田真成、副将▽竹内透、大将▽後藤田廉)②石井A③徳島B③北島
▽高校①城北A(先鋒▽黒木)

太 次鋒▽森康二、中堅▽小野竜弥、副将▽齋田悟志、大将▽岡田寛孝②鳴門③徳島科技③城ノ内
【女子】中学校①阿波(先鋒▽佐藤みなみ、次鋒▽岡田悠里亜、中堅▽竹内朱理、副将▽秋山澄香、大将▽尾関友衣)②石井③県立川島③徳島・加茂名連合
▽高校①城北(先鋒▽中川由美子、次鋒▽片岡美利、中堅▽三島菜摘、副将▽福田茜、大将▽井上亜美)②城ノ内③川島

10月18日

小松島A制覇

県社団法人剣道

剣道の第39回徳島県社人大会は17日、鳴門ソイジョイ武道館に39チームが参加して行われ、決勝は小松島Aが1-0で徳島支部Aを下し、優勝を果たした。

▽決勝トーナメント1回戦 徳島支部A2-1 小松島B、北井上教室2(本数勝ち) 2 徳島錬心館 月曜会2(本数勝ち) 2 麻植支部A、小松島A2(本数勝ち) 2 阿南支部A▽2回戦 徳島支部A1(本数勝ち) 1 坂野西B、徳島刑務所2-1 北井上教室、大塚製菓4-1 月曜会、小松島A2-1 振武館A▽準決勝 徳島支部A2-1 徳島刑務所、小松島A2(本数勝ち) 2 大塚製菓

▽決勝

小松島A 1-0 徳島支部A
○原 ヌメー 河村
武蔵 井村
園田 玉田
佐藤 ドーメ 生田
本田 福多

成年男子16強

剣道

【成年男子】2回戦

- 徳島 3-2 茨城
- 山本 3-1 メー 村上 3
- 山名 3-1 メー 小磯 3
- 前田 3-1 メー 川上 3
- 平野 3-1 ドレーゴ 山 3
- 近藤 3-1 メー 齊藤 3
- 3回戦
- 京都 3-2 徳島
- 坂口 4-1 コー 山本 3
- 谷山 3-1 コー 山名 3
- 磯合 3-1 コー 前田 3
- 高橋 3-1 メー 平野 3
- 藤元 3-1 メー 近藤 3
- 3回戦
- 千葉 3-1 東 京

千葉は8年ぶりの度目の優勝。集中し2本勝ち

○：初戦（2回戦）の対茨城は2勝2敗で大将戦に持ち込まれた。徳島の近藤（県警）は写真右は相手がコチを任掛け



練習をしているが、千葉に先着を相手にかかっている。監督兼任の近藤は「各チームの実力は平均化しており、さらに一皮むけた力をつけたい」と話した。

たのむ合わせ、メンを決めリズムをつくり結局2本勝ち。近藤は「絶対勝つとの気持ちで集中した」と振り返った。3回戦は対京都に競り負けたが、2戦とも次鋒として勝利した。刀流の山名（県警）は「普段は後輩を相手に受けて立つ

11月7日

県チーム 中学国体の16強



全日本都道府県対抗少年剣道優勝大会中学生の部で16強入りした徳島県チーム



第5回全日本都道府県対抗少年優勝大会（9月19日・大阪市舞洲アリーナ）で全国チャン

ナは全国各地域で選抜された小・中学生男女が参加。小学生46チーム、中学生47チームが都道府県単位で団体戦を行い、徳島県勢は中学生の部で初のベスト16入りを果たした。予選リーグを突破した徳島は決勝トーナメント1回戦で全国チャンピオンを擁する強豪、福岡と対戦。1-3で敗れたものの、健闘をみせた。小学生の部は予選リーグで敗退した。

- △徳島県勢
- 【小学生】予選リーグC組 大阪 1-0 徳島、長野 2-1 徳島
- ▽順位(徳島) 先鋒 徳島 誠 館 湯淺 渡平、次鋒 同・川田 将 也、中堅 徳島 教室・塚田 圭吾、副将 小松 島 少 剣、丸谷 川 瑞 実、大将 坂野 少 剣、丸谷 川 瑞 幸、2敗 予選敗退
- 【中学生】予選リーグA組 徳島 1-0 富山、徳島 2-1 岐阜
- ▽順位(徳島) 先鋒 徳島 誠 館 湯淺 渡平、次鋒 同・松本 美 紗 樹、中堅 徳島 文 理、谷本 晃 佑、副将 同・高木 勝 三、大将 同 門 一 山 夫、2勝 1 決勝 トーナメント 進出
- ▽決勝 トーナメント1回戦 福岡 3-1 糸山、反メー 岡田、大西 梅、松本、高橋、メー 谷本、今村、高木、男メー 山本 1 徳島

徳島教室が団体連覇



12月12日

第17回徳島市少年錬成大会(11月7日・徳島文理中高剣道場)は市内の道場で学ぶ小学生剣士たちが集い、団体戦と個人戦で日ごろの練習の成果を試した。徳島教室は団体戦2連覇を果たした。



徳島市少年剣道錬成大会で団体戦2連覇の徳島教室

か、個人戦でも全3クワ谷桃子は2年連続の1位。

- 【団体】①徳島教室(先鋒)②熊鷹知晃、次鋒③山室和士、中堅④熊鷹凌司、副将⑤秋田修平、大将⑥塚田圭吾⑦北井上教室⑧養武館
- 【個人】小学1・2年①北條智士(徳島教室)②北條琢己(同)③武知樹生(養武館)④3・4年①水谷奈々子(徳島教室)②北條弘登(同)③小島拓也(北井上教室)④5・6年①水谷桃子(徳島教室)②海老名和(久田錬成会)③高瀬陽平(徳島教室)
- ◆平尾杯県少年剣道大会(11月7日・鴨島体育館)
- 【団体】小学校低学年①鳴門市光武館②小松島少剣③藍住④山川修練館⑤高学年①小松島少剣②鳴門市光武館③鴨島教室
- ▽中学①鳴門②坂野③鴨島④市立川島
- 【個人】小学1年①松本輝灯(藍住)②新山裕(同)③高崎理(鳴門市光武館)④灰宗汰(同)
- ▽2年①鳥海空(川島)②柏木太斗(小松島少剣)③岩原潤哉(同)④兼松凌真(阿波教室)⑤3年①鳥海匠(川島)②庄村凌(同)③濱田健祐(同)④島井寛世(小松島少剣)⑤4年①三宅拓磨(脇町教室)②原隆斗(小松島少剣)③鈴江修雅(上八万俱樂部)④土藤颯馬(同)⑤5年①上田瑛斗(鴨島教室)②由ひかり(市場教室)③榎本優花(小松島少剣)④森下快哉(くら剣友会)⑤6年①猪野明日香(川島)②北村悦暉(阿波教室)③兼松綾那(同)④村本恵太(徳島石武館)

12月16日



◆徳島市中学校新人大会(11月21日・城西中体育館)

【男子】団体2回戦 徳島5-0城東、上八万3-0国府、八万

- 2-1北井上、徳島文理4-0鳴敷大付▽準決勝 徳島4-0上八万、徳島文理2-1八万決勝 徳島3-0徳島文理
- ▽個人1年①南谷飛鳥(徳島)②郷野将寛(同)③熊鷹和真(同)④菅生優輝(加茂名)▽2年①平尾秀典(徳島)②島村泰介(上八万)③橋和馬(八万)④谷本晃佑(徳島文理)
- 【女子】団体2回戦 徳島文理4-0城西、津田2(本教勝ち)2城東、北井上(不戦勝)川内、八万2-1加茂名▽準決勝 徳島文理2-1津田、北井上1-1八万▽決勝 徳島文理3-0北井上
- ▽個人①玉田真子(徳島文理)②川原真実(同)③大瀬茉莉子(同)④佐々木南波(同)

1月24日

◆剣道 第21回徳島県中学校強化
錬成大会
(23日・鳴門ノジヨイ武道館)
【男子】団体1回戦 日和佐1
10市場 鳴門3 11八万
川川2 0勝浦、驚敷4 0江
原、上那賀5 0津田、城西3 1
0県立川島、貞光3 0高岡東
石井3 1城東、城ノ内2 1鳴
門2、坂野3 1池田、阿南2・
相生・大藤2 0入田の回戦
徳島5 0日和佐、川内4 1三
加茂、鳴門5 0山川、驚敷3
1八万、上那賀4 1土成、徳
島文理3 1坂野、鳴教大付2
(本数勝ち) 2阿波、阿南5 1
0城西、鳴門4 1貞光、北井
上3 0三好、小松島2 1石
井、阿南4 1城ノ内、木頭2 1
1羽ノ浦、坂野1 (本数勝ち) 1
北島、加茂1 0松茂、那賀川
5 0阿南2 1相生・大藤 3回
戦、徳島3 0川内、驚敷2 1
鳴門1、上那賀2 (本数勝ち) 2
徳島文理、阿南1 3 1鳴教大
付、鳴門3 0北井上、阿南2
1 0小松島、木頭2 0坂野、那
賀川3 0加茂名 2準々決勝、徳
島4 0驚敷、阿南4 1 0上那
賀、鳴門4 1 0阿南、那賀川2
1 1木頭 準決勝、徳島2 0阿
南1、鳴門1 (本数勝ち) 1那
賀川

▽決勝
徳島 2 1 鳴門 1
○中西 反ノイ 井形
○古屋 ヌドイ 玉川貴
南谷 1 1 川邊
中川 1 1 玉川博
平尾 1 1 西條

【女子】団体1回戦 加茂名3
10市場・江原、木頭・相生1
0那賀川、阿波5 0小松島
(代表勝ち) 1坂野、市立川島
阿南2 1大藤、城ノ内・徳島1
0那賀川、阿波5 0小松島
新野4 0八万、県立川島2 0
鳴教大付、三好4 1松茂、石井
1 0城西、阿南1・加茂谷1
(代表勝ち) 1北井上、城東2 1
1鳴島、池田2 1牟岐、鳴門
4 1 0川内、坂野・阿南2 2
回戦、徳島文理3 0加茂名、阿
南2 1木頭・相生、驚敷2 0
城ノ内・徳島、阿波4 0津田
新野2 (本数勝ち) 2県立川島
三好2 1石井、城東4 1阿南
1・加茂谷、鳴門4 0池田 準
々決勝、徳島文理4 0阿南
阿波2 1驚敷、新野3 1 三
好、鳴門4 0城東、準決勝
徳島文理4 0阿波、鳴門4 1
0新野

▽決勝
徳島文理 1 0 鳴門 1
佐々木 岩木
平島 藤村
○玉田 藤田
大嶺 中井
川原 1 1 深見

鳴門市光武館 初の王座 女子

徳島至誠館 4年連続



第27回新野少年錬成大会(12月23日・新野中体育館)は小学生16チーム209人が参加して日ごろの鍛錬の成果を試した。男子12チーム、女子7チームが参加した団体戦は、男子・徳島至誠館が4年連続9度目、女子・鳴門市光武館は初の王座に就いた。学年別に男女



新野少年剣道錬成大会で男子4連覇の徳島至誠館(右側)と女子初優勝の鳴門市光武館(左側)

混合で行った個人戦(団体戦出場者を除く)は6年の丸岡由理奈(坂野少剣ク)が6連覇を飾った。

【団体】男女決勝トナメント
1回戦 徳島至誠館1 (代表勝) 楓華(同) ③河野菜々子(わかあ
ち) 1 練武館教室、木頭錬心館0
(代表勝ち) 0新野教室 3位決
定戦、練武館教室1 0新野教室
▽決勝、徳島至誠館(先鋒 朝田
智輝、中堅 川田将也、大将 湯
淺規平) 1 0木頭錬心館
▽女子3位決定戦、那賀川B &
G教室わかあち会1 (代表勝ち)
1相生龍虎館 0 鳴門市光武
館(先鋒 太田あかり、中堅 富
田理莉、大将 田淵晴帆) 3 1 0
小松島少剣クA
【個人】1年 ①松山若樹(小松
島) ②松葉佳香(至誠館) ③若本
楓華(同) ③河野菜々子(わかあ
ち) 2年 ①福田優那(至誠館)
②大城穂高(同) ③相大斗(小
松島) ③木歩(新野) 3年 ①
後藤高志(至誠館) ②飯田翔太
(同) ③兼任秀汰(新野) 3井原
拓己(至誠館) 4年 ①本木輝
(新野) ②中山拓真(牟岐) ②大
城明裕奈(至誠館) ③若本隆紀
(同) 5年 ①後藤雄喜(同) ②
宗野虎滋(養武館) ③西名晴輝
(至誠館) ③木内輝人(阿南) 6
年 ①丸岡由理奈(坂野) ②福崎
ひかり(同) ③福良海都(同) ③
堤綾乃(光武館)

1月30日

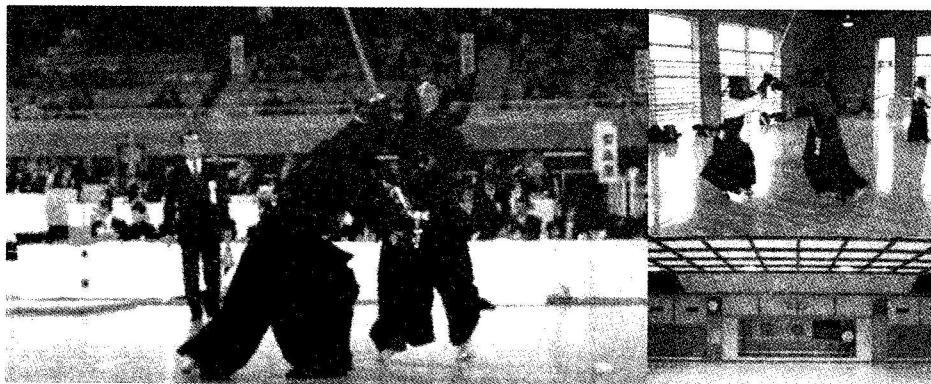
剣道行事の中止、開催などの確認の仕方



徳島県剣道連盟

SHOWデートップ トップページ

連盟紹介	スタッフ紹介	写真館	イベント	リンク	メール	大会結果・ブログ
------	--------	-----	------	-----	-----	----------



HOT NEWS

▶ 2011/6/7

第33回 全日本高齢者武道大会（剣道）において本県選手活躍

平成23年6月6日（月）日本武道館において開催された標記大会において美馬勝行先生がB組で優勝、遠藤一美先生が寿A組で第3位入賞を飾りました。

▶ 2011/6/6

平成23年度徳島県高等学校総合体育大会の結果のお知らせ

6月4日（土）・5日（日）阿南市那賀川スポーツセンターで開催されました標記大会において団体戦は女子の部が富岡東高校、男子の部は阿南工業高校、個人戦は女子が富岡西高校の岡内拓未選手、男子は阿南工業高校の小藪京蔵選手が優勝を飾りました。

結果の詳細は大会結果欄をご覧ください

台風等による行事の中止確認は、上記の徳島県剣道連盟ホームページ「HOT NEWS」でお願いします。

なお、剣連ホームページアドレスは

http://www.tokuspo.net/as/tokushimaken_kendo_renmei/index.html

です。「徳島県剣道連盟」で検索をかけてご使用していただくと便利です。

また、支部長には剣連より連絡しております。念のため、支部長へもお問い合わせ下さい。

『徳島の剣道』第二十七号

編集委員会

私事で恐縮ですが、四月中旬より、一ヶ月半にわたり、座骨神経痛を患い、日常生活がままならぬ状況が続き、「徳島の剣道」の編集作業が大幅に遅れてしまいました。関係者の皆様に多大なご迷惑をおかけし、誠に申し訳ありません。

折しも東日本大震災が起こり、また、あわせて福島第一原子力発電所の大惨事がありました。人は大自然のもとでは何と脆い地盤の元で生活しているのかを痛感させられるでございました。近い将来おこるであろうとされる南海大地震の震源を近くにもつ私たちにとっても他人事ではない切実な想いに至らざるを得ません。

今回の東日本大震災は私たちにとって、大切なものは何か、何が要らないのかを考えさせ、原点に立ち返り、やり直すことを求めているような気がします。

被災された東北の方々に心よりお見舞いを申し上げますとともに、早期の復興を強く祈念いたします。

別	笠	月	上	松	柴	伊	影	美	中	手	藤	三	木
宮	井	岡	田	永	田	賀	山	馬	村	塚	本	木	原
憲		陽	宏	貴	宗	雅	美	和	稔	十三子	雅		資
治	勝	市	司	史	忠	人	雄	義	裕		史	毅	裕

『徳島の剣道』第27号

平成23年7月7日発行

編集・発行 徳島県剣道連盟

代表者 坂下彦之

〒770-0861 徳島市住吉三丁目9-6
栗本マンション106号室

TEL 088-652-2337

FAX 088-652-2360

表紙
題字
さし絵
村堀江恒徳